

圍棋神髓 月

795.
H633i
Ⓜ

Kodak Gray Scale

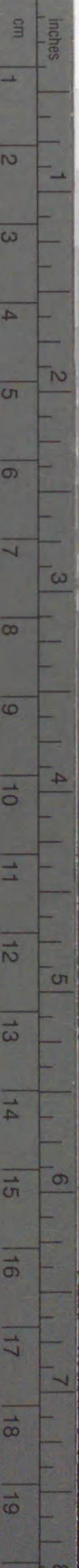
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak



名人本因坊秀哉講述

圍棋神髓

月

海越圖書文庫

二子布石法二十局

寄贈者八種各題三子布石法十五局

經售圖書



名人本因坊秀哉講述

圍棋神髓

月

瀨越因碁文庫

二子布石法二十局

寄贈者八幡恭助三子布石法十五局

松井明夫



軒絕月廣筆執 [髓神棋圍]

贈
瀨越田基文庫
殿

會
國血國會
38.8.-5
圖書總藏書

617188

二子布石法 目次

第拾局	第九局	第八局	第七局	第六局	第五局	第四局	參局	貳局	壹局	概論
.....(六圖).....(六圖).....(三圖).....(八圖).....(六圖).....(四圖).....(二圖).....(三圖).....(二圖).....(三圖).....
五九	五二	四六	三九	三一	二四	二〇	一四	一〇	四	一
六四	五八	五一	四六	三八	三〇	二三	一九	一三	九	三

自頁

至頁

第拾壹局	……………(七圖)……………	六五
第拾貳局	……………(三圖)……………	七〇
第拾參局	……………(三圖)……………	七五
第拾肆局	……………(五圖)……………	七九
第拾伍局	……………(六圖)……………	八五
第拾陸局	……………(五圖)……………	九三
第拾柒局	……………(二圖)……………	九九
第拾捌局	……………(三圖)……………	一一〇
第拾玖局	……………(六圖)……………	一一五
第貳拾局	……………(四圖)……………	一二二
		一二六

布石法詳解

二子の部

概論

第二十一世
名人 本因坊秀哉講述

初段 廣月 絶 軒編輯

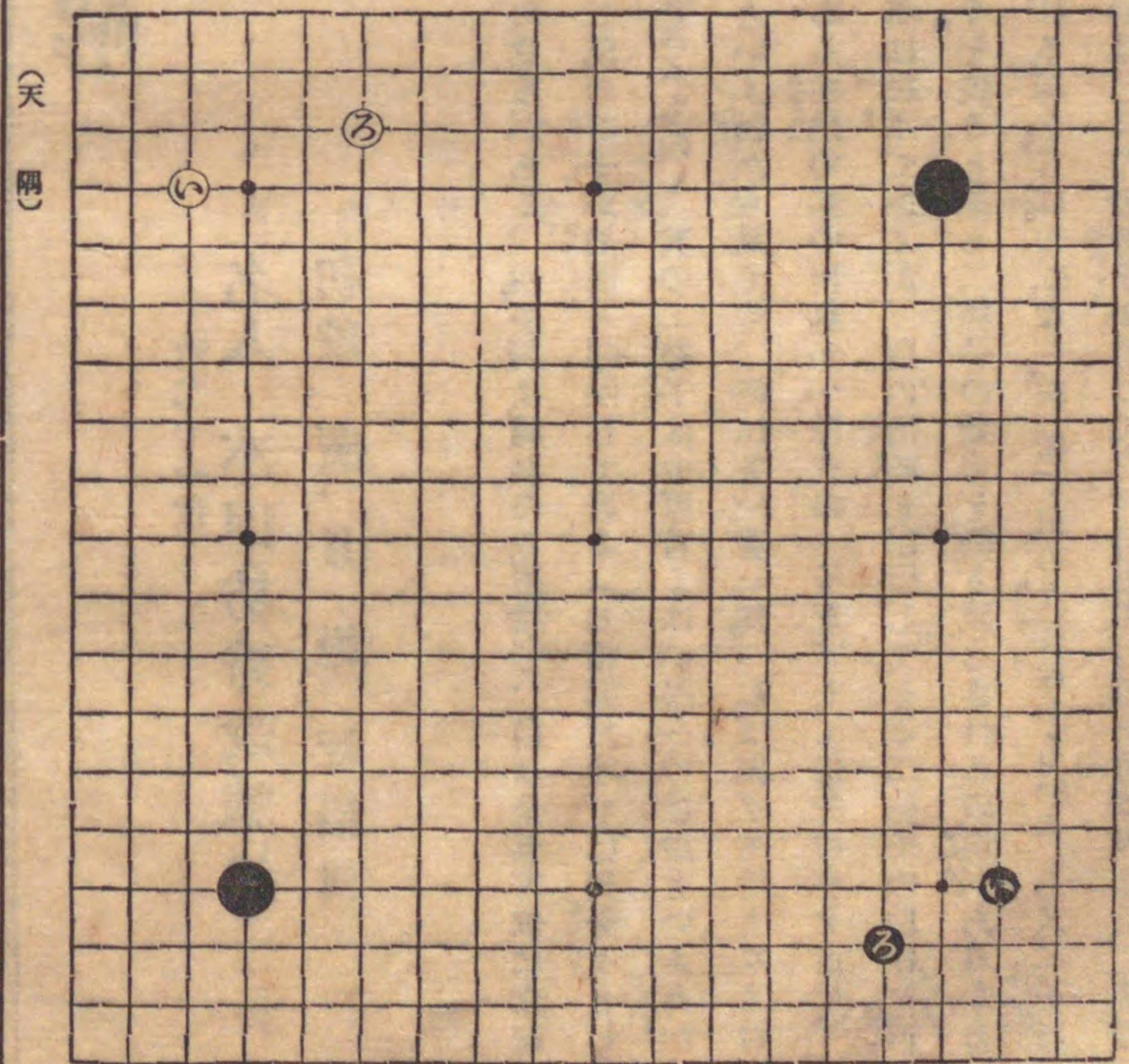
四子局純然たる置碁
二子局ハ打々難キ局

二子局は置碁と互先碁との相半ばした意味がある、四子局は純然たる置碁で、白は全然客位に立たねばならぬ、が二子局に至つては、二隅の勢子が局面を制限して居る(勿論其だけで已に勢子としての効用も目的も充分ではある)とは言ふもの、其の二勢子は中原若くは側邊への發展といふ方から見ても又根據的占領即ち隅の「縮」といふ側から見ても、何れ各一着を加へねば確なものとならぬ性質の子である、然るに白は二ヶ所ある明隅の其の何れかへ任意の一子を下して優先の利を占め、黒も亦他の明隅へ着手する、其の一着は後手であるが、白の活動を制限してをる二勢子の助けを恃として對抗する譯であるから、若一步を誤ると忽ち二勢子の効力を削り減らされるの惧があるから二子局は策戰の困難な極めて骨の折れる局と言はねばならぬ、所て白の立脚地からいふと、又二子局は極めて打ち難い、なぜならば、二隅は已に黒の勢子があつて白に自由の行動を許さぬから、先づ

此白黒ノ交、
一手ヲ下スト
云フ所味コレ

ニ子局ハ彼我
共ニ難局ト
スル所

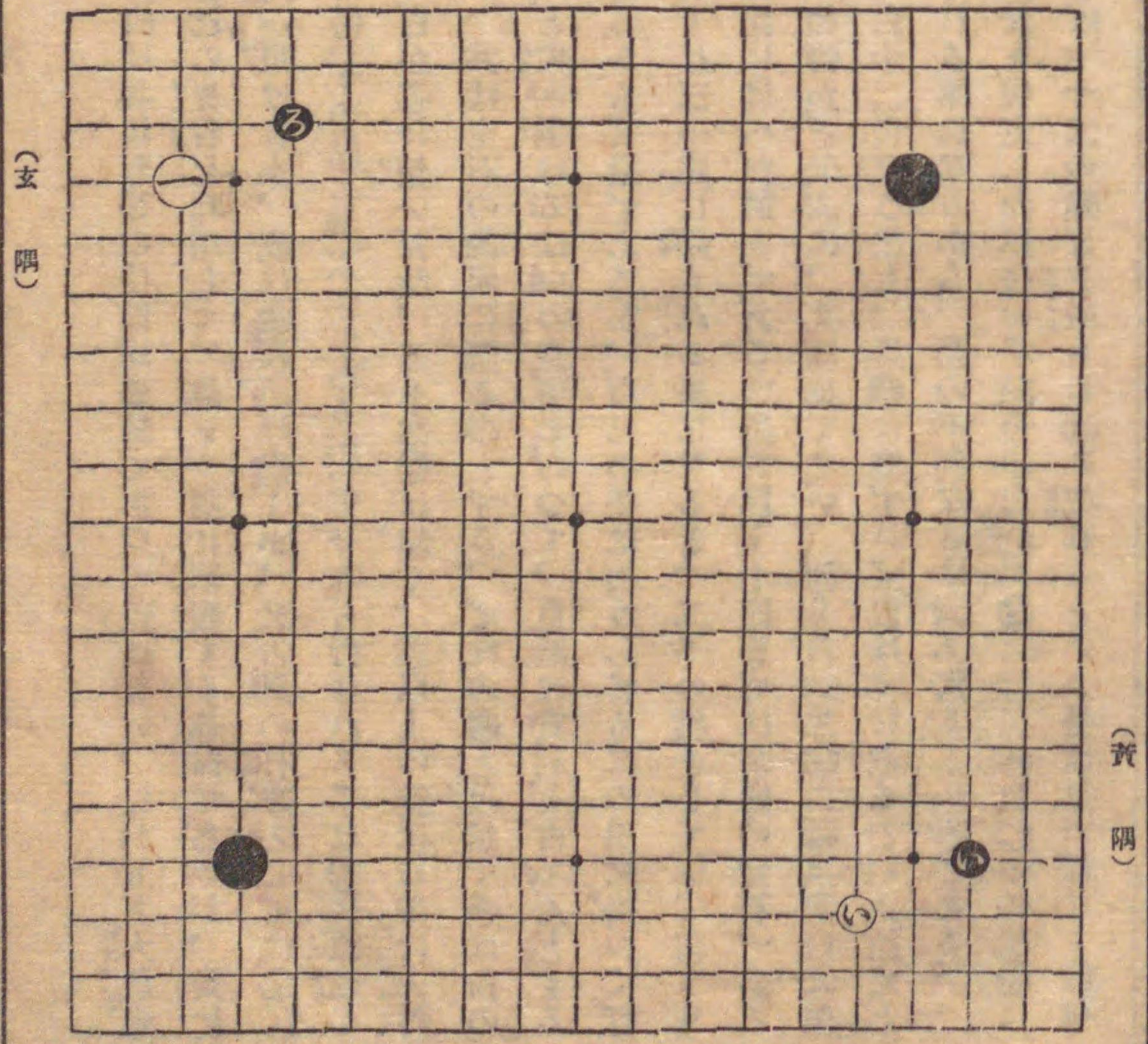
白が(天隅)へ(3)若くは任意の着手をすると黒も亦之に對抗して(地隅)へ(5)と打つ、乃て白が(3)と締れば、黒も亦(5)と締る、其では局面の狭くなる事夥しい譯で、如何にも打方がないから、白は却々「締」をして居る違がない必ず地隅(5)に向つて(3)の點に掛を打つて黒の應手を問ふ順序となるが、其の以後如何に變化しても黒に大なる過の無い限りは二勢子の効力は中々動くものではない、畢竟二子局は黒から言うても亦白から見ても打ち難い局たる事は免かれぬのである。



白玄隅、一黒
黄隅、ニハ考
慮ヲ要セズ

白ノ第二着
ハ黒ノ第一着
ニ掛ルキモ

乃て白が玄隅へ一と打つた時は黒亦黄隅へ(5)と一子を備へる、是は殆んど考慮を要せぬ手である、何ぜなれば明隅は先入主となつて任意の好着點を擇ぶ事が出来る、然るに其の主となる事の出来る明隅を捨て、顧みず、好んで白の先鞭をつけて居る隅の一に向つて(3)と掛つて客位を争ふのは極めて不道理といふ事は一見して判る筈である、白も亦第二着は黒の(5)に掛つて(3)と打つ可きもので、第一着の隅を(3)の點に締るといふ事の爲難いのは前圖で述べた理由によるのである。



~~~~~(局子二法石布)~~~~~



二子第一局

白五ノ一手ハ黒  
ヲ一隅ニ閉鎖  
スルノ意

黒六ノ手ニ

白ノ意中ヲ  
行ク

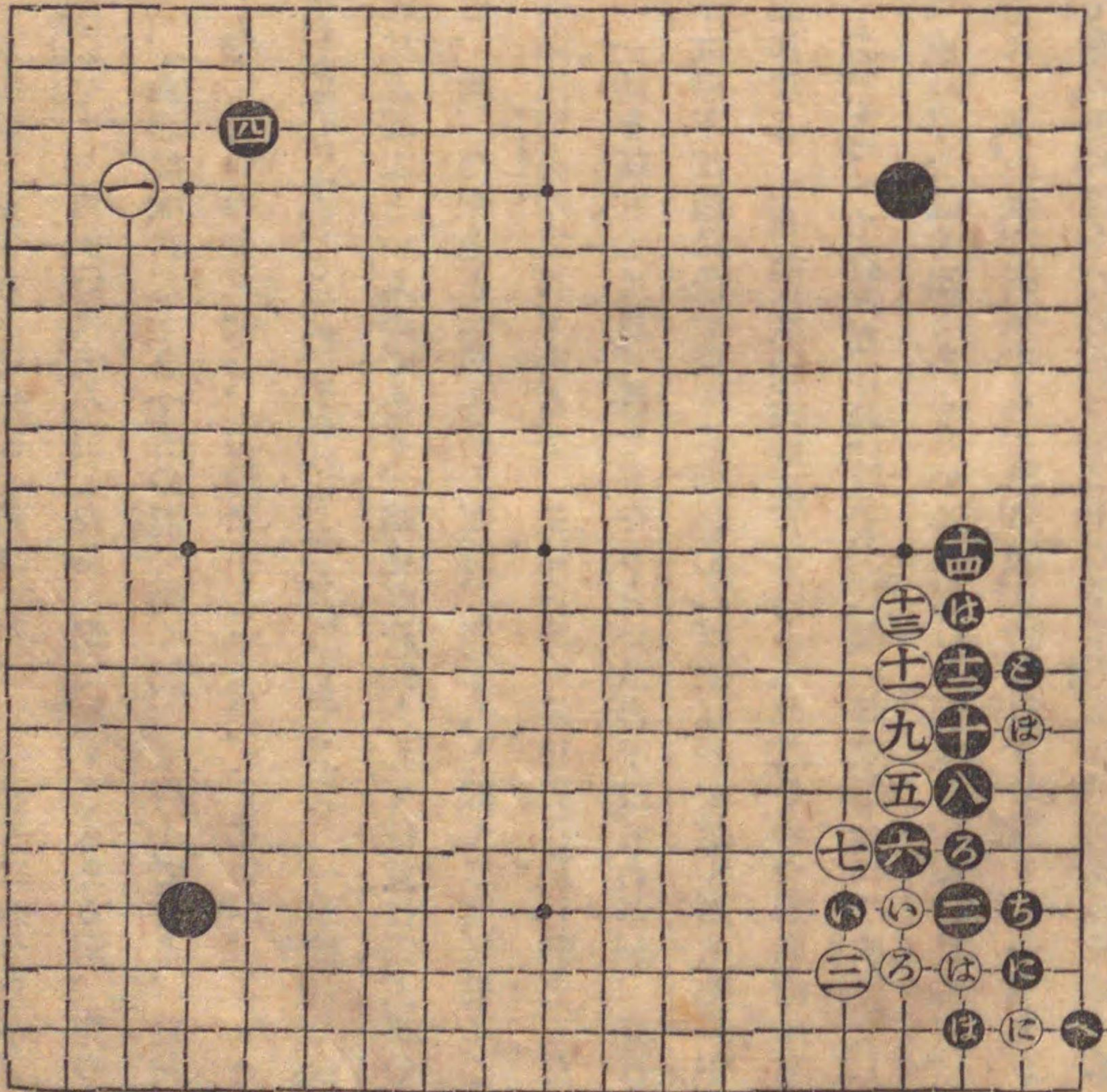
黒十二ノ手ニ  
注意

白一に對する黒二、白三に對する黒四は共に對等の位置同姿勢であつて差はない、白が五と大斜走に打つたのは、この一隅に於ける自己の先着を利用して、黒を一隅に閉鎖する趣向であるが、是に對する黒の受け方としては、六と尖み頂けるか、或は七に頂け出すか、又古風の打方としては八に並んで置いて、白が七の點に打つた時、十の點に飛ぶかであるが、方今専ら行はれる手は九に頂越て白が十に縛込んだ時、六の點に當て白が九に粘いだ時、黒も亦十に粘ぐ、其以上の變化は俗に大斜百變とも稱へて種々の打方があるが、其は定石の説明に譲る事とする、で此の九と頂越す手は白の趣向を打破つたもので、圖の様に六と尖み頂けるは白の意中を行つて、自然に實利を占めんとするのである、(黒二は明隅に據るのであるから普通であるか、白三の手は何うしても二の黒に掛つて打たなければならぬ、若し黒から四若くは三の點に縛られる事になると、二子の棋としては、何うも白の方が打ち難くなるといふ事は概論に述べた通りである)、黒六以下十四までは普通の定石であるが、黒十二の手を九に飛んだならば如何かと云ふに、其は良くない、即ち白十黒九白十黒九白十黒九白十黒九と白の一子を抱へた時、白十二に突き出し、黒十に應ずれば白は九に截るといふ結果となつて、結局九の一子を征に提られる事になるから、黒の不利なるは云ふ迄もない事である。

△(問)上述黒が十二の手で九に飛んだと假定した以後の手順の中白十黒九白十黒九白十黒九の時黒九に截る手で九に己の缺點を補てあげば、十二の點に突破られ九に截れるといふ憂は無様なり如何

十目以上、  
換得

△(答)其は十二の一子を急いで九に飛んだ爲一隅に非常なる利益を白に與へる事となつたので、初め忍んで十二を圖の様に打ておいたならば、後に至つて白から十と十一と迫つて來た時、悠然として九に截り白十の一子を擒にする事が出來たのである、其で此の隅を九に截つて十の一子を提るか或は九に粘いで白に十の點を粘られるか如何かといふ事は少くとも十目以上の損得に關する手である、此かる大利を失うて迄も十二の手を九に飛ばねばならぬ程、其が重要な手であるか如何かといふ事を比較して考へて見れば直ぐに解る筈である。



(局子二法石布)



初心者十六、  
手ニ注意

初心者  
手ニ注意  
味フニ

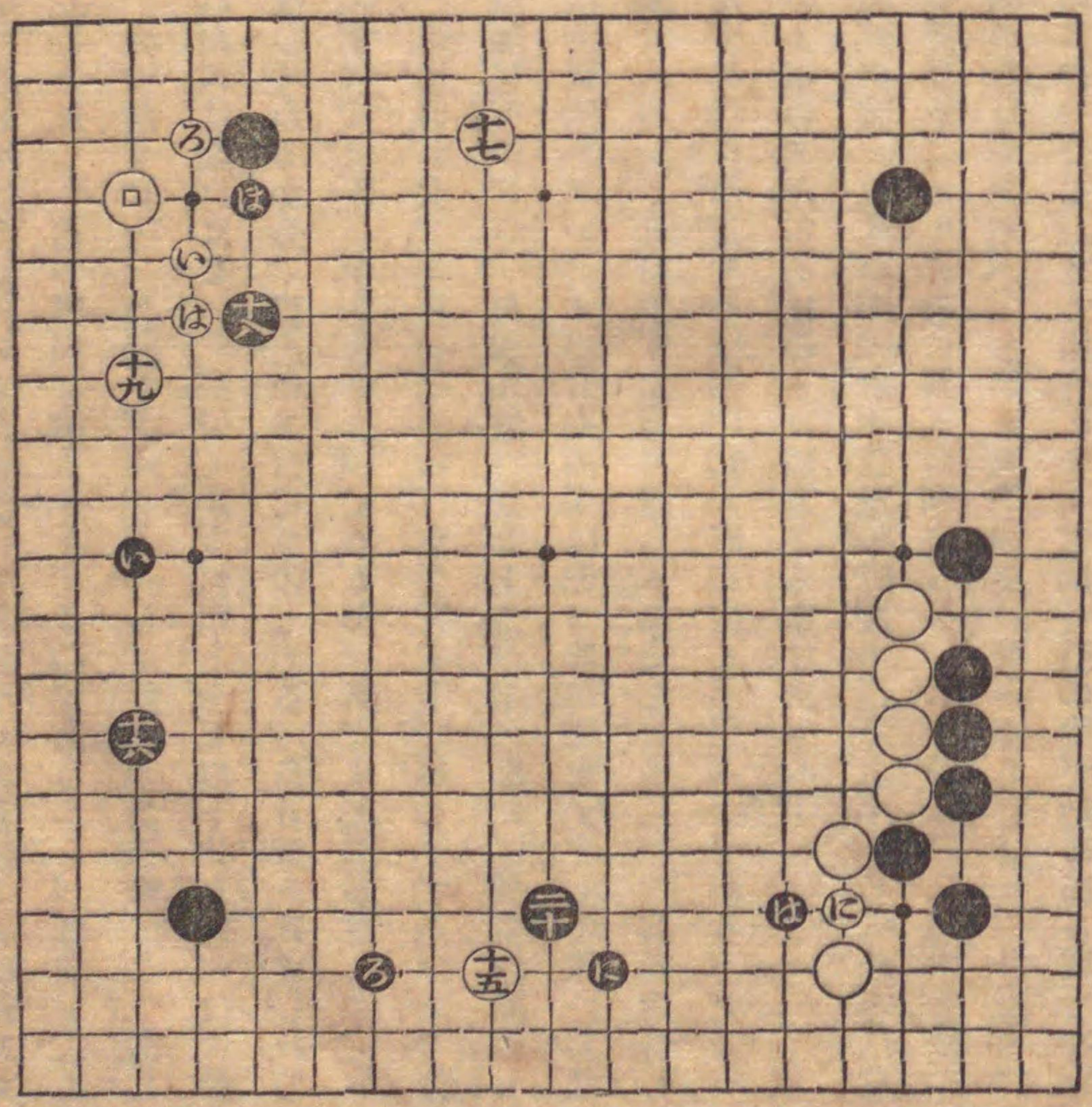
白十五は右壁の厚みを利用して廣壯なる地域を劃すると同時に、間接に左下隅の勢子に迫つた手である、黒十六は十九の點に□印白を二間夾とし、白が○に尖み出した時、●に拓く手もあるが、先づ十六と圖の通り打つのが普通であらう、此手は次に二十と十五の肩を衝く筋をも含んで居る、兎角初心者は、この十六の手を以て、よく●に打つて見受る、勿論悪手といふ程でもないが、さりとて餘り感服した手でもない、此方面は白が既に十五と先鞭を着けてゐる所であるから、一步後れて後から、白の待ちうけて居る所へ行くには及ばぬといふ譯である、畢竟好着點として任意に選ぶ事の出来る廣い方面へ拓けば可いのである、次で白十七と三間に夾んだ時、黒十八と軽く二間に飛んで白に十九と應ぜしめたのは、目下流行の三間夾の定石であるが、是は白から●に尖み頂け●と立たして●に煽るといふ急な手を防いで、一時を緩和して以て機を見やうといふの手段であるが、委敷は三間夾の條下に説く事とする、白十九の手は他に急を要する點があれば或は手を抜く事もあるが若し手抜して□印白が困しめられる事になると、自然黒の形が厚壯になつて、取返しのかね結果を來すかも知れんから、よく此場合といふ事を考へて打たなければならぬ、圖の様な場合に手拔は斷じて不可である、只急を要する場合には、或は手を抜く事もあるといふ事だけを記隠して置けば可い。

〔絶日〕 本圖白十九迄の配石の場合に、初心者は稍もすると●の點に○の截りを窺うて一着を下し、其の勢力を假るの誤想からして●の邊に深く打込み白に二十の點に尖まれ、騎虎の勢益々敵

二個、教訓

教、大領城  
手、侵、大  
好、手、段

の圈内に於て、危殆の兵を増して彌々白に右側の鐵壁を利用され、終りに全部生擒されるか、よし免れるにしても、非常の損失を蒙るといふ様な事は屢々見受る處で、是は研究に乏しき所謂俗筋といふの趣向である、上述の俗手の中に二個の注意すべき教訓がある即ち●と懸軍萬里深く敵地に侵入す可らざる事と一は●に截りを窺うて白に○の點を堅く粘がしむるの不利とであるが、此等は最も注意して嚴禁すべき要がある、其て本圖の様は二十の點から、白十五に對し一歩高く肩個を衝いて軽く打つのが敵の大領城を侵略する好手段である。



~~~~~(局子二法石布)~~~~~


初進者

二五ノ手

下ヲ這フテ利ヲ得ルハ極ニ稀

稀

二七ノ手學

フキテ所

白廿一の手は是亦初學者往々是を(21)に受けて下を這ふのを見るが、下を這つて利を得る事は極めて稀である、此場合黒は(21)印黒(前圖廿)と打つて白の模様を消さうとするのであるから、低地を這ふは即ち黒の術中に陥るものである、故に白も廿一、廿三とずん／＼押して左右の黒の勢力を分割したのである、成程白の模様は消されたには違ひはない、が併し此方面即ち十五以下廿五迄の白の勢力は、遙に左下隅の黒に影響を及ぼしてゐるから、得失相償ひ得るのである、白廿五と斜走したのは、若し黒が(25)の點に押へて來れば廿六に包圍しやうといふのであるが、其では黒が面白くないから、廿六と一間に飛んだのである、次に白廿七、是亦初學者の注意を要する肝要な手であつて、若し此手を(27)に飛べば後に黒から(28)の點に突出され、白(28)に盤れば廿七及び(28)の點に二個の缺點即ち「截」が残つてゐるから、何うも白は薄氣味が悪い、この廿七の手は先づ此缺點を無くして置いて且右下隅の白に連絡するのである、黒廿八の「視」は打たずに單に卅に大斜走しても可い、其時白若し(30)に來れば(30)に斜走し白又(30)に打たずに(31)に斜走すれば黒は(31)の點に尖んで居るのである、でこの廿八と覗いて白に廿九と粘がすといふ事の是非得失は輕々に斷言する事は出來ぬ。

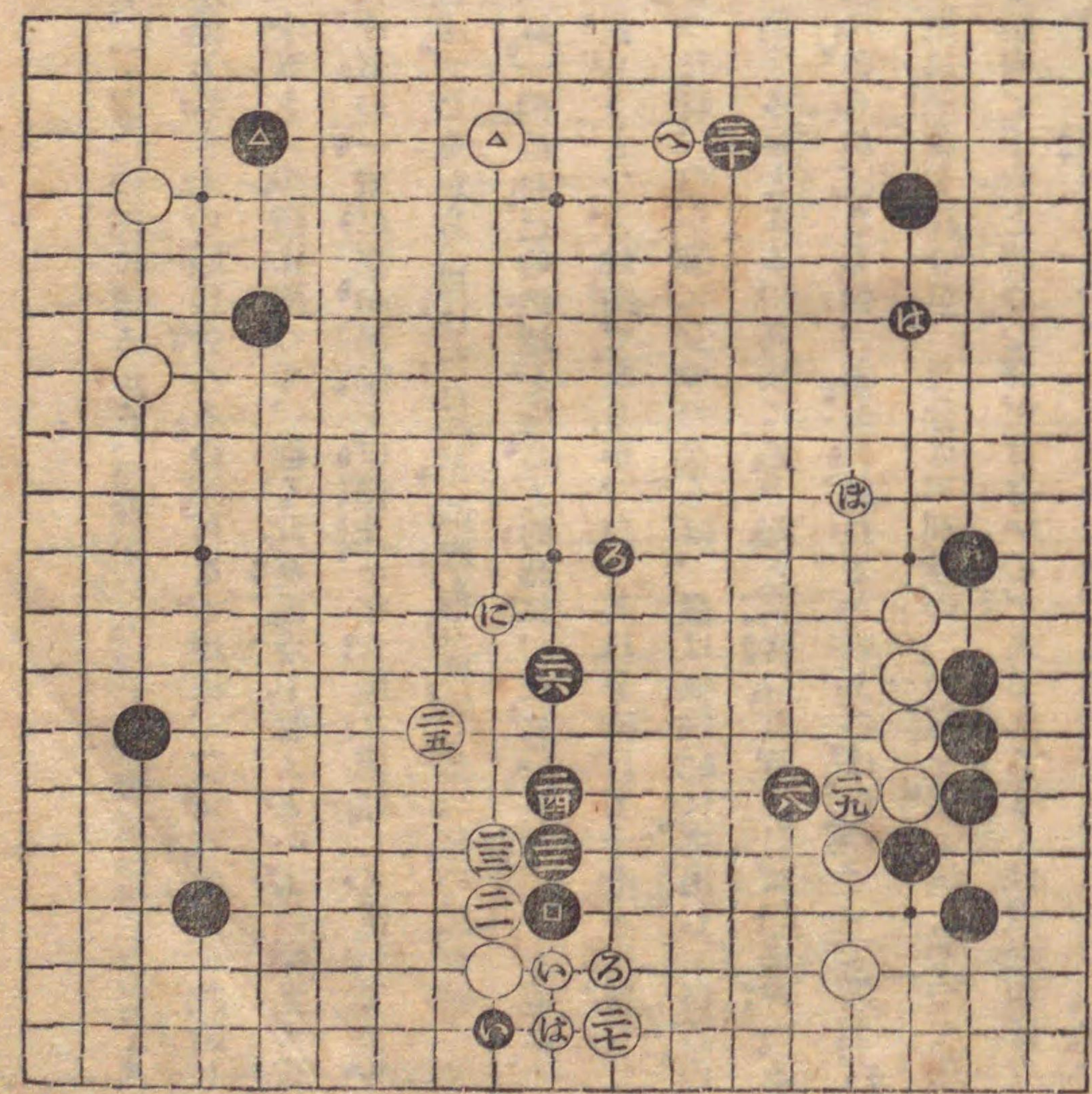
《絶日》布石の一手一手みな金科玉條に違ひはないが、就中實戰の際屢々出來る手として最も注意せねばならぬのは、(一)本局第壹圖黒十二の手を(12)に飛ぶの利害得失、(二)第二圖黒二十と敵の大模様を消す主意で輕く白の肩側から打つ要點、(三)第三圖(21)印黒に肩へ來られ廿一、廿三と押した白が右隅の白と連絡するために打つ廿七(尤も場合によりては廿三の手で(23)に曲る事もない

初進者

三十ノ手

は打タサレ

では無いが(30)等の要點である。其から黒三十の手であるが、初心者稍もすると右下隅との連絡を意味して(30)の點に打つが是は頗る消極的で且つ勢力偏重の嫌がある、之に比べると三十の點は第一自己の地域を造る第二に△印白を攻めて其の(30)の拓きを妨げて居る、其の結果は△印白は左右何れも黒に妨げられ、普通の二間拓さへ出來ず極めて孤弱な位置に陥る、此の白の勢力が弱いのは、即ち左右の黒の安全を意味してゐるので、従つて本圖三十の價値も明瞭になる譯である。



~~~~~(局子二法石布)~~~~~



白十五  
重要一手

十六十七の急引  
はカウ俾る  
俗筋

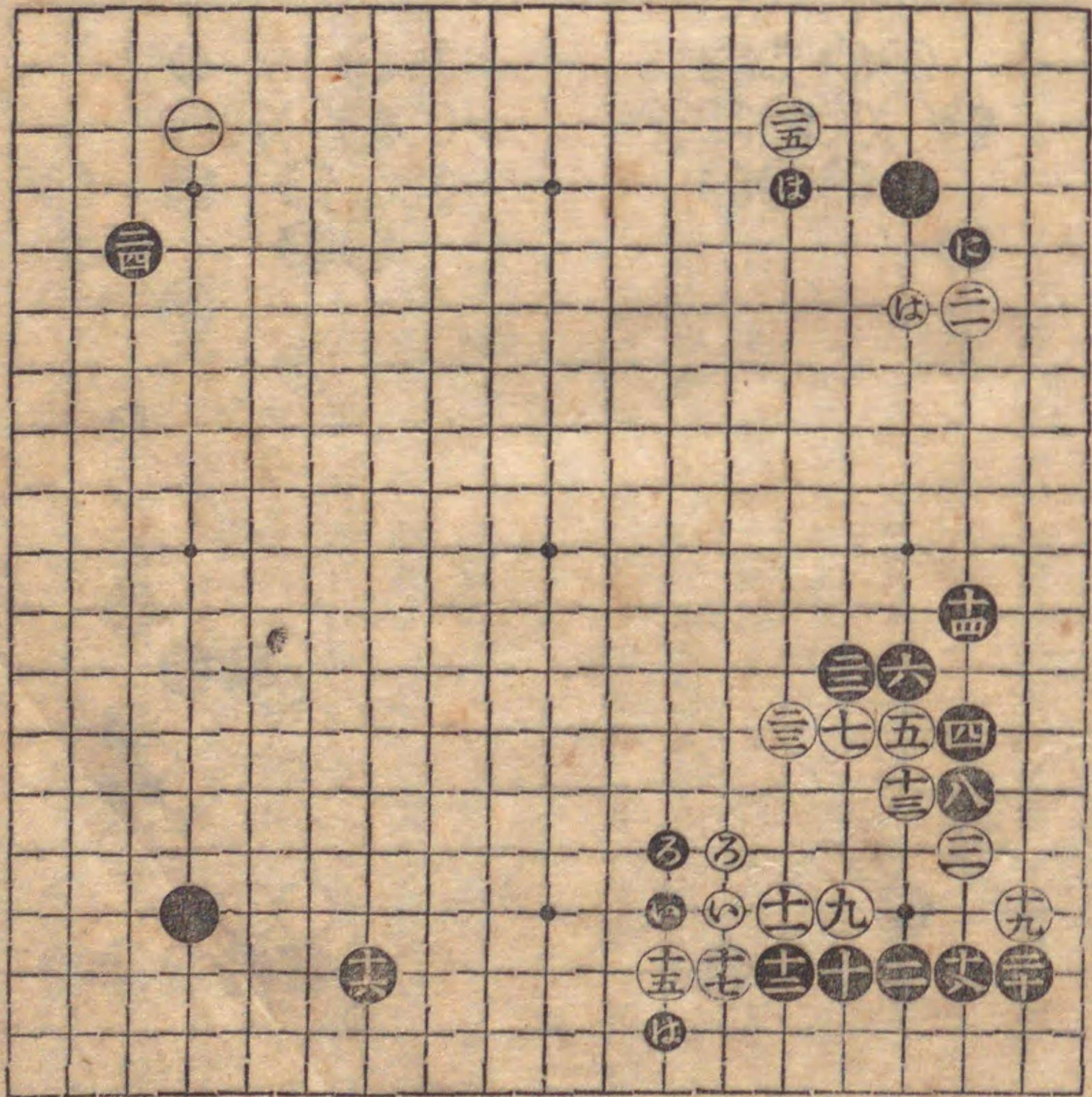
二子第二局

黒二から白十五迄の説明は「互先定石一間夾」の部に譲るから、同部頂行の條を仔細に參看せられよ、殊に白十五の手を單に⑤に行ひ或は直ちに十七の點に押へるの不可なる理は、該定石の部に詳説した通りであつて畢竟此處に於ては、十五と一步敵に隔つて、軽く其發展地を奪ふといふのは尤も重要な手である、已に説いた通り、白十五の一着は黒の活動をば阻止めて右隅に閉鎖して置いて、左隅の黒に攻撃を加へやうとの意を含んでをるから、黒は白に⑥の缺點あるに乗じて、其の謀を破つて十六と大斜走したのである、此十六は一隅に自己の地域を造ると同時に、次に⑦に縛出すか或は十七の點に突當り白⑧に押へれば⑨に截らうといふ趣向であるが、白も其れを恐れて十七と突當つて置いたのである、若し黒十七と突當つた時、白が⑩に立つたならば、黒は無論⑪に突出し、白⑫の時、烈しく⑬に截るから白は始末に窮する事となる、其故に黒十七と突當つた時、白は⑭に押へる一手であるが、此時黒も亦必ず⑮に截らねばならぬ、⑯から縛ねるといふのは俗筋で、又黒十六と打つた趣意に背くのである、且つ敵に三線を押され、自分は不利益の二の線を這ふ事となつて此上の損は無い、勿論初めから、盤る趣向で十六と打つた譯ではないのであるからよく注意せねばならぬ、白十九は則ち手順で、先手で盤りを防いだ手段であるといふまでもないことである、白廿一

廿二肝要  
一手

の時黒が廿二と押したのは心得置くべき肝要な手で、敵の缺點を衝きつゝ、自己の勢力を伸ばし、徐ろに白廿一の一手に迫まらうとして居る、此の場合黒は廿四の手で⑰に尖み頂け白を⑱に立たして、⑲に單關しても可い本圖の様には手抜して廿四に掛つて打つ手も悪くはない。

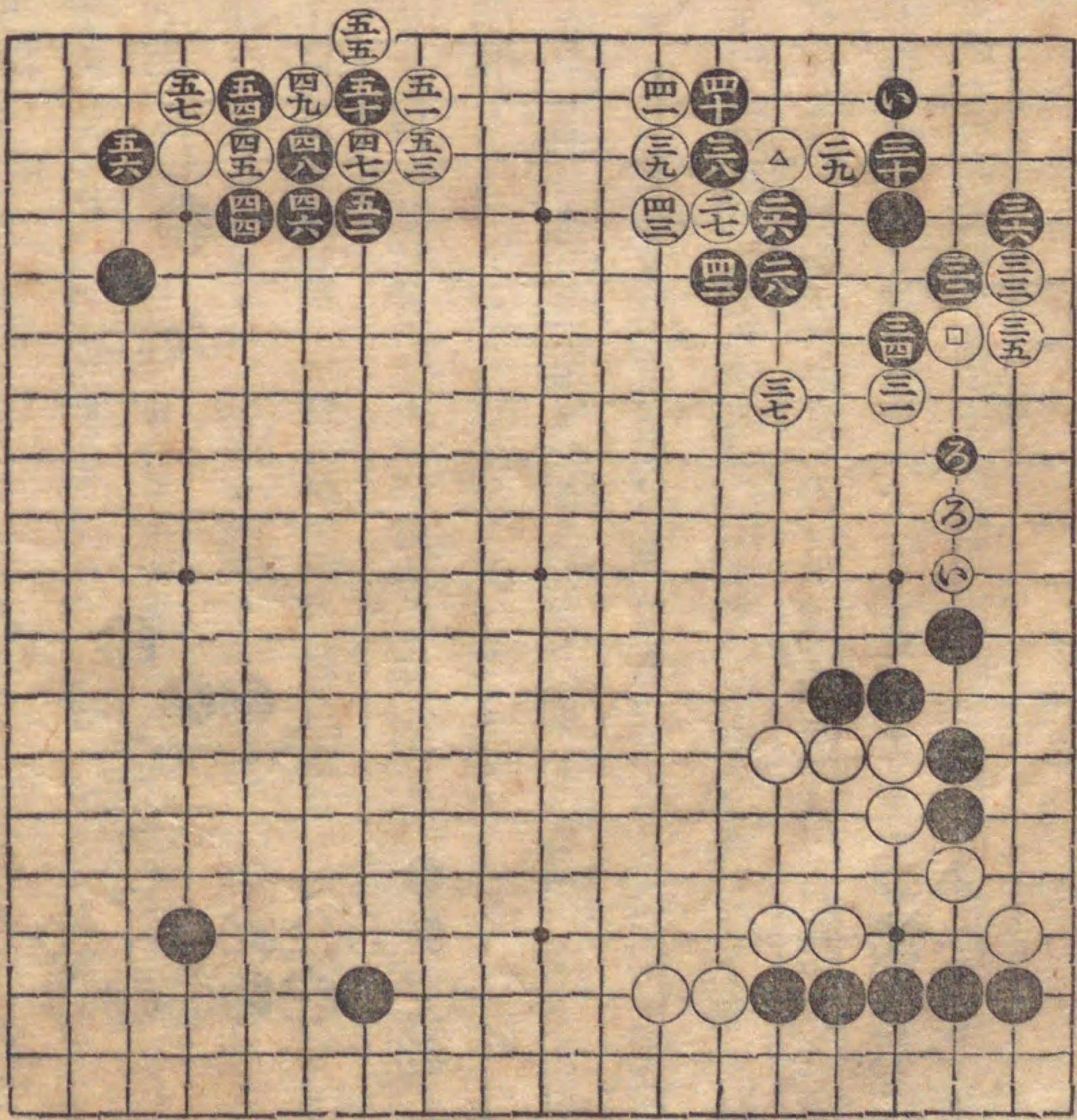
（絶曰）「黒廿四は圖の通り打もよし、又⑳と尖頂け白を㉑と立たせて㉒に飛ぶといふ打方としてもよい」と言ふのは要するに場合問題である、此の「場合」を解剖詳解する筈であるが、特に諸君の研究資料として此の説明は暫時保留して置く、諸君にして本誌を通覽精讀せられたならば、此の「場合」問題は自然に解決が出来るであらうと思ふ。



（局子二法石布）



黒廿六以下の變化は、「兩掛頂  
行定石」として、大抵の置棋定石  
の本にあるから、其手順及大體  
の意味は既に諸君も御承知であ  
らうが本書亦順を追うて漸次説  
明する筈であるから、茲には略  
す、さて□印白及△印白の兩掛  
に對し黒は何れに頂くべきもの  
であるかといふに、或は兩方と  
も同じだと考へて無雜作に頂け  
る人もあらうが、決してさうで  
はない、必ず味方の子の無い方  
に頂ける、若敵の子があれば其  
の子のある方に頂ける、言を換  
へて言ふと敵が孤弱を感じて居



世八面白カラス  
ハニ下ル方可

左、上、隅、ハニ

る方には頂けず其の比較的に安全と見えて居る石の方に頂けるのである、本局の實地に就て見ると  
□印白の方面には右側中邊に五子の黒の勢力がある、扱 翻つて△印白の方面を見ると彼我共に石  
が無いから、味方の石の居ない方である△印白に頂けて廿六と打つたのである、然し乍ら若も此の  
場合◎◎の方面に白がある場合は、敵の石があれば、ある方に頂けるといふ法則に従つて必ず□印  
白に頂けて打たなければならぬ、今若し黒が卅四の點に頂けたものとするれば、自然□印白の一子に  
手順を與へ孤弱な石に勢力を加へさす事になるから、其では黒の立脚地として、白を攻め立てると  
いふ意志が貫徹しない事になる、「黒卅八の截りは此場合面白くない、寧ろ●に下りて打つか、或は  
單に四十四に懸けて打つか、二者其一を撰んだ方が可い、圖の様に截つたとしても黒は少しも白を  
疑らすといふ事が出来ぬ、  
黒五二と押した時、五五と提らずに、五三と粘ぐは定例である、五四に截られる事が極めて不利  
と感じた場合は、不得止五三に粘ぐ手を以て五五に提るが、其では黒から五三に當てられ白の形が  
非常に低くなるから、先づ多くの場合は五三に粘ぐものと思つて置けば可い、さて本圖の石立を見  
ると互先定石が二隅に、置碁定石が一隅に行はれてゐて、定石と定石とが旨く調和してゐるから可  
いが、單に定石ばかりに着目して行くと、甲隅と乙隅との利害相反する事となつて、一部の定石と  
しては良とも、配石としては全く支離滅裂のものとなつて了ふ様な事があるから注意せねばならぬ、  
〔補拾〕前圖白廿一と右上隅の勢子に掛つた時、黒●と詰返す手段も無いでもないが、其は右上隅の  
利益を開放して徒らに右側の黒に勢力を集注さす事になるから、先づ本圖の様に打つが宜い、



白一子テ五  
ニ掛ラハ黒  
ニトイニ打ツ  
シ

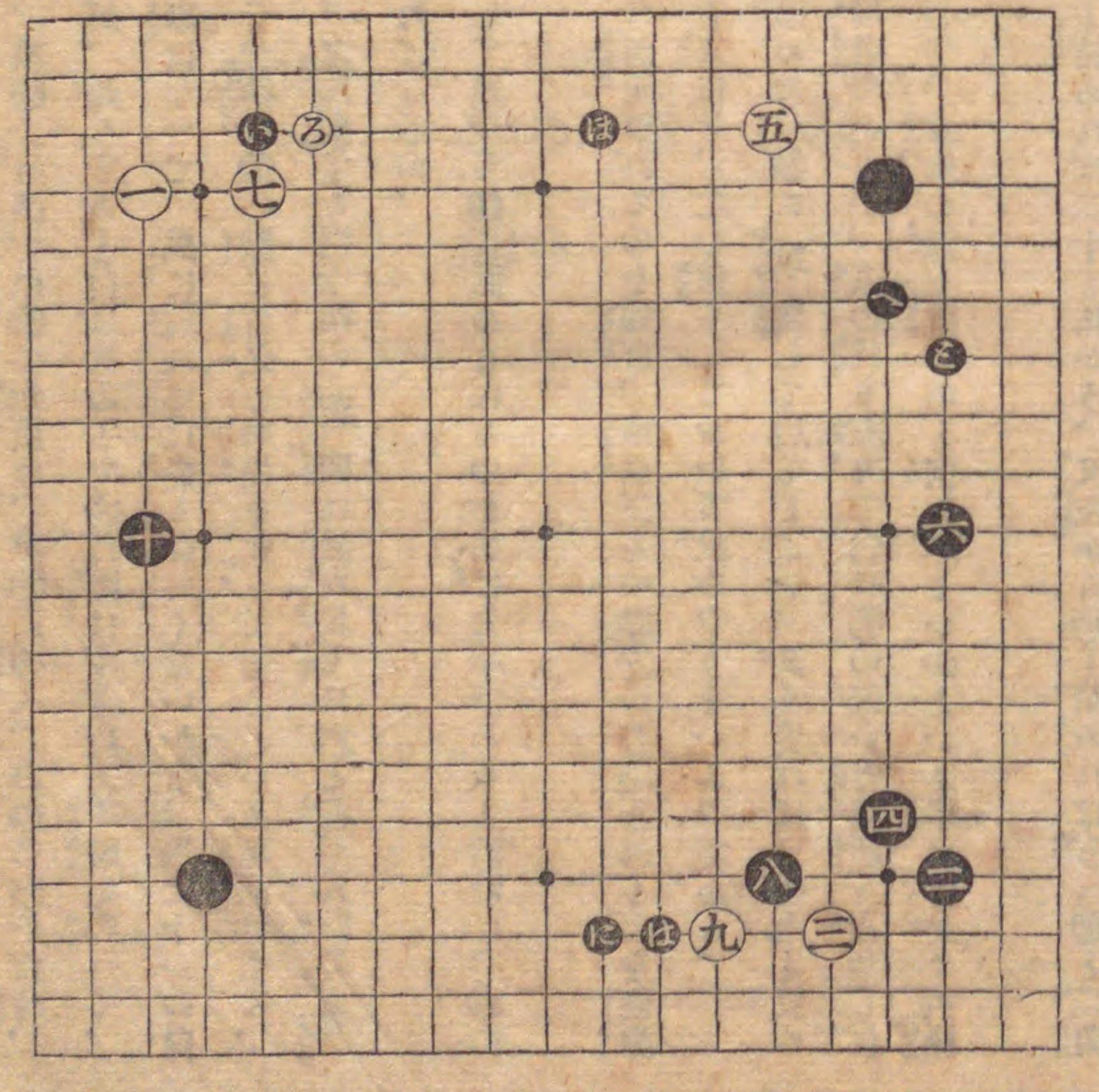
二子第三局

白第一着は圖の様に明隅に打たねばならぬ事は布石二子局概論に詳述した通であるが、古人の擲棋やら石立集などには往々此の第一着を勢子に掛つて五の點に打て居るのがあるが、是は白の不利である事言ふ迄もない、乃で若も白が一の手で五の點に掛つて來たならば黒は之に應せず、と左上隅目外に打つがよい、何故なれば此の●の手は後に白が一の點へ小目に掛つた時●に打つて●の拓きを兼ねて五の點にある白を三間夾にしやうといふ趣向の着手である、  
白一に對し黒亦明隅に二と打ち、白が心す三と掛らねばならぬ理由は同第一局の初に説いた通りであるが、黒四は●と掛つて打つも或は九の點か●か若くは●と夾んで打つも決して差支はない、本圖の通り四と尖むのは多少緩いといふ氣味はあるが、二子の碁としては先づ此う打つのもよい、  
白五の掛りに應じて黒が六と星下に打つたのは二、四の黒からの拓きを兼ね、次で●に單關して此の方面に大規模の形勢を造らうといふ趣向である、若し此の六の手を●に普通の様に大斜走する事は古人の擲棋にも往々ある手で敢て悪いといふ手ではないが然し後に至つて此方面即右側一帯に大模様を造らうといふ時に●の位置が如何にも低いから其の打ち場に困るのである、から矢張り本圖の通り六と星に打つ方がよい。

六子可  
六ノ子テト  
緯ルノ利害

ハトカケタ  
意

白七の手は必しも此く高締に打たねばならぬといふ點ではない●の點に小斜走縮をしておりても又は●に大斜走縮をしてもよい、其は對局者の趣向によるのである、  
黒八の掛けを打たずに單に十と星下に打つておくのもよい、圖の様に八と掛けて白に九と飛ばしたのは、以後の成り行によつては、其がよいか悪いか此の場合では一寸解らぬ  
要するに黒が此く八に掛けたのは右側の模様を壯大にしやうといふ意味を含んでゐると同時に白に●の點に二間拓きされるのを不便と感じた時此の拓きを妨げる目的をも兼ねて打つたのである、



(局子二法石布)



にノ打込所  
ヲ是也一

白十五ノ意

黒十六ノ意

黒十八ノ打  
場所

黒十二の手で●に頂け、白○に縛ね、黒●に行び、白○に飛頂け、黒●に抑へ、白○に粘いだ時、黒●に角を粘ぐといふ打ち方もあるが、此うすると白に次の手で●に圍はずといふ手順を興へて、下側一帯の白の地域が治まるといふ事になつて、黒に取つては餘り面白くないから、黒は十一の白に應じて圖の通り只軽く十二と飛んで、徐に●の點に打込む時機を窺うてをるといふ趣向である、白十三は●の打込を防いだ手である、之に對する黒十四の單關は最初星下に六と打つた時の志を遂げた手で極めて好い着手と言はねばならぬ、

白十五は左上隅の白の地域を手厚くして黒から●に詰められるのを妨げた手であると同時に、●に打込まうといふ意味を含んでをる、

黒が十六と尖頂けたのは、白から○に斜走されるのを妨げ、或は三々の點●に打込まれるのを幾分拒いでをるが、重なる目的は白を十七と立たせ、之を重くしておいて攻めやうといふのである、

黒十八は星下●に打つて、白が●に詰めた時に●に單關して居てもよい、其うすれば、十七と立つた白に與へる打撃は本圖に比べて一層急であるが、其の代り左方で白に○の好い打場所を占められる事になるから、各々一得一失であつて、本圖の通り運ぶのと何れがよいかといふ事は容易に判斷が出来ぬ、

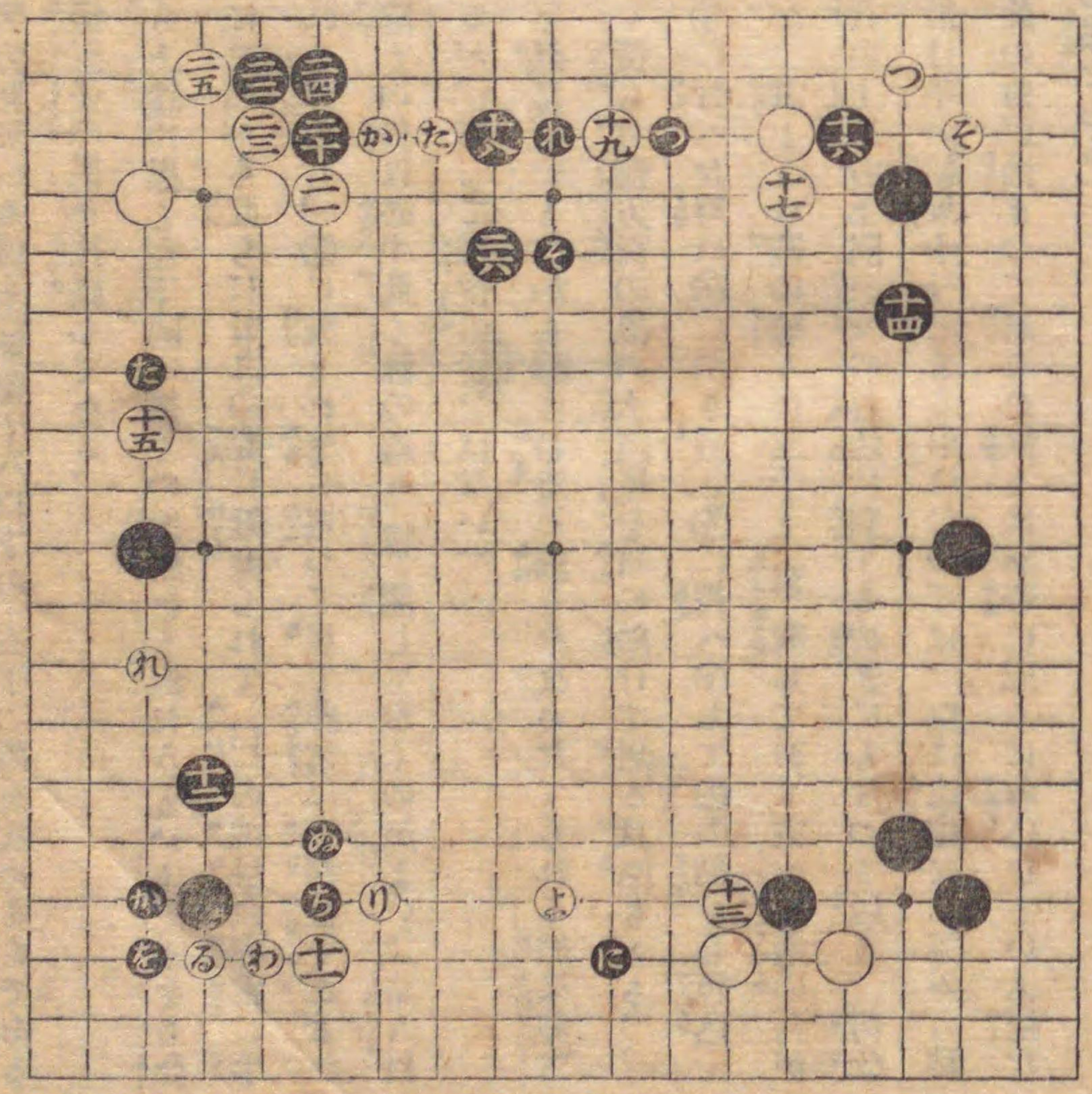
本圖十八の點は若し白が右から十九と詰めれば二十と拓かう、又左から●と詰めれば右へ●と二間

二十乃至廿六  
常用ノ手

拓しやうといふ、所謂見合の手である、

要するに本圖十八の打ち方は、白を攻めるといふ事を主にせず、白にも多少の餘地を興へ、自分も安全にして其の傍ら白の地域を狭ばめやうといふ意味の手と見てよい、

黒二十から二十六迄黒白七着の應接は、黒が白の地域を窄めながら自己の根據を造らうといふ自然の手順である「此と同じ形が已に(黒白地を更へて)布石法互先第一局第十一頁に於て詳解してあるから、茲には略説するが常によく能く顯はれる形であるから參照熟讀せらるゝの必要がある」



~~~~~(局子二法石布)~~~~~


白三十九後慢
ノキニアラス

白三十九大捲ハ
打ツキ要所

黒手ノ手ノ
味深ク味ノ
ハシ

白が廿七と單關したのは、自己の勢力を加へる傍ら(前圖十八以下の)五子の黒を攻める着である
黒廿八は⑩の打込を拒ぐ傍ら暗に上邊五子の黒を掩護してをる、
白廿九は左上隅の白を手厚くする傍ら上邊の黒と左下隅の黒との連絡をも絶たうといふ意味をも含
んでをる、若し此の手を打たぬときは、黒から直ちに廿九の點に冠せられて白の地域は非常に手
薄くなるばかりで無く⑪に打ち込まれる味やら、⑫に夾まれ味が残つて居て非常に不利であるか
ら此ういふ所は萬已むを得ぬ場合を除くの外は必ず此く圖の通り單關しておくのがよい(素人目
には此ういふ手は緩い様に感じられるが、決して緩慢の手ではない)
黒が三十と打つたのは、若し此の手を打たないと白から⑬に斜走に煽られ攻めたてられる結果非常
の不利益を招く來になるから之を防ぐ傍ら右側方面の黒の大模様を暗に助けて居る意味もある、
尤も此の三十の手で⑭に頂け、白が⑮に押へた時は⑯に引き若し⑰に押へずして⑱の點から縛込ん
だならば、⑲に截るといふ手もあるが、其よりは圖の通りに三十と單關しておく方が上邊の白が
治まらぬだけ黒のために便利である其の上右隅三々の打込に對する凌ぎにもなつて居る、何故
ならば二十七迄の四子の白が黒⑲の頂け手の結果十分治まる事になつては、白は遠慮なく三々の點
に打込む事も出来るが、之に反して此の白が治まつて居らぬ限りは無暗に三々に打込むといふ様な
事は出来ぬ(此ういふ所が味のある點である)

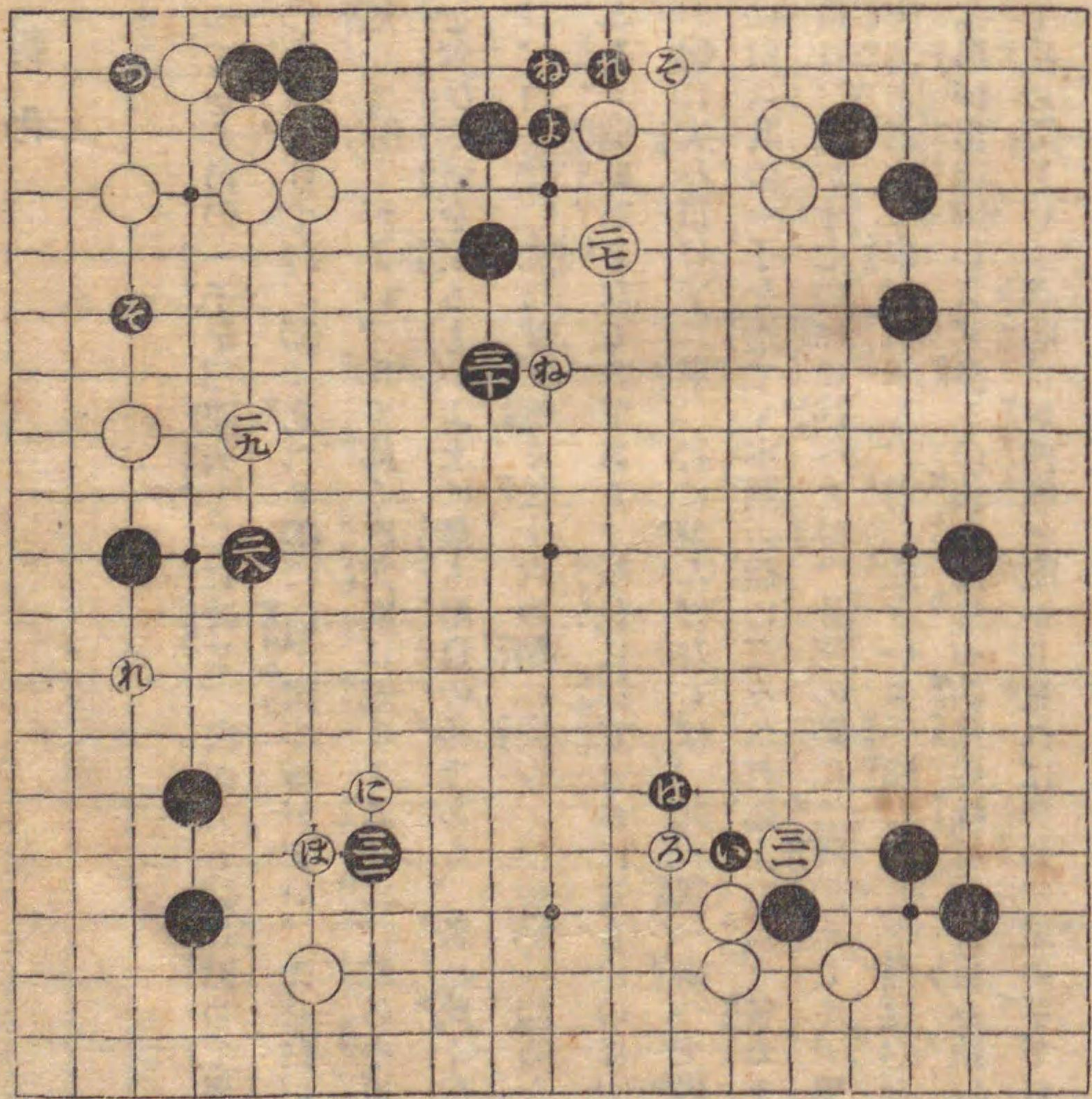
肝要ノ手

白三十一

此手二十三頁
二十五頁ヲ
参照ス

黒三十二
最良ノ着
手

白卅一の手は黒から⑳に縛ねら
れ、白が之を㉑に縛ね返した時
再び㉒に二段縛をして右側の黒
を益々手厚くする黒の手段を防
いだのであるから之の手で幾分
右側の黒の模様が消された譯に
なる肝要な手である、黒卅二は
白から㉓若くば㉔に打たれて下
側の白に大模様を造られる其手
段を防いだ手で、即ち白の模様
を消しつつ自己の領域を擴めや
うといふ最良の着手である。



~~~~~(局子二法石布)~~~~~



二子第三局 變化

本圖は前譜黒十六の手からの變化である、

扱黒が十六の手を以つて右上隅に掛つてをる白の一子を三間夾とした時に、白が若し①に詰めて黒の拓きを妨げたならば、黒は先づ②に尖み頂けて白を③に立たせ④に單關するがよい、此時白が⑤に打つて凌いだならば、黒は⑥に冠しておくがよい、凡て此く直角風に冠する着手は、敵の中原に發展する鋒を止め、其の勢力を奪ひ地域を削るといふ上に最も好良の手である、若し此くなれば最初十六と打つ手で⑦に尖み頂け、白に⑧に立たせ、然る後十六の點に尖み、白が⑨に詰めた時に⑩に單關した(前圖十八の説明と)全く同結果となるのである、唯茲に注意せねばならぬのは、本圖黒十六、白①となつた時若し黒が②に尖み頂けずに單に③に飛んだならば、此の隅へ掛つて居る白の一子は極めて輕いから、其時は白は其の一子を捨て、本圖の様に三々へ打込んで振り替るとも、又は趣向によつては十八の點へ頂け、黒が十七の點に抑へた時、廿三の點に二段緯をして、黒が二十の點に粘いた時④に掛粘いで容易に活きる事が出来る、若し此ういふ手順になると黒は白を攻め立て、自然に利益を收めるといふ事が出来るから、多くの場合は先づ前述の様に⑤に尖み頂けて白を⑥に立たせ之を重くしておいて攻めるといふ手順は専門家の眼から見れば普通一般の手ではあるが策戰の巧妙といふものである、

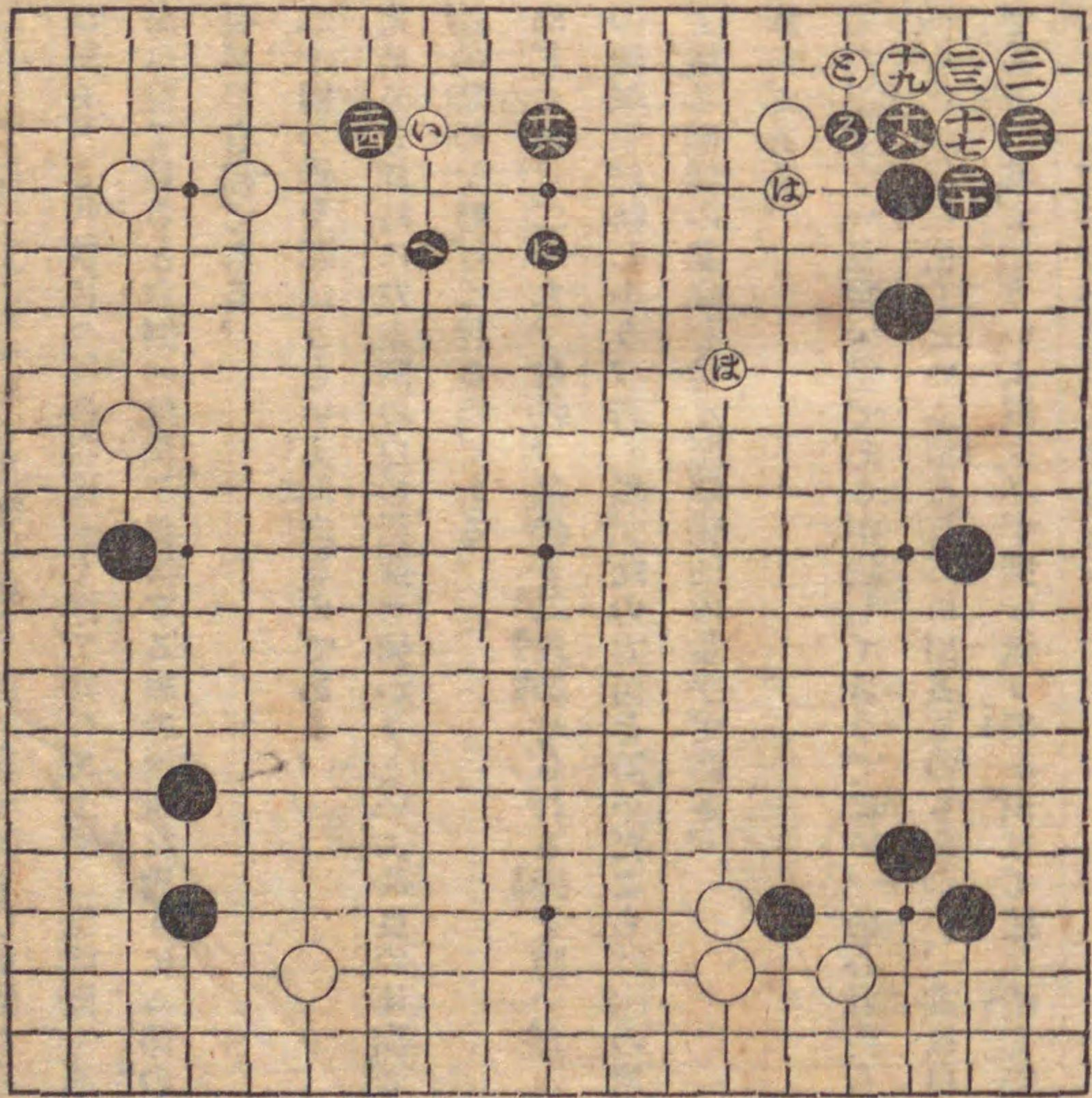
直角風、  
冠する良  
着

此の意

二段緯の時  
切ラレナイ筈

前述の意味から言ふと、本圖黒十六の夾みは普通ならば⑦の尖み頂けから先きにす可きであるが、此の場合圖の通り白に三々を侵されても、黒は其の代償として二十四の一着が打てる此のよい打場所を占めたいために隅の實利を白に與へたのである、要するに、本圖の様に隅の實利を抛棄して二十四の點に打つて左上隅方面に自分の地域を造り白の領域を削るがよいか、又は前述の假設圖の様に⑤に尖み頂けるといふ策を取るがよいか、といふ事は本圖の様な場合は何れも對局者の趣向次第であつて其の得失可否は容易に斷言する事が出来ぬのである。

第二十四手迄



~~~~~(局子二法石布)~~~~~


黒二十ノ趣向

黒二十の手で(20)から抑へてもよい、然すれば白は二十三に粘ぎ黒(21)に粘ぎ、白は(22)に斜走して活る事となる、此うなれば右側の黒の地域は削られる代償に△印の白は全く浮て終つて上邊の黒は漸く厚壯を加へる事になる、之を本圖の結果に就て見ると右側の地域を保持する事の出来た代りに△印の白は隅と連絡して此の方面は全く共有地の有様である、要するに黒二十は之に先手を取つて二十四の點を奪はうといふ趣向なのである。

白二十五 十九頁

二十一ノ年ヲ
參照スル

黒二十四は自己の地域を造り根據を定めると同時に左上隅の白の根據を衝かうといふ最良の地點であると同時に、白から必然来る可き(23)の詰めを妨げて居るのである。白二十五の手は前々圖三十一の手と同じく黒に二十九、白(26)、黒(27)と二段縛せられる理を防いだので、次に二十七と打つて廣漠たる黒の地域を侵略しやう、若し黒が此の方面を防いだならば(28)の單關若くは(29)の斜走を以て自己の地域を造る兩様の意味を含んだ準備的の着手である。

黒三十後手
ニアラス

此打方忘ル
カチス

黒二十六の手は、前々圖黒三十二と同意である。黒三十の一着は此の隅の治りを確かめた手で、一見緩い様であるが決してさうでない、初心者稍もすると此の手を以て(30)に頂け(31)に抑へられて(32)に引くといふ様な打方に出るものもあるが、其は白に利益を與へるの外何の益もない手である、其で此ういふ隅は必ず圖の通り尖み頂けて速に活を安全にして置いて、徐ろに(33)の截を窮ふといふ打ち方を忘れてはならぬ。

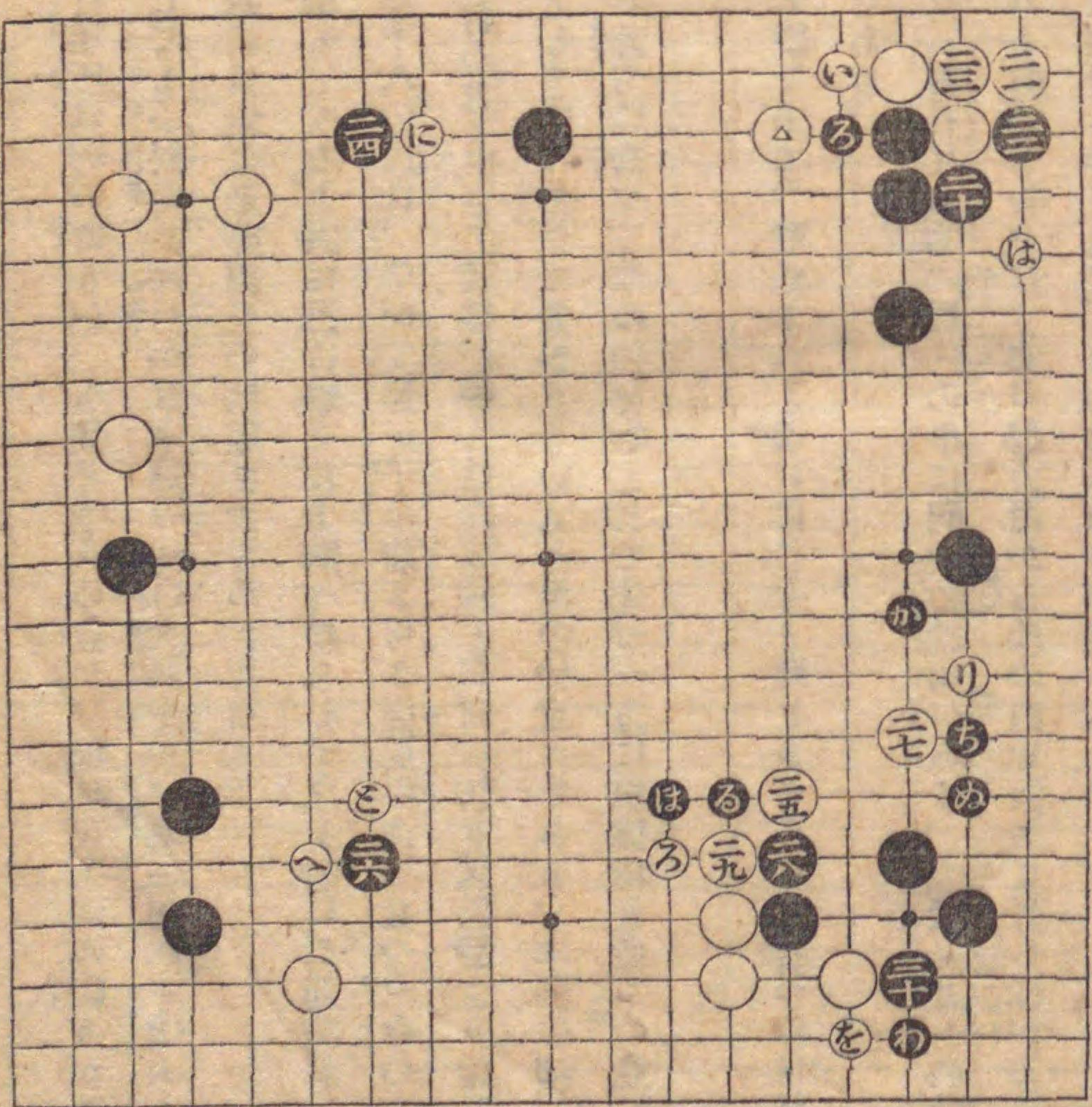
此打方
ツギフヘシ

扱黒が三十と尖み頂けた時に白若し(34)に下つたならば、黒は之を(35)に押へて居てもよし、又(36)に頂けやうといふ意味を含んで(37)に尖んで、白の應手を伺うて居てもよい。

説明の都合上前圖二十の手よ

り二十四手迄を本圖に再掲す

第三十手止



~~~~~(局子二法石布)~~~~~



二子第四局

黒四と尖んだ時、白五の撰ぶ可き打場所は⑥の掛りか、右側星下八の点か、或は左上隅の縮りか此の三種の内である、縮りをするとしても小斜走か高目か又本圖の様に大斜走か、其の何れを撰ぶも畢竟對局者の趣向次第であつて、茲には未だ是非得失の問題は起らぬのである。

「注」白が五の手で若し⑥の点に掛るとすると其は黒に⑦と左上隅へ掛らして之を⑧に二間夾にしやうといふ手段である、又右側星下八の点は、やがて黒が子を運ぶ可き樞要の点で且つ見合の点である（見合とは「白が八の點に打つたとして」若黒が⑨と迫れば⑩と二間に拓き又黒⑪より迫らず⑫の點から詰をうてば、悠然として⑬に拓いて置かうといふ一種の約束手である、本圖の様に一隅に縮を打つは、黒が四の手で直ちに掛つて來ぬのを幸として先づ一方に根據地を造るの意に外ならぬのである、

黒六は單に八の點に打つのも良好の點である、唯此く六と掛け白に七と應じさせてから打つのは茲に勢力を増して打たうといふ趣向である、

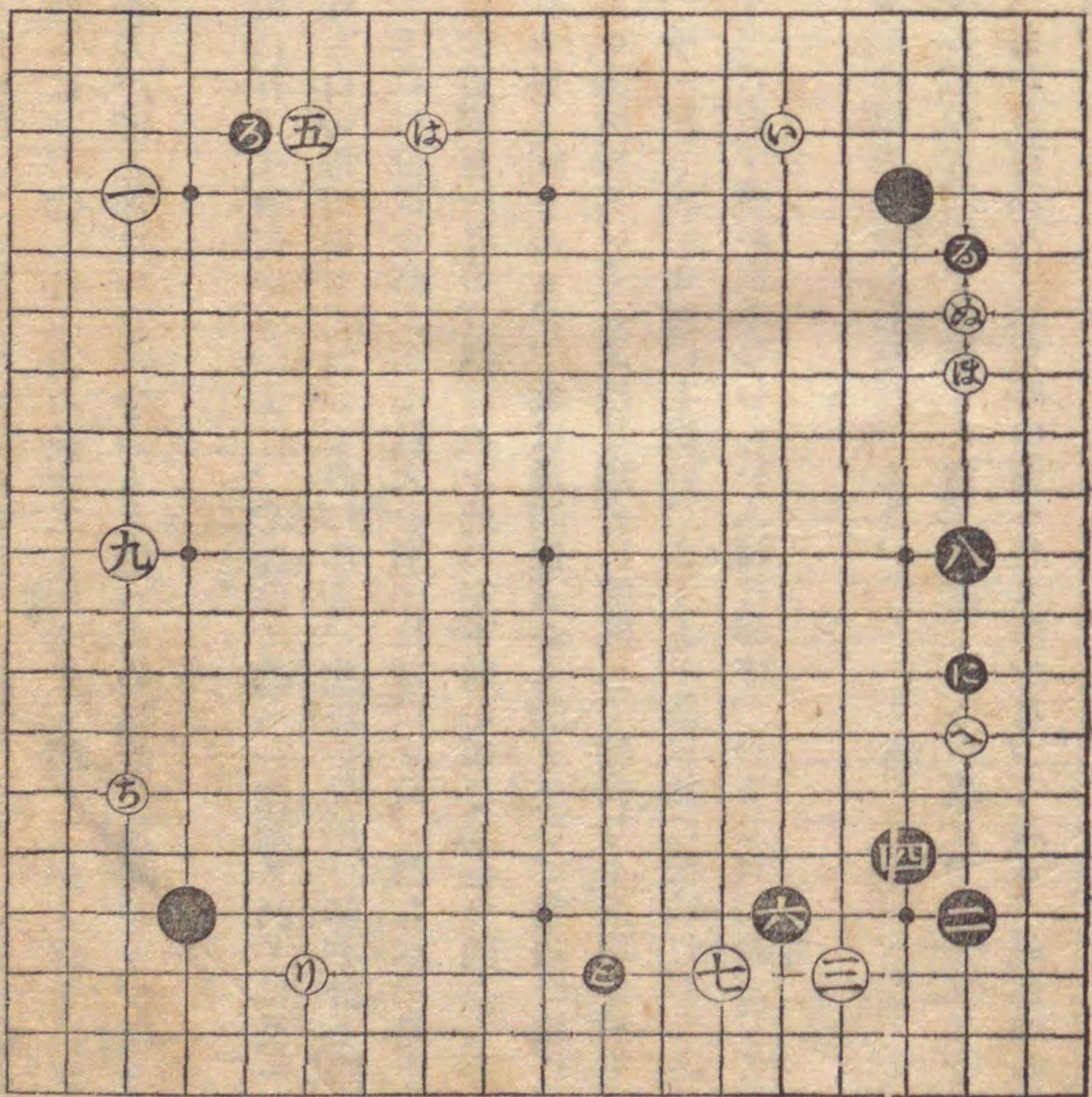
「注」此の六と掛け八と拓く手順は「布石互先第六局」の中に同型の説明がある、大體は其と同様である、若六と掛けずして單に八と打つておけば、他日⑭方面から此の白を攻めて打つ味がある兎にも角にも此の場合八の點は大場であつて逸する事の出來ぬ好着點である、

九ノ手打ツ  
ハカウサレハ  
ぬノ一止

白九は、右上隅へ⑬と掛るか或は左下隅へ⑭又は⑮と何れかに掛るも良い。

「注」本来白九は⑯若くは⑰、⑱何れかに掛る方がよいので互先の棋とは多少趣の違ふ所を能々翫味せねばならぬ、其で此の白九の手が悪いのかと言へば決してさうではない、元より立派な點ではあるが、打つ人の趣向即策戰次第では前記⑲、⑳、㉑、の何れかへ烈しく打つて黒の應手を試みるかも知れぬ、唯此場合打つてならぬのは㉒の一點である此點は八の夾と相待つて㉓に尖頂られる不利があるからである。

第一手より第九手迄



~~~~~(局子二法石布)~~~~~


星十二ハヤカラ
ちノスルヲ
白十三ノ手ヲ
打テサル
理由

棋家ノ最モ
忌ム所

黒十八ノ味

黒十と二子の白に迫り十一と應せしめたる後十二と壯大の地域を劃した此の十二の手はやがてと飛ぶ手を豫想して打つた手である、然らば先づと打ち其の後十二と圍うても同じ事かと言ふに少し趣が違ふ、其は若しと打ち白の勢力がと加はつた後であると方面の黒地の厚味が多少薄くなるの傾が出来る。

「注」白十三を更に歩を進めての點に打てば如何かといふに、其は黒にへ一間飛されては又一手の邊に手を引かねばならぬ、即ち白の形が極めて低いものになる、狹隘い場所活を計る際は兎も角、廣漠たる部面に子を配するには位置を高くして壯大を期せねばならぬ、即ち本圖黒十二を決しての點には下さない、(注意實際有段者の打棋に往々此の左下隅の様な場合で隅置石から次で十、といふ様な形の現はれる事も往々あるが、其は最初置石からと拓いて後或時機に際して十の點に着手するより外に良い場所が無いといふ様な場合に遭遇して餘義なく出来る形であつて已に十と打つて見るとの一子の在り場が如何にも低い、さりとて是は既に前に打つてある手であるから今更之を若くは十二に直す事が出来ないといふ様な譯で、つまり豫期せずして出来た形である。

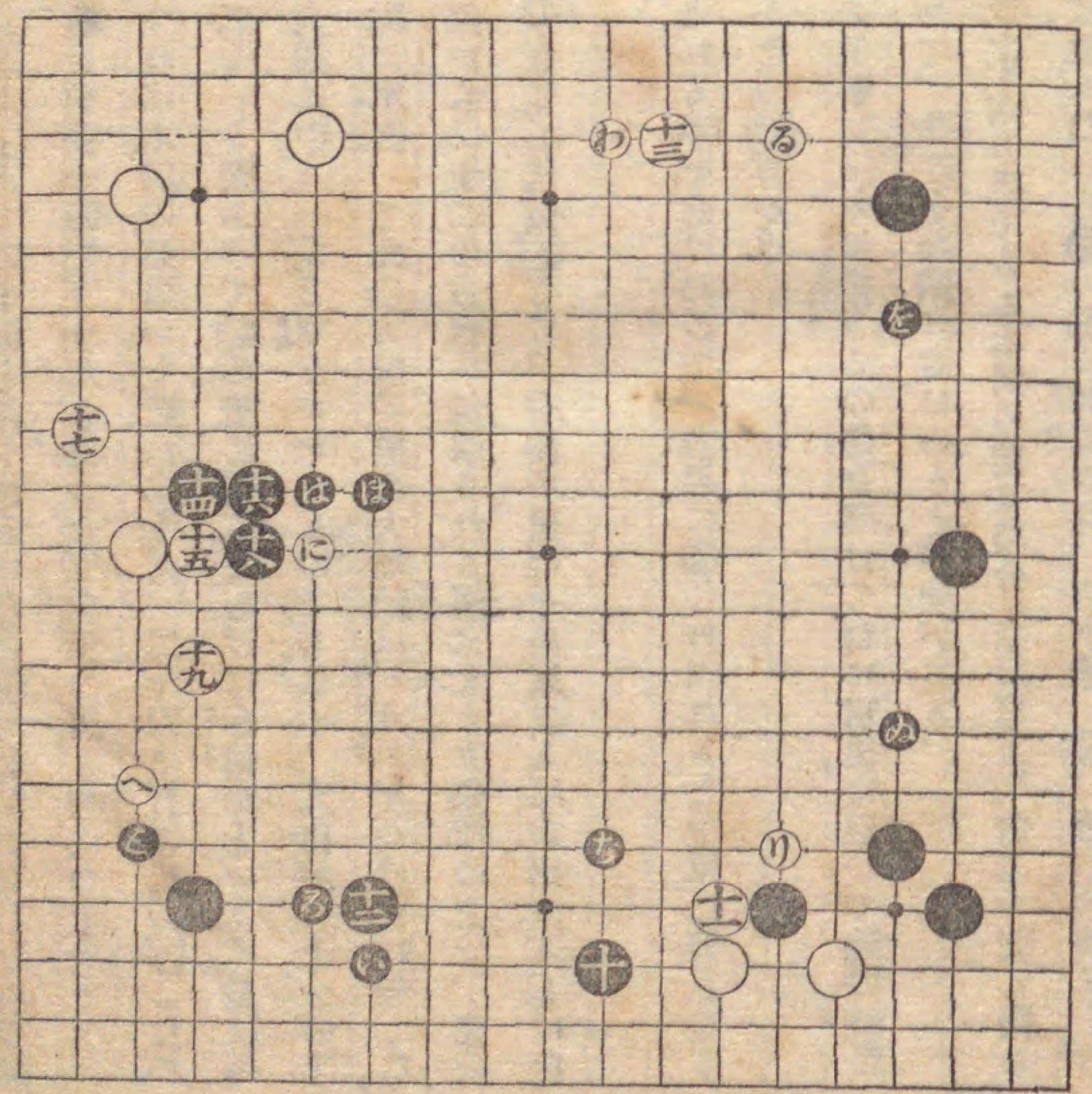
即低い位取りで廣い場所を占領する形は棋家の最も忌む所である、黒十四と白の肩側から行くのは安全に敵の大規模を侵襲する常用手段であるが更に十六と立ち十八と曲つたのは右側の黒の大地域へ白から打込んで來た時の備へにも多少なつて居る、が上邊の白地に對する侵略の味も含んで居る、

白十九極必要

白十七と軽く走つたのは若黒十六の時更に十八に押し黒白の黒と押せば此の四子連立の白の勢力が十、十二で圍うて居る黒地に及ぼす影響よりは十四以下迄の黒が上邊の白地に影響する味の度合の方が餘計に不利だと考へた際に此く軽く捌くのである、黒十八に應じた白十九の手は極めて必要である、之に反して若黒から一着此の邊に運ばれると左下隅より中原一帯へかけて黒に壯大無邊の形勢を造られるの患がある。

「注」白十九から更にに運ぶのは蛇足である、但し黒からと自己の隅に備へて白の裾を覗ふのは良い手であるが是は時機問題で今は尙早い。

第十九手迄



(局子二法石布)

黒二十と詰め、白を二十一に飛ばせ、次で二十二、二十四と打つたのは白の位地を低からしむる手段である、且此の二十二、二十四の兩着は前圖十四以下十八と曲つた三角形の黒と相待つて居る。
「注」黒二十に應じて二十一と單關すれば本圖の通黒から更に二十二、二十四と打たれる順になつて白不利益の様であるから、寧ろ二十一と飛ぶ手で㊦の邊に備へておけば如何かといふには一應尤の様であるが、然し此ういふ大地は中々一手で守りキレルものでもなく、又白が二十一の手を㊦に打つとすると黒又二十八の點に單關して此の方面の黒の大地域は一寸手がつけられ無くなる、乃で白は二十一と打つた以上黒から二十二の方面に侵撃される事は元より覺悟の上で、此の方面の自己の地域が低くなる(實利の減少)代償として、右側の黒地を略取する事が出来るとは白の胸中に成算した所である。

白二十五と縛ねたのは、黒に㊧と圍はれる手を妨げたので、若黒に㊨に打たれると中原に何となく黒の手厚い形勢が出来るから其を嫌うたのである。

「注」白二十五は黒二十二、二十四の進撃に一々挨拶するの愚を避けて窃に軍後に廻つて敵の歸路を絶つたの勢を示し二十六と應せしめて、先手を他隅に着けやうとの趣がある、

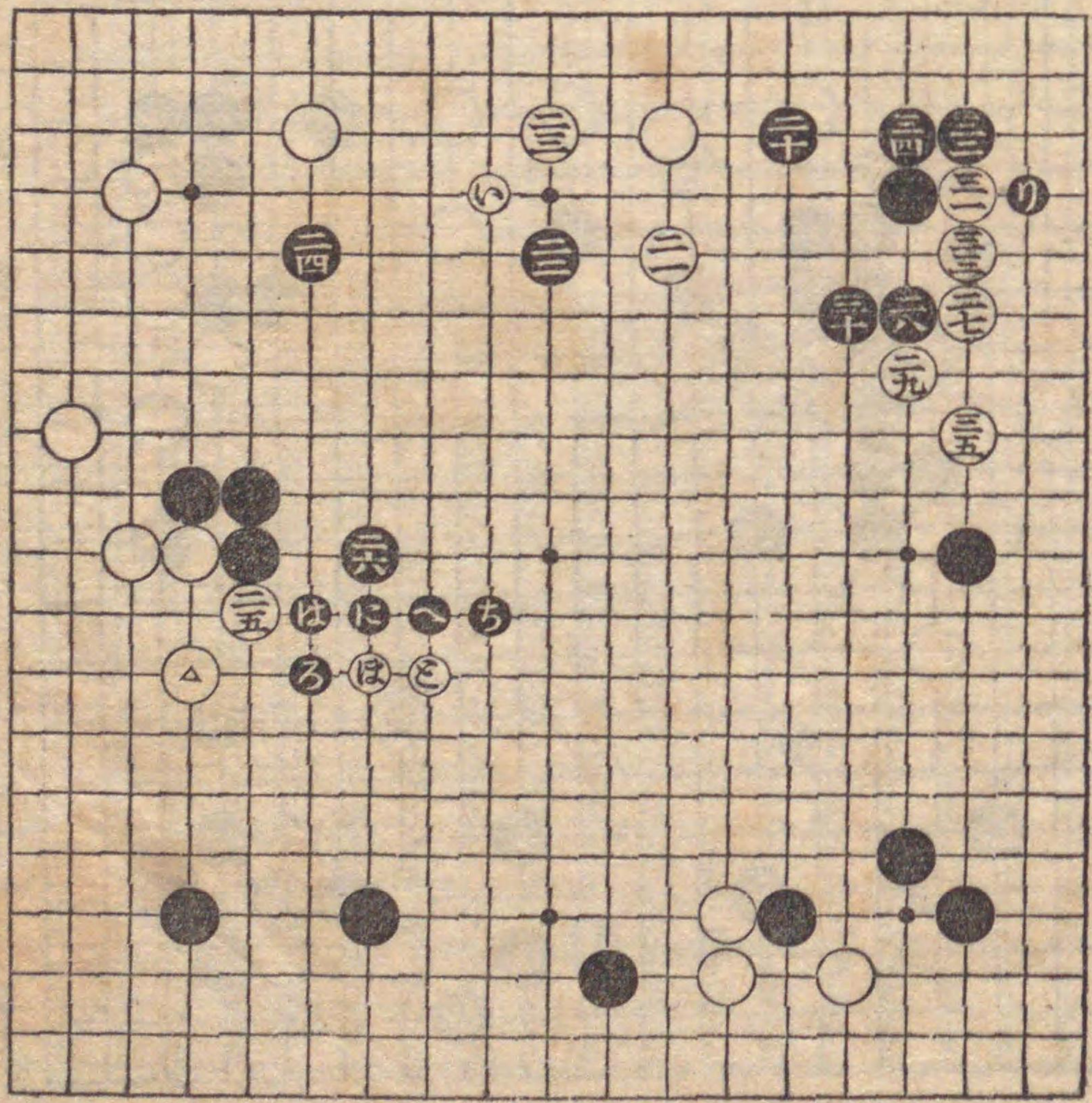
初心者のため特に注意す可きは、黒二十六の手である本國の様な場合に若輕卒に、白二十五に應じて、二十六の手を㊩に縛ねたならば忽ち白から㊪の點に縛返され、以下㊫、㊬、㊭と餘義なく行

黒二十文ノ受
方初心者、
学ヲ所

びて後手を取るといふ不利ばかりでなく、茲に㊮、㊯、㊰と加はつた白の勢力の影響として左下隅の疎慢な布石に痛切な感じを受けねばならぬ、其で此ういふ場合は唯二十六と軽く且つ堅く受けておくが要點である、

白二十七は二十一と單關した當初の志を遂行した手で此場合黒は㊱に飛んでおくのも悪くは無いが多少緩い、且つ後手である、白に軽く手拔かれて何れかへ先手で趣向される恐がある、乃で黒二十八は先手で他の好點に着手しやうといふ策戦で圖の通り頂行の定石に出たのである、

第二十手より第三十五手迄

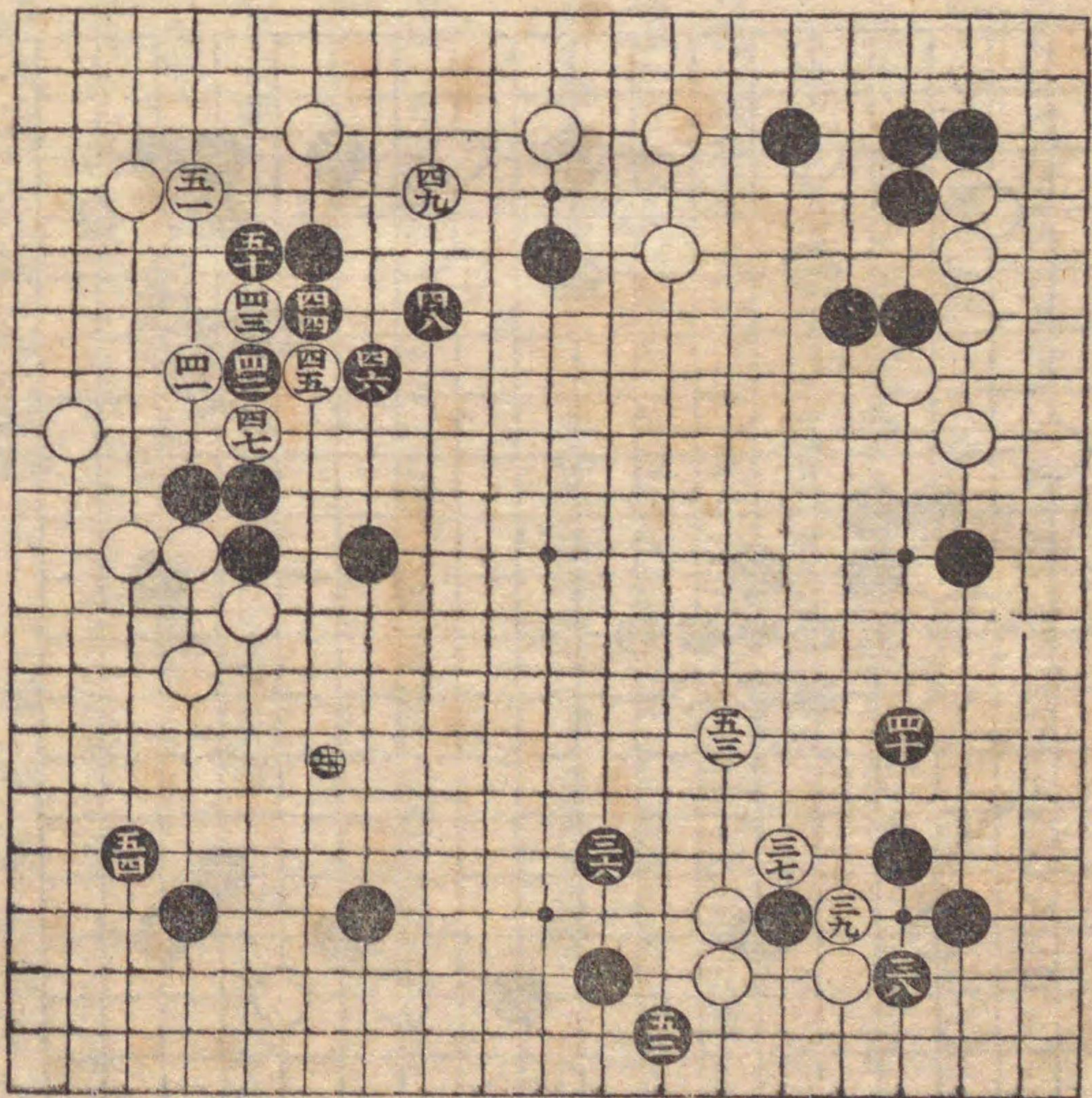


~~~~~(局子二法石布)~~~~~



黒四十二以下  
呼吸

黒三十六は當初十、十二と打つた時の意志を實現し次で三十八と尖頂けて隅の實利を確にして白に三十九と手を引かした後四十に飛んで此の黒地の治りを全うしたのである、  
白四十一は先づ黒の弱點を衝いて自己の地域を定めやうの手である、之に對して若黒が四十五の點に應じたならば更に白から四十九に窺はれ應接に日も亦足らぬ有様で不利のみを受けねばならぬから圖の通り四十二と烈しく應じ之の一子を犠牲として以下數着の交換後四十八と打つて先手を取り更に五十と行び轉じて右下隅に五十二と尖み着々利益を占めつ、白を攻の最後に五十四と手堅く締つて左下隅の大地域を確保したのである。



第三十六手より第五十四手止

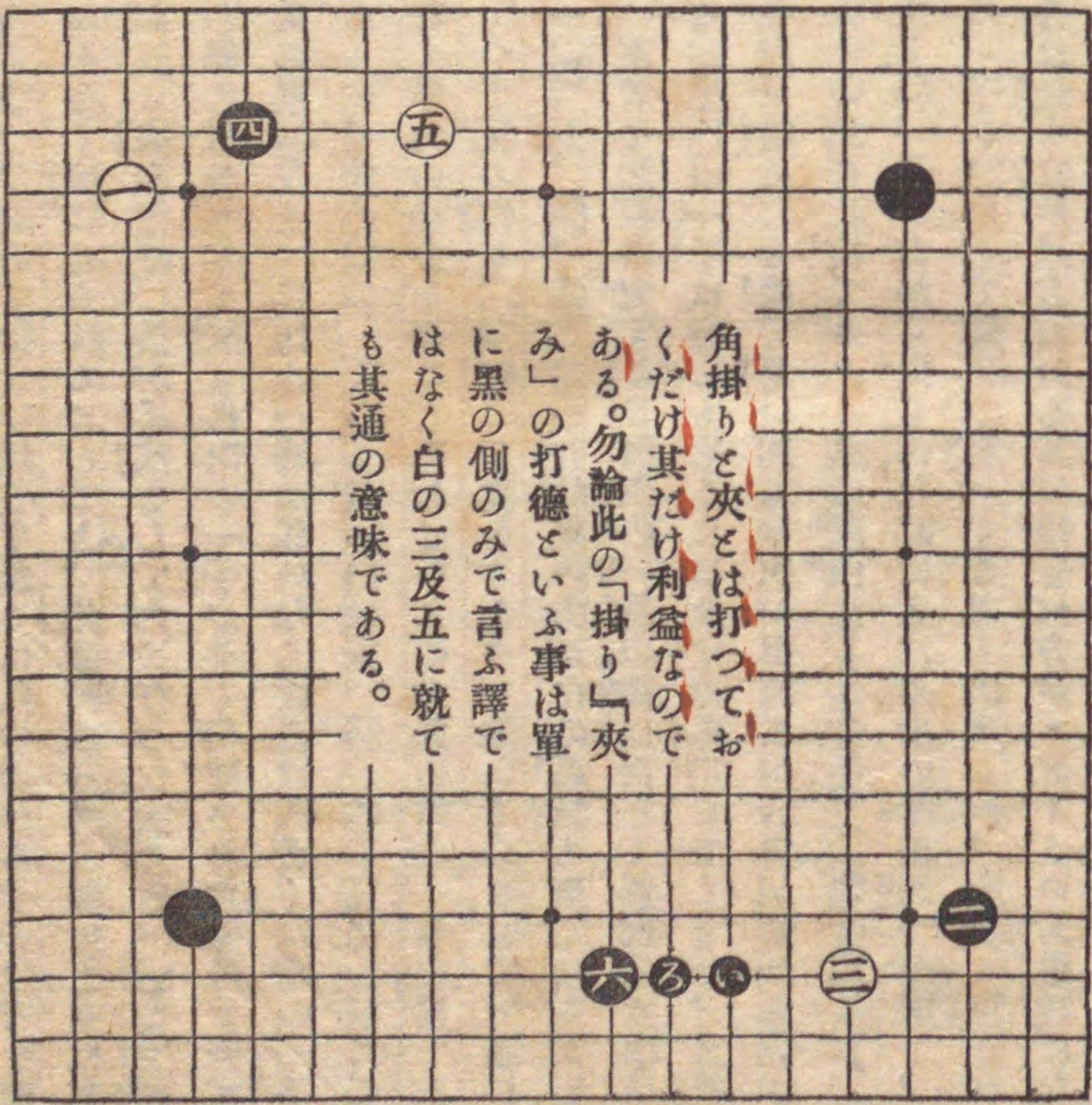
打徳・手

第一締  
第二掛  
第三夾  
夾の意味

一子第五局

黒四の掛かり及六の夾は打徳である、黒六は必しも此く三間夾にするとは限らぬ、趣向次第で●の間夾でも又は●の二間夾でも差支ないのである。  
「註」四の掛及六の夾が打徳であるといふ意は已に従來解説した通り(布石の初期に於て、「締」即我石のみで一隅を占領する事の大なるは言ふを俟たず、次には「掛り」即敵の締る可き要點を奪うて其の利權の幾分を我に收めておくといふ事が大切で、其の次は出來得可くんば「夾む」即來攻の敵の勢力の加はらざる前に先其の勢を殺いでおく、此の三種は最も重要な問題である、出來得べくんば兎に

第一手より第六手迄



角掛りと夾とは打つておくだけ其だけ利益なのである。勿論此の「掛り」夾み」の打徳といふ事は單に黒の側のみで言ふ譯ではなく白の三及五に就ても其通の意味である。







白十三は黒に●と煽られるのを拒ぐと同時に左下隅方面の黒の大模様を削がうといふ手である。「註」即之を反面から言うに黒に●と煽られると右方三子の白が窮屈を感じるのみならず随て十四方面の黒の封域が厚壯を加へるからである、

白二十一の手を常用の形即ち●に尖み黒●白●黒●白●黒●白●黒●白二十五と運ふ手は一方●方面に白の勢力があつて大模様の出来る時でなければ面白くない。

黒二十二を●と一路低く第三線に打てば、右下隅の黒は据明にならずして治る譯であるが、其を此高く打つたのは△印以下九、十一、十三の四子の白に響かさんが爲である。

「註」黒二十二が●の點に在れば四子の黒はさまで痛切な感じは受けぬが、其が一路高いため黒から●に頂越される味もあり四子の白は大に危険を感じる譯である(黒に●と頂越された時其を征に提る事が出来ぬ)

白二十三の衝當りは黒●の頂越を拒ぐと同時に黒が若手抜すれば直に●と打込んで黒の地域を蹂躪しやうといふ手である、

黒二十四は便ち此の白●の打込を防いで此の大地域を安全に護つたのである。

「註」茲に於てか二十二の一手が如何に活躍して居るか解る、二十二と一路高く打つて白に利かし彼を誘致して二十三と打たせ、其處に自然の手順を造り出して二十四と安全に防禦を施した此の無理ならぬ手順、次第あり連絡ある着手の活理を會得せねばならぬ、若夫れ之を俗理に平凡に

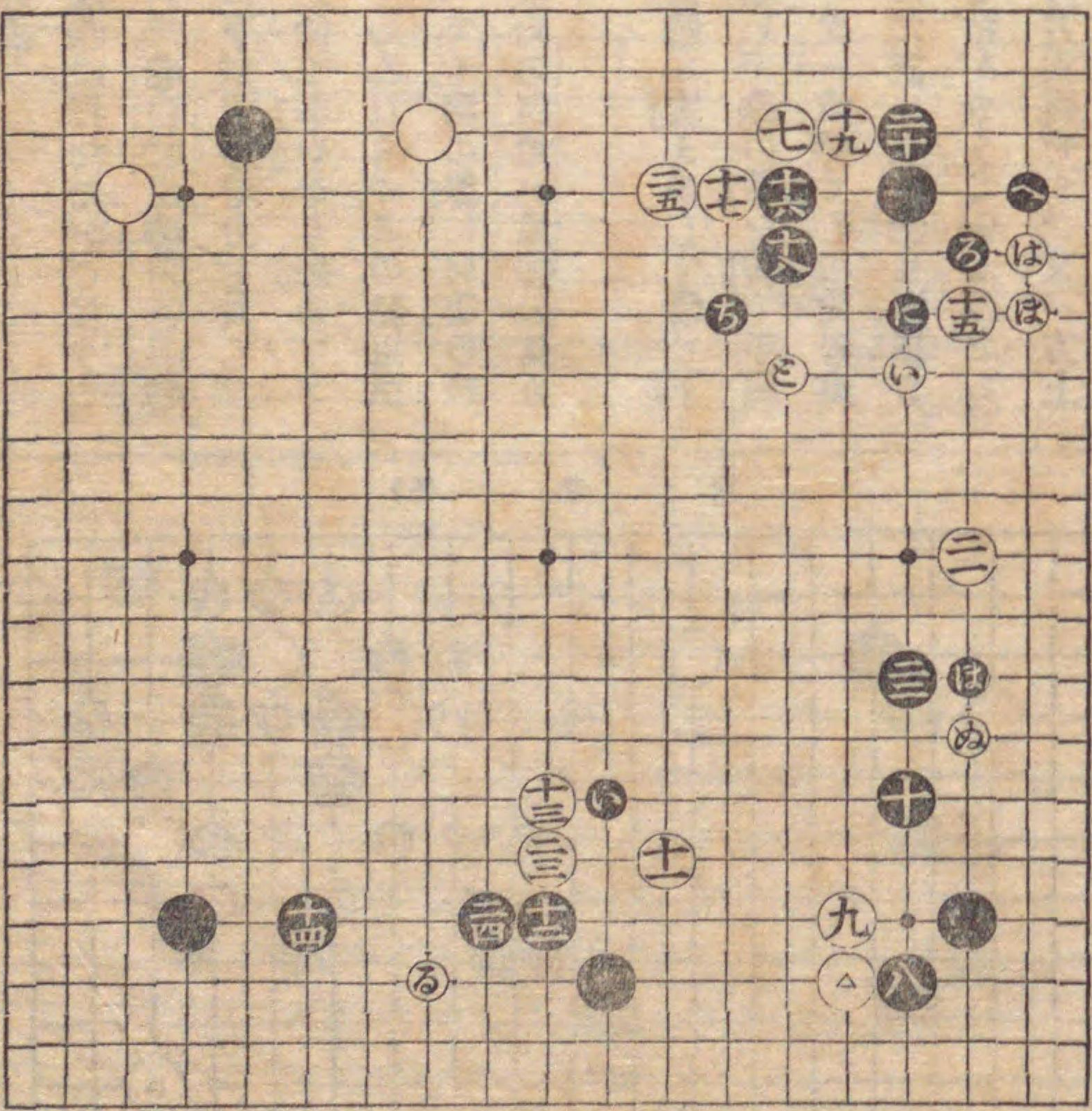
黒ニニノ術キ  
此理ヲ會得  
スハシ

白ニ五、  
意味

一路低く●と打つたとせば其の着手は腐つて居るヨシ腐つては居らぬにもせよ確に眠つて居る、眠つた手は附近の白に響かぬ、即白が二十三と來ぬのに此の黒地に手を入れるのは不自然である、手を入れねば局勢の推移によつては如何なる機會から此の大地域も侵略せられぬとは限らぬ。

「白が二十五と行びた意味は複雑であるから次の(第三十六頁)参考圖に就て詳解する事としやう」

第七手より第二十五手迄



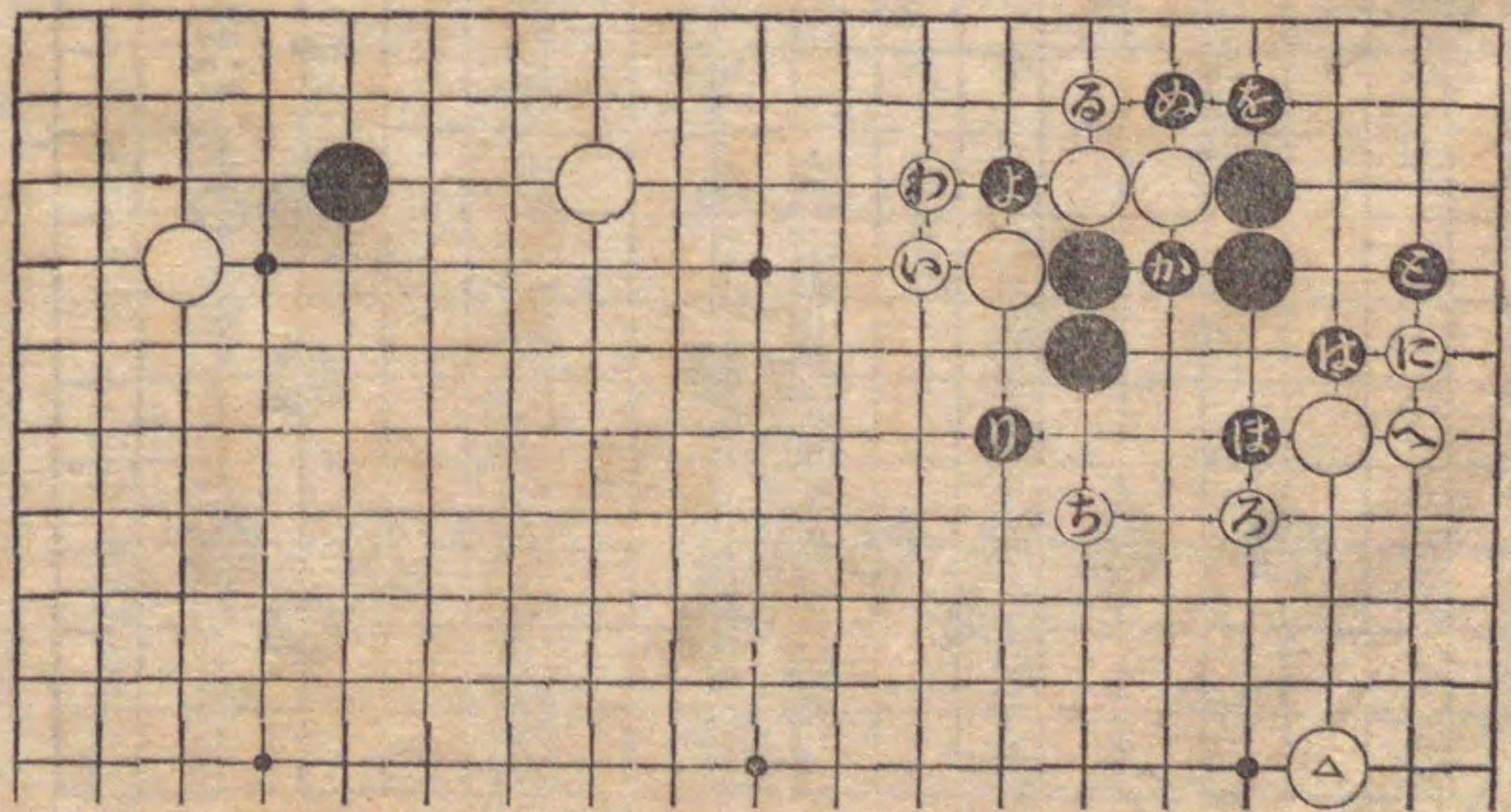
~~~~~(局子二法石布)~~~~~


此打廻し
方生る

(参考圖) 前圖第二十五の手に關する詳説

「註」白二十五の手(即本圖○)を何故○に打たぬかと言うと此の手で○と尖み以下常例の手順(黒●白○黒●白○黒●白○黒●)にも關はらず一方△印白との距離が餘り窄いから極めてツマラヌ即徒勞に等しい結果となる、のみならず其の結果黒に○と縛られた時白が之を○と抑へても隅の黒に何等の痛痒をも與へぬ、サリトテ手拔すれば此の白地が黒●の爲め裾明になつて居て甚だ味が悪い、
或は前述の手順で白○と飛んだ時黒●と尖ますして○と下られる手もある、其時は白○と掛粘いで●の截を防ぐ手順になつて黒に先手を取られるアマツサへ依然として此の處裾明である、乃で白が單に○と並んだ意は黒に●と尖頂させて手拍子で●の點に立ち黒に○を粘がさうといふのである、さすれば一方△印白との間も勢力重複せず、又一方上側の白地が裾明にならぬだけでもよいからである。

(圖 考 參)



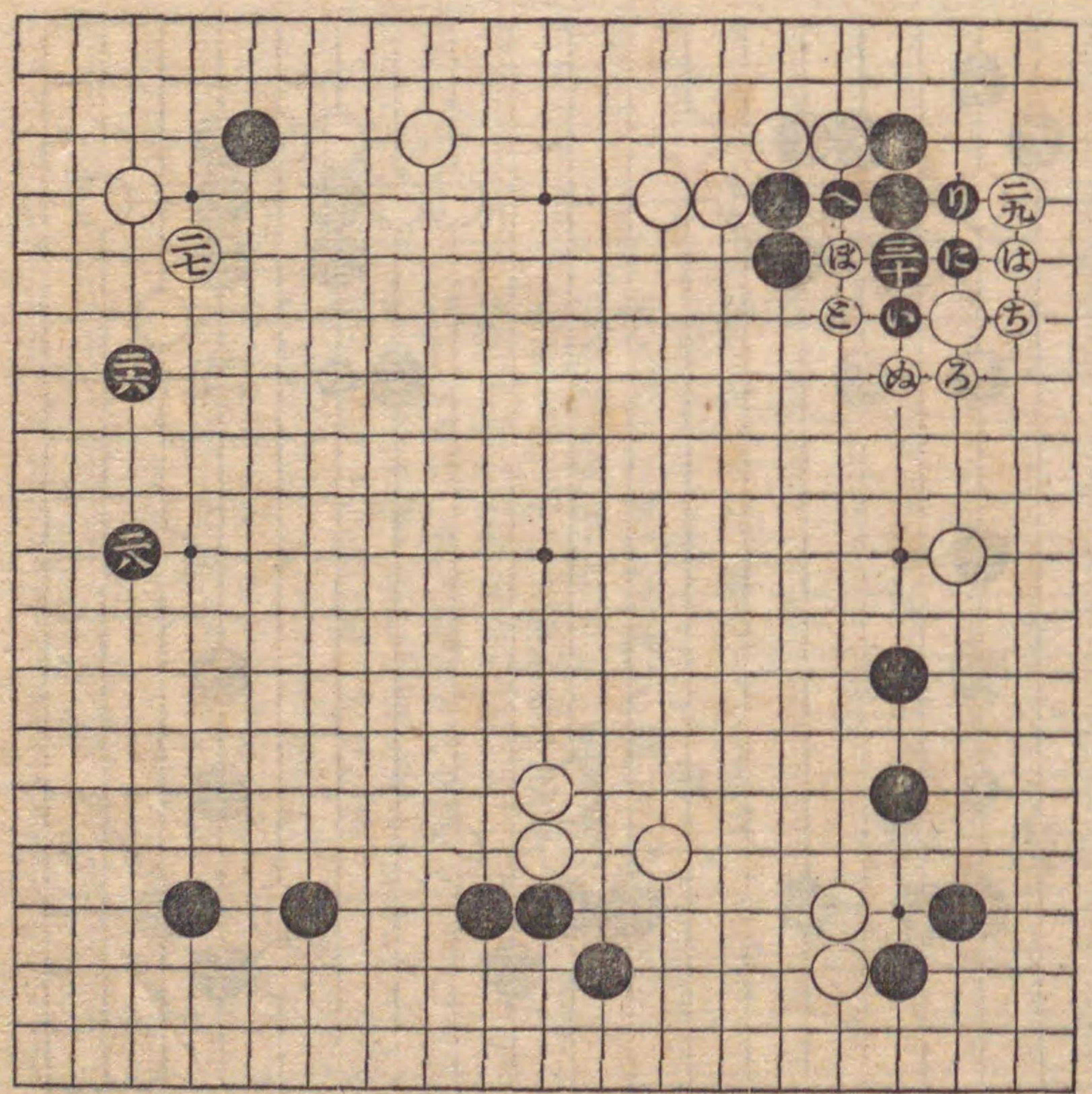
白二十九は黒(隅)の眼を奪うた手である。

「註」黒三十の手を若し●と頂けたならば、白は○と行びておくがよい。

△問、四子第四局第二十三頁左下隅兩掛の説明を應用して(假に黒三十の手で●と頂けたとして)白○に行びる手を三十の點に縛込まば如何

○答、生兵法大怪我の元なり、彼の四子の場合には白○と尖んであるから三十の點に縛込んだ時黒は之を上からアテるより外に途はないが、本圖の場合には大に趣を殊にして白は二十九と斜走して緩んで居るから白若三十に縛込まば黒に●から截られ白○黒●白○黒●白○黒●白○となつて非常に不利を蒙らねばならぬ。

第二十六手より第三十手迄



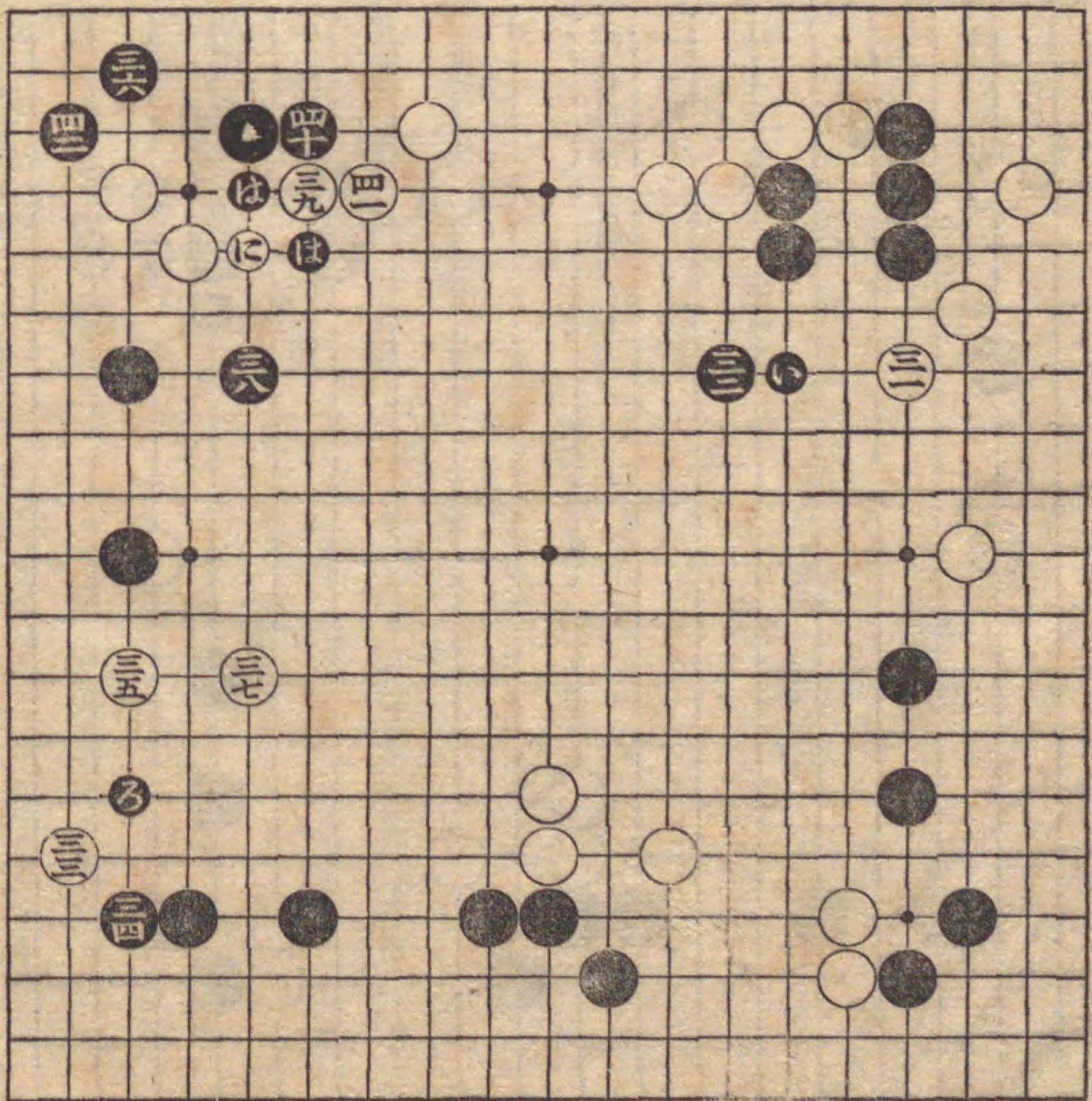
—(局子二法石布)—

打込
白三十三面白

二子夾内
黒ノ活方

黒三十二は●と飛ぶ手を一步働かしたのである、白三十三の手で單に三十五の點に打つとすると忽ち黒に●と詰られて容易に隅の黒地を侵略する事が出来ぬから先づ一着三十三と打つて黒に三十四と應じさせ一着の得をしてにおいて三十五と打つたのである、黒三十六は四の一子の凌ぎ手である、

黒が先づ三十八と飛んで白に三十九、四十一と運ばせておいて次で四十二と隅の活に就いた手順が良い(他日●と出白●と抑へた時●と截るといふ味をも覗うて居る)

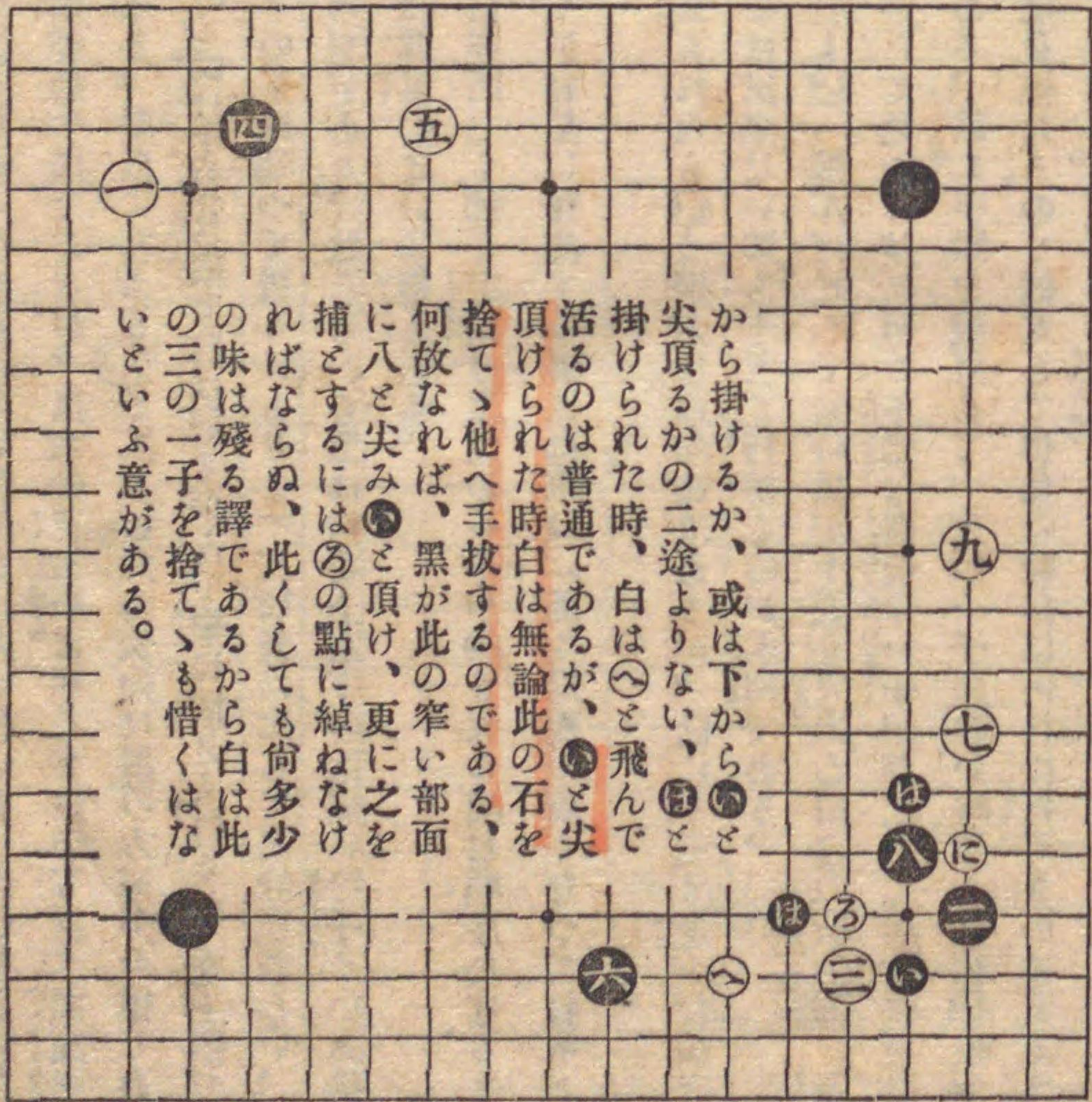


二子 第六局

白七、は前局の様に黒から●と尖頂けられる手を防遏したのである。

「註」白七が何故黒●の尖頂を制肘するかと言うと、元來●の尖頂は從來屢々詳述されてある通り白を●と立たし之を重くしておいて六の一子と相俟つて●と高壓を加へやう即ち一方●の尖頂けで根據を奪つておき、他方には六と●とで發展を阻害しやうといふ頗る酷しい攻撃の手である、然るに本圖の通り七の夾返しがある時は、ヨシ●と尖つけ●と立たしたとて白から●に頂越があるから●に煽る事が出来ないのみならず一手を緩うすると忽ち八の點を鎖されて出路がなくなるから、黒は何を捨ておいても先づ八と尖出た上は時機を見て●と上

第九手迄



から掛けるか、或は下から●と尖頂るか二途よりない、●と掛けられた時、白は●と飛んで活るのは普通であるが、●と尖頂けられた時白は無論此の石を捨て、他へ手抜するのである、何故なれば、黒が此の窄い部面に八と尖み●と頂け、更に之を捕とするには●の點に綽ねなければならぬ、此くしても尙多少の味は残る譯であるから白は此の三の一子を捨て、も惜くはないといふ意がある。

下段推テ

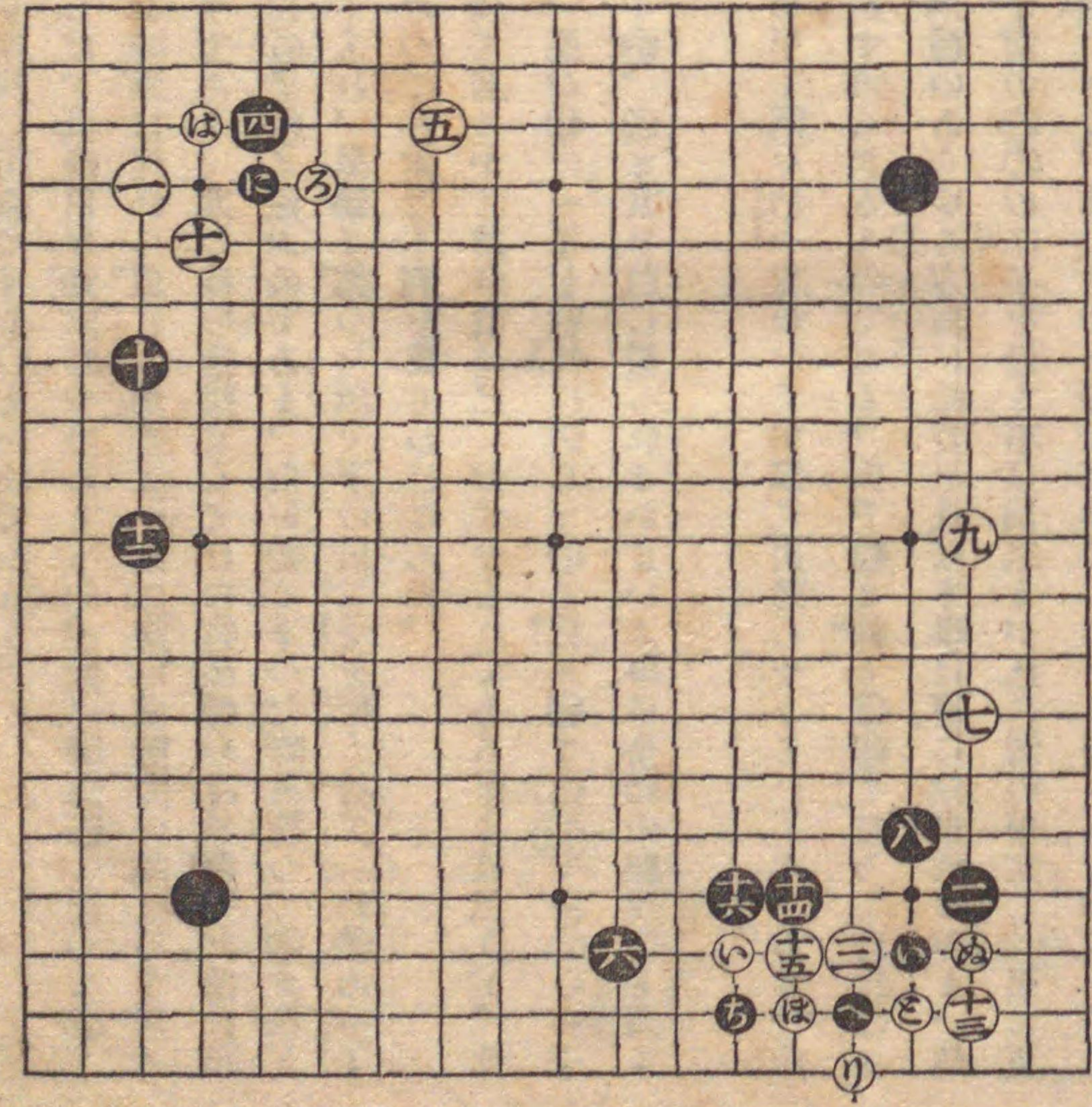
此本は
手ヲ知シ
此理ヲ
述ク

黒十と夾返す手は紛がなくて後が打ちよくなる、白が最初七と夾返して九と拓いた、之に對して黒亦十、十二と打つたのは殆んど互角の姿勢の様であるが、黒六の三間夾に對して白の五は二間夾であるだけが少しく利害關係が差つて来る、明白に言ふと白と黒との此の交換は黒の方が多少損である、何故かと言へば右下隅で黒が十四と掛けて見た處で白は⑤と飛んで樂に活きられるが、左上隅で白に⑥と掛けられると（隅に活、盤りの手は残つて居るにもせよ）三間夾に比しては餘程苦しい、同じ振替りの交換としても此ういふ不利がある、然しながら黒は尙右上左下の兩隅に勢子といふ偉大なる勢力が現存して居るから辛抱は爲易いといふ譯もある。

「註」 黒若十の手で⑥に尖頂け、白亦同じく④と尖頂け黒四の一子が③と立つ様な順序になるものとすると碁の變化は如何なり行くか容易に豫測する事は出来ぬ（即ち局面が廣くなつて打ニクイ碁になる）

白十三の斜走のない前に十四の點へ掛られたら⑤と飛ぶ事は勿論であるが、已に十三と走つた後であるときく十四と掛けられても飛ぶ事は出来ない即ち十五と打びるのが本理である、其の理由は、白十三黒十四の時白が若も⑥へ飛んだとして其時黒が十五と突出し白⑬の時黒⑭と截り白⑮黒⑯白⑰黒⑱となつたと假定して見ると茲に頗る不働な緩慢な一子が存在して居る事を發見するであらう其は即ち十三の子である、試に手順を變更して十三の一子のない時黒十四白⑮黒十六白⑰黒⑱白⑲黒⑳と手順を経たものと假定して扱此の際白は何れに打可きかと言ふと必ずや④と尖頂ける手であつて決して十三と打びる様な緩慢な手は下さぬ理屈である、して見ると

第十六手迄



今此結果が④と尖頂く可き筈の手を十三と打びたと同じ結果になつたのは十四の掛に應じて⑤と飛んだ弊を受けたのである、其故已に十三の走りをした上は④と飛ぶのは不利益である。

「註」 但し黒の立場から言ふと白十三黒十四の時白が⑤と飛んだからとて、必ず十五と出截ものとは限らぬ、其は黒の趣向次第で、或は十五と出て次に十六と曲り白に⑥の點を粘がすといふ様な手に打つかも知れぬ、茲は只白としての注意を記した迄である。

此兩掛
對をね
半味を
重要ナキ
ニト抑ハス

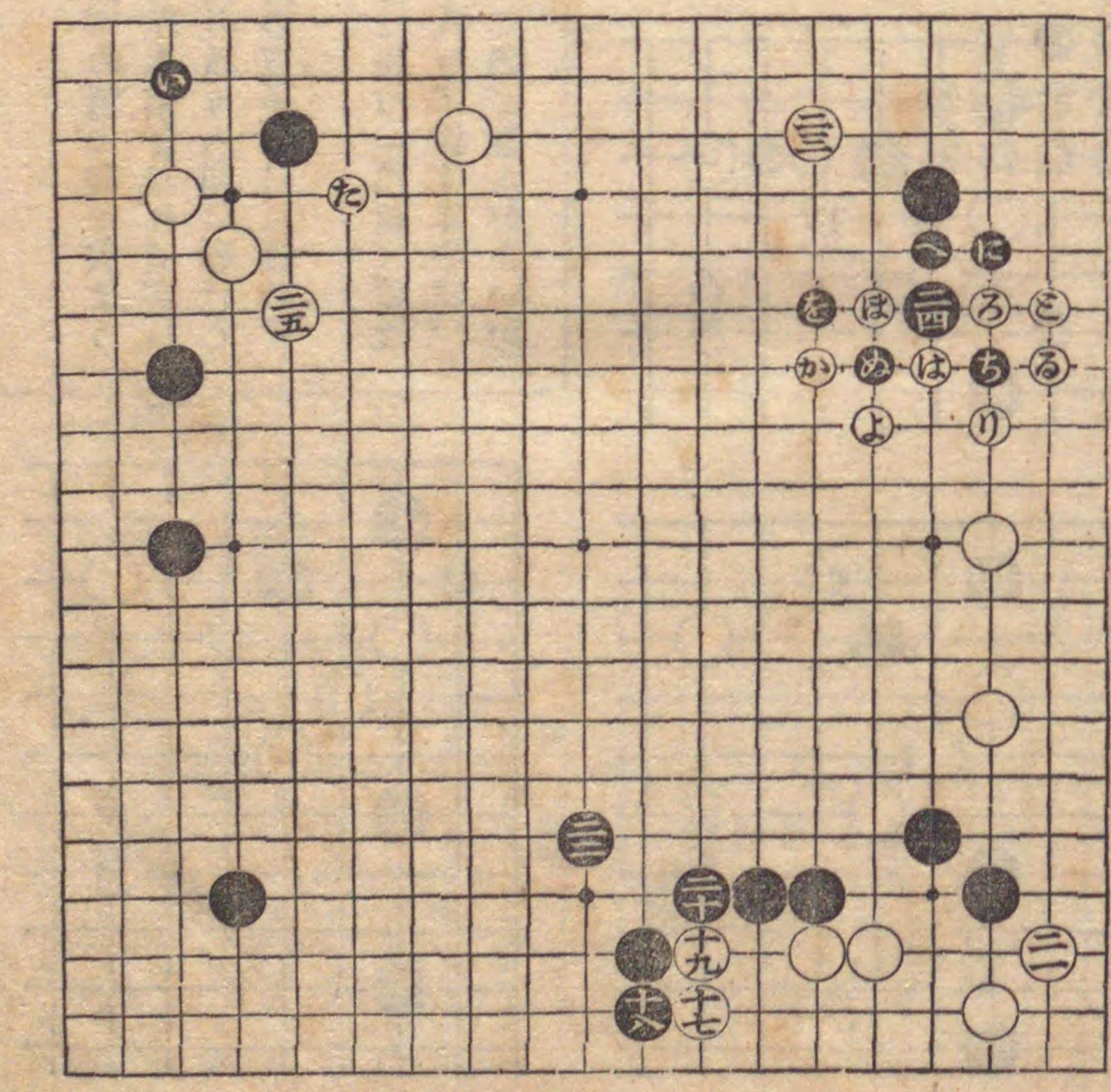
黒二十四は●と隅に斜走して右上隅を兩掛の應接とするのも一法であらう。

「註」若黒が●と隅へ斜走したならば、其時白は如何打つであらうか、先づ右上隅に向つて○と兩掛を打つ位のものであらう、其時黒は何れへ頂けるかと言へば無論白の勢力の加はつて居る方へ二十四と頂けるのは慣用の着手である、其の後の應接としては白⑭黒⑮白⑯黒⑰は勿論の事であるが次で白⑱黒⑲白⑳黒㉑と運ぶのである、白が㉒と下つた時黒誤つて㉓と截る様な事があれば忽ち白に㉔と縛まぐられ、黒㉕と截つた所で下の白二子を軽く捨てられ㉖の二子を先手で㉗と抜かれる様な結果になつて非常な不利を蒙らねばならぬ、

此う言ふ所は今迄の講義にも已に出て居るから講修者は已に知悉せられてある事とは思ふが、此の假定説のより⑳迄の手順の中で、黒が㉑の二子を犠牲に供して㉒と截り㉓と抱へて白㉔の二子を提るか、或は誤つて㉕と先に截り㉖、㉗と其を白に提られるかといふ事は全局の勝敗にも關する重大な問題である、

何故なれば最初黒が●と抑へたのは早く隅を治つておいて中原に出動しやうといふ手である、此く●と抑へた以上は隅黒の活は動かす可らざるものである、次で㉑と截り㉒と打ちて白㉓の二子を擒にするに至つては此の黒が局面のあらゆる方面に勢力を及ぼす事は實に無盡藏である、然るに誤つて一着を㉔より下す時は下面の㉕の二子を提る事は出来るが已に活の確定した黒に更に此の二子を添へるのは一種の贅物である、此の贅物を得た交換として白に屠られる㉖の二子は

第二十五手迄



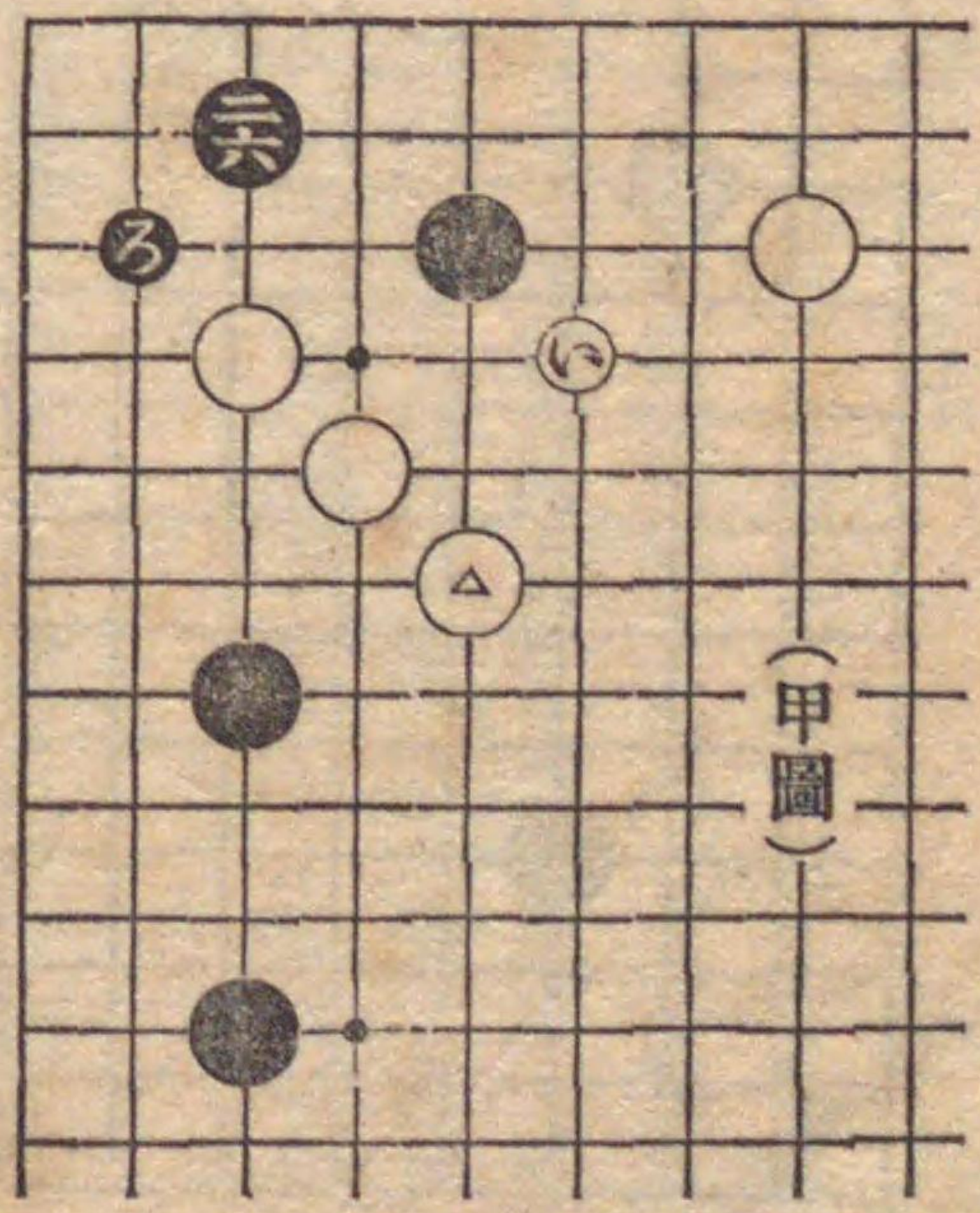
—(局子二法石布)—

中原に活動す可き種石である
此の贅物と貴重品との交換
が非常なる不利である上に先
手の利までも白に譲るといふ
結果に至つては實に沙汰の限
りである、之によつて見るも
一着の微も決して忽にする事
の出来ぬといふ道理を領得せ
ねばならぬ。
白二十五を○に掛けるは普通の
手である、本圖は已に二十三の
一子が廣く右上に向つて布置し
てあるから次で左側の黒を壓し
て上側に壯大なる形勢を造らう
との白の策戦である。

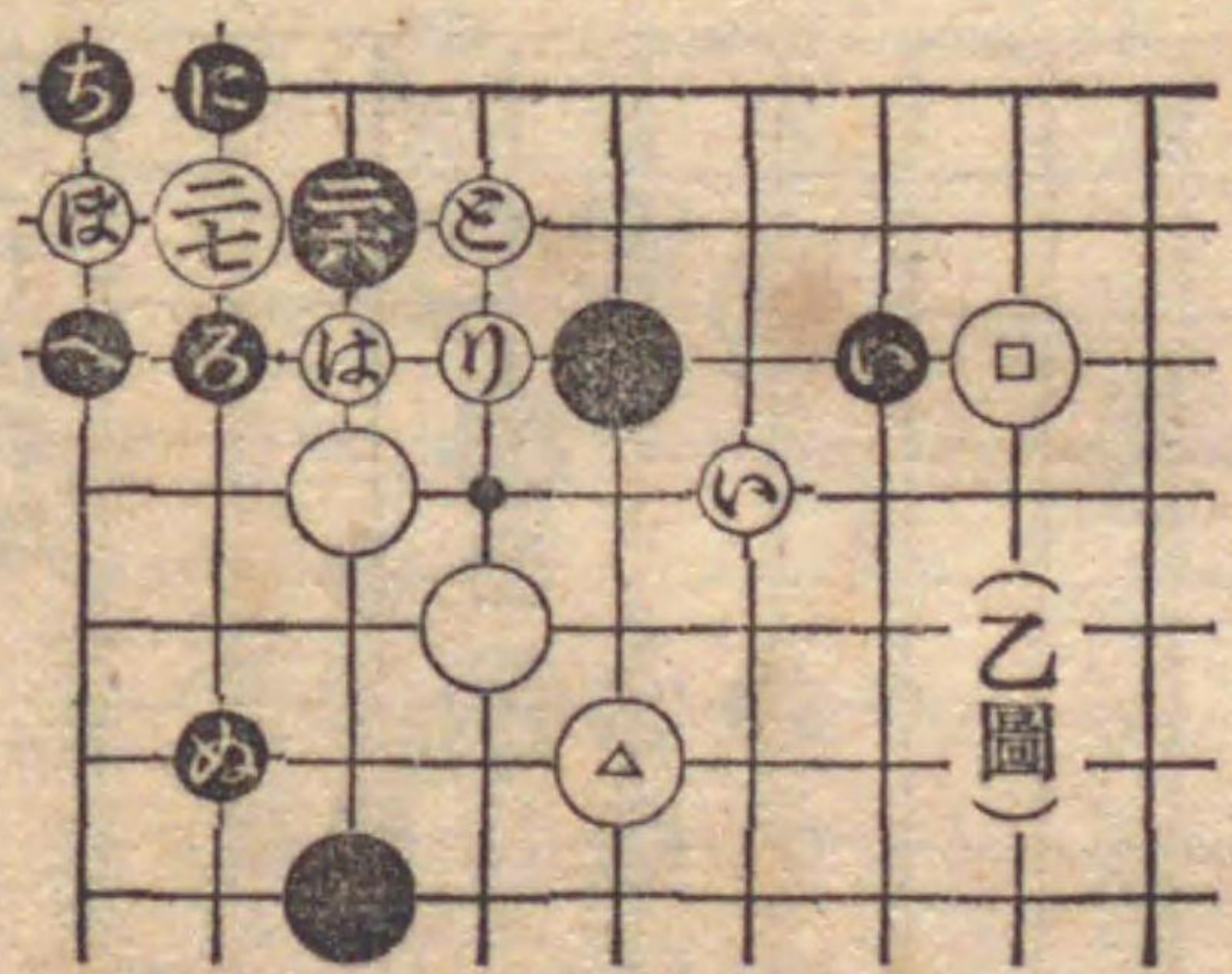
「註」参考圖(甲)(乙)(丙)

黒が二十六と隅へ走るの(甲圖)の通り●と尖まうといふ手である、若△印白が○に在る場合なれば常に能く出来る形で普通であるが本圖の通り△印に雁行して居る場合黒に●と尖まると此の三子の白は極めてツマラヌものになる、

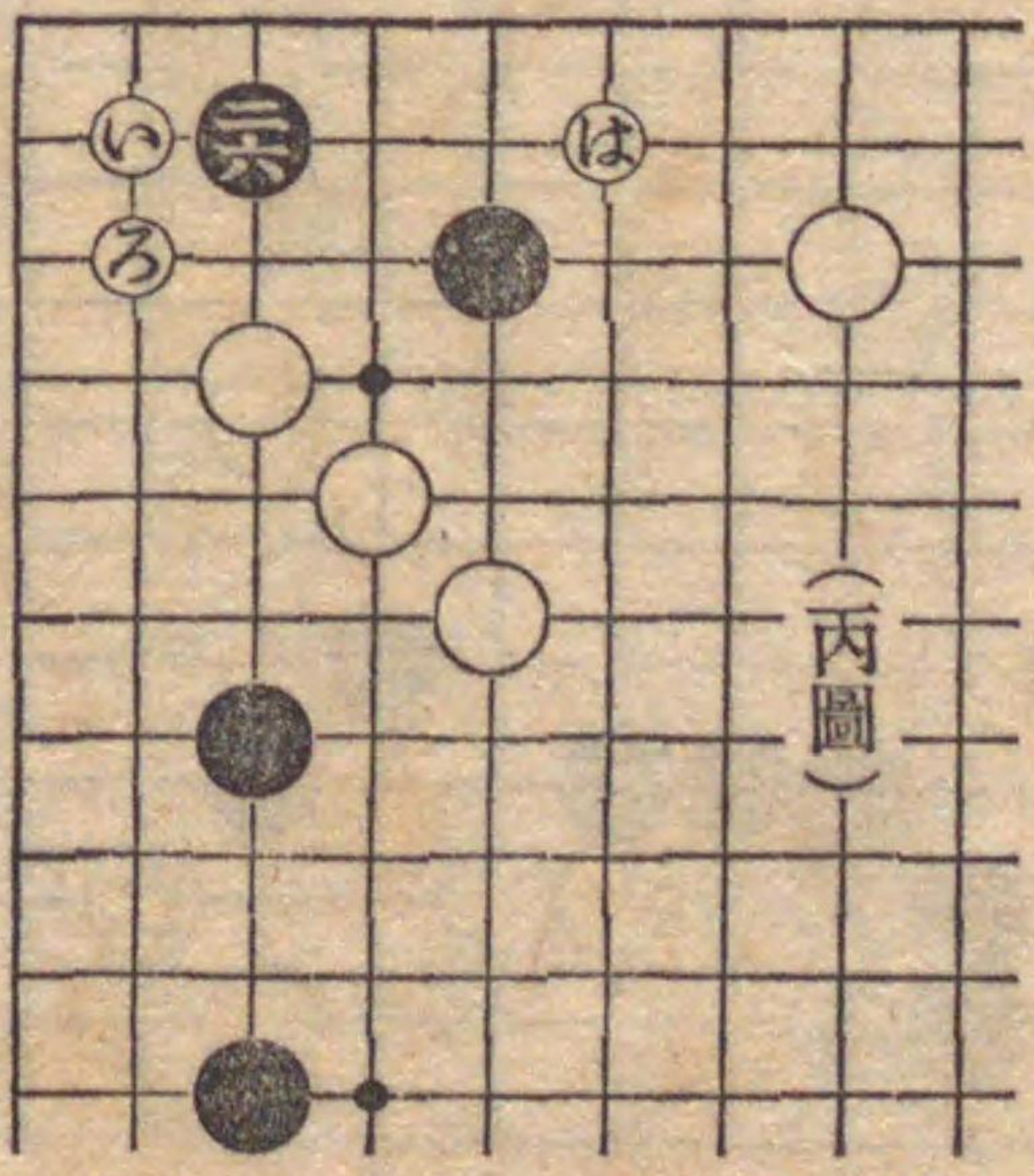
乃で此の●の尖を妨げるために白は先づ(乙圖)の通り二十七と頂けておく、黒が二十八を手抜するのは、●と綽出して以下符號の通り運んで●と盤るがよいか或は●と右方の□印白に頂け
中で活るがよいか時機を觀望して居るといふ手である、又白の方から言へば黒に●と綽出され符號の通り運んで目外の黒一子を提つた結果は初の白が狭く○にあるよりは△印にある方が遙に働いて居る、乃て此の雁行の場合は黒に二十六と走られた時は必ず二十七と頂けねばならぬ。



(甲圖)



(乙圖)



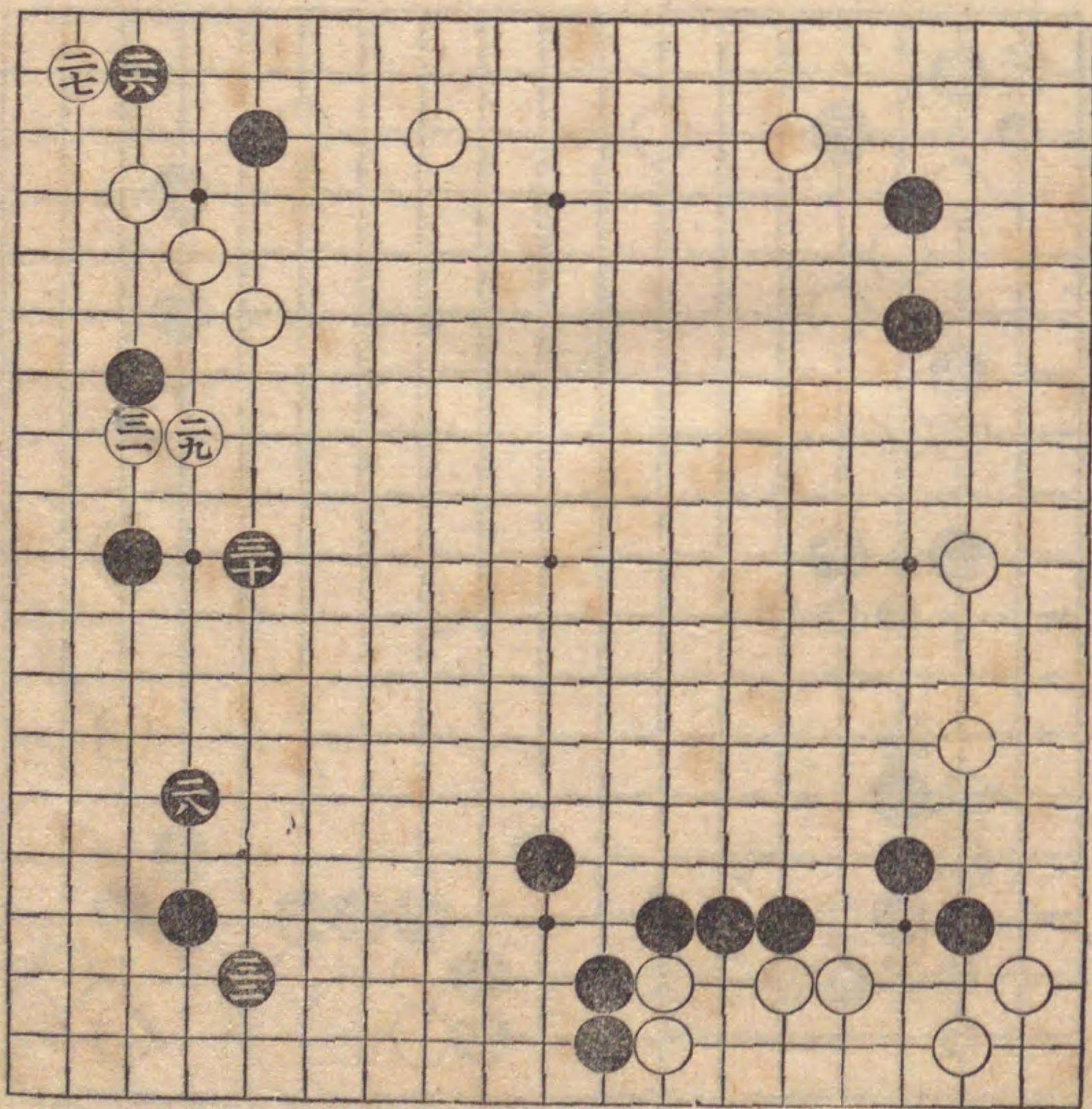
(丙圖)

(丙圖) 黒が二十六と走るとも時期が大切である局勢が進んで附近の白が堅固になつた後であると白は○と頂けず或は○から若くは○から眼形を奪ふかも知れぬ。

○(黒二十六及白二十七の詳解は前参考圖の通りである)

白二十九は黒に三十一の點に應じさせ三十の點に煽らうといふ策である、乃で黒は白の謀を破つて手抜して三十と打つたので、此三十は二十八の一子と相待つて左下隅を壯大ならしめる良着である。

第三十二手迄

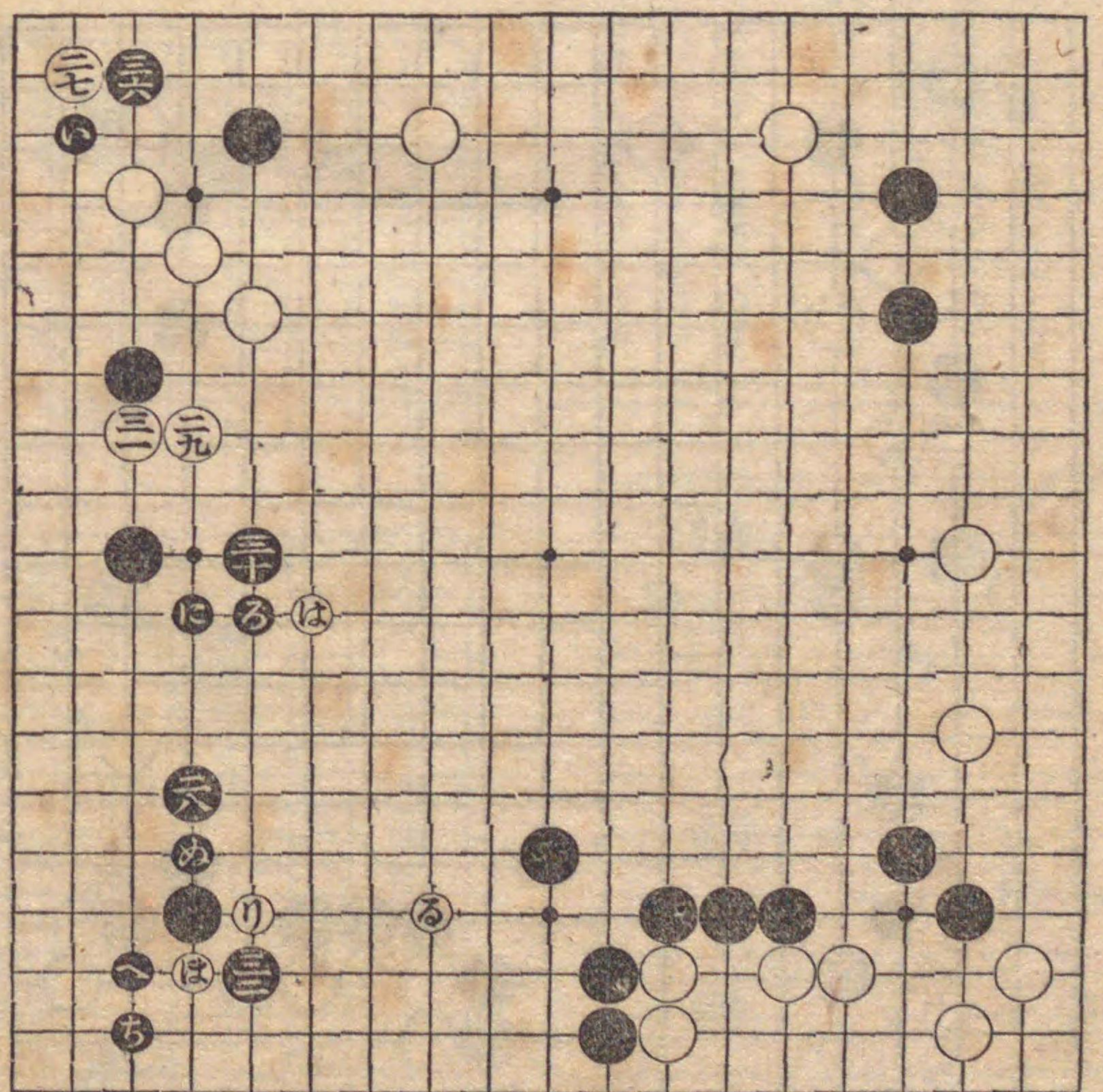


(局子二法石布)

「註」若黒三十の手を三十一の點に應じると白に三十の點に煽られ、黒は白は黒の次に白は轉じて左下隅へ進撃する手順になり、黒は白三十二黒三十三白三十四と悉く白に利かせられ、黒は維命維從うて居る間に、局勢の否運を招かねばならぬ様な結果になる。

一子 第七局

「註」布石の初期であるから白三の來攻に應じて直ちに此く四と夾撃することも或は此の手で左上隅へ掛からうとも、其れは黒の策戰次第で、



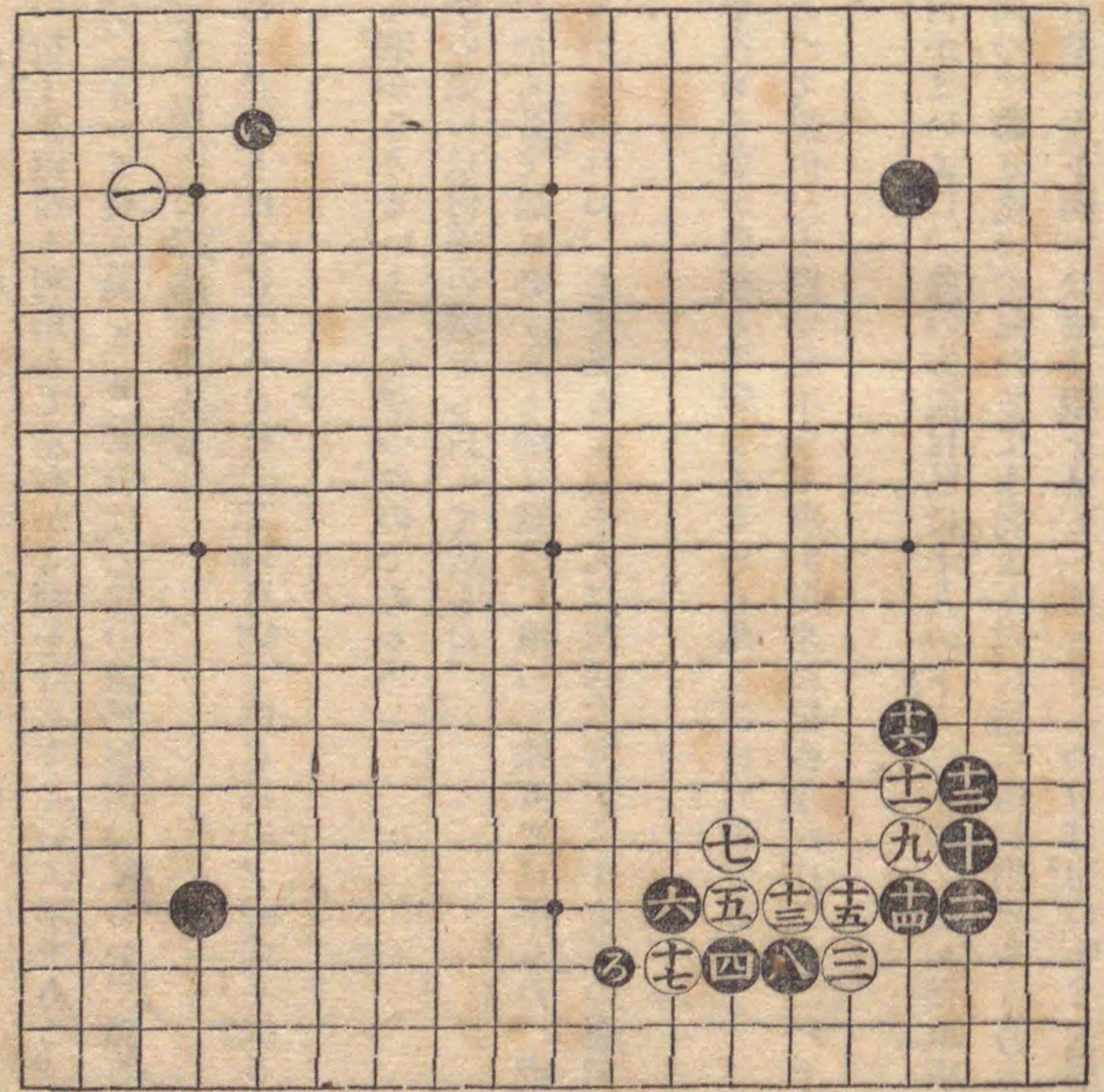
再掲

孰を是とし孰を非とする差はないのである、又同じく夾撃するにしても本圖の如く四と一間に夾むとも或は十七の點に二間夾とするとも、又は三三に三間夾するとも是亦黒の任意である、

○白五以下十七までの相互の應接は「互先定石一間夾頂行の部第三十圖及第三十一圖」(第三十四頁三十五頁)に詳述してあるから茲には略する、

△要するに二子の局であるだけに黒としては早く一隅の治りをつけるだけ其だけ局面の變化が制限されて打ち易くなる譯である。

第十七手迄



(局子二法石布)

白十八の巻

欠点のツキ
此の巻

黒十八は（互先定石の部にも述べてある通り）白に㊦と應じさせ、更に左方から㊧とアテ白十九と下り㊨と押して白を㊩曲らせ、二子の捨子を飽迄も利用して左右から利を計らうといふ手である。（此の手順の中白は㊪と曲る前に先づ（イ）と截り黒を（ロ）と行ばし黒の缺點を衝いておいて然る後㊫と曲る手である事は「互定第三十二圖」に詳述してある）

「註」若も黒十八の手で㊬と打つたならば次に十八と行ても白は㊭と應じない、必ず手拔されるに決つて居る。

白十九の下りは此の黒の策（兩方から利かさうといふ）を破つたのである。

「註」其の代り㊮に白がないから隅の黒には何等の響をも與へて居らぬ、又黒の十八に應じて白が㊯と打つたからとて黒は必ずしも㊰と露骨に迫つて來るとは限らぬ、或は㊱の邊から種々策を廻らして來るかも知れぬ、して見ると白十九は此等左方からする黒の趣向を全然消した手と見ればよい。

黒二十二は最後に三十四と上側大場を占める事が出来る手順であるから此く掛けたのである。

「註」若し上側方面に白の布石があつて黒が三十四と着手する事が出来る場合なれば二十二以下三十二迄の着手は畢竟徒勞である、

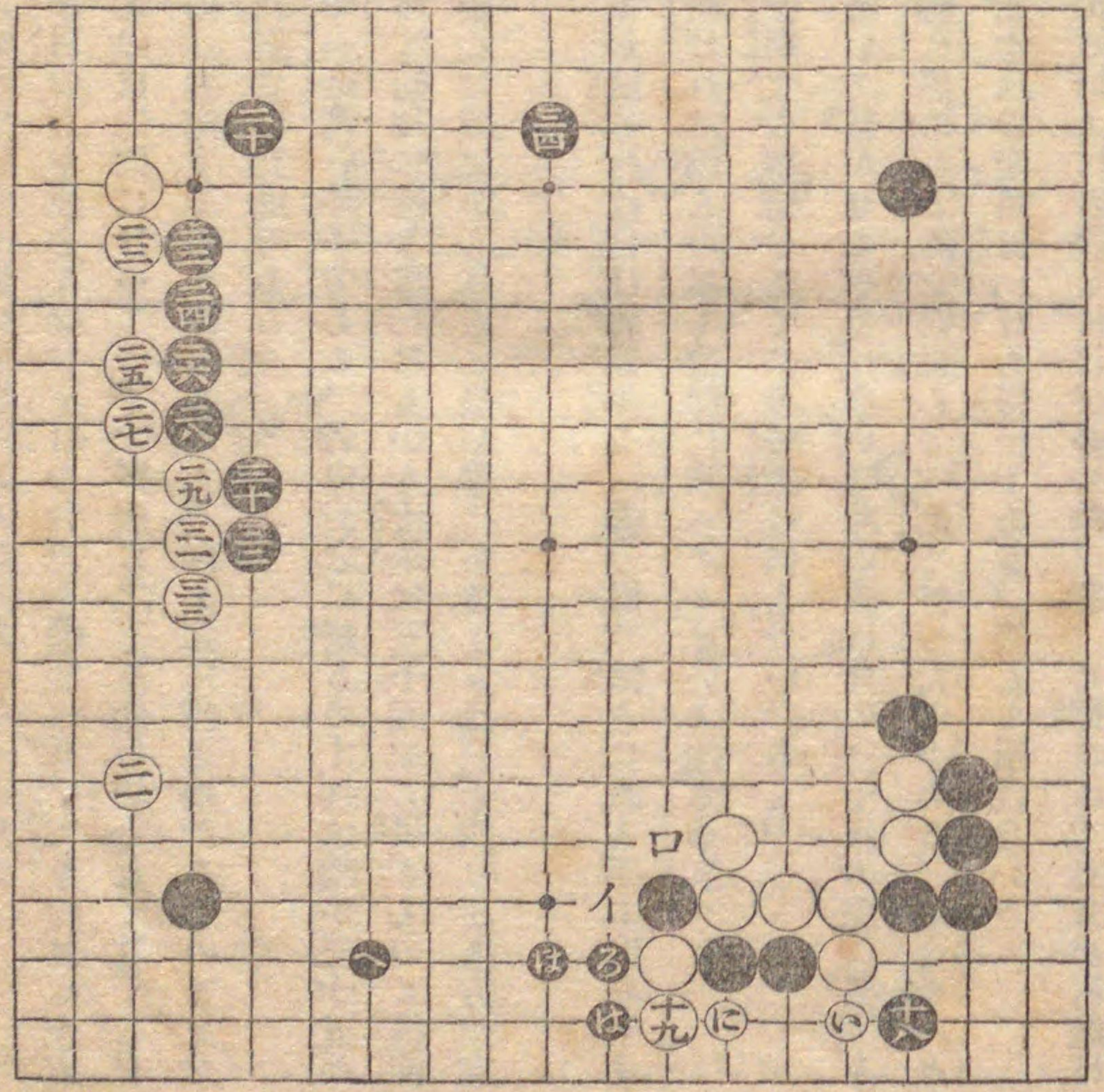
黒二十二の手で㊲と斜走すれば如何かといふに、此の方面は已に十九の下りによつて白が金城鐵壁を築いて居る處であるから之に向つて㊳と走つて見たとて元より隅に黒の地が出来やう筈もなく却つて危険を醸すに過ぎぬから茲（左下隅）は他日機を見て「凌ぎさへつけば可い」と大體

小目への掛
ハ容易に行
フハカテヤル手

を見超して二十二以下の方針を採つたのである。

元來此の目外の位置から小目の敵に向つての掛は容易に行ふ可らざる手である、ヨシ掛たとしても二十四、二十五の交換位で止めておいて徐ろに機を熟するのを待たねばならぬ（餘論参照）然し本局の如きは左下隅の勢子が全く保守に傾かざるを得ぬ状態にあつて何等活動の端緒を發見し難い有様である、且つ又上側は幸に白の足跡を印して居らぬから、二十二以下三十二と飽迄白を壓迫しておいて三十四と好點を占めたのである。

第三十四手迄



（局子二法石布）

此掛方

三十九ノ手
何故ニ肩
カテ消スカ

黒三十四は普通●と打つ可き所であるが本局は右上隅に置石があるから此く打つがよい。

「註」本圖の通り左上隅目外から小目の白を壓して掛けを打つた以上●印へ五間拓をせねば左方に長城を築いた効力がない、といふのは通則になつて居る、又假に之を互先の局として見ても右上隅には●に黒の布石があるものと想定する事が出来るから、白が之に●と掛かるものと見て旁々●の着點のよい事は從來屢々繰返された處である、

然るに本圖は右上の黒は●に比して一路高い勢子である、若白が之に掛るとすれば●か三十五かの點であるが●に掛るのは自ら求めて窮地に陥る事になるから大抵は三十五から掛るものと推測される即ち白三十五黒三十六と應接した結果から見ると黒が●にあるよりは三十四に在る方が左右の均合がよい、

又三十四の一着が●に在つて左の方が廣ければ白は肩側から(●の點)消しに来る手も出來やすいが、本圖の様に三十四とあつて狭ければ消しの手も自然に來ニクイといふ趣もある。

白三十七は三十九、四十一と黒地を侵略する準備として多少聲援に供したのである。

「註」普通は此ういふ處は決して窺いて粘がせる手ではない唯此の處は此の三十八の點に截りを施す見込のない處と認めて(假に●に黒のある處と同視して)此く打つたのである、即ちモハヤ截る手段がないとすれば三十七、三十八の交換は「打ち得」である、決して損はない。

白三十九を何故●と肩側から消さぬかといふに若●と行けば必ず●、●、と押されて右方が自然に

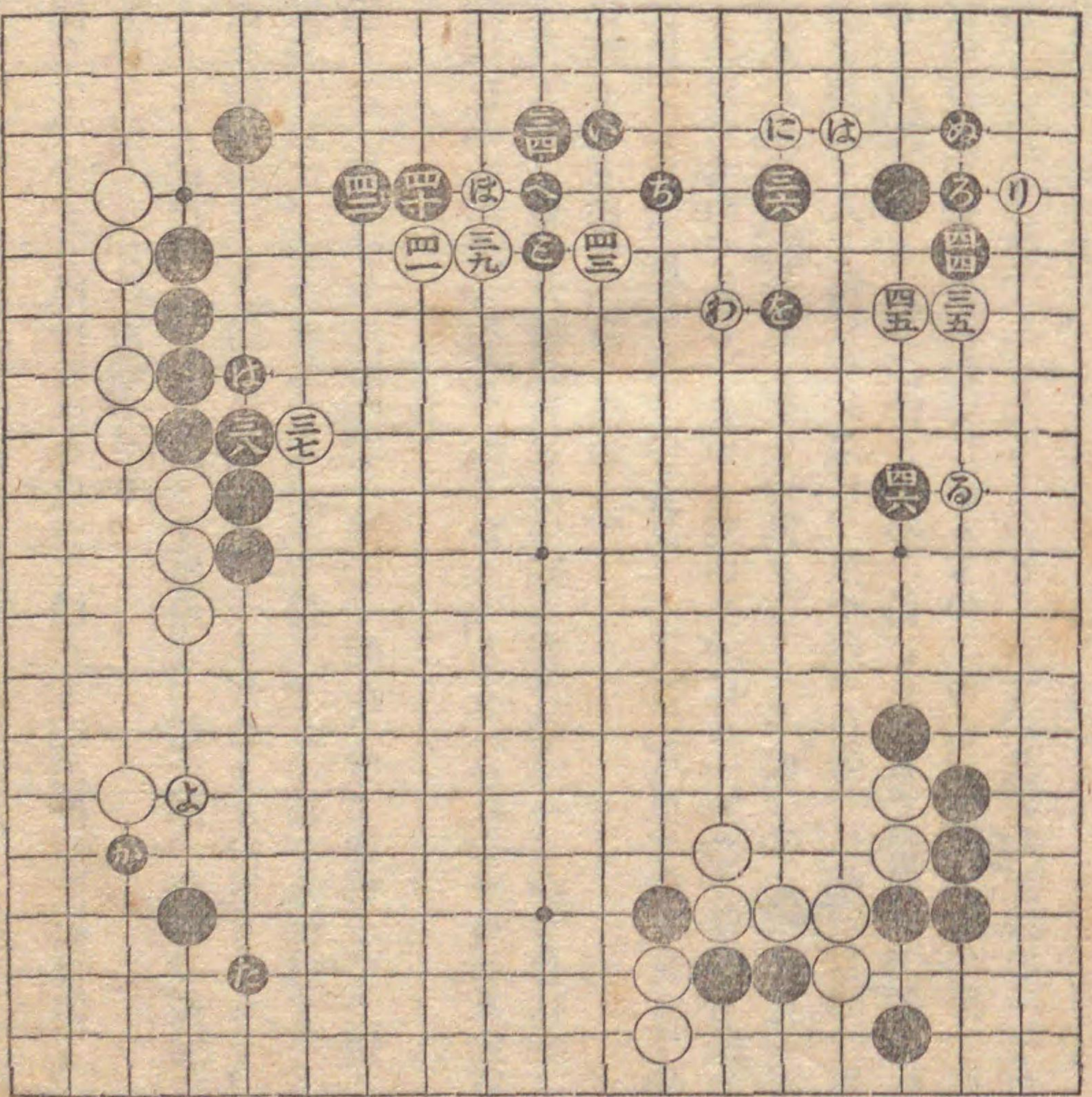
カト去ツ
ケたて混
ル所子
フ、こ

堅固となり黒地を益々厚壯ならしめる恐がある、

黒四十四の手で若●に應じると白に●と走しられ●と應じた時●と地域を造られるの手續になる、乃で黒は四十四と尖頂け白を重くして四十六から攻め立てたのである。

「註」次で白は黒に●邊に冠せられる急を拒いで●邊に備へる手順になり、黒は●と尖頂け●と一隅を治まる位のものであらう、白四十三、三十九邊が薄弱な間は白から●邊に兵を進める餘力はあるまい。

第四十六手迄



トト夾スハ
四間夾トスル

上隅ヲ大斜
ニ走スルハ白
ハカヲカケル
一問夾ナラハ
劣クキ

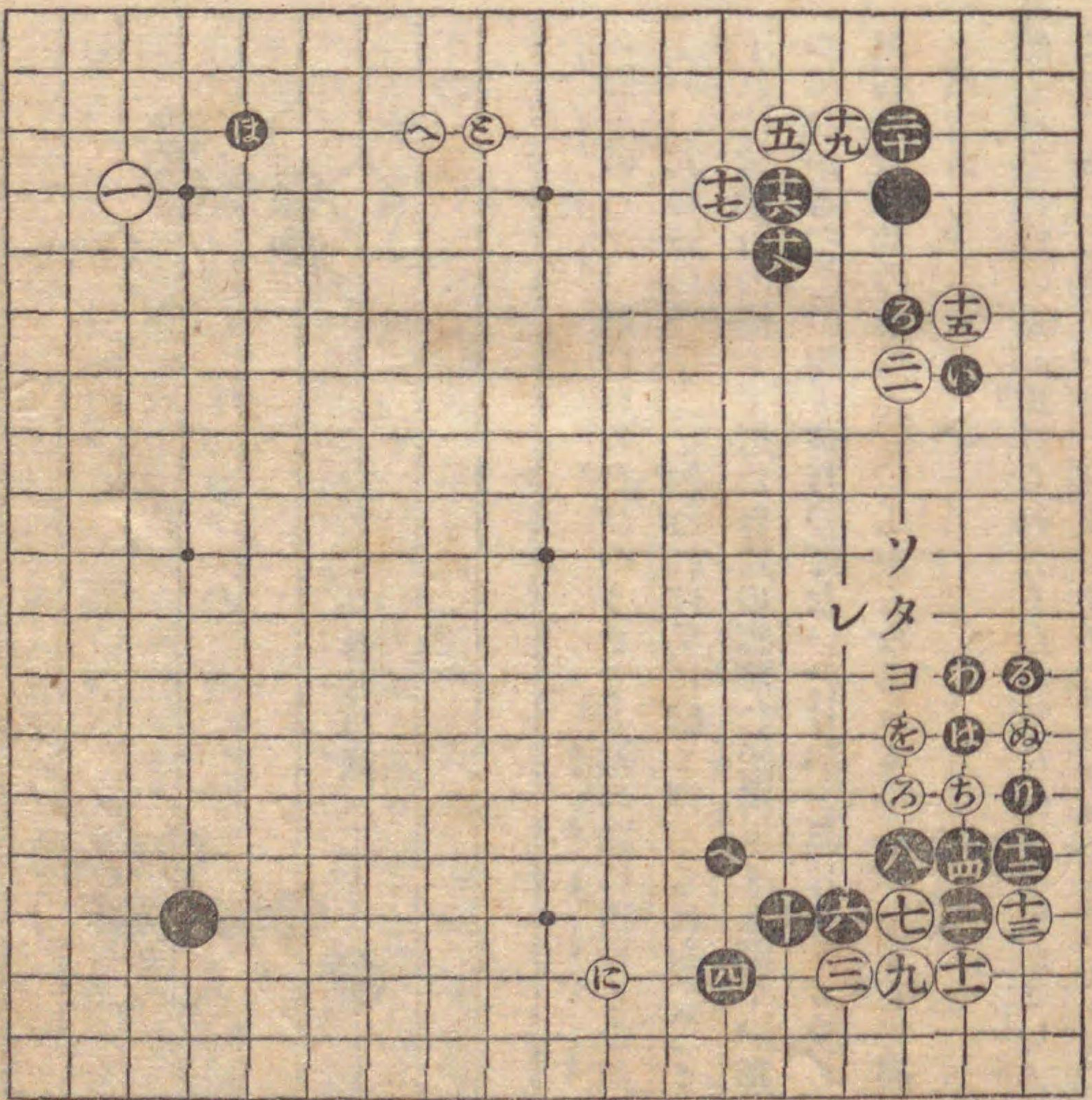
白五は、黒六以下十四迄の手順を豫測して、十五と兩掛の手を以つて激しく右上隅の置石に迫り、自然の手順を以つて右下隅黒厚壯の姿勢を削らうとの策戦である。
黒若し六の手で白五に應じ(五)に斜走したならば白は八の點に黒二を壓迫し、黒十四、白(六)、黒(七)の交換を遂げた後(八)方面から夾んで黒四を(九)と飛ばして然る後(十)、ヨ、レ、と押しキルの策もあらう、若又黒六の手で(六)と走らず、(七)と一間飛すれば、白は直ちに次の手で黒二を八の點から壓迫す可きや否やは考ふ可きである、後に黒が(八)と左上隅に掛つた時(九)若くは(十)と夾んで五と相待つて上側に地域を拓く理も残つて居る。

「註」白が五と手抜したのは七と縛込む事の出来る場合であるからである(是は從來布石及定石の各所で屢々繰返した「黒が八の手で九から截つた時は白は八の點へ行ひ黒十一と粘ぎ白は十と抱へて黒六の一子を征に提る事の出来る理を指す」通りである)

「白五の時黒若し(六)と大斜走に打てば白は黒二を壓迫して八と打つてもよいが、黒若(七)と走らず(八)と一間高飛した時は白が八と掛ける手は考ものである」といふ理由は、已に一方右上隅から(九)と低く治つた形の方角へ向つて今又白八に壓迫された黒が低い地點を這うて十四、(十五)、(十六)、と運ぶ姿勢は極めて愚である、即ち白が黒二を壓して八と掛けた結果は、黒十四、白(九)、黒(十)、白(十一)、黒(十二)、白(十三)、黒(十四)となるものとしても一方黒(十五)と姿勢の低い我が石と相向つて茲に堅固な數箇の勢力を加へるといふ事は黒自身が勢力重複の弊に陥るものである、又或は白八、黒十四、白(九)、黒(十)、白(十一)、黒(十二)、白(十三)、黒(十四)となるものとするも、其の結果黒の一子が(十五)に在るのは決して姿勢の宜しきを得たものでない、

然るに之に反して黒が(六)に高く在る時は、白の來攻に應じて打つた黒の(七)、(八)、(九)、(十)の堅固な備若くは黒(タ)(ソ)と運んだ數子は、右上の黒(九)と相待つて極めて良好の姿勢を造つたものといふ事は言を要せずして明かであらう。
然しながら、白が五と手抜きした以上は(其が白の一策にもせよ)黒は先づ本圖の通り六と押へて打つのが普通の着手である。
此の右下隅に於ける黒六以下十四迄の黑白相互の應接は「互先定石一間夾手抜の部(第六十三圖)の應用に外ならぬ。白十五以下相互の數着も亦「置棋定石兩掛」の應接として從來布石上に類例が屢々出てをる。

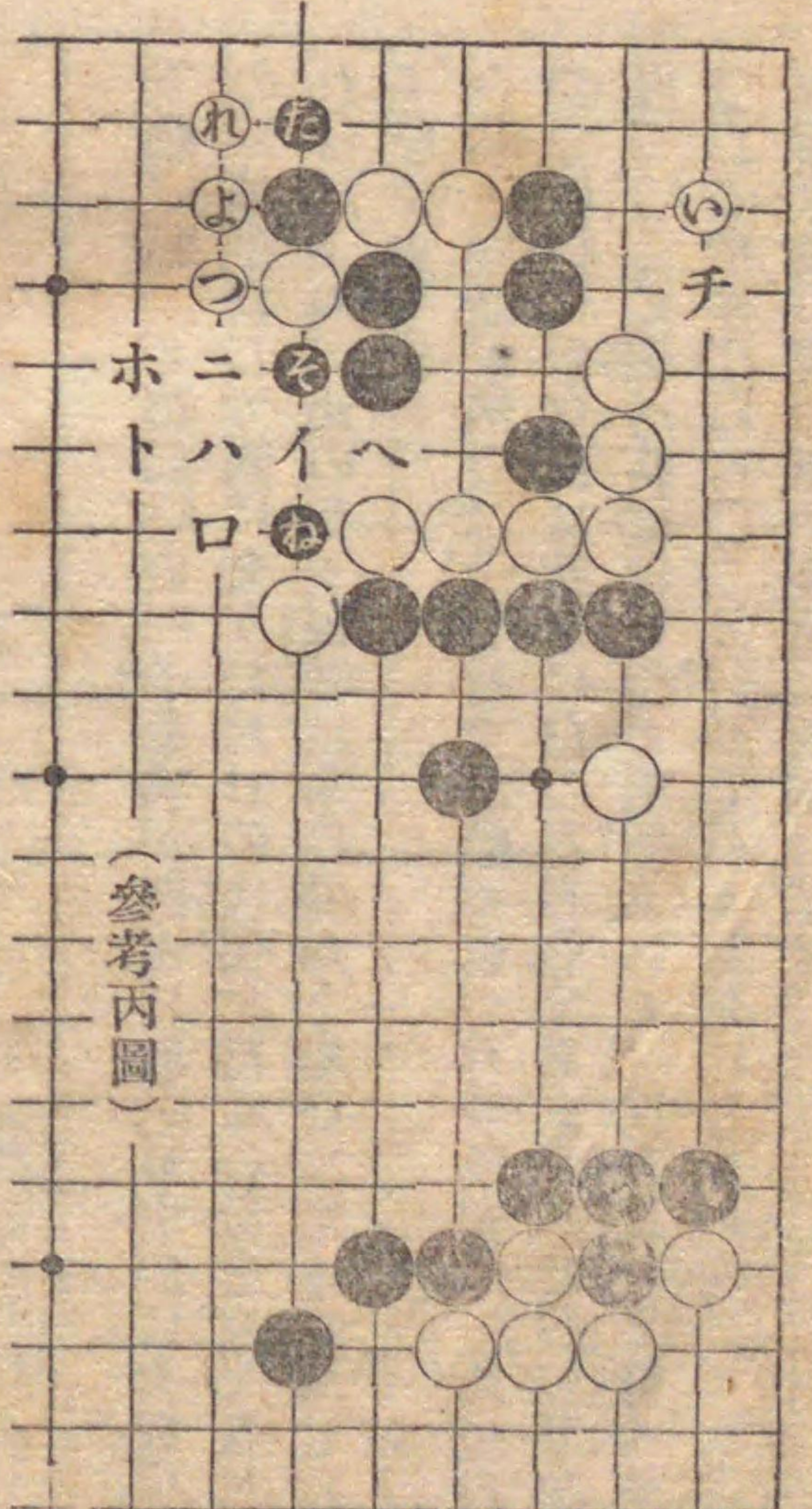
第二十一手迄



(局子二法石布)

白ニ七ノ手ニ
テイト學園
ノ時黒手
ヲ技ク

(次頁説明)
白二十一以下三十一迄の黑白相
互の應接は置棋定石の應用であ
る、白若し二十七と拓く手で⑥
と單關したならば、黒は手抜き
して三十二と左上隅へ掛るがよ
い其時白が二十九と来たならば
黒は⑦と下り(ハ)の截を覗ひ兼
ねて右上隅を活きる、其時白⑧
と掛粘がば黒又先手である、
白は二十九を手抜して⑨と左上
隅を「大斜走縮」としてもよい、
次で黒が二十九の點から来れば
⑩と走つて軽く凌いでおく、若
又二十九と曲らず(ハ)と截つて
来たならば白は⑪とアテ二子を
捨て、打つの趣向である。
「註」白が二十七の手で⑫と
飛んだ時は必ず三十の點に尖

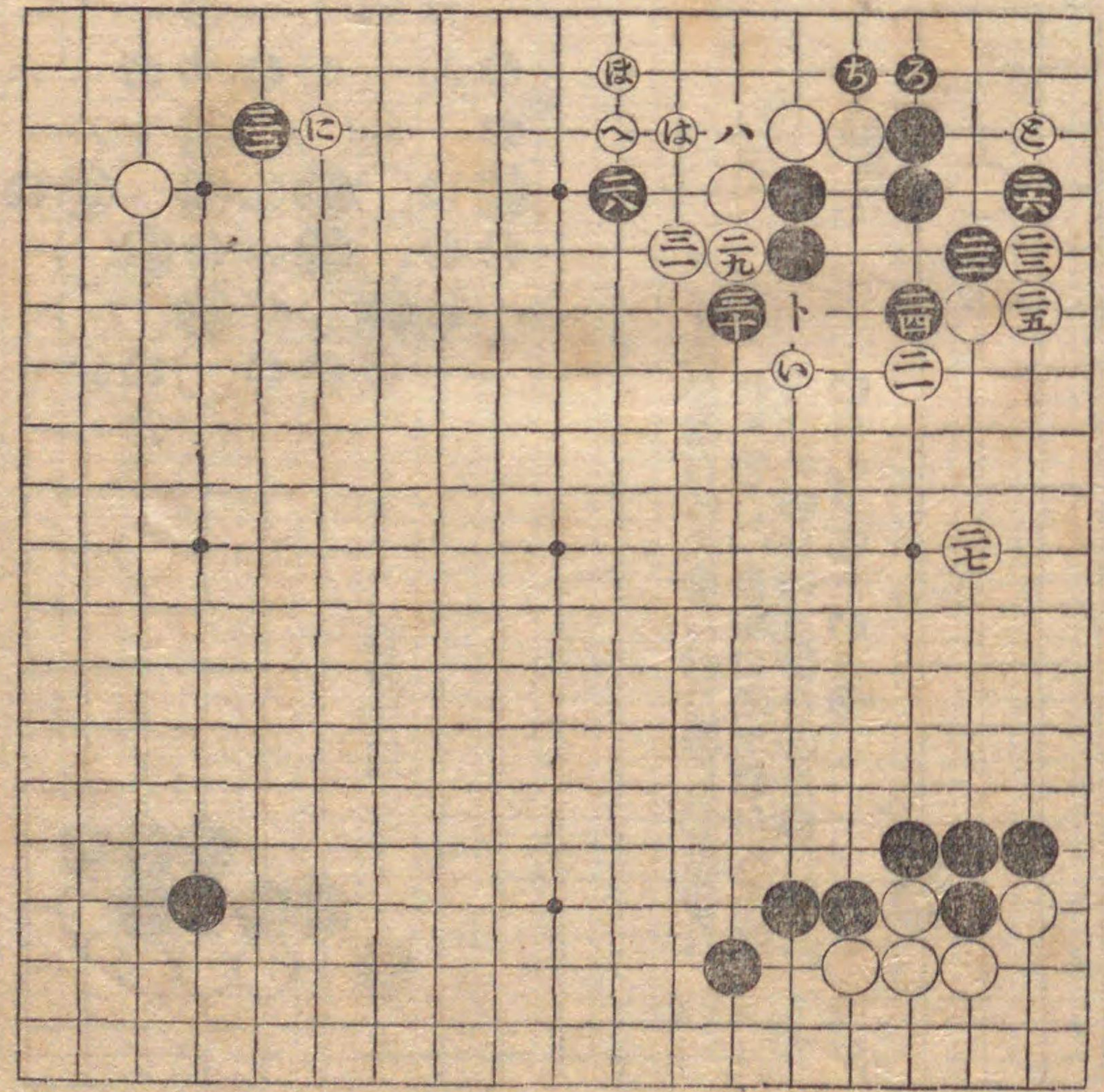


○(参考丙圖) 前圖白⑫の手で本圖の通り外面から押へ黒⑬と
行びた時れと押して打つ方が前圖に比して白は利益である、
其時黒⑭、白⑮、黒⑯と截り、以下白⑰、黒⑱、白⑲、黒
(ニ)白(ホ)黒(ヘ)白(ト)の次に黒は(チ)と打つて白を後手活
せしめる手順である、若又黒が⑳と截つた時白㉑と隅へ走れ
ば黒は(ロ)と行び白(ニ)黒(ハ)となる譯である。

ニ七ノ時ニ
ト本テス
ト元シタ
後如何
ス(キ)

定石ハ死物
定石ニ拘泥
ス(カラス)

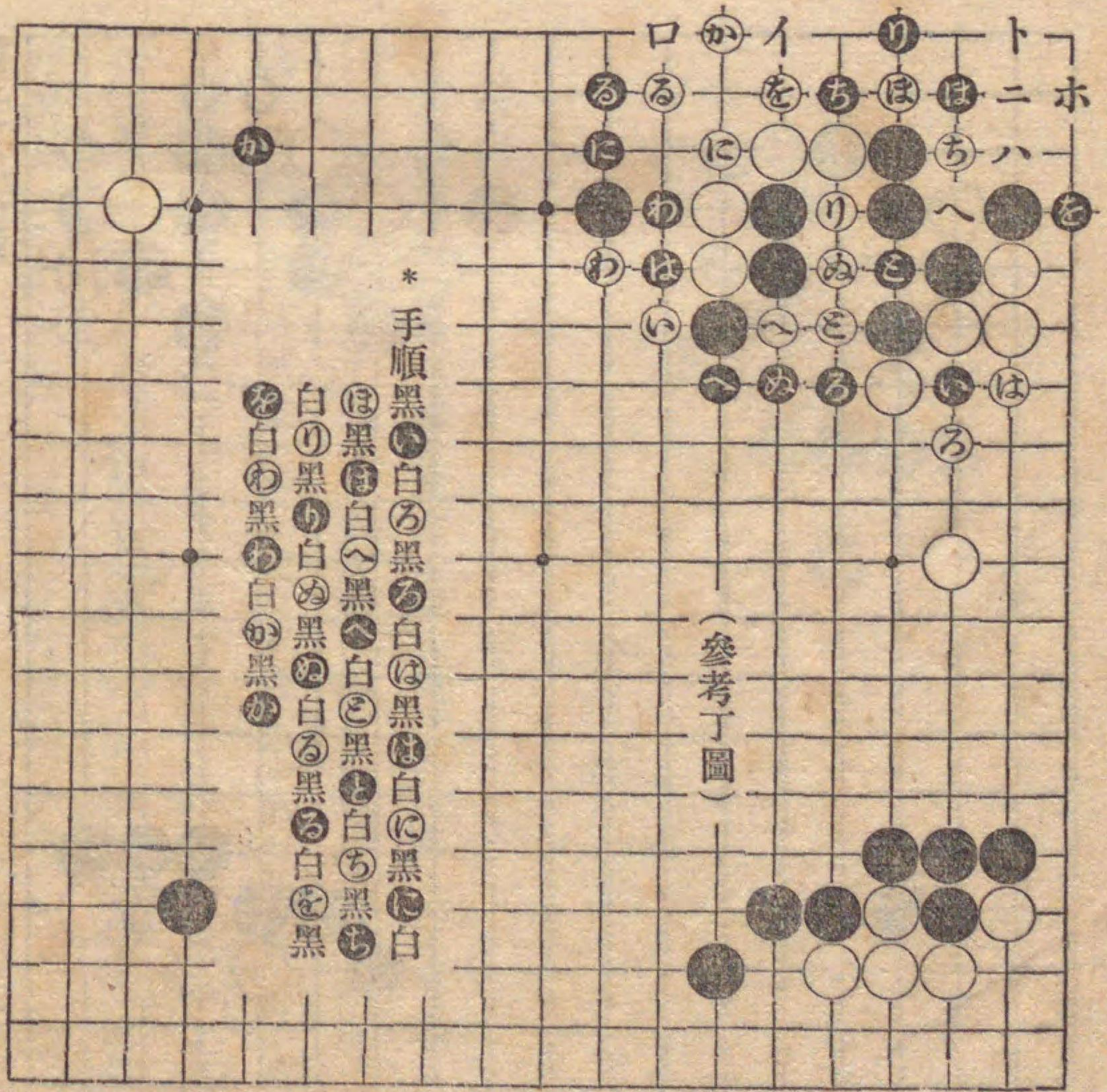
*
めよ、とは置棋定石の教ふる
所である、然るに茲で若も三
十と尖むと白に⑬と打たれる
結果、次に白に⑭と夾まれる
手の凌ぎとして⑮に一着を費
さねばならぬ結果となつて二
十七の點若くは三十二の點へ
行く機會を失ふの恐がある、
是即「定石は死物である、定
石に拘泥す可らず」といふ事
を明に證據立て、居る、
然らば三十と尖む手で二十八
から攻めたならば如何かとい
ふに是又白に二十九と出られ
た時三十と縛る手がないから
無効である、何故なれば已に
⑯に白が在る以上は白に⑰の
點へ縛られ、(ト)の點を截ら
れる手があるからである。



第三十二手迄

黑白
活々
黒先手

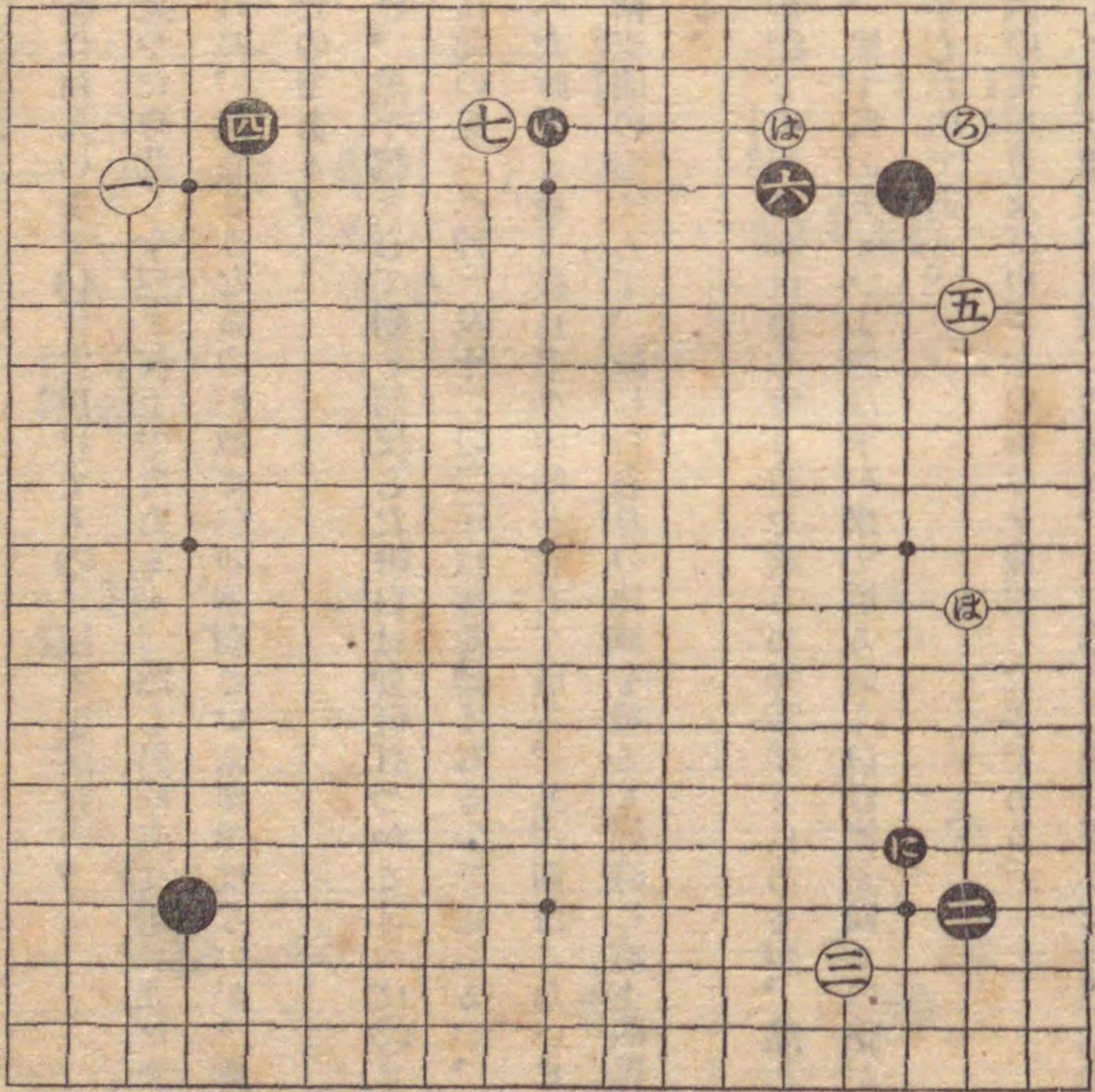
○(参考丁圖) 前圖白三十一の
手を以て若し本参考圖①の點
へ縛ねて來たならば黒は之に
如何應じるか、即ち先づ白の
急所に向つて②と一撃を加へ
以下白③黒④白⑤黒⑥等符號
の通りの手順を経て双方共茲
に活々の結果となり黒は⑦と
先鞭を左上の攻撃に向ける手
順になる、
若又白⑧の時黒強いて此の白
を殺さうとして⑨と備へず⑩
の點に白の眼を奪つて來たな
らば白(イ)黒(ロ)白(ハ)黒
(ニ)白(ホ)黒(ヘ)白(ニ)黒(ト)白
(ト)となつて攻合手足すの黒
全敗に終るの外はない。



白五ノ意

一子 第九局

白五の意は、黒六の手で①と上
側星下に打たば②と三々に打ち
込まう、又③と打たず七の點に
打たば④と兩掛に打たう、若六
と一間飛すれば黒四を三間夾に
しやうとの考である、本圖は此
の中の第三者に運ばれたのであ
る、且又此の五の手には次に黒
が右下隅を⑤と尖まば⑥と四間
大拓をして右下隅からの拓を妨
げやうとの手も含んで居る。
「註」 上述白五の手に含む兩
三策は、黒の應手に隨つて臨
機に運ぶ白の趣向といふまで
で、其の何れにしても、敢て
黒の不利といふ譯ではない。



第七手迄

黒ハハハ
ノ夾戻リ
嫌フタレモ
白十三落
通ニ飛ス
其説也

白夾戻
対立タス
ニ七トカ

黒八は白に⊙と尖頂けられるを拒いだ手である。

「註」既に黒から八と夾返された後は白九の手で⊙と尖頂けても⊙と煽る手がない。

白十三は、普通⊙と尖頂け黒が⊙と立つた時此く十三と拓くのであるが、然し黒は或は⊙と立たず二子の黒を捨て、⊙と詰返すかも知れぬ、然しさうなるのが敢て白の不利といふ譯ではないが、兎に角白十三は其れを嫌つて此く拓いたのである。

「註」白若し十三の手で⊙と尖頂け、黒手抜きして⊙と詰反した時白は如何打つかと言へば⊙と尖むより外に策はない、此くなれば此の黒(△印)及十二の二子は無論捕となるのではあるが、只は捕られぬ、⊙と出白が⊙と抑へた時⊙と截り茲に多少の味が存して居る、其が面白くないと考へて白は十三と拓き、右上隅を兩裾明の形として、茲に白自身の地域を造ると同時に右上隅黒の實利を奪ふの手段に出たのである。

單に此の左上方面に就て言ふと白が⊙と尖頂けるは自ら守り敵を攻めるの好着手ではあるが、然し全局の上から見ると、右下隅には、黒十四の夾といふ急な手が來て居るから白は他を顧るの違がない、乃で白は右下隅に十五と着手したのである。

白が十五と三間に夾返したのは黒十六の尖頂け及び白十七の掛けを豫想した手である。

「註」白若十七の手を以て⊙と立てば黒は⊙と一間飛に治まり、白が⊙と二間に圍うた時黒は先

若又十五カ
二間夾返
シナラハ

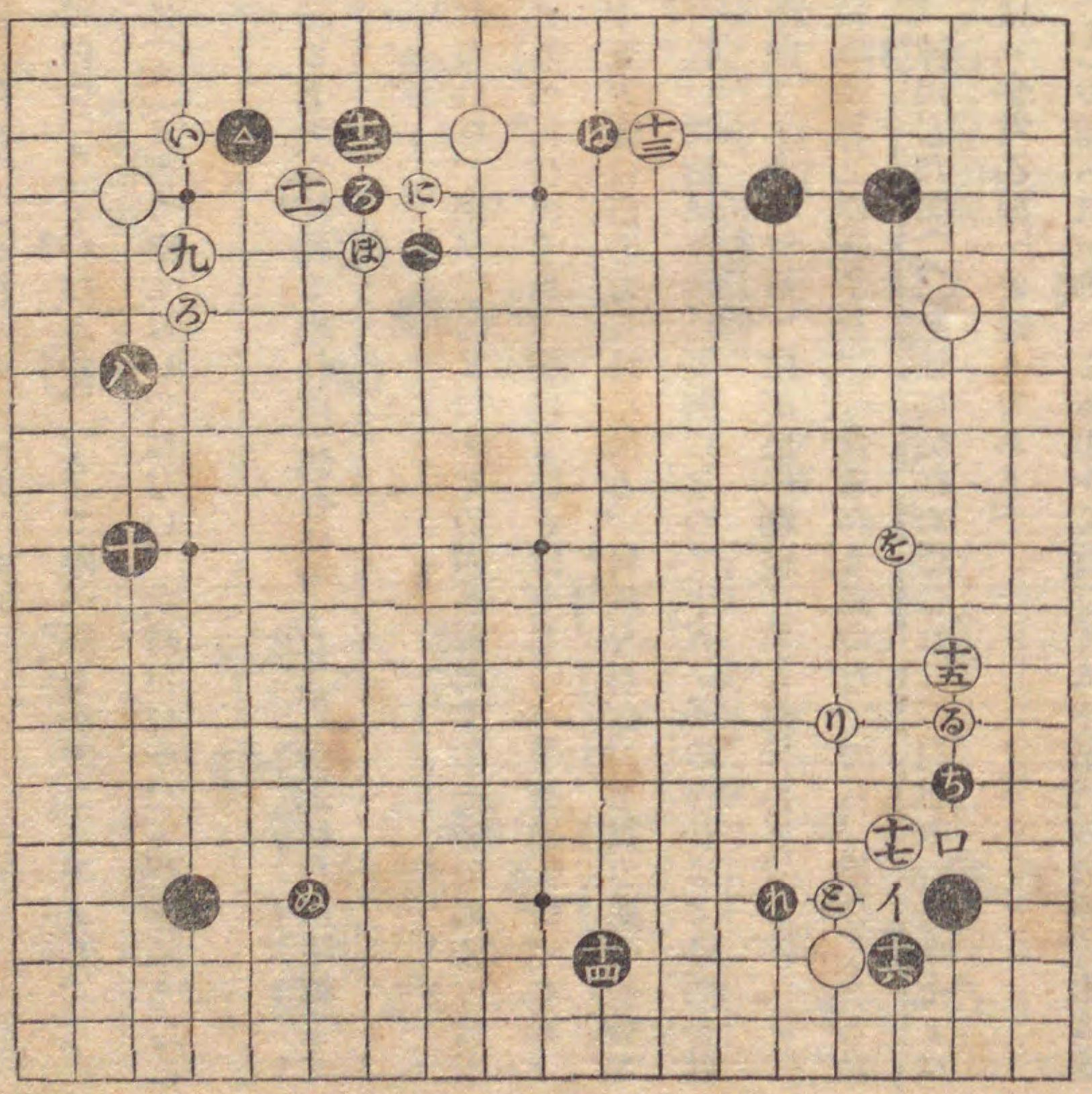
は白十七
対スル星
受方三
法アリ

手で⊙と左下隅の要所に打たれる、即其の結果愚を見るのは獨り白である、

若又十五の手が⊙の二間夾返してあれば、黒はやはり十六と尖頂け、白が⊙と立つた時十七の點に尖むの一方である、或は十六と尖頂けず單に十七と尖み、白は⊙と星に圍ふ事になる、其時黒は十六と尖頂けても又は⊙と上から掛けても何ちらでもよい、

黒十六と尖頂け白に十七と掛られた時黒の打方は(イ)とグヅムか、(ロ)と行びるか⊙の點に縛出すかの三法である。

第十七手迄



大抵の手
扱スルヲ

頭へ縛ル
一方

白一七ノ時

ハト縛ル

現合

白ノ心得

(参考甲圖) 若し黒が(イ)とグヅメば、白は(ハ)と押へるの一途である、
又黒が(イ)と打たず(ロ)と行ければ、白は(ニ)と行びるか、(ホ)と隅へ縛るか
の二ツである、
白十七、黒(ロ)白(ニ)の時、黒は更に(ル)と押す事もないではない、其時白はやはり何處迄も(ヲ)
と行びておくがよい、
白十七、黒(ロ)白(ニ)の時、黒が(ヘ)と下から縛ねて来れば(場合にもよるが)大抵は白は手抜きす
るがよい、

白十七、黒(ロ)の次白が(ホ)と隅へ縛ねれば、黒は(ニ)と白十七の頭へ縛返すの一方である、次で
白が隅へ(リ)と行ければ、黒は(ワ)と外へ行び出すか、或は(カ)と白十七の二子を提るかである。
白十七の時、黒が(ハ)と縛出すのは十五方面に白のある時に限る、何故なれば、下記の通の振替る
手順をふんで、白が小目の黒一子を打抜いた結果非常に堅固になつて十五二子の存在する必要を認
めぬ状態になるから(此く白に不利を犯さしめるため)之が黒の利益とする處である、

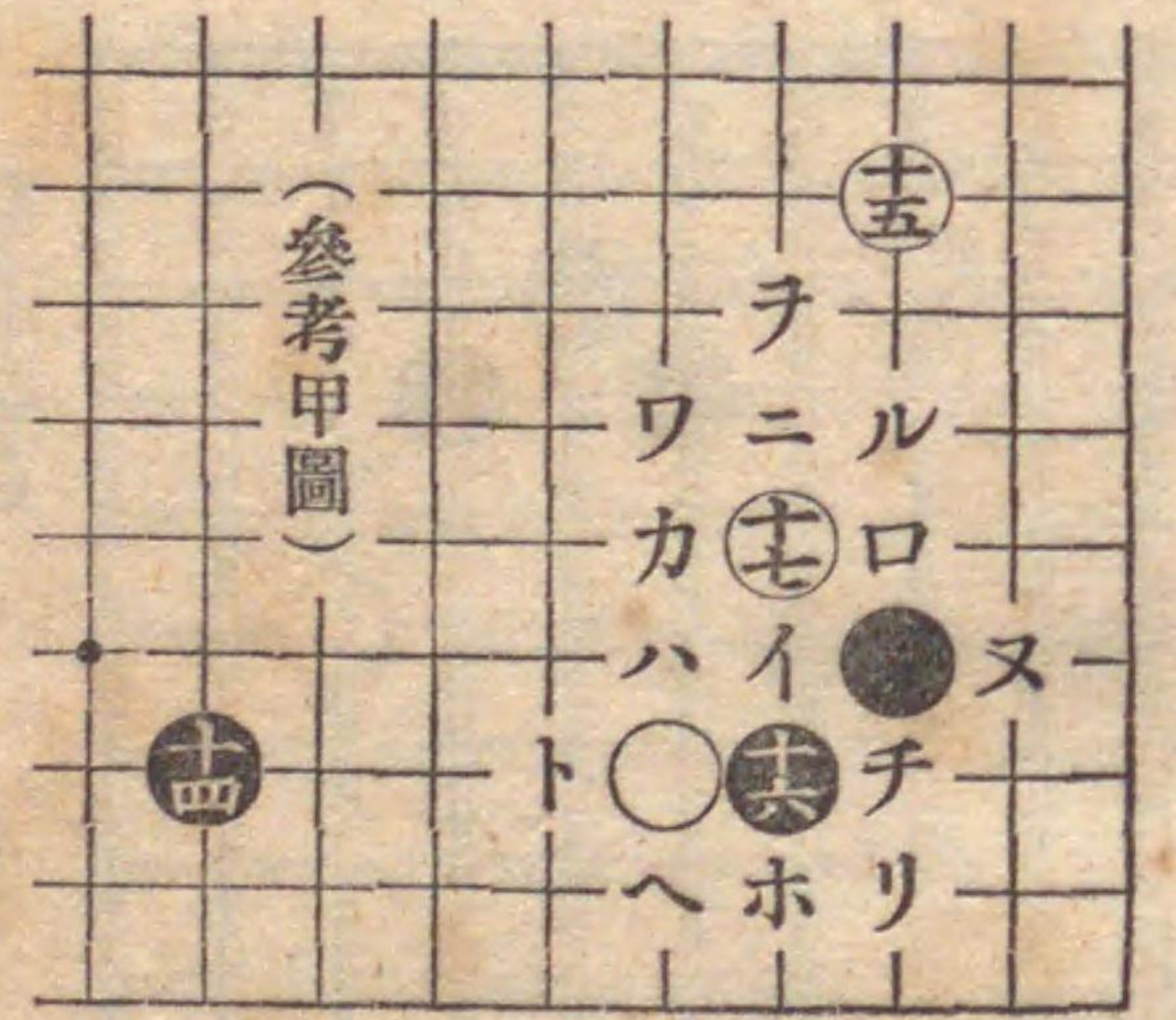
黒が(ハ)と縛出し、白が(イ)と截つた時黒(ハ)の二子を征に提られる患のない時は、黒は(チ)と粘
ぐのであるが、然し溯つて言ふと、縛出した黒(ハ)を征に提れぬ様なれば、白は初から十七とは
掛けぬのである、縛出した後の手順は「参考乙圖」の通りである。
(参考乙圖) 扱符號の通り運んで後(イ)の點へ白が抑へても黒から行びても十數目の損得のある處

イ点ノ奪
又ハト十數目
ノ損得所

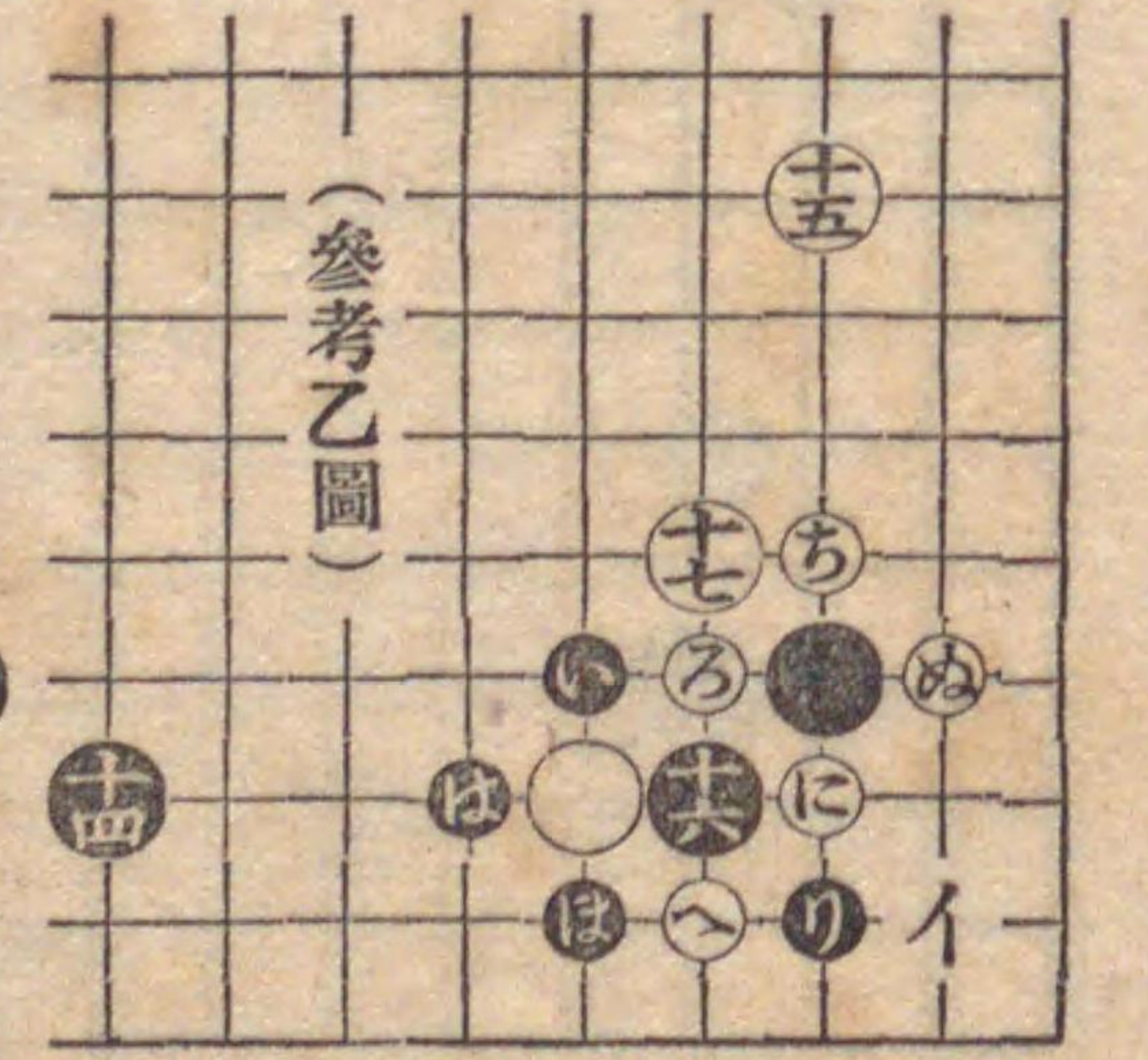
先手
ヲ扱ク

ではあるが要するに侵分であ
る、其から此の(イ)の點を白か
ら抑へても黒から行びても一方
は必ず手を抜くのである(但し
之に應じるより外に利益な處が
ないといふ時は別問題である)
(参考丙圖) 黒は上部を包まれ
まいといふ時に三十の手で此く
一と截る圖の如き打方もある
が、其は黒の不利である。
上述甲圖の手順は本來なれば三
間夾定石の處に説く可きである
が、説明の便宜上茲に一通りを
示しておく、随つて定石の部に
或は之を省略するかも知れぬ。

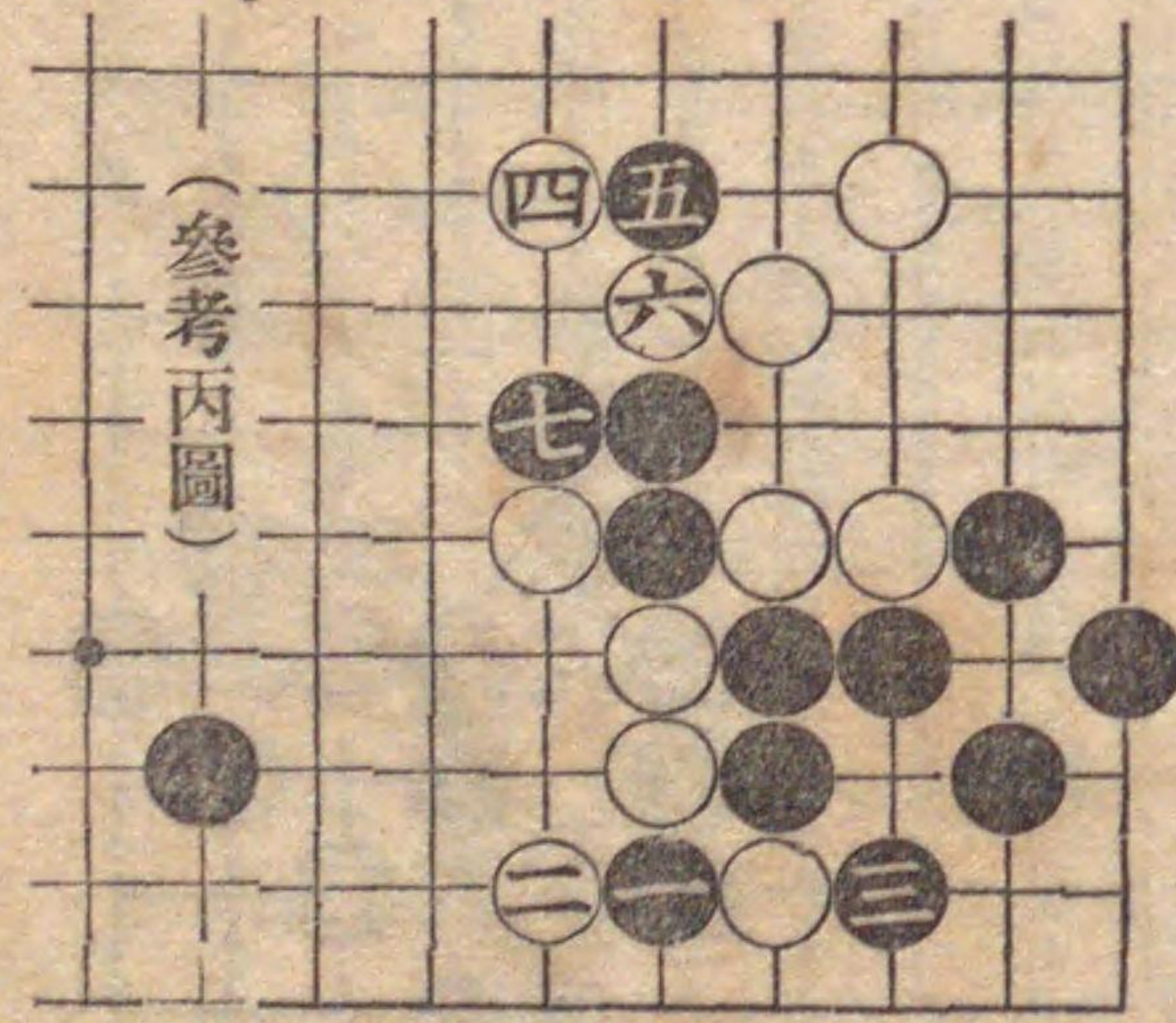
(乙圖)の手順
黒十六、白十七、黒(イ)と縛出し、
白(ロ)と截り黒(ハ)、白(ニ)、黒(ロ)と
提り、白(イ)とアテ、黒(ロ)の點を
粘ぎ白(ロ)、黒(イ)白(ロ)。



(参考甲圖)



(参考乙圖)

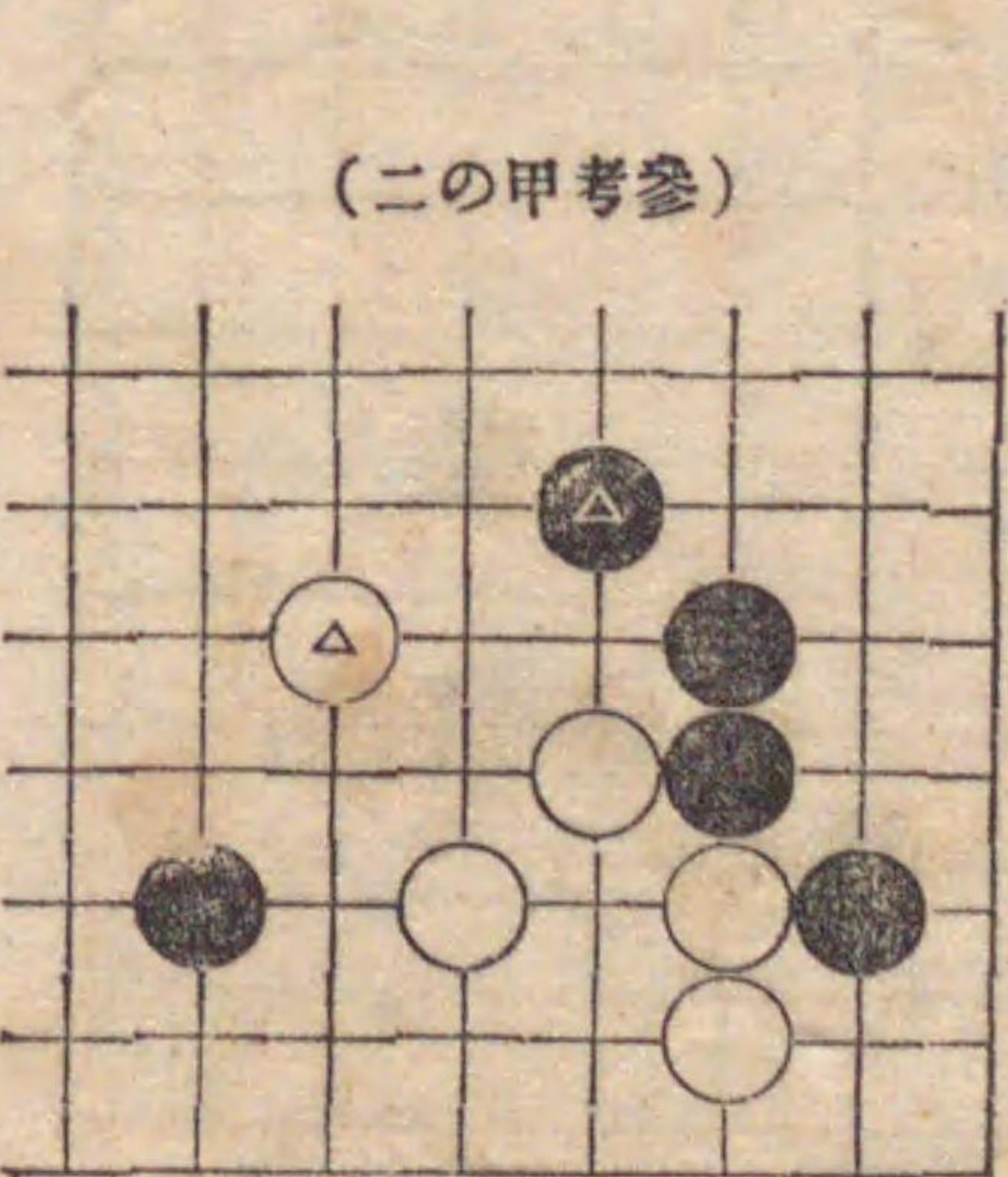
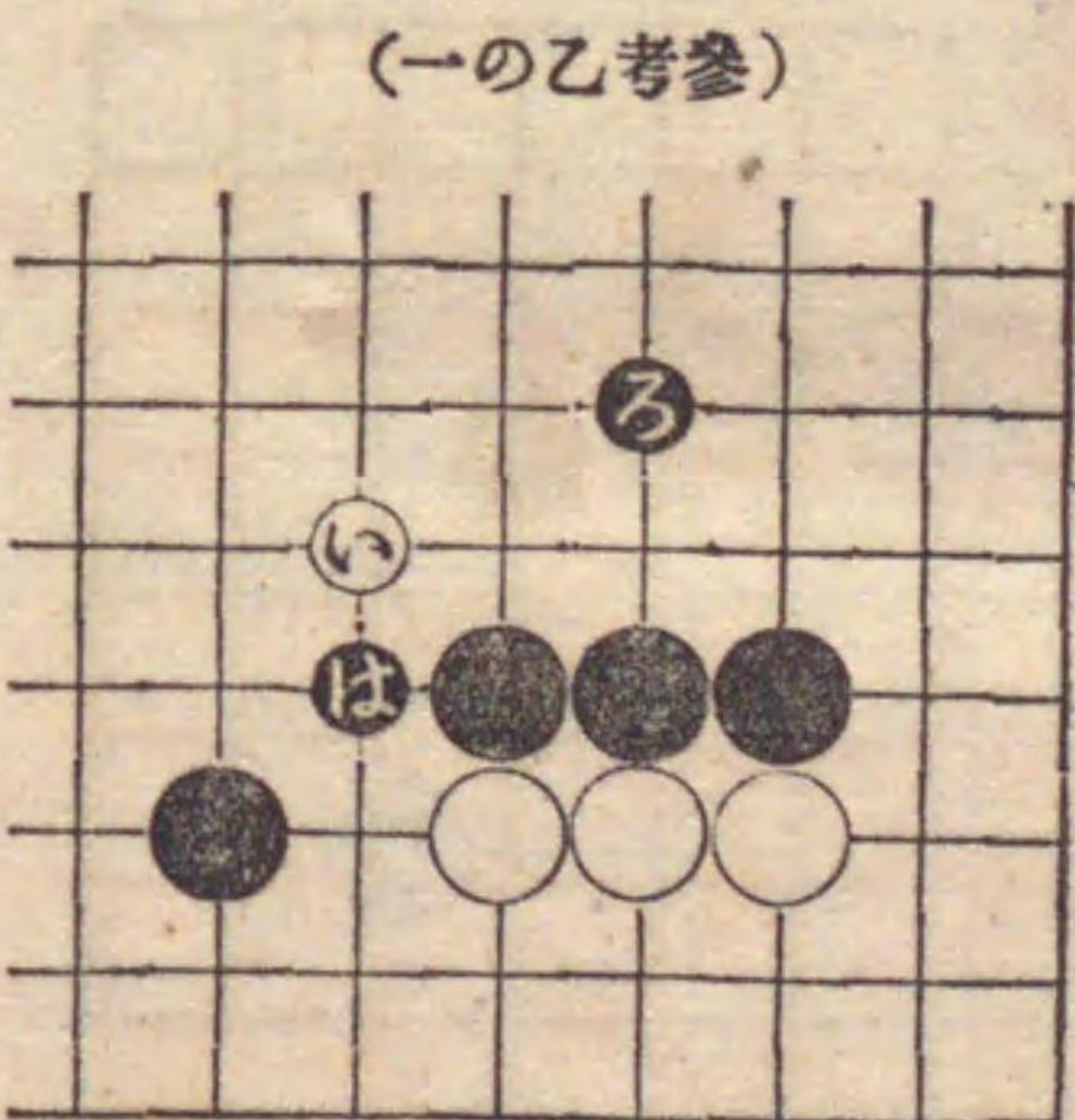


(参考丙圖)

白七黒ハ
ト交換
後白ヨリ
三三ニ戻
ル方利キ

「註」今白が七の手を以て直ちに三々に頂け、黒が之を第二線に縛ね、白が星へ膨らむ一間夾三々頂定石に出るとすると其結果は(参考甲の一)の通りになる、然るに跳出し定石で同じく三々頂縛ね膨らみの手順を逐うたとする(参考甲の二)の様になる此兩者を比較すると(甲の一)の場合では□印黒が斜走に飛躍して居るが、(甲の二)に至つては△印白の交換として△印黒が僅に尖んで居るのである、して見ると(甲の二)に於ては△印白が黒の活動を稍制限して居るといふ道理になる。更に翻つて一間夾三々頂黒が上を塗つた定石の結果を見ると恰と(参考乙の一)の様になるなつて居る之を本局右下隅に行はれた躍出しより導く結果の形に比較して見ると(乙の一)に示す白(七)黒*

* (八)の各一手づゝの交換があるだけ違つて居る、即ち之は有る方が利益であるか無くてよいかと言へば、有る方が幾分利益であると答へる事が出来る、然らば其の利益の度合は、黒白何れが勝つて居るかと言へば白の方が少しく優つて居る、何故なれば、今(乙の一)の如き場合に際して白が(七)と打ち黒は如何之に應ずるかと言へば、無論(七)と打つ可くして決して(七)とは打つまい、然るに白七黒八*



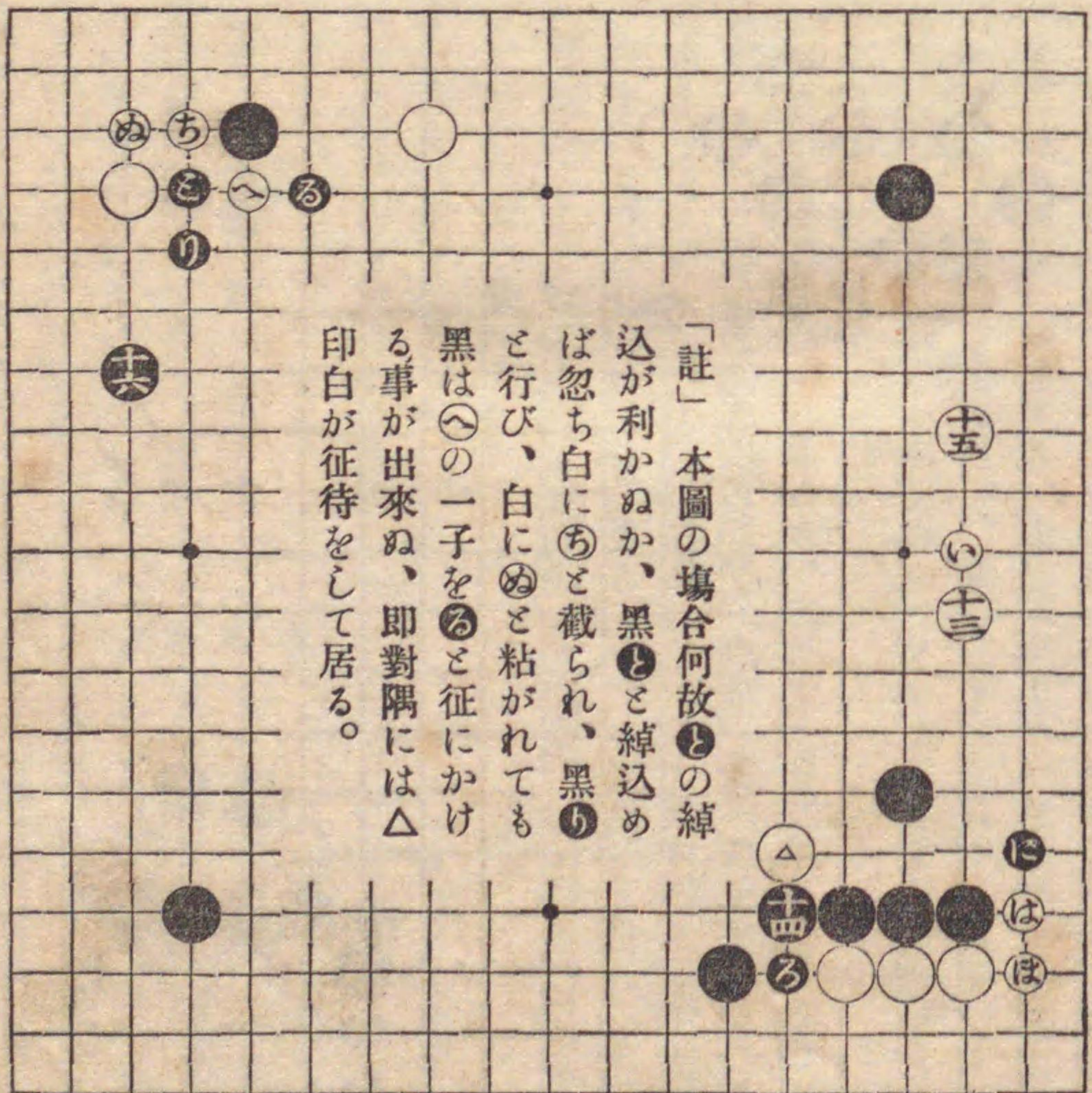
(一の甲考参)

*の結果は白(七)黒(八)の交換に歸して居る、即之に依つて見るに白七は多少働いた手といつても過當ではない

黒十六ノ
夾近ハ此
場合ニ利
アラス

白十三は星下に(七)と打つても差支はない、然し右下隅に及ぼす響を言ふと、十三と一路近いだけ感じも酷しい譯である、然し白十三の手を本圖の様につつか或は(七)と打つかは右上方面の關係にもよるのである、白十三の時黒若手抜きすると忽ち白に十四の點へ打たれ、黒(七)と截つた時、白(七)と縛ね、黒(七)と抑へ白(七)と粘ぐ、順序となつて、黒は本圖に比して甚だ薄弱を感じる事となる。

黒十六の二間夾返は此の場合に於ては元來良くない手である、何故なれば白から(七)の頂けの利く時即ち白に(七)と頂けられても黒は(七)と縛込む事の不可能な時は茲に白の堅壁が出来るものと豫想しなければならぬ、其の白の堅壁に接近して居る十六の一子は自然に勢力を失ふ道理になるからである。

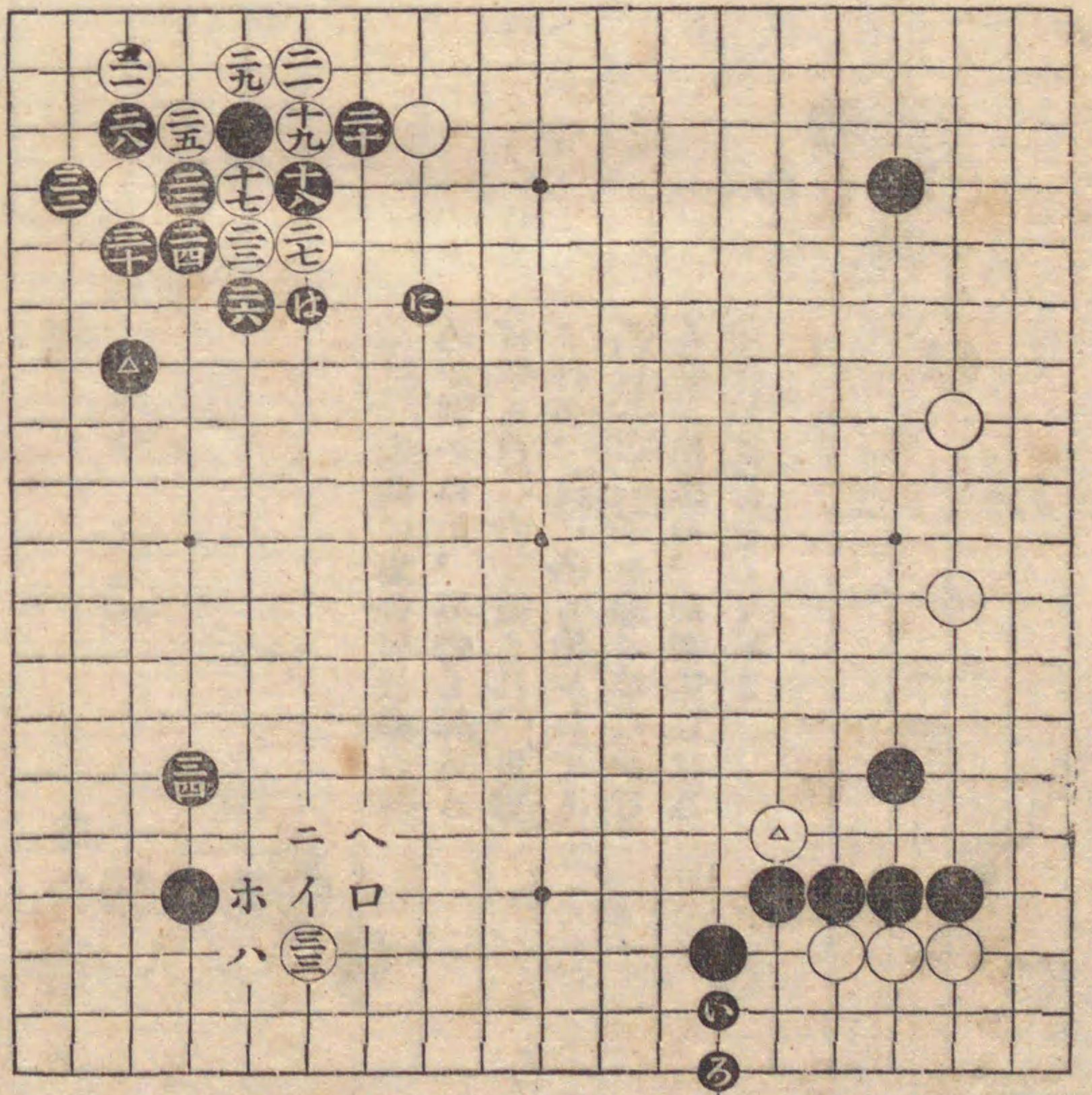


(局子二法石布)

二向夾返
し、打方
、変化

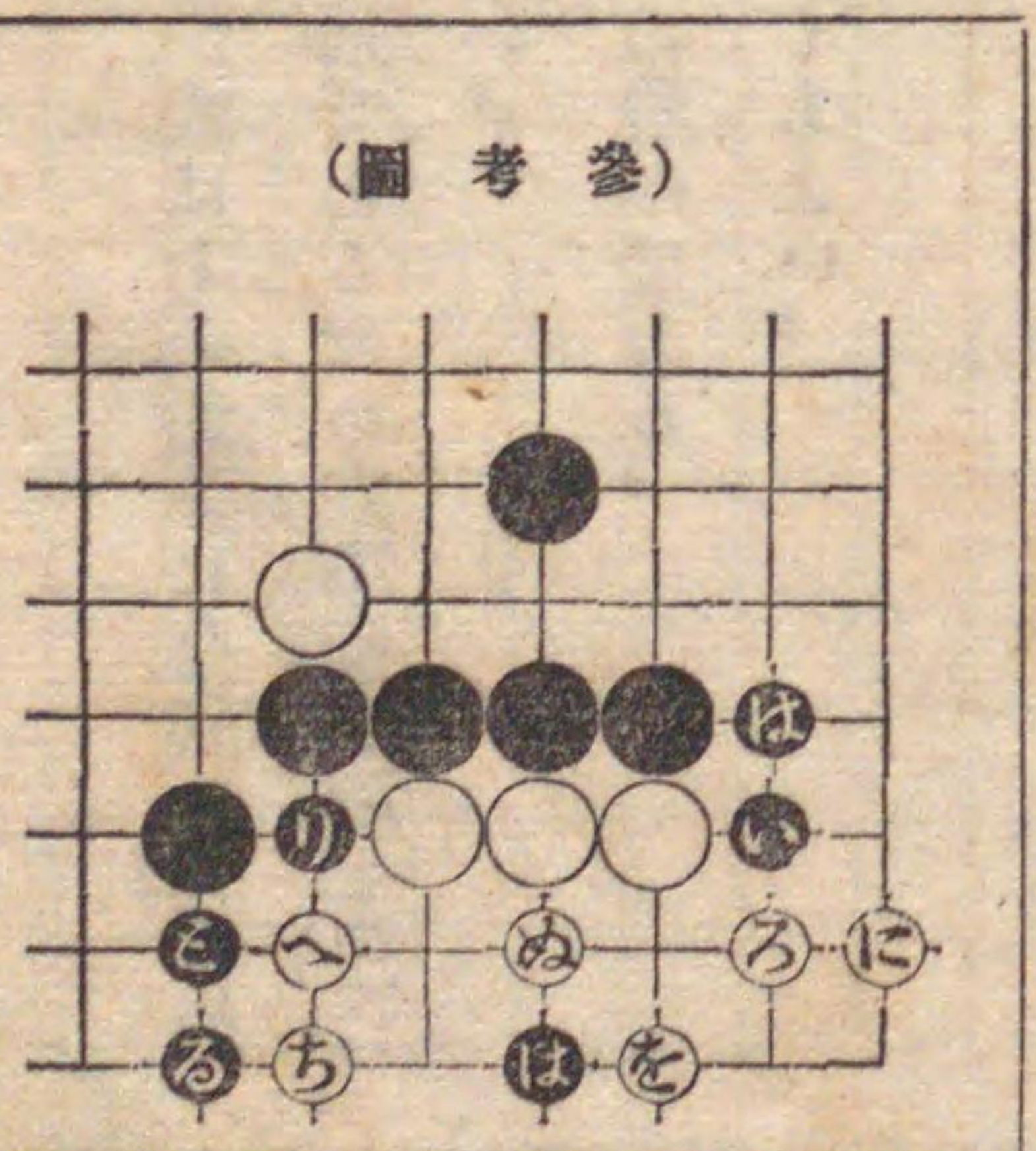
前圖黒十六（本圖△印黒）が本来良くないといふ理は已に説いた通りであるが、然し此の局は二子の棋である、已に置棋である以上は多少の不利を犯しても其が爲め紛れなき堅固の姿勢を形づくることが出来れば差支はない譯である。

白に十七と頂けられ、（對隅に△印白の征待があるため）二十二と縛込む事が出来ぬとすれば、黒の採る可き途は二十五の點に行るか十八と縛出すより外はない、二十五の點に行れば空しく一隅に封鎖され白を堅壁ならしめた上に△印黒が益々危険に瀕する事となる、乃で黒は十八と



はト押
手ヲ忘ル

縛出して振替りの手段に出たのである、最初黒が不利と知りつゝ十六と二間に夾返した時、已に此の振替りを豫期して居たものである、曾て敵の堅壁に接近するが爲に不利であつた△印黒は此の振替りによつて利益の位置に移つたかといふに決して然うではない、此く三十二と打つて白の一子を打抜いた結果極めて堅固の形を備へた黒に近く此の△印の一着を添へたといふ事は重複の姿勢と見られるのである、
△印の黒は多少の不利を犯して居るとは言へ全體の結構から見ると、右下左上の二隅が互先定石の應用で治つた結果、二子勢子の効力は儼然としてゐて壯大な模様となり、白が一方の黒地を消さうとすれば自然に一方に尨大なる地域が出来るといふ勢になつて白は容易に手の下し難い棋となつた、白が三十三と掛かつて来た時、唯軽く三十四と受けたのはよい、然し（ハ）と尖頂けて白に（イ）と立たせてから三十四と飛んでもよし又趣向としては（イ）と頂け白（ロ）、黒（ハ）、白（ニ）、黒（ホ）と頂抑へ定石に出て白が（ヘ）と粘いだ時三十四と飛んでおいてもよい、何れにしても右下隅の白がまだ完全に生きて居ない、何時でも（ニ）、（ホ）の下りが先手で利くといふ有様であるから之に牽制されて白は頗る働き難いのである、
黒は時機を見て（イ）と押す手を忘れてはならぬ此（イ）の點に白から曲られるのと黒から押すのとの消長の差は非常なものである、若黒から（ニ）と押し（ホ）と飛ぶ手順にでもなれば黒が益々壯大を加へると同時に上側の白地は極めて狭少なものとなつて終ふのである、
先手で右下隅を（ニ）、（ホ）、と下る手順は（参考圖）の通りである。



二子第十二局

黒四は八の點に掛るが普通である、若此の隅を打つとすれば⑥か⑦か或は七の點かに白三を夾むがよい、四と尖むのは曾て説いた通り稍緩慢の嫌がある、然し二子の局であるため左下隅の石と遙に相呼應して均衡を保つて居るから、是でも敢て悪いといふ譯ではない、

白五は④と大斜走若くは⑤と一間高目に右下隅を締つておくが普通の着手である、

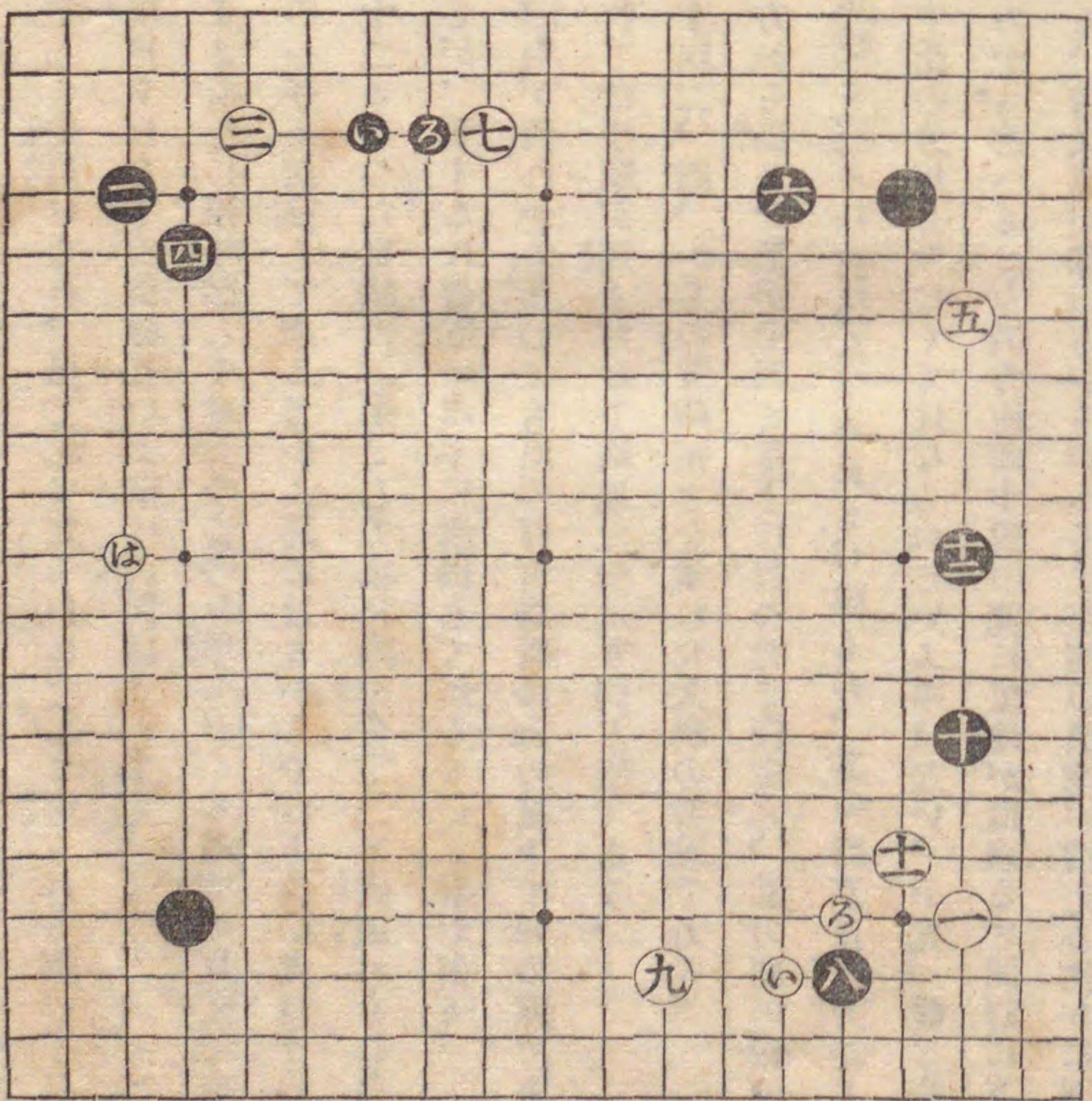
若他に打つとすれば⑥と左側の大場に打つて黒の勢力を中斷しておくもよい、

白七は黒から⑧と二間夾に攻められるのを防いだ手である、

白九と二間夾にした時、黒は十と打つて二間夾返しこの定石を應用し、白十一の時十二と二間拓して兼て白五に對する三間の攻撃手としたのである、

「註」二子及三子の局で白は必ず明隅に先着を下さねばならぬ理由は已に屢々説いた通りである、白が已に一と打ち次で黒から掛りを打たれれば其は致し方がないが若も、本局の様には黒が一への掛りを打たず四と守りをした様な時は、白は其の機を逸せず直ちに⑧若くは⑨と締りをするが、白の立場としても棋の道理から見ても、共に好良の着點といはねばならぬ、然るに本局白は五と右上隅に掛つた之は對局者の趣向とでも評しておく可き手で別に善惡の評は下さぬが兎に角一隅を締つておけば後が打易い譯である、

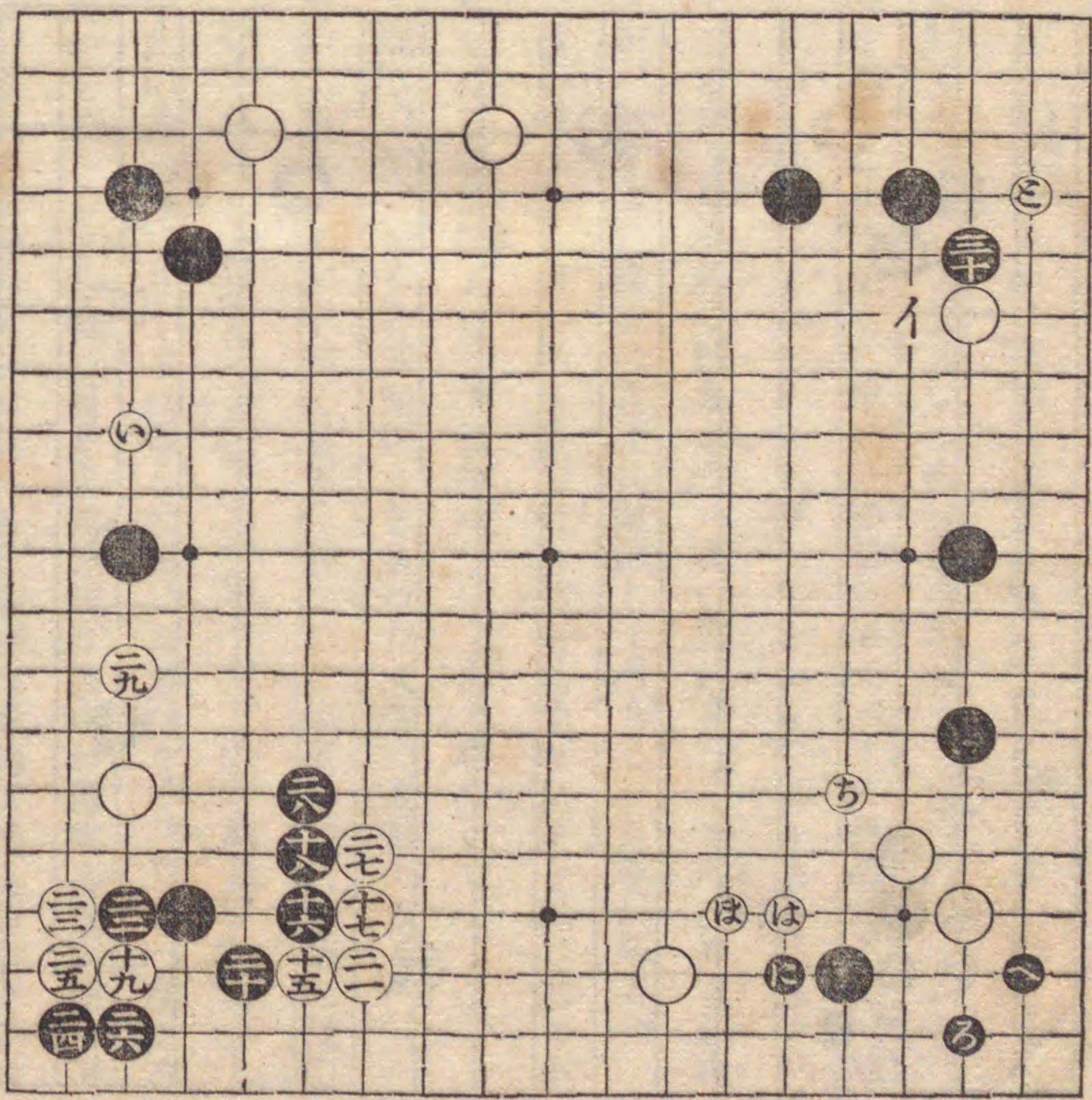
此の白五の手の弊は直ちに七の手から現はれて來た即ち白が五とさへ打たなければ黒六の飛もない、六の飛がなければ⑧の二間夾も餘り急でないから今いそいで七と拓くにも及ばぬ、今茲で七の手は黒六からの命令手といつてよい何故なれば左側星下④若は右下隅の締り等よい手を打つ可き場所はいくらあつても七の手の時には他に行く違はない、溯つて言ふと白五の手が原因となつて七の拓きを餘義なくせねばならぬ結果に到達したといふ様な道理になつたのである。



(局子二法石布)

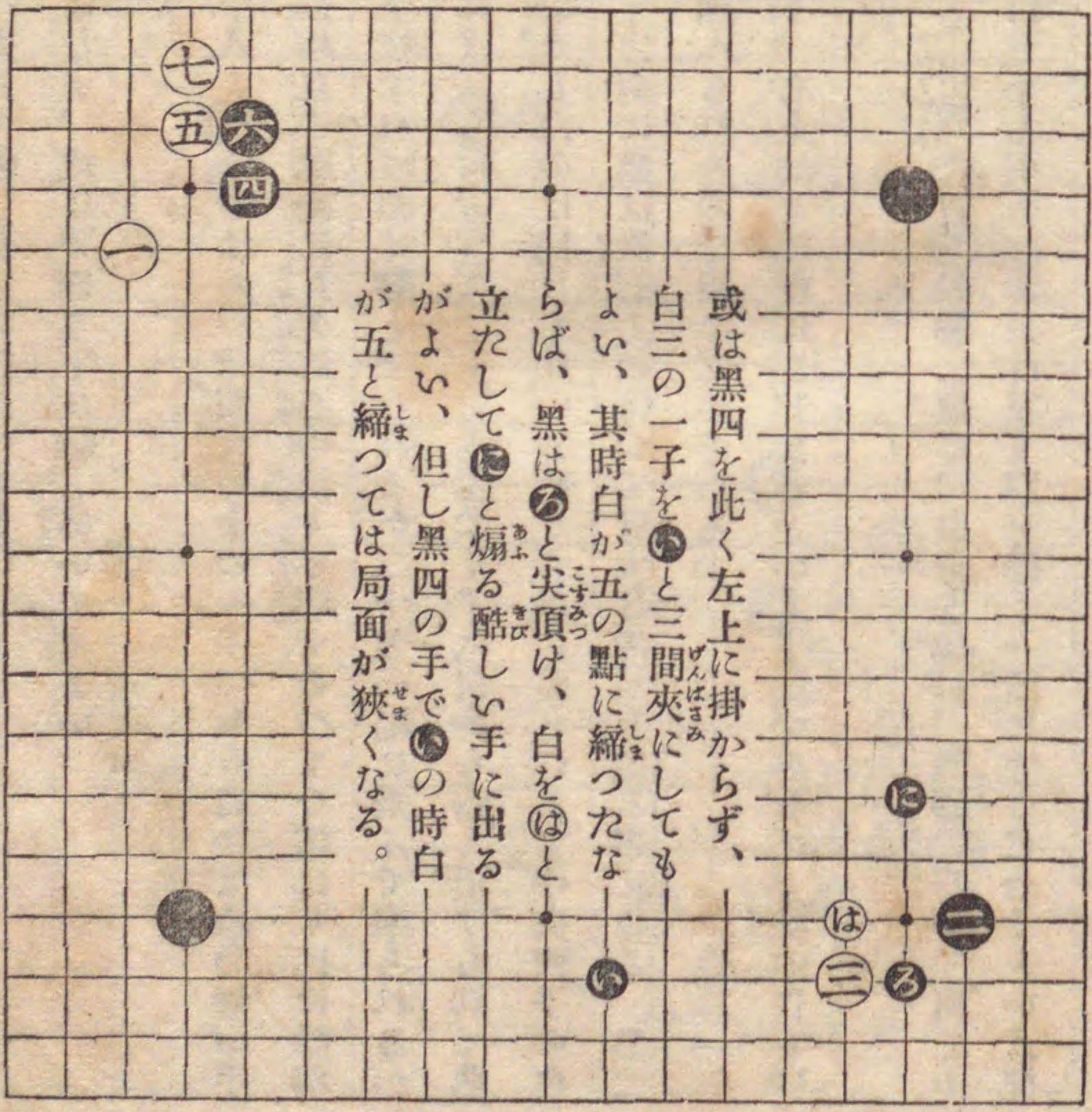
九下隅の
両掛に對
する打方

白二十七は此の手では是非共押し
ておかねばならぬ若黒から此の
點へ曲られると下側の白地が極
めて手薄くなる、白二十九は自
らの姿勢を整へると同時に⑤の
打込をも覗ふ手である、
黒三十の手で⑥と隅へ走れば、
白は⑦と掛け、黒⑧の時⑨と封
鎖し、黒⑩の時⑪と右上隅に走
るがよい、又黒⑫の時白は⑬、
⑭、⑮、⑯四着の交換を打たず、
單に⑰と右上へ走る手もある、
黒三十の時白若し(イ)と立て
ば、黒は右下を⑱と斜走するが
よい、若し又黒三十の時白手抜
して⑲と打てば、黒は(イ)と緯
ねて白を抱へておくがよい。



二子第十三局

白一の目外は只少しく形を變へ
て打ち試みたといふ迄で別に仔
細はない、随つて黒四は五と小
目に掛つても差支はない。
「註」此く高目から掛つて打つ
のは隅の實利から言ふと多少
不利の傾はあるが、右上置石
との關係上上側に黒模様を造
らうといふ意を含んで、此く
高く掛つたものと見てもよい、
然し必しも黒の此の考が實現
されるか否かは保する譯に行
かぬ、何故なれば其は今後の
白からの來方によつて如何變
化するか知れぬからである。



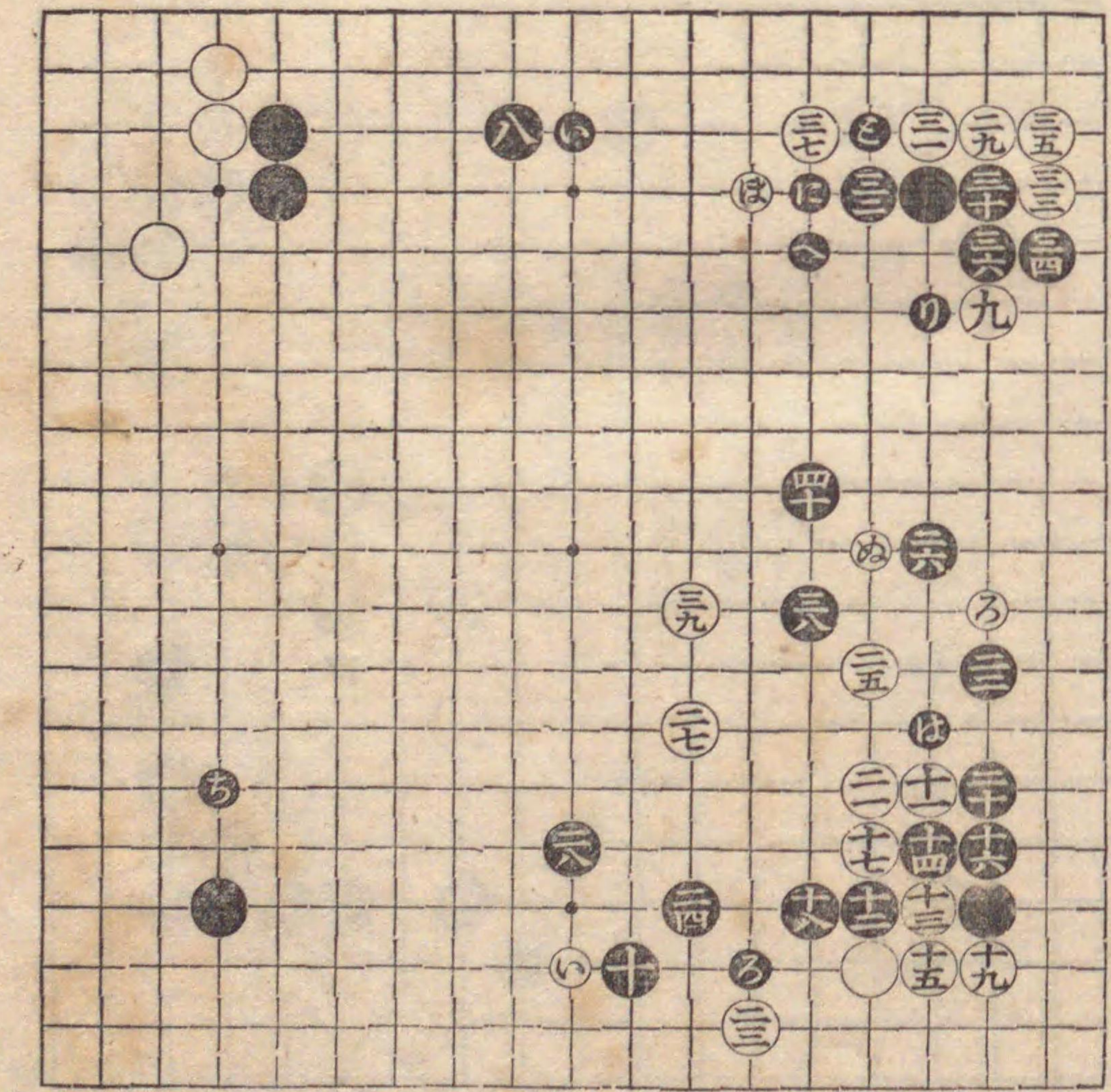
或は黒四を此く左上に掛からず、
白三の一子を①と三間夾にしても
よい、其時白が五の點に締つたな
らば、黒は②と尖頂け、白を③と
立たして④と煽る酷しい手に出る
がよい、但し黒四の手で⑤の時白
が五と締つては局面が狭くなる。

黒八は右上置石との均衝上、一路右へ寄せて●と星下に打つてもよし、
白九は三十七の點から掛つても差支はなから、或は下側星下に○と拓つてもよし。
黒十は●と酷しく一間夾にしてもよし。

「註」 白が十七と截つた時、黒が十八と行るのは此の三間夾の十の一子のある場合は論の無い手である、黒十八以下二十八迄の黑白相互の應接は互先定石の決り手順であつて今迄にも已に詳解した通りである、即ち白二十五を手抜すれば黒に●と來られるか二十五の點に飛んで來られるか孰れにしても少からぬ迫害を蒙らばならぬ、黒亦二十六を手抜すると、白から○と頂けられて非常の不利に陥る、白が二十七と大斜走したのは同じく此の方面から黒に迫られると中央四子の白が苦しむのみならず、其の結果左下方面に黒は置石と相待つて壯大な地域を造る事になる、黒二十八も同じく中央の白から威壓を加へられるのを拒いだ手である。

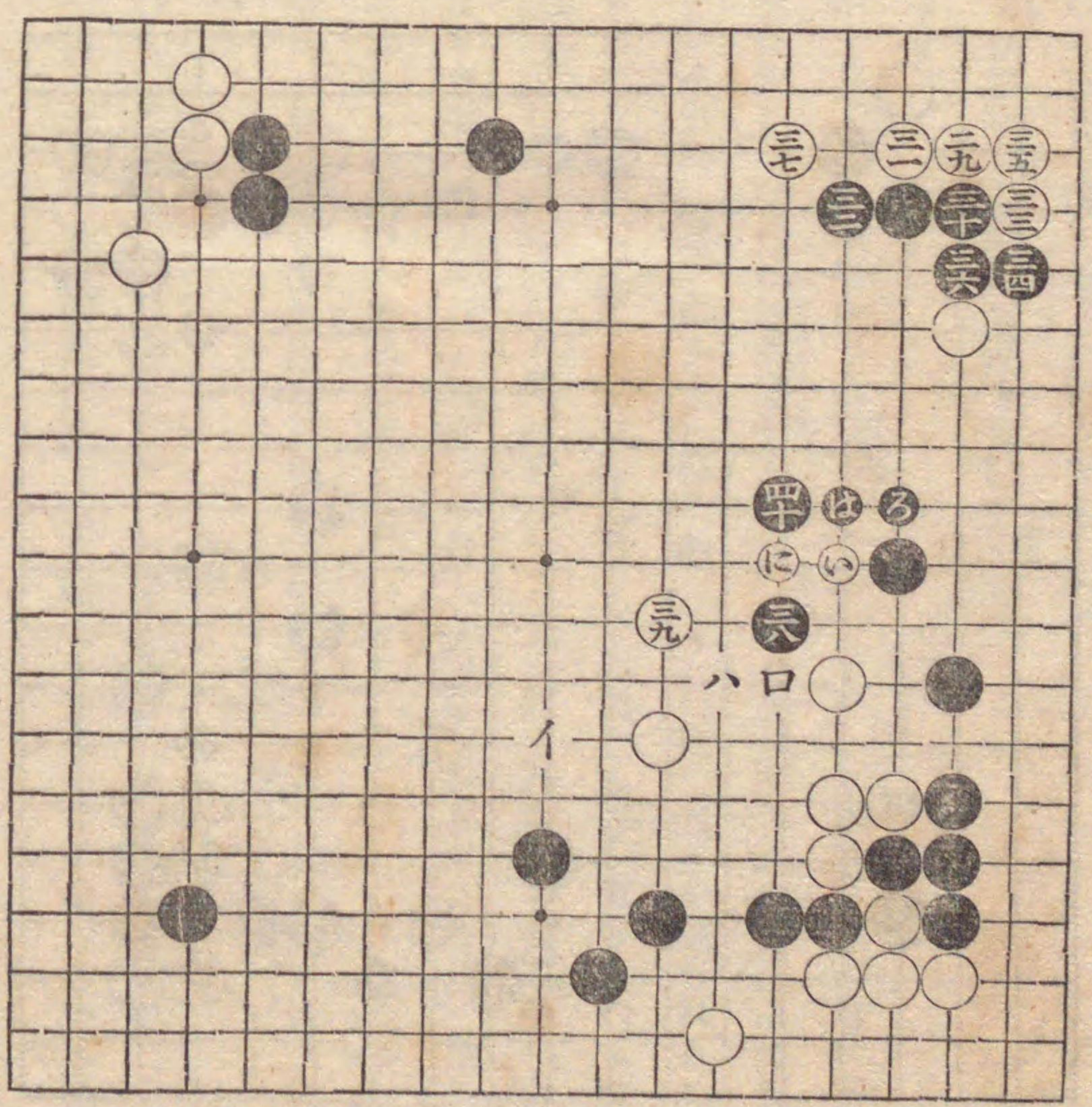
白二十九は九の一子を捨て、振り替り、右上側を黒地にさせまいといふ手段であるが、其の代りに右側に龐大な黒地を造らす事となつた、
溯つて白は二十九の手で三十七から「兩掛」に打ち黒●と頂け、白○と緯ね、黒●と行び、白二十九と隅三々に打込み、黒●と抑へ、白三十と引いた時黒は左下隅を●と一間に守つておくといふ様な形になつてもよし。

本圖の結果は九の一子を黒の圈内に葬つて、三十八と煽られ、四十と防備された、右側に大地域を確定され、白は頗る打ニクイ形勢となつた（然しながら別に白の打方が悪いといふ譯ではなく、二子の勢力の自から然らしめた結果である）。



此残説
味つく

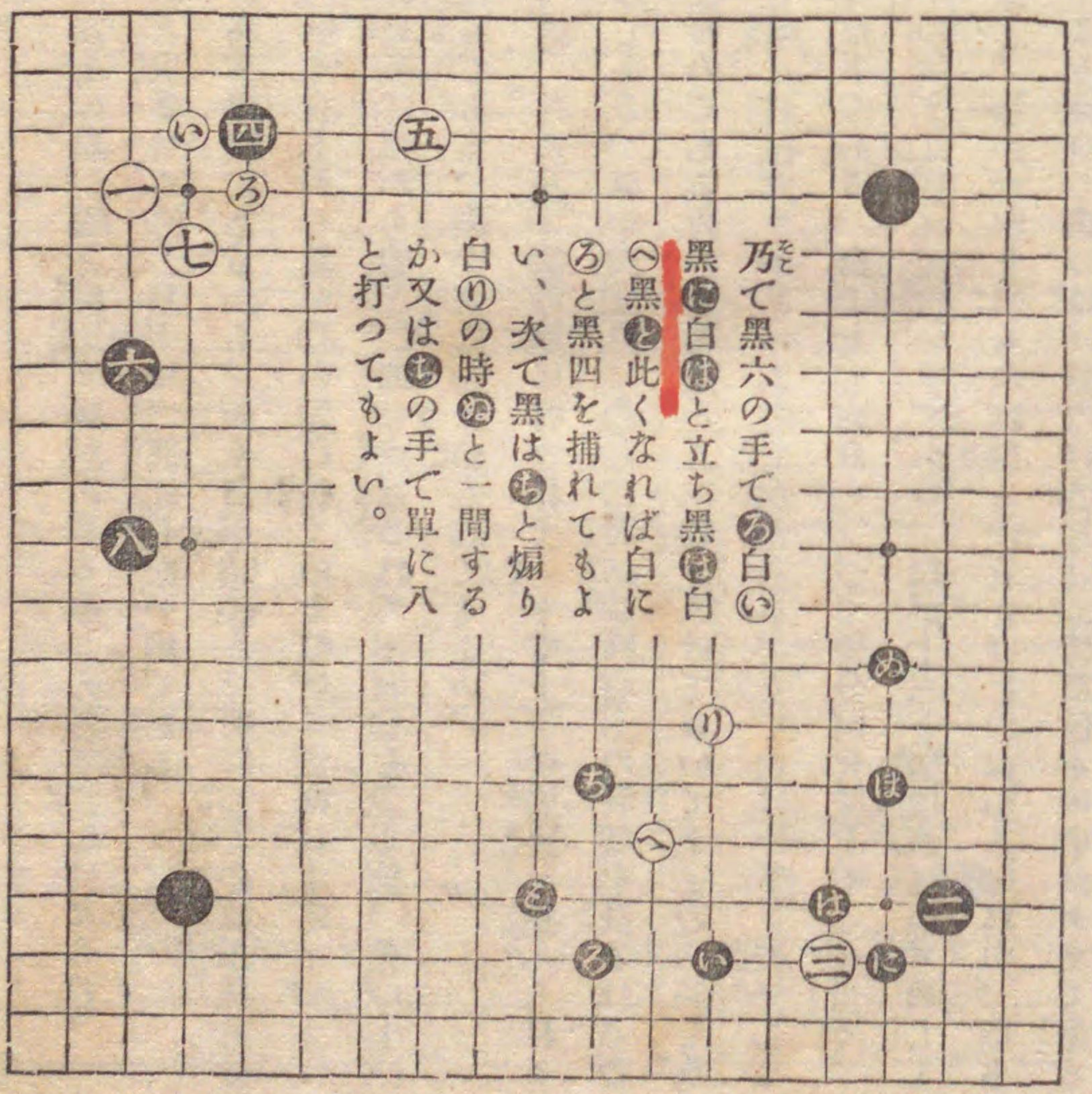
「殘説」 白二十九以下再録
 白は二十九と打込む以前に先づ
 ⑥と頂ける方が急務であらう、
 其時黒が⑦と行ければ白は二十
 九と打込むがよい、若又黒⑧と
 行びす⑨と緯ねて来れば、白⑩
 と行び黒が⑪と粘いだ時二十九
 と打込むのである、何れにして
 も右側の黒の勢力を削つた上三
 十八と迫られる手を防ぎ中原の
 白は餘程ラクになる本圖四十の
 後若し黒の手が(イ)の邊に來れ
 ば白は(ロ)とでも備へておかぬ
 と黒から(ハ)と急所を衝かれる
 患がある。



はニ意

は交換
白不利

一子第十四局
 黒六は必しも此く夾返さなくて
 もよい、此の手で右下の白三を
 ①の間夾若くは②の間夾にし
 てもよいのである。
 「註」 ③の間夾は直に④と
 上から頂けて押しやうとの意
 ⑤の間夾は⑥と尖頂けて立
 たして煽らうとの意である。
 黒若し六の手で⑦と三間夾にし
 白は七の手で⑧と尖つけ、黒亦
 ⑨と白三に尖頂けた時、白が⑩
 と黒四を捕れば、黒も亦⑪と打
 つて白三を捕る、此く同状態に
 なつては白の方損である。



乃て黒六の手で①の
 黒②と立ち黒③白
 ④黒⑤此くなれば白に
 ⑥と黒四を捕れてもよ
 い、次で黒は⑦と煽り
 白⑧の時⑨と一問する
 か又は⑩の手で單に入
 と打つてもよい。

白九の手は
右から掛つてもよい。

白九の手は⑨と右から掛つてもよい。

「註」 但し白⑨黒⑩となつた後は左上の黒が⑪と尖出す味が出来事と心得て置ねばならぬ。白十一は⑫と二間に夾んで黒を十二と尖ませて⑬と星下に二間拓したい處である。

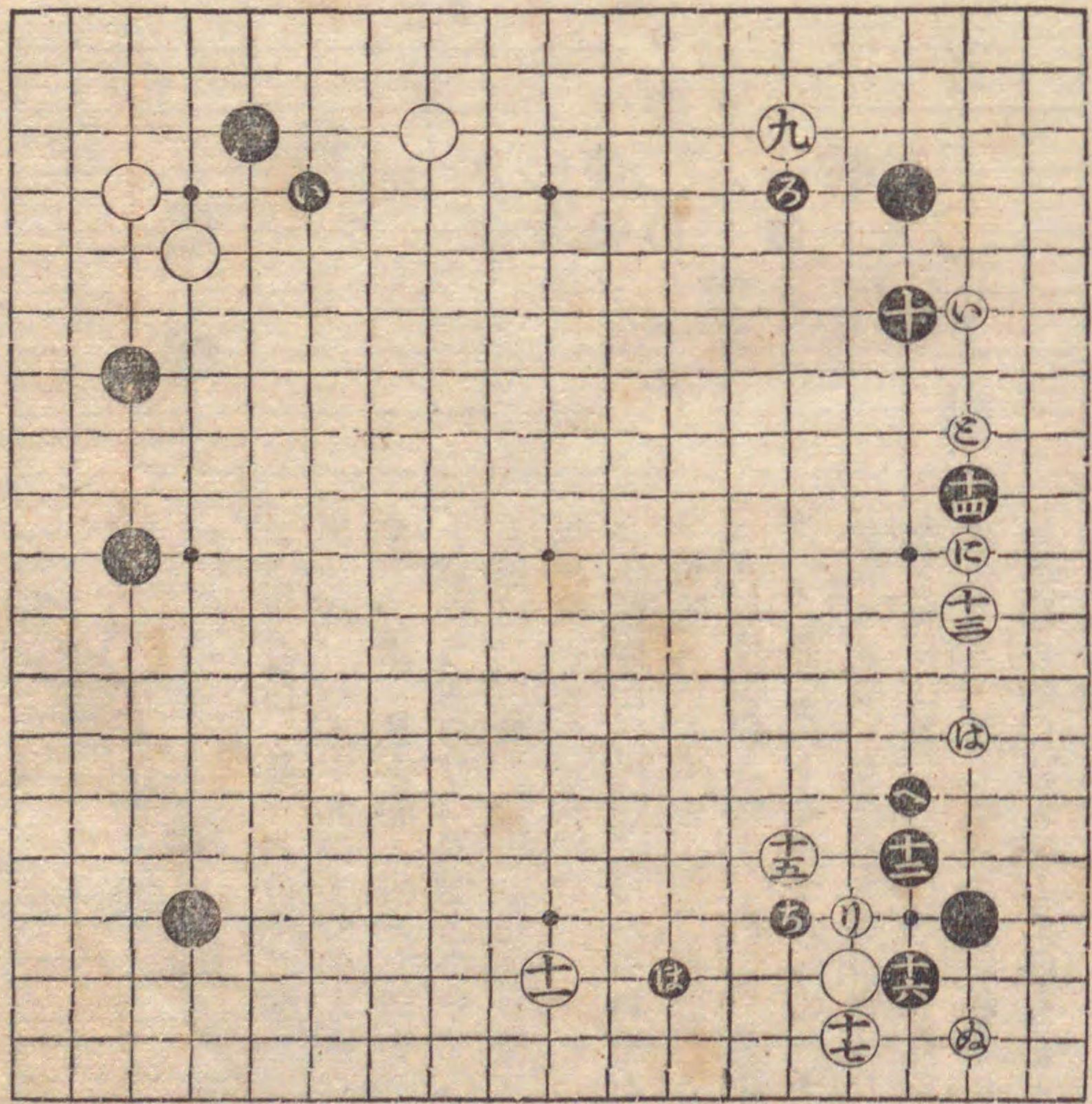
「註」 何故なれば右上の黒が十と高き位置にあるから、此く白が⑭⑮と二間に拓くのは單に自分の地域を造るといふのみでなく、兼て右上から黒が⑯の點に拓くのを妨げる意味にもなる。

然し本圖の場合白が十一の手で⑰に夾めば黒から⑱と二間に夾返されて不利益を蒙る故、先づ十一と拓いておいて次に⑲と夾まうとの考である、黒十二は⑳と斜走してもよい、

白が若し十三の一着を打たぬとすれば、黒に星下㉑の點に打たれて一手で上下の姿勢を整へられるから白は之を妨げて十三と打つたのである、黒十四は白に㉒と二間拓され右上の利益を侵されるのを防衛し、兼て白十三の發展を妨げたのである此の場合黒からは㉓と掛けておいて十三の一子を攻めやうか、或は㉔と打込んで兩方を擱んで打たうかといふの二途がある、乃て白は十五と斜走して之に備へた、黒十六は隅の活を計つた手である、白十七も亦自ら守つて幾分隅に味を残して居る。

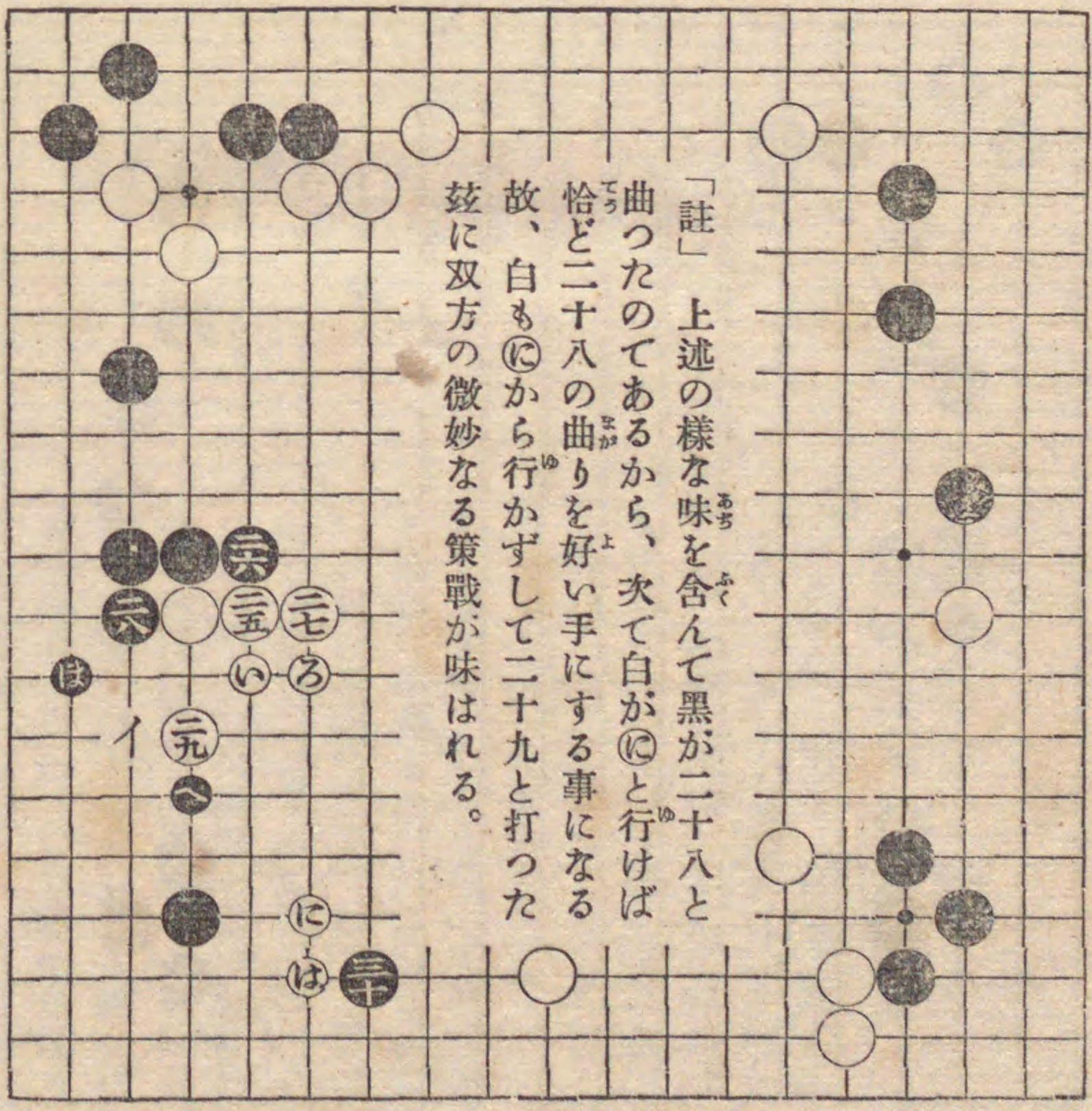
「註」 此の白十五、黒十六の二手の如きは實に面白い手である、白が十五と圍はねば黒も決して十六とは尖頂けぬ、又溯つて言ふと、黒が十四と迫らねば白も十五とは打たぬかも知れぬ、即ち黒十四のために十三の一子が弱くなり随つて㉕の掛け㉖の打込といふ様な色々の手が出来て来る

から白は餘義なく下側の防禦と十三を援ける意とを兼ねて十五と打つた、已に白が十五と打ち及⑳の手がなくなつた以上、此の白を治らせるのは惜しくないから、黒は十六と尖頂けたのである、又白十七の下りも注意す可き手で、若し十五の斜走がない前ならば㉑と立つ手であるが、今㉒と立つては、十五の一手がハタラカヌ事になる、乃て十六と下り、十五の手をハタラカシた上、隅へ㉓と飛ぶ手を残したのである。



(局子二法石布)

白二十五は二十七と飛ぶ手もある、二十七と飛べば黒は二十五の點へ沖^つんで、白[○]黒二十六(此際白[○]と堅く粘るか或は手抜して[○]若くは[○]と迫るかである)となるか、或は手抜して三十と走り白が二十六へ膨^はらんだ時二十八と下から行くかである、黒二十八は普通[○]と走る手であるが此の場合黒が[○]と斜走すると白に[○]と迫られ黒若[○]と飛べば[○]の中間に(イ)の間が出来て味が悪い、乃て勢白[○]に應じて二十九と二間せねばならぬ、黒が二十九と二間した結果は黒が[○]と緩^{ゆる}んでゐるよりは此く二十八と曲^まつてをる方がよい。

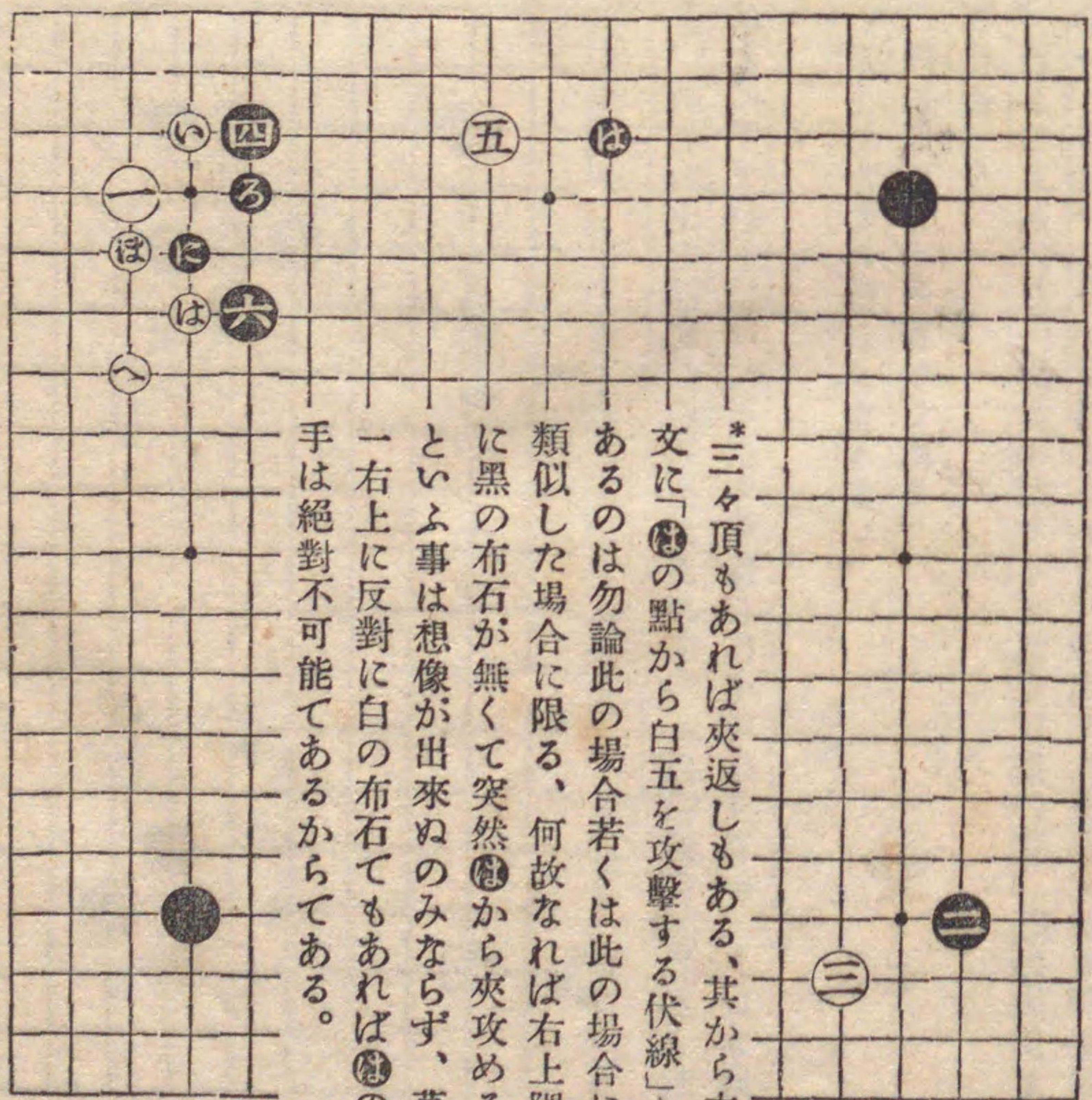


「註」上述の様な味を含んで黒が二十八と曲つたのであるから、次で白が[○]と行けば恰ど二十八の曲りを好い手にする事になる故、白も[○]から行かずして二十九と打つた茲に双方の微妙なる策戦が味はれる。

一子第十五局

黒六の手は、白一から[○]と尖頂けられ[○]と立つた時、[○]から煽られるのを、豫防する手である事は、從來屢々説いた通りであるが、本圖の場合には次で[○]から白五を攻撃するの伏線とも見る事が出来る。

「註」黒六は[○]と白一の肩へ壓迫し、白[○]、黒[○]、白[○]、と運ばして[○]の點から白六を夾攻めると大差はないが、只此の六の二間飛は[○]以下の掛の手に比較すると、少し子のハタラクが軽い。又單に白から[○]に尖頂けられるの凌ぎ手とすれば必ずしも此の六の手のみには[○]ならぬ。



*三々頂もあれば夾返しもある、其から本文に[○]の點から白五を攻撃する伏線とあるのは勿論此の場合若くは此の場合に類似した場合に限る、何故なれば右上隅に黒の布石が無くて突然[○]から夾攻めるといふ事は想像が出来ぬのみならず、萬一右上に反對に白の布石でもあれば[○]の手は絶対不可能であるからである。

(局子二法石布)

白七は普通の應接であるが、此の手で⑥と頂け黒⑦の時⑧と引く手もある。

「註」 互先定石三間夾第二百七頁以下を参照せよ。

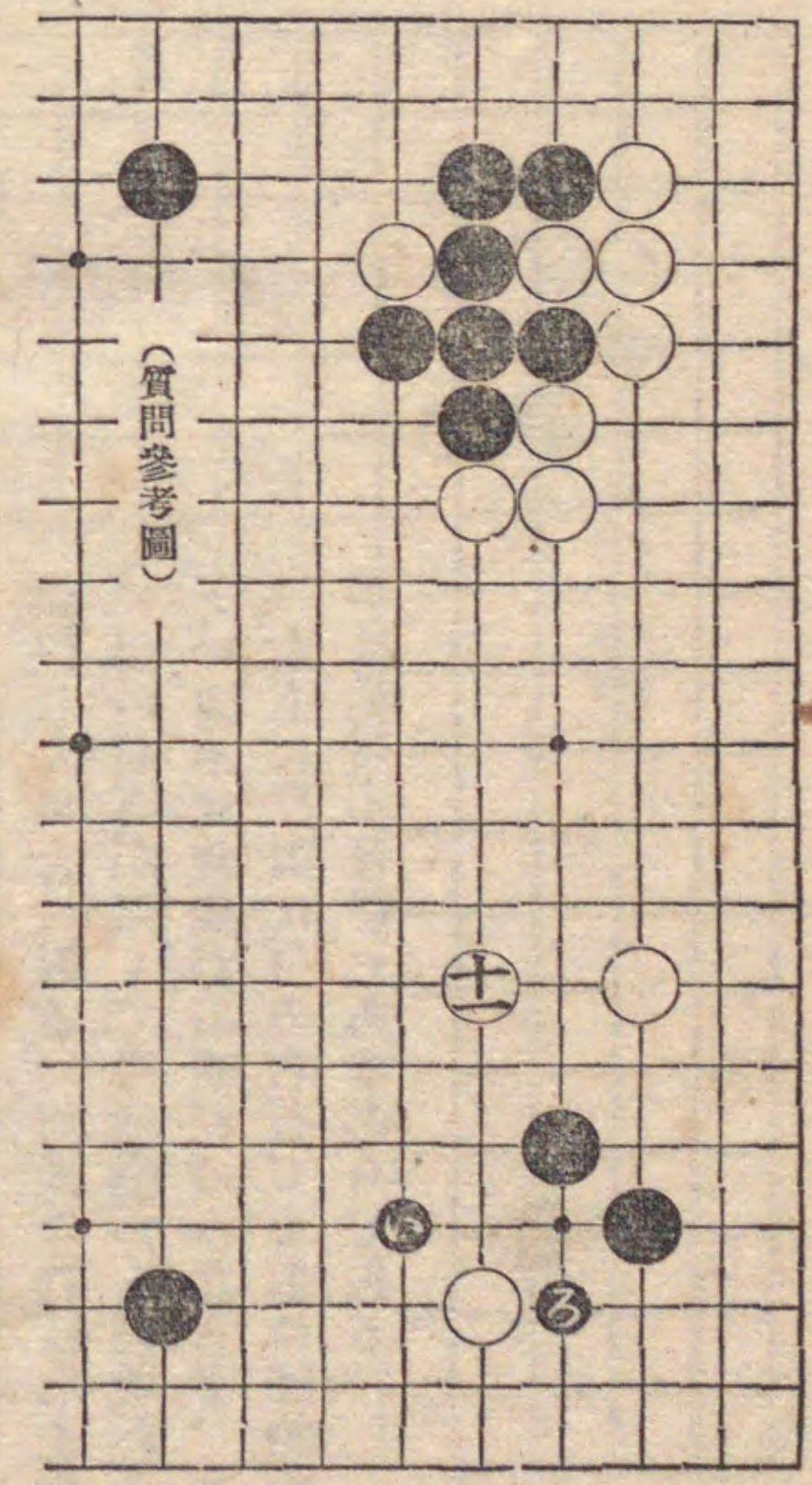
然し本圖の場合は⑥の頂けは絶對に悪い、何故なれば⑥⑦⑧⑨と運んで茲に黒の勢力を強盛ならしむるは、直に△印白が孤弱に陥る譯になるからである。

「註」 此の意味を反面から考へると、若し右上方面に白の布石があつて、△印白が急に黒から攻められる患のない場合ならば、白は七の手で⑥と頂け⑧と引く手段に出ても差支ない、といふ道理になるのである。

白九は黒に⑩と尖頂けられるのを拒いだ手であるのは言ふ迄もなし。黒十の尖は約束手である、白十一の二間拓是亦普通の着手である。

△問 白十一の手を⑪と一問飛する場合ありや。

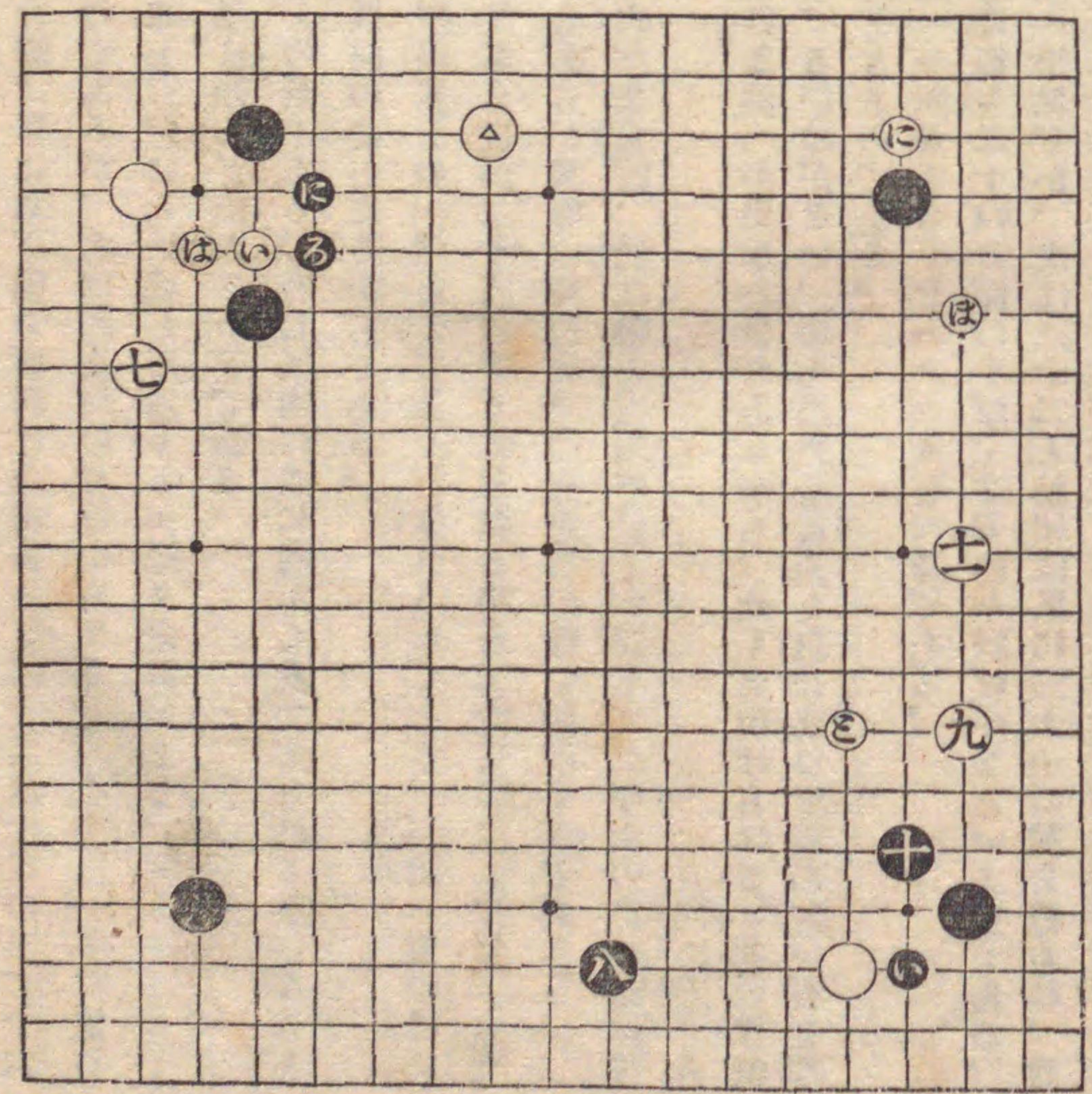
▲答 其は右上隅の布石關係による、若し右上隅に星の黒勢子がなくて互先状態の⑫、⑬の大斜走締てもある様な場合は、此の⑬と十一との低い姿勢が重複するから、右側に大模様を造る勢を示



して、⑬と飛んでもよい、又或は右上が互先状態大斜掛の結果として「参考圖」の如き鞏固な形になつて居る様な場合であれば、無論十一の手は中央へ向つて一問飛しなければならぬ、以上二種に類似の様な場合でない限りは大抵本圖の通り十一と二間拓する事と心得ておくがよい。

△問 「参考圖」右上の布石關係で白十一が此く中原へ一問飛した時黒は之に如何應ずるが可きや。

▲答 黒は⑭と上から掛けるか或は⑮と隅から尖頂ける手である。



白十一(△印)が前圖の通り二間拓した際、單に右下隅方面だけの場合ならば、黒は十二の手で十六の點へ掛けるか、又は㊸と尖頂けるのであるが、本圖即全局の打算からすると、上側白一子に迫つて此く十二と打ち彼の弱點に乗じて右上方面に大地域を形造くるが最も急務である。

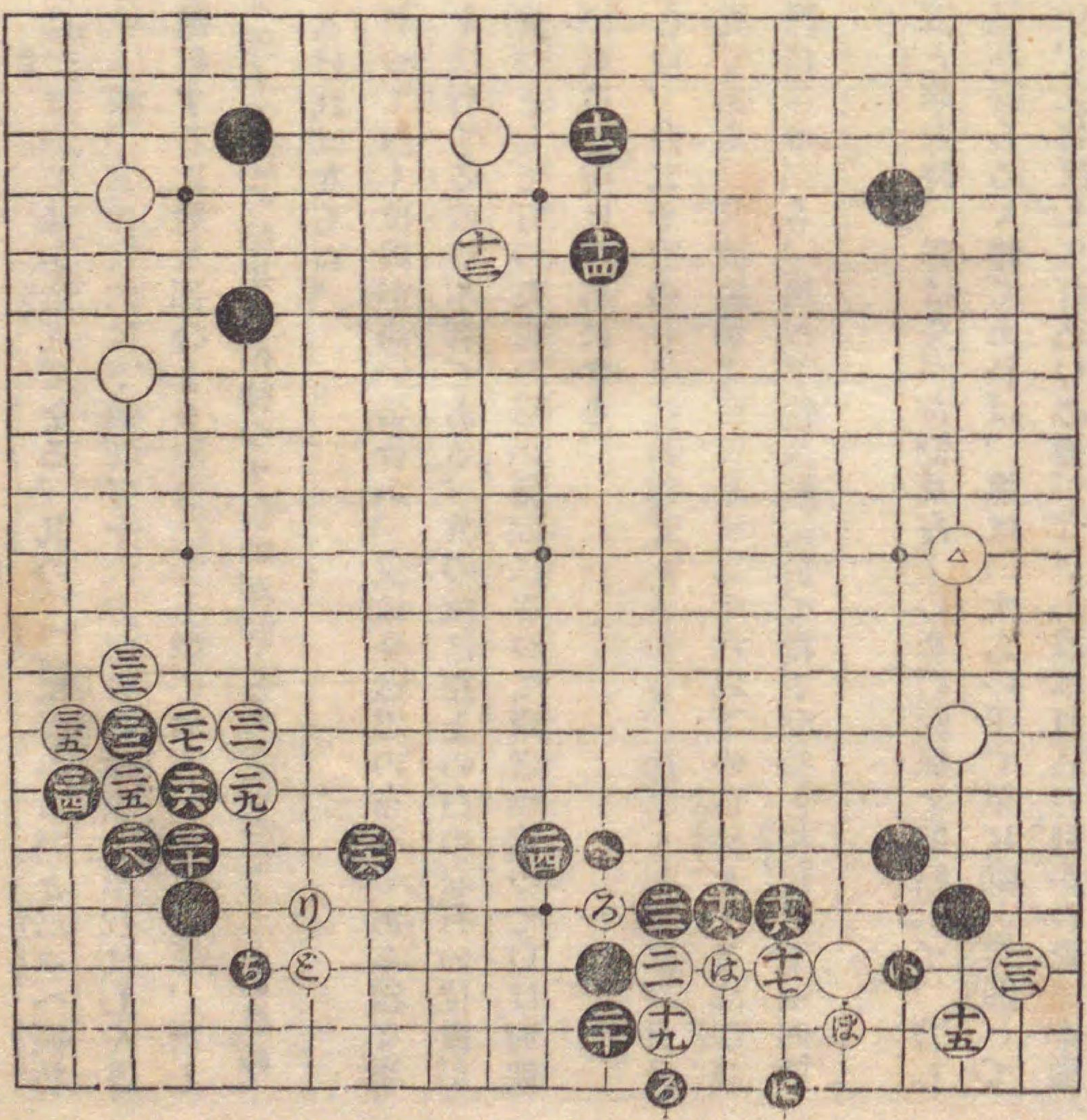
白十三の應手、黒十四の備へ此の二手は殆んど論のない手である。
白十五は先手を以て實利を占めやうとの策である、若し反對に黒に㊸から攻立てられる事になると黒の勢力益々旺盛を加へ白は極めて孤弱の姿となるからである。

「註」 白十五から黒二十四迄は三間夾定石の一種として能く行はれる形である、が此の形の時に黒二十を二十一の點に押す場合、其から白が二十三の手で㊸を截る場合、或は黒二十四の手で㊸、白㊹、黒㊺、白㊻、黒㊼となる手もあるが其等の詳細は三間夾定石の部で明解するであらう。
白二十五を若し右方から㊽と掛つて來たならば、黒は㊾と尖頂け㊿と立たして二十六の點に單關する手順である。

「註」 其の故は下側に已に黒の堅固な備へが出來た後であるから、此く尖頂けられても其の代償として立つた㊿の二子から發展する餘地がない、即ち黒から言ふと白に立つ甲斐のない石を㊿と立たせ重い姿勢に誘致する手段となるのである。
黒二十六、二十八の頂抑へは㊿の點へ一問飛する手をハタラカした譯である。
白が三十一と上を粘いだのは下側黒地即ち二十四方面の手厚くなるのを妨げやうといふ意である、若し此の手で三十四へ下るか三十五へ掛粘ぐか、或は三十二と粘げば黒に三十一の點を截られ、益々下側の黒地を厚壯ならしむる恐がある。

黒三十六は二十四の一手がある
故此く二問したので、普通ならば㊿の點へ單關する手である。

「註」 白二十五と來た時、若し左側の白地へ打込む必要のある形勢であれば黒は二十六の手を單に㊿に飛んで居る譯で、決して二十六以下の頂抑へはしない、然るに本圖は右上の白の位置が極めて低いから敢て打込む必要のない處である故、二十五以下の白に勢力を加へさせても差支ない、却つて其の代償として左下及下側の我黒地の治る方が得策である、との理由で此く頂抑へをしたのである。



(局) 子 二 法 石 布

「黒二十六の手の残説」
 此の二十六及二十八の頂抑への手には二ツの意味を含んでをる、其の(一)は白から㊦と三々へ振替られるのを防ぎ、隅を早く治らうといふ意、其の(二)は下側即三十六方面の我地域を厚壯にしやうとの意である、且つ此の二つの意を遂行するに最も都合よき理由は左上隅の布石關係である、若し左上の布石關係が、本圖白二十七より三十五迄の結果と相待つて白の利益となる様な場合であれば、黒は二十六と頂ける手からして考へなければならぬ。

「註」 本圖の様に左上の白が低く打つて無く位置が高い場合か、或は全然黒の布石である様な場合ならば黒は二十六以下の頂抑へを決定するのは不利である、其の故は左上の白の布石の位置が高ければ黒二十六以下の數着の交換として打つた白の形が堅固になつて兩者相俟つて白は利益を收める結果となり、隨て黒は白の利益を援けた事になる、

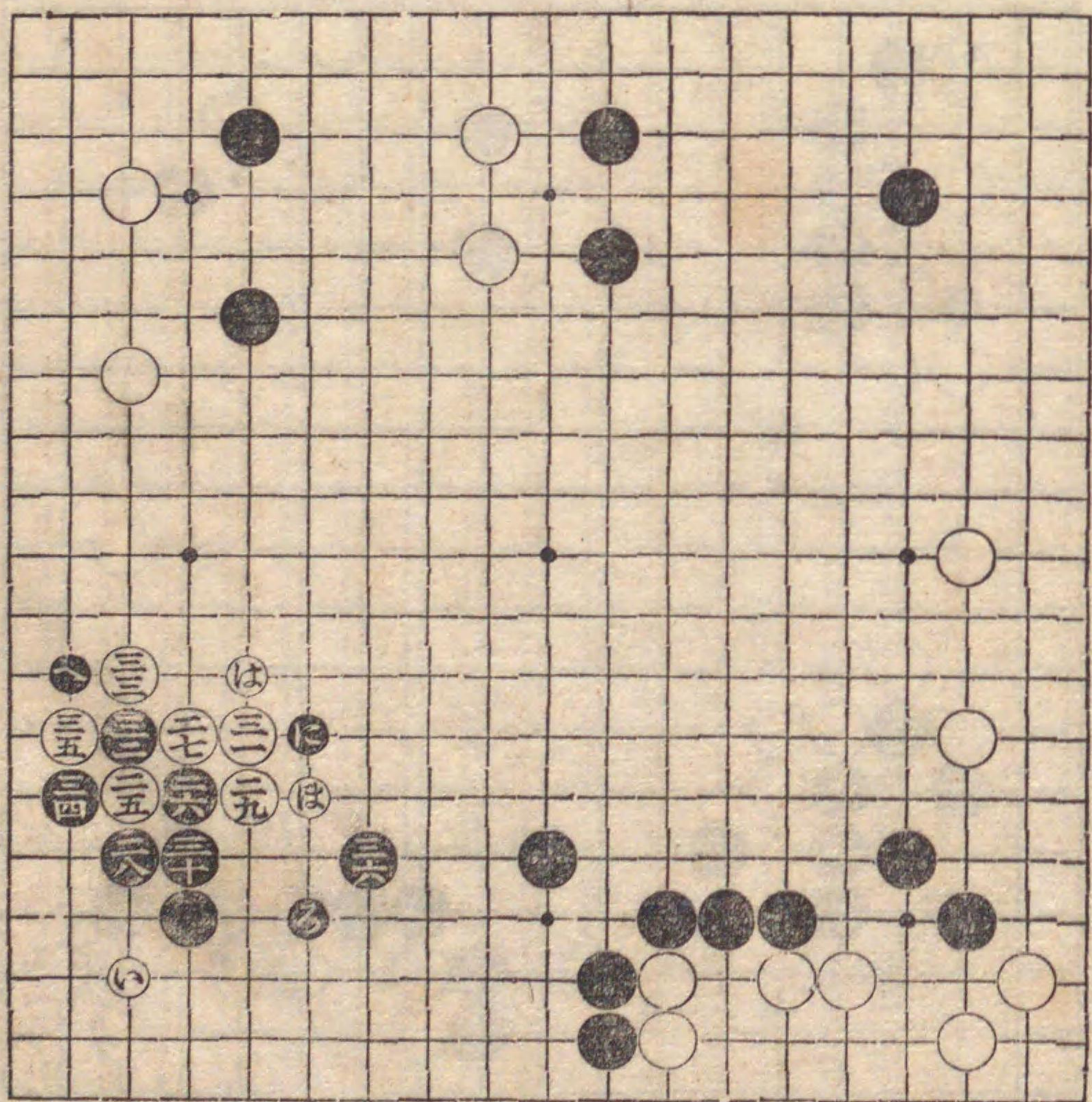
又反對に左上に黒の布石がある場合は、白二十五の一子は孤弱であるから、捨て、おけば白自身に何とか始末をしなければならぬ處である、其故黒が之に對して二十六以下の頂抑をする事は適以つて白の勢力増長を助ける様な譯になるから、黒が下側及隅に於て得る利益と相殺して一向感心せぬといふ道理になる。

乃て前頁の説を繰返すと白が二十五と來た時、黒は先づ左側及左上の布石關係を觀察して、若し白地へ打込む必要があり若くは打込み得らるゝ時であれば、黒は二十六の手で單に㊦と單關して其の打込の機會を覗つて居ればよい、之に反して打込む必要がないか或は打込の利かぬ際は本圖

の通り早く始末して自分の地を堅めるがよいのである。

白三十一の手で若し三十二の點を粘ぐと黒に三十一の點を截られ、白が㊦と押せば黒に㊧と行びられて黒下側が非常に厚壯になる、又其を恐れて㊨と立てば黒に㊩の點へ行びられて左側の白が非常な厄を蒙る惧がある何れにしても此の場合白は此く上を粘ぐより仕方はない。

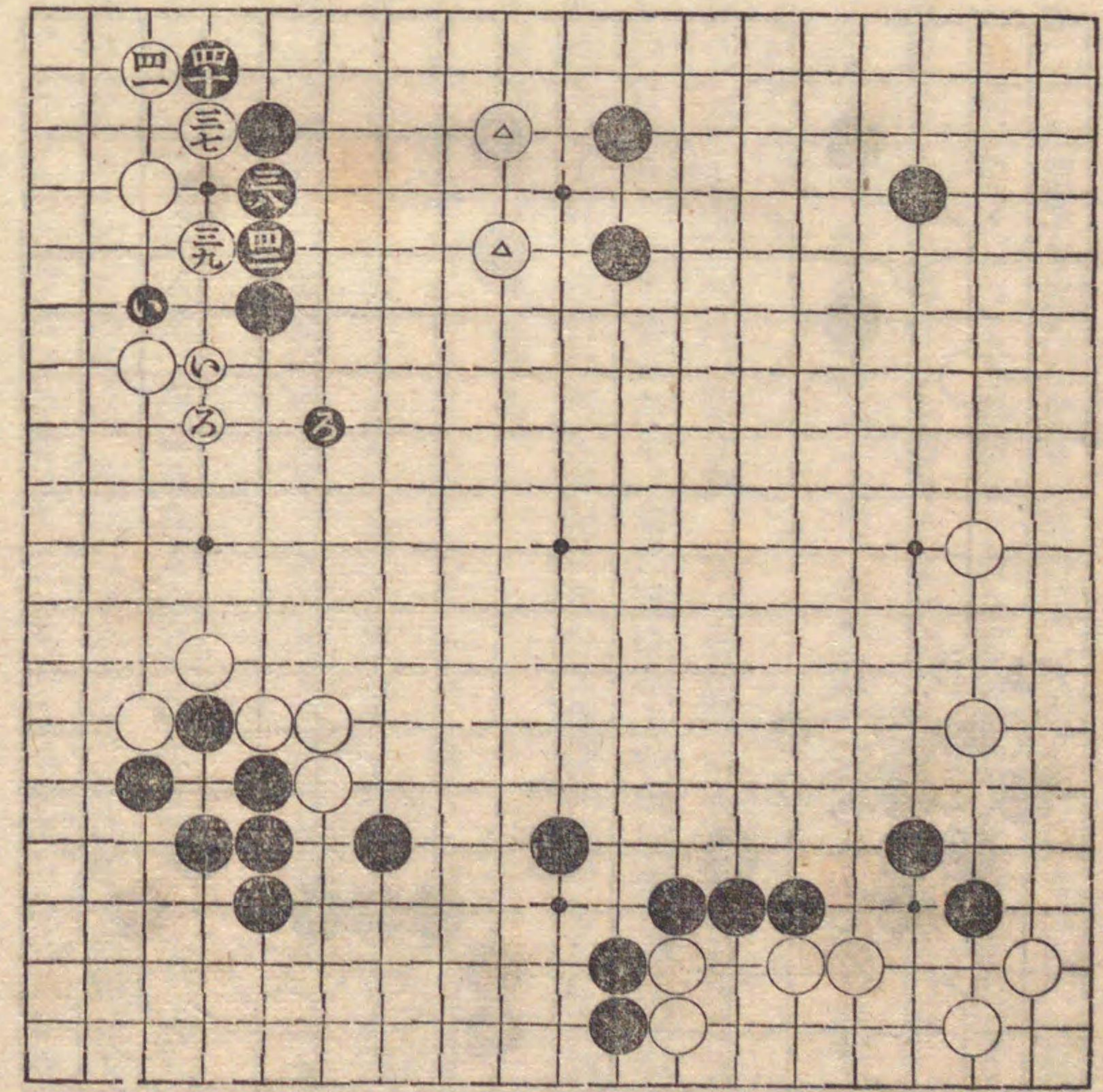
白三十五のアテは、黒に㊪と締出される手を豫防したのである。



白二十五より黒三十六迄再掲

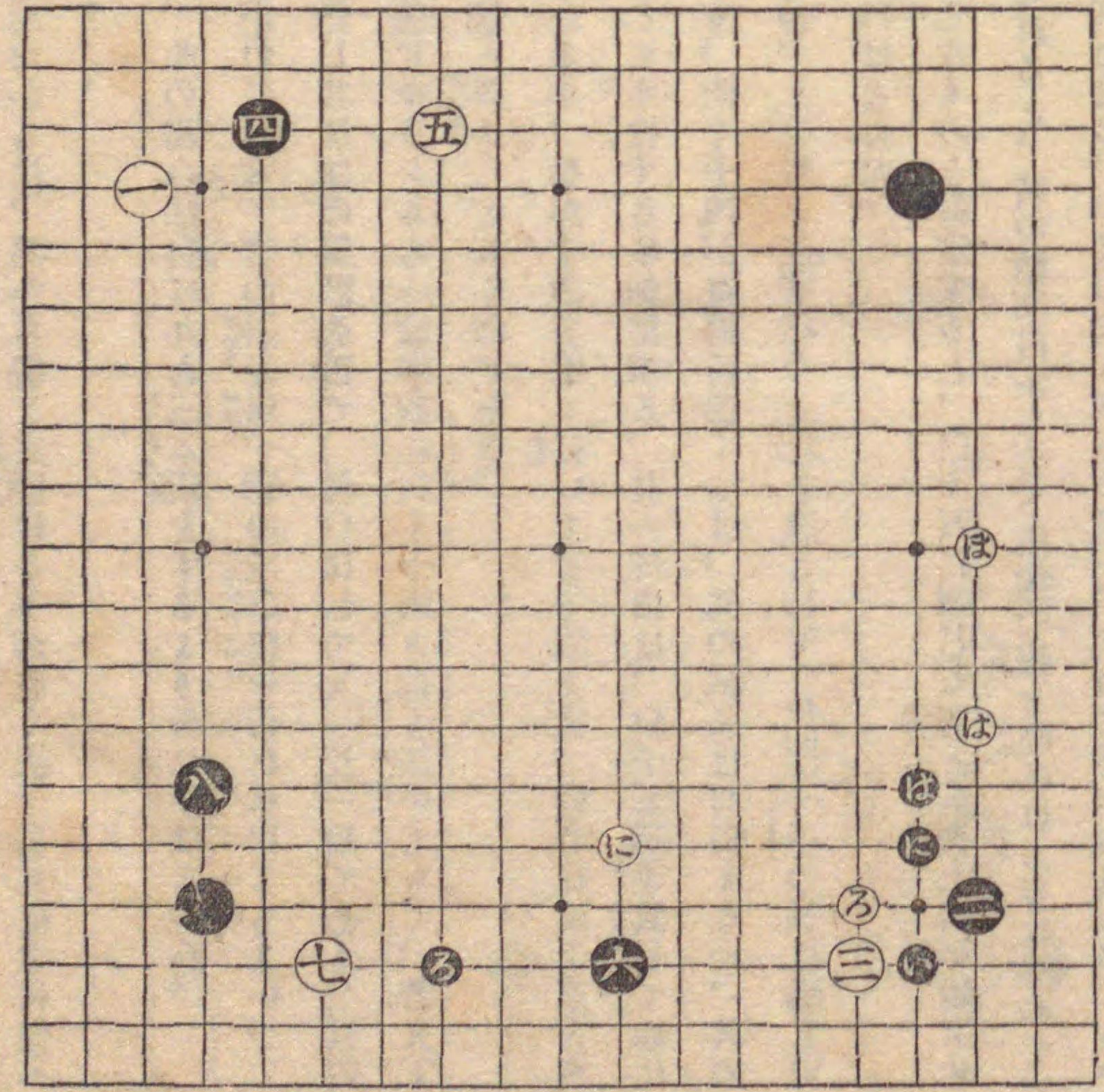
黒四十で四十二の處を粘ぎ、次
て白は●の頂越を拒いて○と尖
むが普通の應接であるが、本圖
の場合は白は四十三手目の手を
以つて四十の點に下られるから
黒は豫め此の白の下りを妨げて
四十と縛ねたのである。

「註」本圖で黒が四十の手を
四十二と打てば白はなぜ○と
打たぬかといふに、左下隅の
白が手堅くなつて居るから、
己の勢力の重複を嫌ふからで
ある、又黒はなぜ白に四十の
點に下られるのを嫌ふかとい
ふと白の子が四十へ來ると△
印白二子が大へん凌ぎよくな
つて随つて黒は不利を痛切に
感じる事になるからである。
本圖の後白が若し●の頂越を防
いで○と並んで來れば黒は●と
斜走しておくがよい。



二子第十六局

白が七と掛つたのは●の尖頂若
くは○の夾を豫想した手であ
る、即白の豫想通り黒が八の手
で●と尖頂け白○と立ち黒●と
煽れば白は○と冠して棋を六ヶ
敷しやう即ち紛らさうといふ手
である、若又黒が●と來ず○と
夾んで來れば、白は○と二間に
夾返し黒に●と尖ませて○と二
間に拓き、黒の勢力を一方に偏
重させやうといふ手になる、黒
八は白七の計の外に出たのであ
る、或は此の手を以つて○と斜
走しても、又は●と尖んでおい
てもよろ。



（局子二法石布）

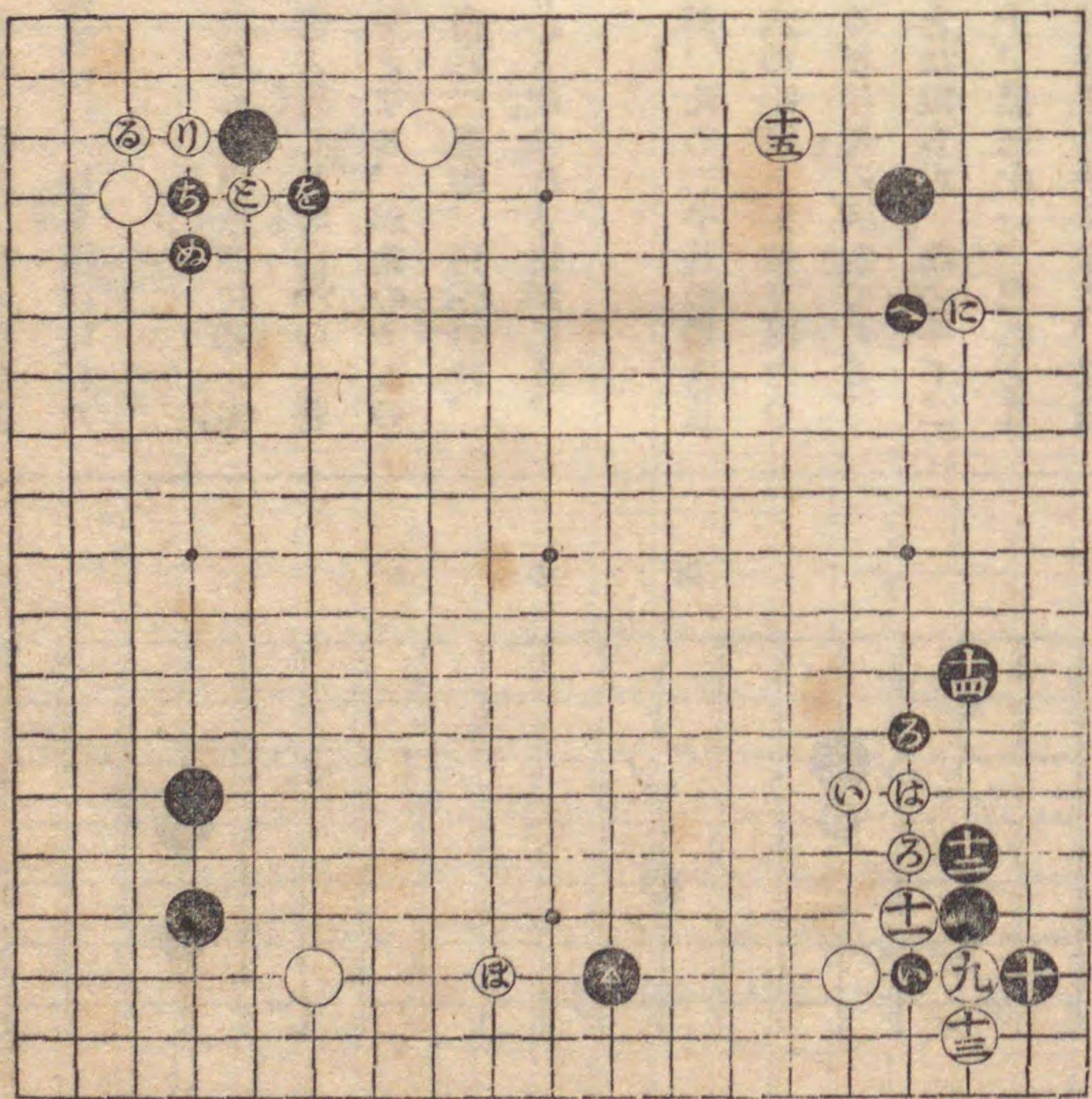
左下隅に此く一間飛の黒の勢力が出来たからは、黒から▲と尖頂ける手が利く故、白九は之に備へて此の隅に根據を固くしたのである。

△問 黒●の尖頂を防ぐ手としては、此の場合には白は九と三々頂をするより外に手はないか。
▲答 敢て此の手のみとは限らぬ、②の二間飛、③の斜走掛、④の大斜掛等何れに出てもよい。
黒十四は或は⑤と斜走してもよい、然し其は黒の策戦次第で、何れにしても一長一短である、其の策戦とは、黒が右上隅に利益關係を生じやうとおもへば本圖の如く十四と低く拓いておく、若又下側に利益關係を及ぼさうとおもへば⑥と斜走しておくのである。

「註」 右上隅の利益關係とは何であるか、黒が十四と低く拓いて居る以上は、假令白に十五と右上隅へ攻掛られても、黒は平然として手抜する事が出来る、其の理由は、白十五黒手抜して他に打ち、白が⑦と兩掛を打つて來ても、此く十四が堅固に低くては、其の結果は面白くない、其の代りに後に白⑧、黒⑨、白⑩、黒⑪、と手順を運ばれた上⑬と迫られて(△印)一子の黒は酷しい影響を受ける事を覺悟して居なければならぬ。
之に反して十四の黒手を⑫と斜走したものと假定すると、白十五に應じて何とか右上隅を始末せねばならぬ、若手抜して⑬と掛かれると、其の結果白から右下黒⑭の裾を覗はれる手になつて、白が利便を感じると同時に黒は不利を蒙る、が其の代り下側の黒一子は白に⑮から迫られても一

向平氣である、随つて白が⑮から攻める手は容易に行はれぬといふ道理になる、

尙黒が右下を十四の手で⑯と打つておけば、後に左上を白から⑰と頂けられた時、黒は⑱と緯込む事が出来るが、此の十四の二間拓ては其の緯込が利かぬ、即ち白⑲の時黒⑳へ緯込ば白に㉑から截られ、黒㉒と行び白㉓と粘いだ時、黒は㉔と打つても白㉕を征に提る事は出来ぬ。
白十五は黒に⑳と飛ばせて、㉖と頂けやうといふ手である。



(局子二法石布)

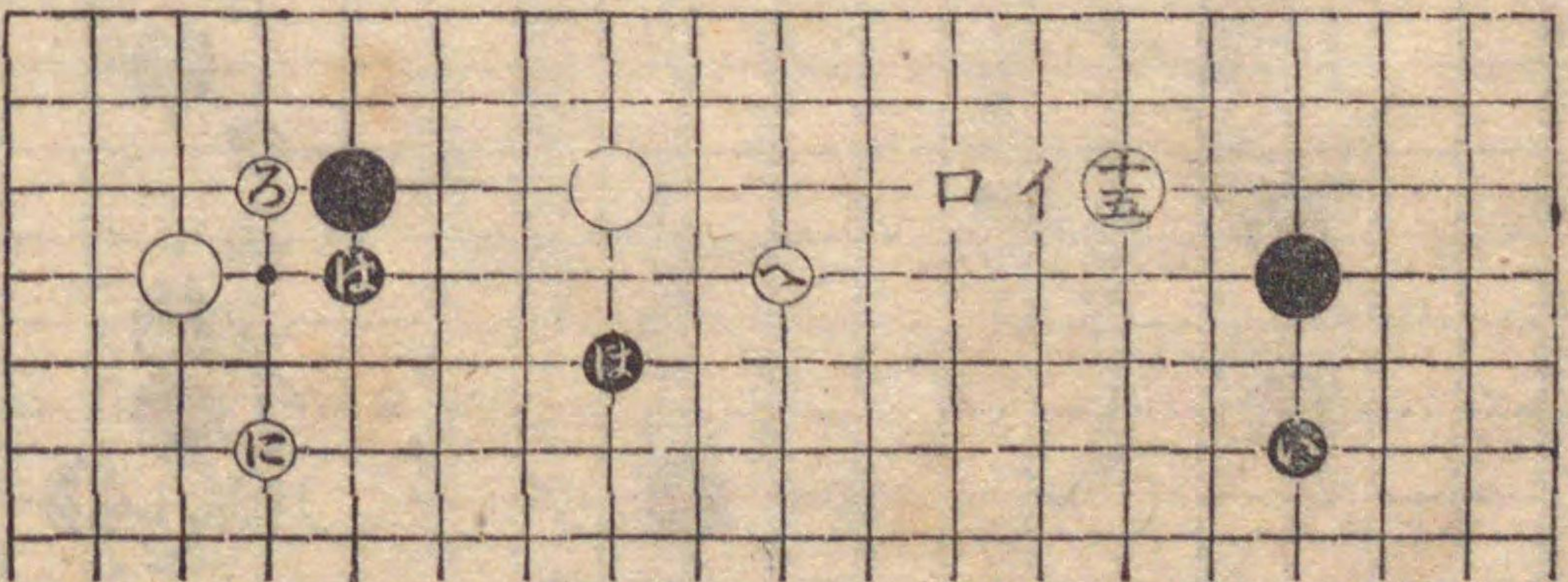
黒が十五と先づ一着の掛りを打つたのは、前頁に説いた左上の黒に頂ける手の外、尙下に示す『参考圖』の様な運びに打たうといふ意も含んでをる、

即ち白十五に應じて黒が⑤と單關したならば白は直に⑧と尖頂け、黒⑥と立ち、白⑦と煽り、黒⑧と冠した時白⑨の一着が十五の一子と相待つて極めて好姿勢となる、が此の十五の一手が打つてないと、白⑩、黒⑪、白⑫、黒⑬、白⑭の時、右上から黒に⑮の裾を(イ)若くは(ロ)と覗はれる惧がある。

(以上前第十五手の残説)

黒十六の夾返しは普通は面白くないが、此の二子碁の場合且は左下八(△印黒)の間飛と左上十六の距離とが遠く隔たつて居るため本圖の様が早く熟するだけ黒の利益である。又十六の手は必しも此く夾返すのみとは限らぬ、此の手で二十八へ頂け、白⑮、黒二十二、白三十、黒三十一、白⑯となれば黒は左側の⑲の裾に向つて⑳と侵撃する手になる、又白

(圖 考 参)

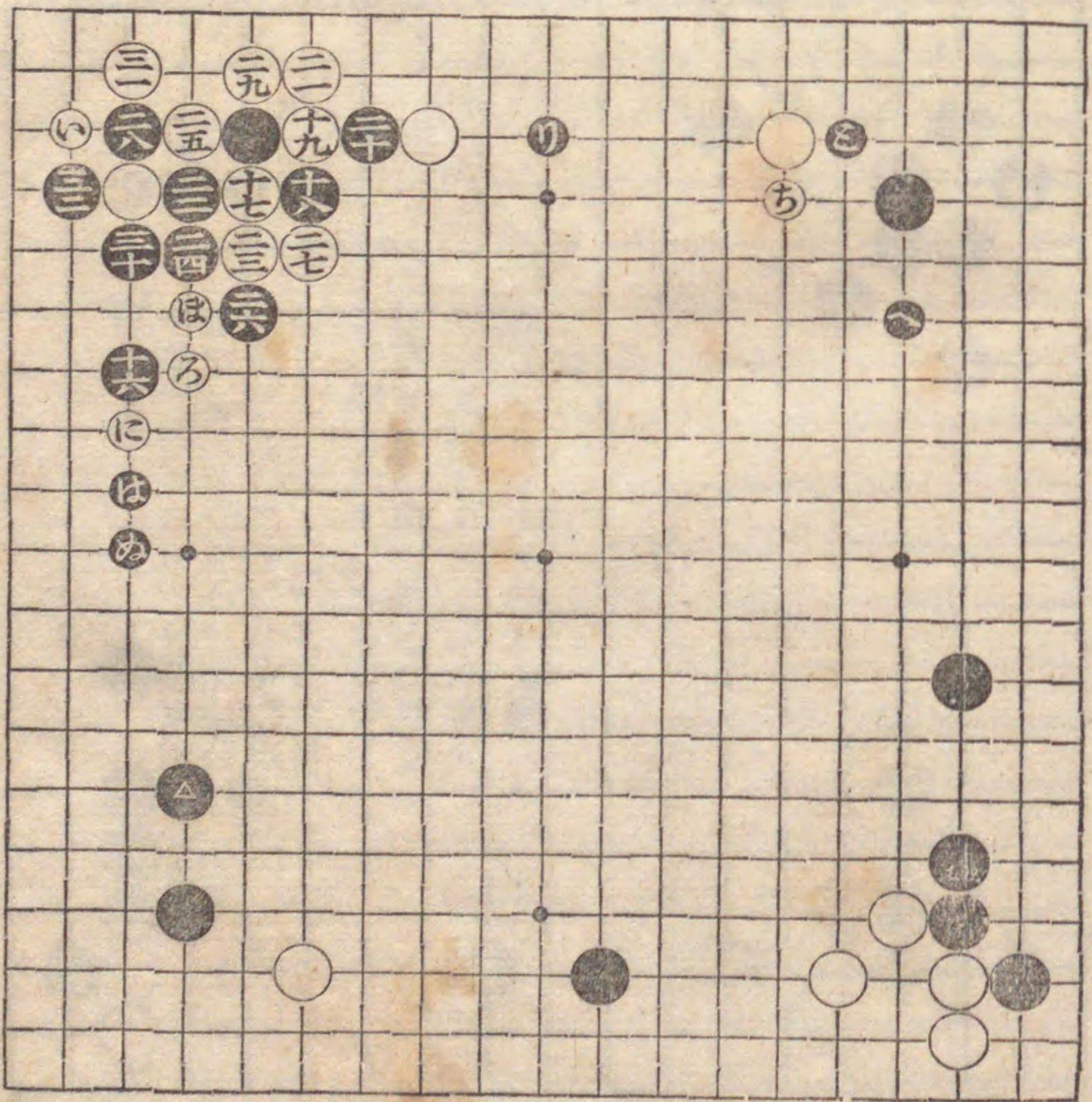


⑲と斜走せずして⑳と二間に拓けば、黒は二十四と押し、白㉑、黒二十六、白㉒と運んでおいて㉓と右上を單關する手順にもなるのである。

「註」此の時の黒⑳は次で㉑と尖頂け白を㉒と立たしておいて㉓と酷しく打込まうといふ手を覗つてをる。

白若し十七の手を二十四に尖めば、黒は星下に㉔と二間拓きの普通の應接に出てよ。

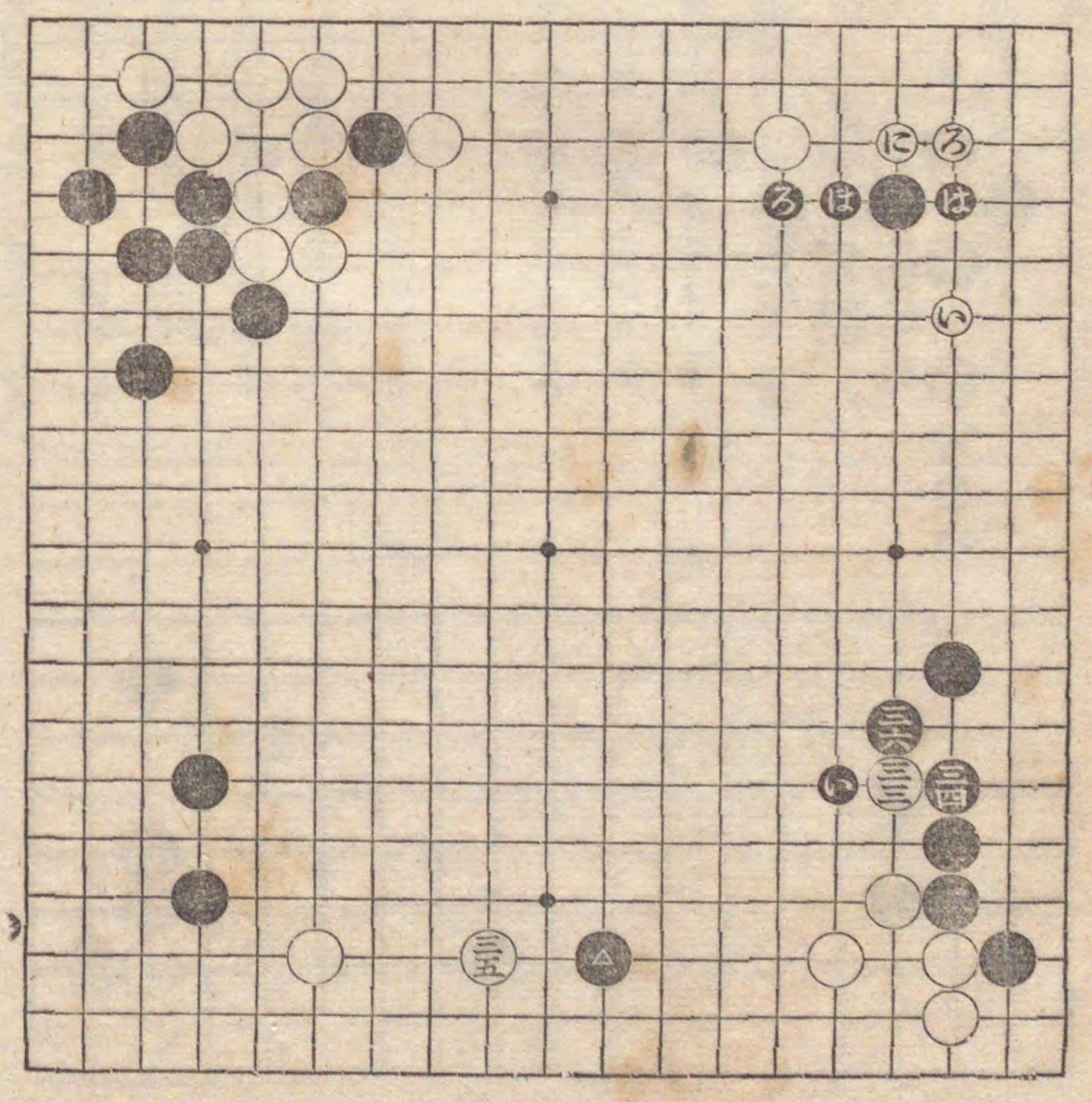
「註」黒十八から三十二迄は互先定石二間夾の部を参照せらるゝとよろし。



(局 子 二 法 石 布)

白三十三の一着は黒の缺點に乗じて其の「ハタラク」を妨げた手である、何故なれば、若し此の手を打たずに單に三十五から迫れば黒に●と斜走せられるからである、黒三十六は此の處に勢力を加へて下側△印黒一子を援け、且つ暗に右上隅へ聲援を與へた手である。

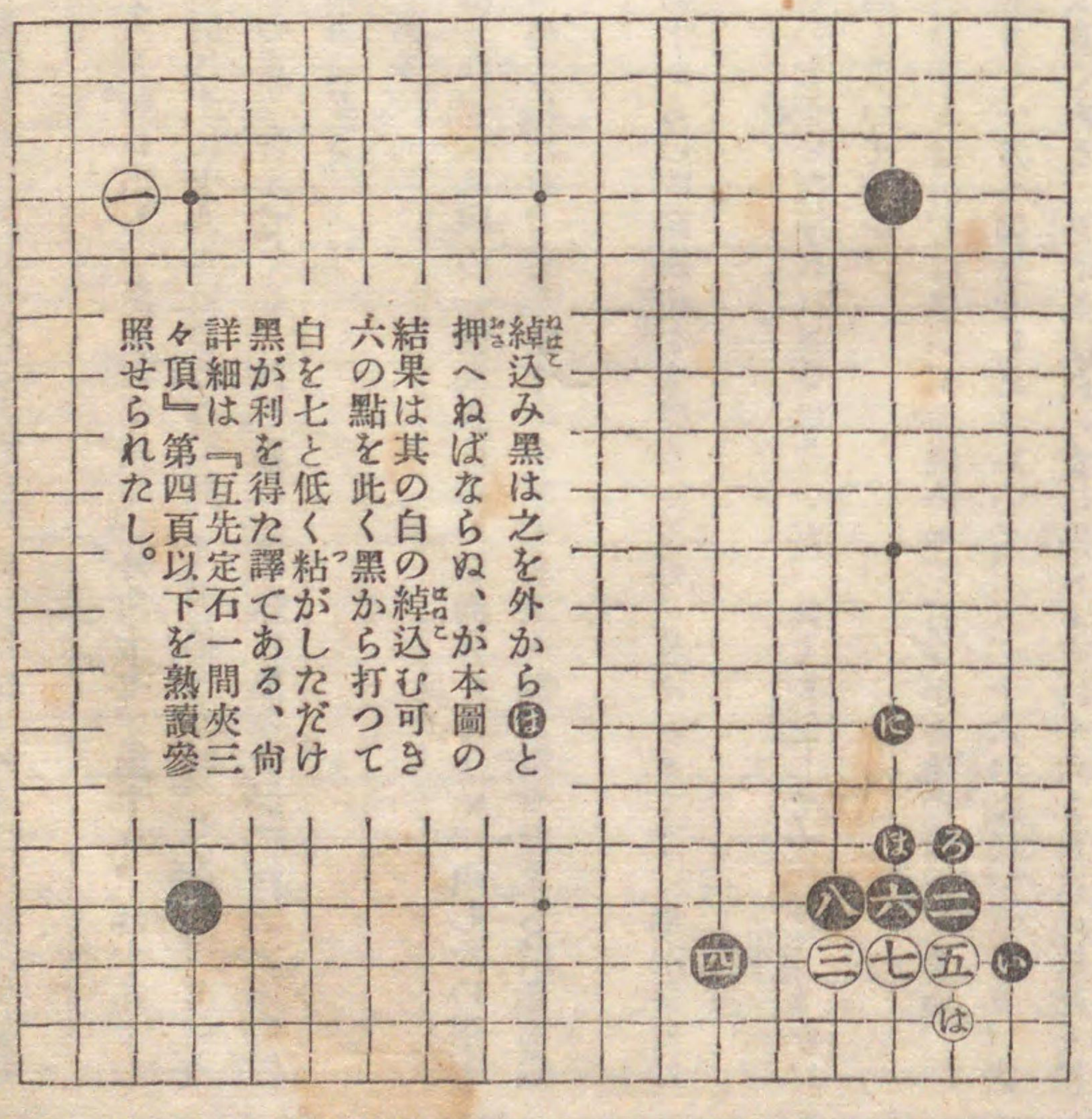
「註」 次の白手即第三十七の手を想像すると先づ右上に着手するであらう、即ち白○と來れば黒●と頂けるがよい、若又白○と來ず●と三々を犯せば●の方から押へ白○の時●と塗つて此の右側を益々手厚くするがよい。



二子第十七局

白に五と頂けられた時、黒●と縛ね、白六へ膨らみ、黒●白○●●となる普通定石に出で、敢て差間はないが、本圖の如く直に六と行びて八と上から塗りつけるが最良の着手である。

「註」 最初黒が四と一間夾に急に迫つたのは白が手を抜けば直に八と頂けやうといふ手であるが若し白手抜して黒から八の點へ頂けられた時、本圖の如き（左上に黒の布石のない）場合は、白は六の點へ



縛込み黒は之を外から●と押へねばならぬ、が本圖の結果は其の白の縛込み可き六の點を此く黒から打つて白を七と低く粘がしただけ黒が利を得た譯である、尙詳細は「互先定石一間夾三々頂」第四頁以下を熟讀參照せられたし。

（局子二法石布）

白九は大切な場所である、若し此の要點を黒に占められると右側一帯に動かす可らざる黒の大模様が出来て、局面が極めて狭くなる。

「註」 尙此の九の一子は、後に(イ)と縛ね出し、黒十六に截つた時白十七、黒十八、白十九の縛粘を打つか、或は(イ)と縛ね出さずに十六と衝き當つて黒(イ)と抑へた時(ロ)と截つて此の九の一子の勢力を其に利かさうとの意も含んでをる、其て若し九の點に黒の子が來れば上述の縛出したたり截つたりする手は利かぬ事になる。

黒十の掛は此の場合に於ける大場である。

白十一の夾は此く二間とのみには限らぬ、或は㊸の一間夾或は㊹の三間夾でもよい、但し此の手を以つて右上の勢子に向つて㊺と掛る事は出来ぬ、若し白十一の手で右上へ㊻と掛つたならば忽ち黒に㊼と三間夾にされる。

「註」 ㊼の三間夾は左上(目外)黒十からの四間廣拓をも兼ねた手で、黒にとりては一舉兩得の好點である。

黒十二は白より(ハ)と尖頂けられるのを拒いだ手には違ひはないが、此く夾返して十四とふりかはり側面に拓く結果は局面が紛れが無くなつて善い。

白十三の尖は(ニ)と黒十二の肩へ打つ手もないが無いが本圖の如く打つが普通の着手である。

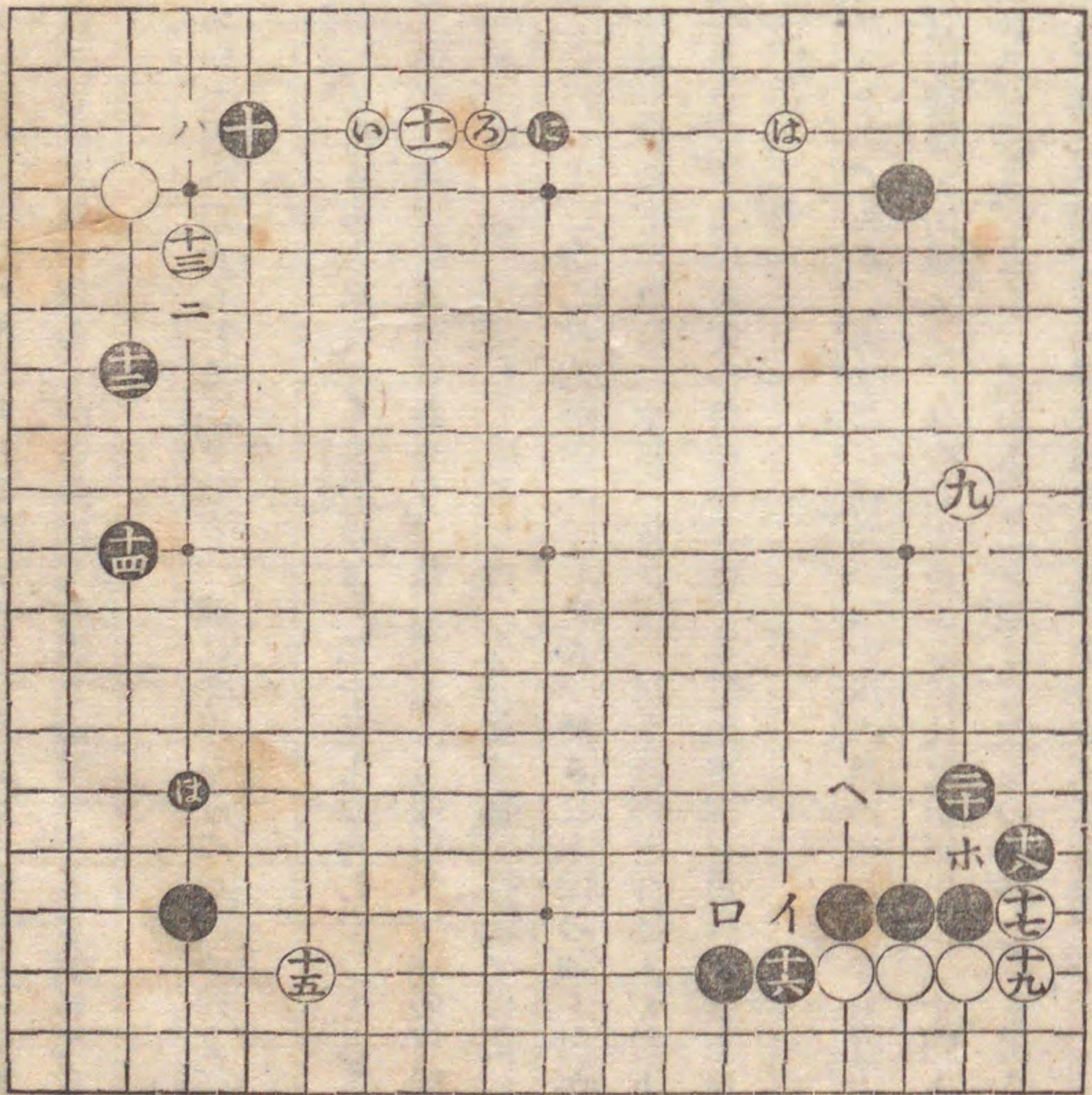
白十五は黒を㊽と一間飛させ彼の勢力を一方へ偏重せしめておいて、次で十六の點に衝き當り、黒(イ)と抑へた時(ロ)と截らうといふ意である、乃て黒は白の意に陥らず直に十六と自己の缺點を補

うて隅の白に迫つたのである。

「註」 左上に黒十二の一子が加はつた後は白が右下を直に(イ)と縛出す手は征の關係上出来ない事となつたのである、乃て十六と衝當つて(ロ)と截る策より仕方はない。

黒二十の掛粘は大切である、若之を手抜すると白に(ホ)と截られる手もあれば、又二十の點から覗いて來られ、黒(ホ)の點を粘いだ時(ヘ)と飛ばれる手も出來る、即ち此く二十と掛粘いだのは自ら衛ると同時に暗に右側白九に迫つて居るのである。

「註」 黒十六の時白手抜すると黒に十七の點へ下られて隅の白は死滅せねばならぬ。



（局子二法石布）

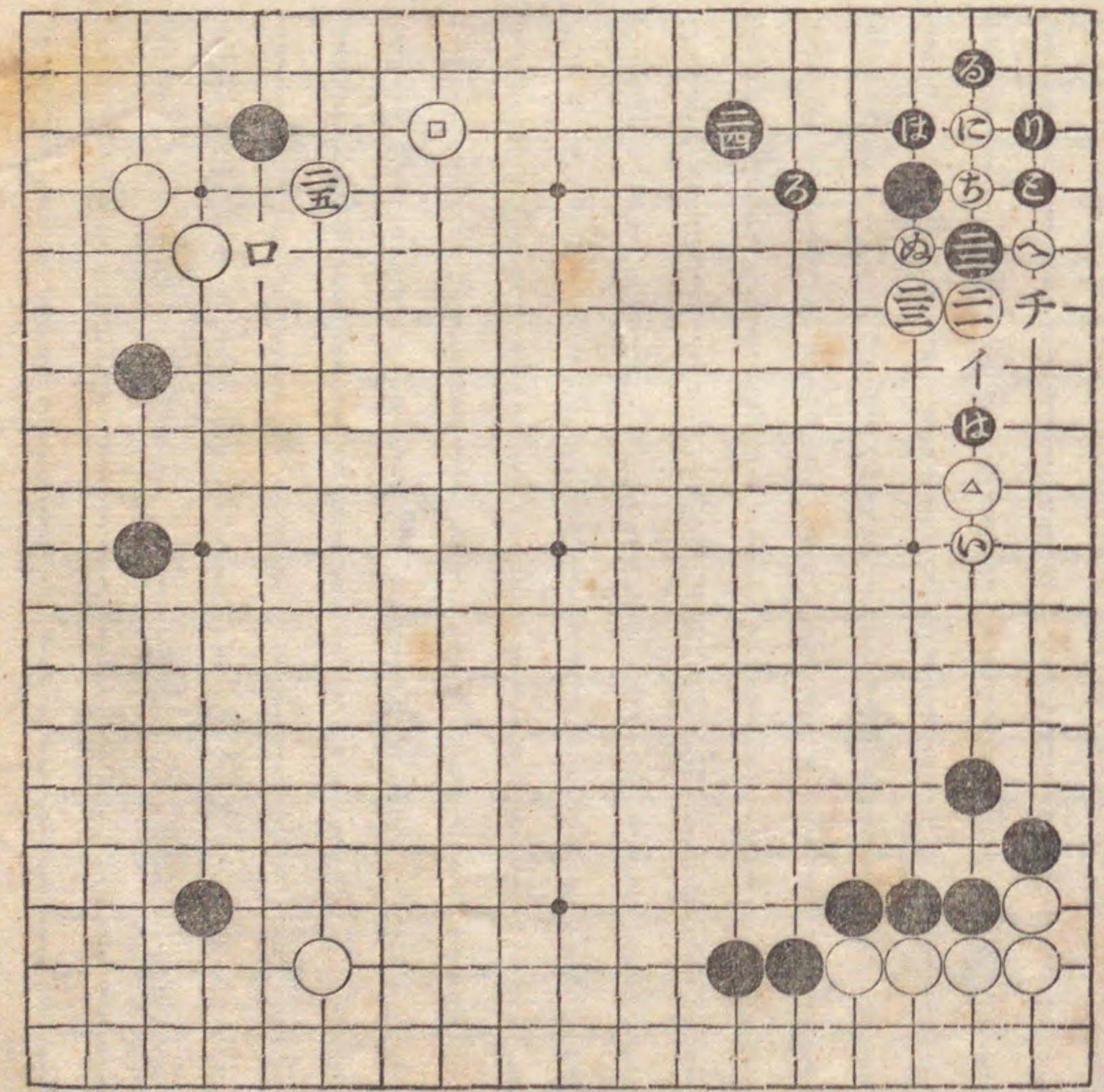
白二十一には已に前圖黒十六以下二十迄の應接で右下の黒が非常に堅固になつた爲め、若し此の處を手抜すると、黒から(イ)と大斜走に詰められ不利の形勢を醸さねばならぬから其の凌ぎを兼ねて右上の黒に迫つたのである。

黒二十二は、白の勢力を重複させておいて隅へ迫まられる手を防ぎ、茲に先手を取つて二十四と拓いたのである。

「註」 白の二十一が△印からの二間拓であるから黒は此く尖頂け白を二十三と立たしたのである事は已に説明する迄もなく從來の講義で了解される事であらう、是が若し(△印白が)⊙の三間拓であれば、黒は二十二と尖頂ける手で單に⊙と單關して居るであらう、其は⊙の打込を保留してよく手であつて、尖頂けて廿三と立たしては⊙の打込が消えてしまふ、然るに本圖の如く白が二間拓て手堅い時、黒が二十二の尖頂を打たずに單に二十四へ拓けば、白から⊙と打込んで右上の地を蹂躪されるかも知れぬ、乃て此の二十二は右側の白に多少勢力重複の不利を與へて右上自己の地域への防禦を幾分講じた手である。

白二十五は二十四の黒の一着から導かれた手である、何故なれば此の二十四の黒の來ぬ前ならば上側一子の白は何時でも右上方面へ任意の發展が出来るから少しも憂ふる處はないが此く二十四と打たれた上は右上への發展を阻害されるばかりでなく、黒から(ロ)と頂けて左上の一子を動き出された時は左上の白地が消えるのみならず爲に上側□印一子は孤立の厄に逢はねばならぬ。

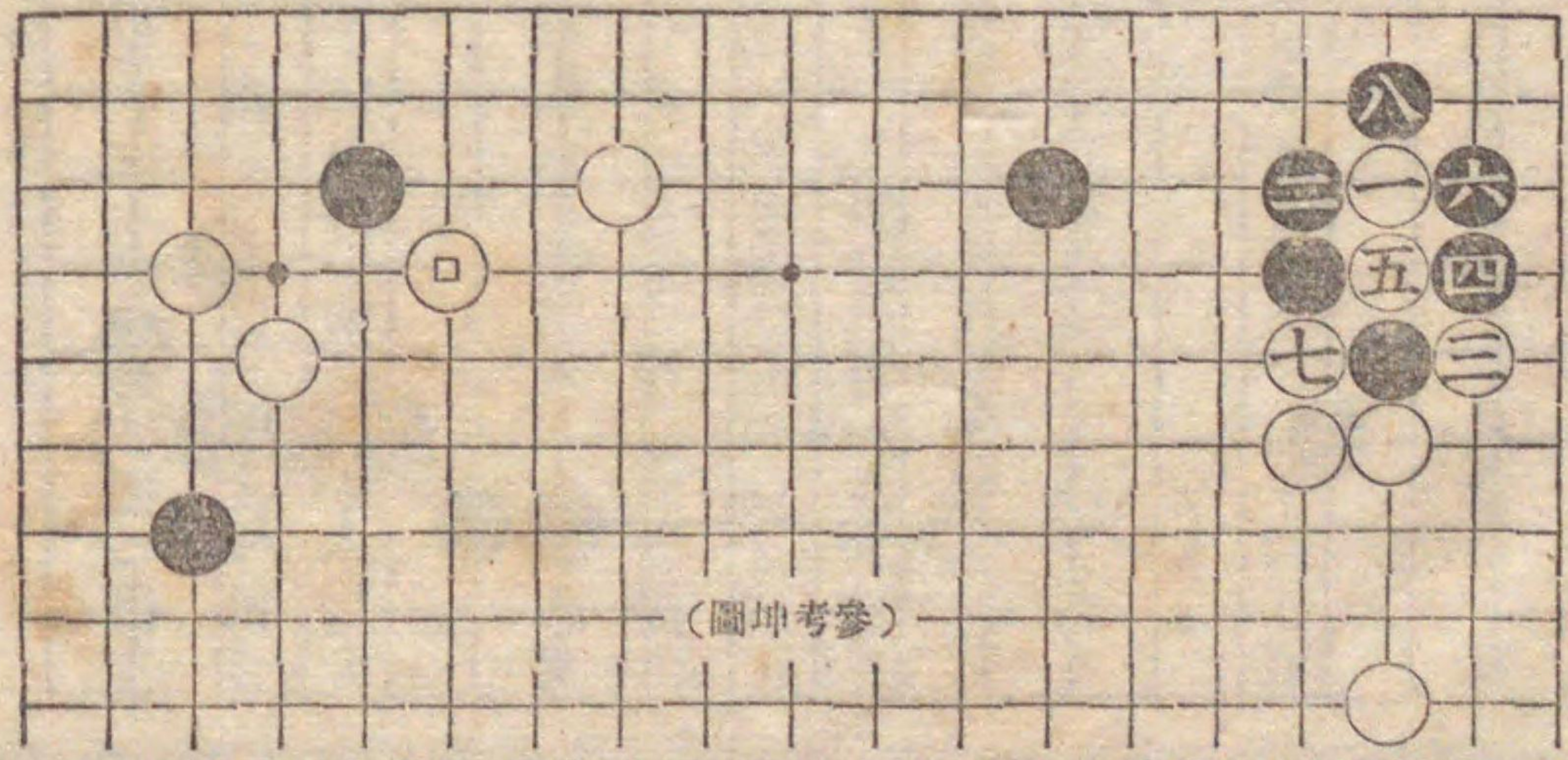
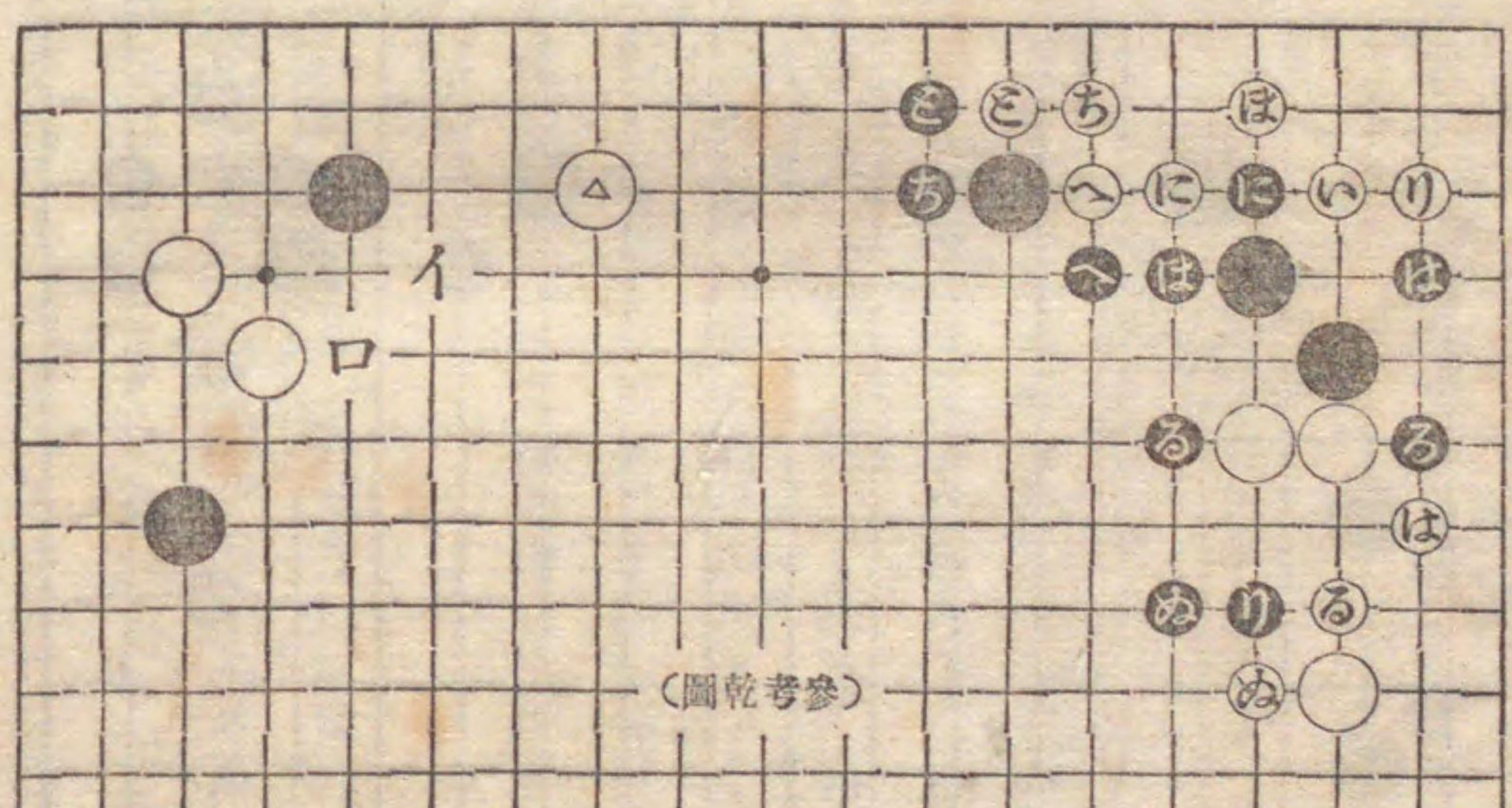
即ち此の二十五の一着は左上の黒一子の出路を鎖して、□印白一子に勢力を加へた、と同時に暗に右上へ⊙と打込む形勢を生じたのである。
□問、白二十五の一子が右上黒地へ打込む手に及ぼす關係を詳細に示されし。
○答、白二十五のない前ならば白が右上隅へ⊙と打込んだ時黒は⊙若くは(チ)と打つて白の盤を妨げ、隅に活かすの方針に出る、然るに此く左上へ二十五と白の勢力が加はつた後は、白⊙の打込に對し、黒は⊙から抑へ白⊙黒⊙白⊙黒⊙白⊙黒⊙と盤らして終ふてあらう。



(局子二法石布)

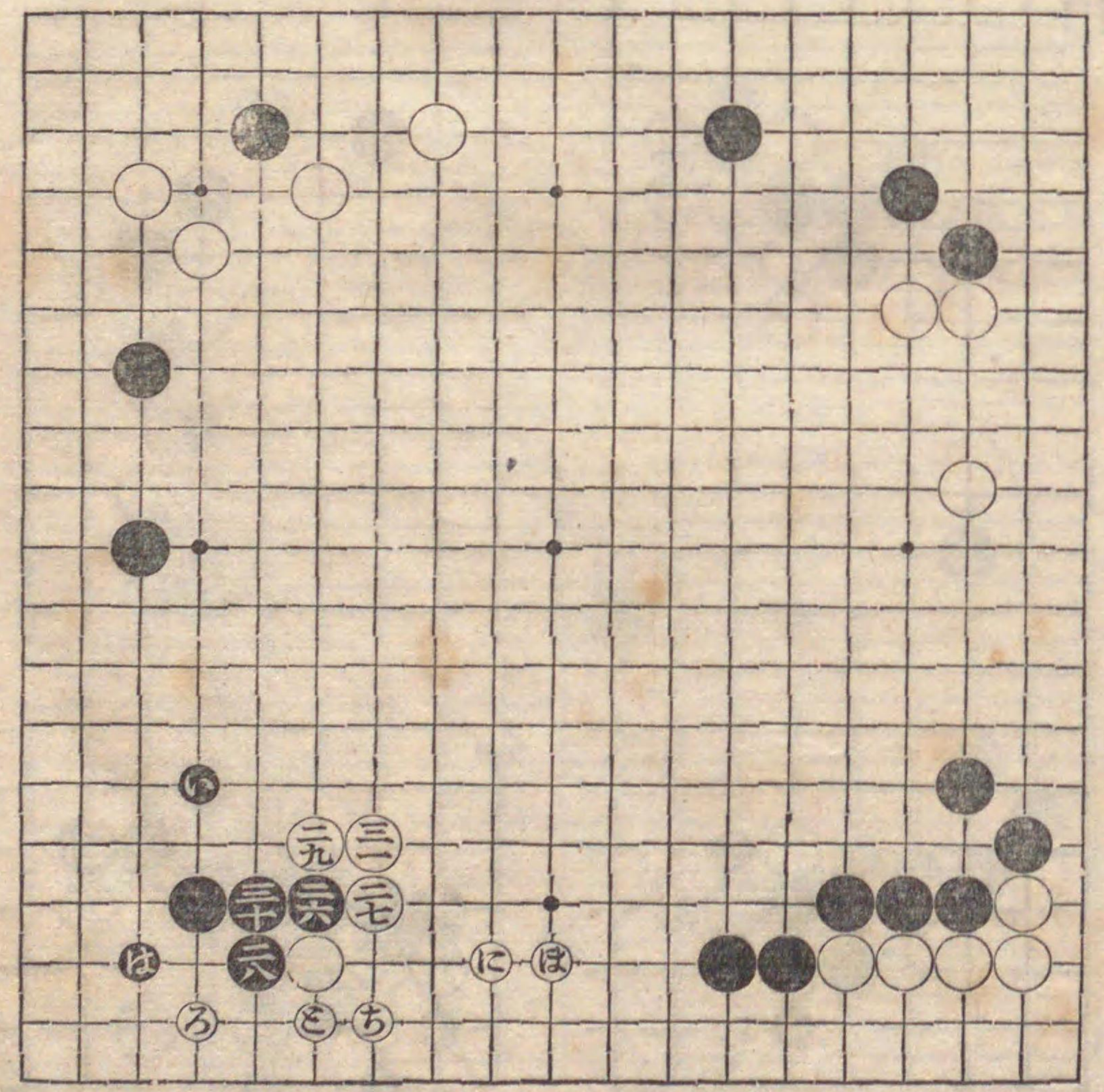
尖鋒リ内
打込の極手

「註」『乾圖』を以つて示す左上(イ)の點に白の圍ひの出來ぬ間は上側△印一子の白が孤弱である、乃て白(イ)の打込に對して黒は(ロ)若くは(ハ)と打つて白(イ)の盤りを妨げ隅に活かず方針を採る、白は假に白(イ)黒(ロ)白(ハ)黒(ニ)白(ヒ)黒(ヘ)白(ホ)黒(ヘ)白(ト)黒(チ)白(リ)黒(ニ)白(ヒ)黒(ヘ)白(ト)黒(チ)白(リ)の後此の白は二間に拓かねば眼はない拓けば左上を(ロ)と頂け出られる、(イ)に掩へば一間に詰められる。
然るに『坤圖』の様に左上に□印一子が加はれば、打込んで來た白を隅に活かしても其の影響として利を見る事は出來ぬ、其故二と押へ三、五、七、と盤らして八と打つた結果右側の白も治るが、其以上に右上の黒は安全の地に就く事になる。



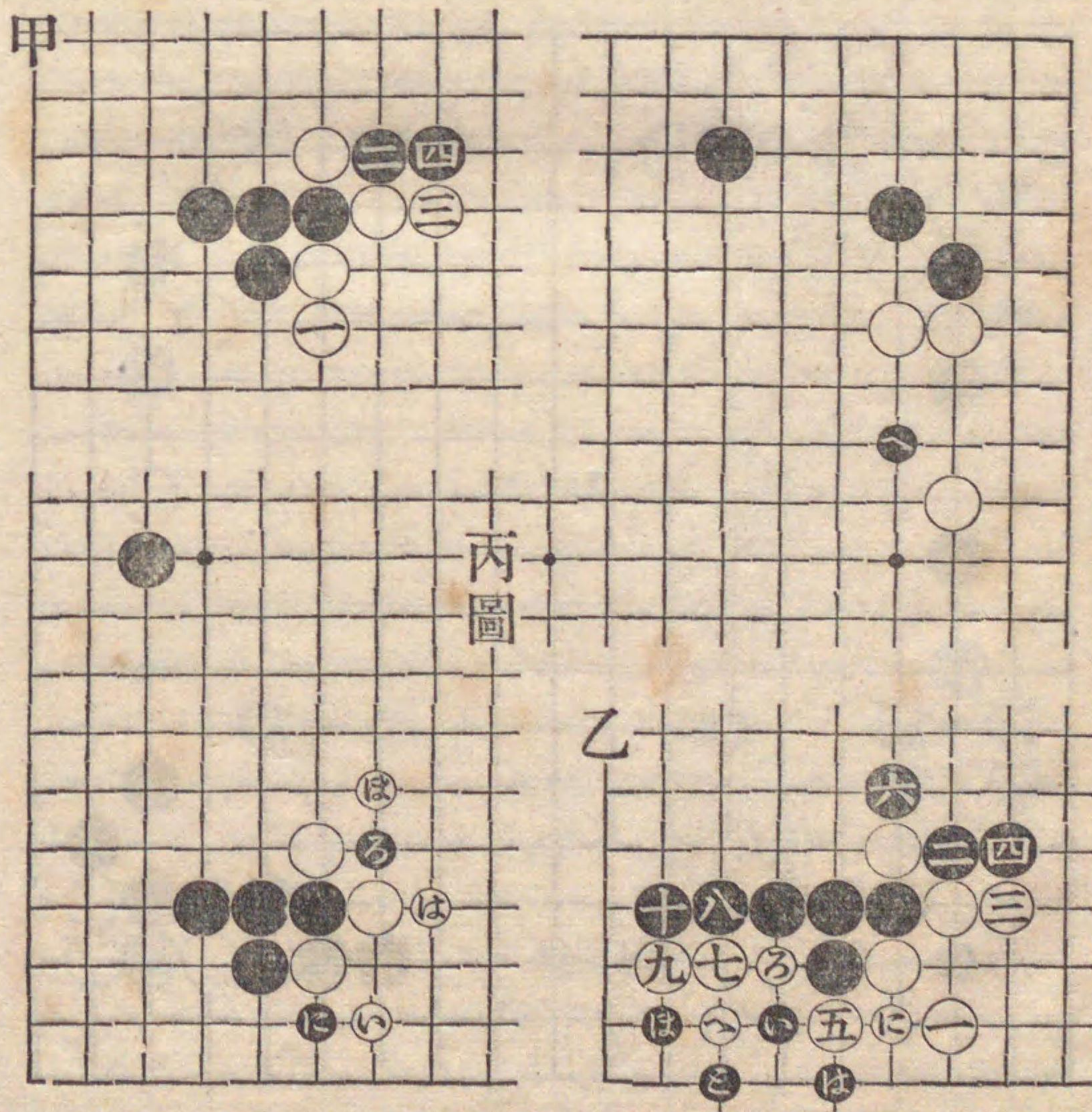
(布二子、三十九)

黒二十六の頂はハタラクキのあ
る着手である、若し此の着手で單
に(イ)と單關すれば白に(ロ)へ走ら
れ黒(ハ)と應じた時白(ニ)へ二間拓
される手順になる、若又黒が(イ)
と飛ぶ前に廿八へ尖頂け白を廿
六と立たして後(イ)へ飛べば白は
⑬へ三間拓する結果になつて、
何れにしても白は苦しまずして
相當の地域を占める事になる。
「註」白三十一の粘は(イ)と下
へ下るか、又は(ロ)と尖むか、
白の策戰次第で如何來るか判
らぬ、が其の時の黒の應手は
次頁に參考圖を以て示さう。



(局子二法石布)

前白三十一の手を以つて
 ▲(甲圖)の如く一と下れば黒は上を二と截り白三と行びれば黒亦沿うて四と行びるのである。又▲(乙)の如く一と下を尖めば黒は尙且二と上を截る白三黒四の後白が五と縛ねれば黒は關せず六と捕る、次て白七と隅へ走り黒八白九黒十の後、黒からは●と縛出し符號の順に運んで劫とする味が残る。
 若又▲(丙圖)の如く白①と尖み黒②と截り白③の時黒は④とアテるもよい、次て白が⑤と征にかけた時右上側に向つて黒から●と征待の猛烈な手を下すのも極めて痛快な事である。
 要するに白は三十一の點を黒に截られる事となれば不利を免れぬのである。



黒三十二は實利を先にした着手である。

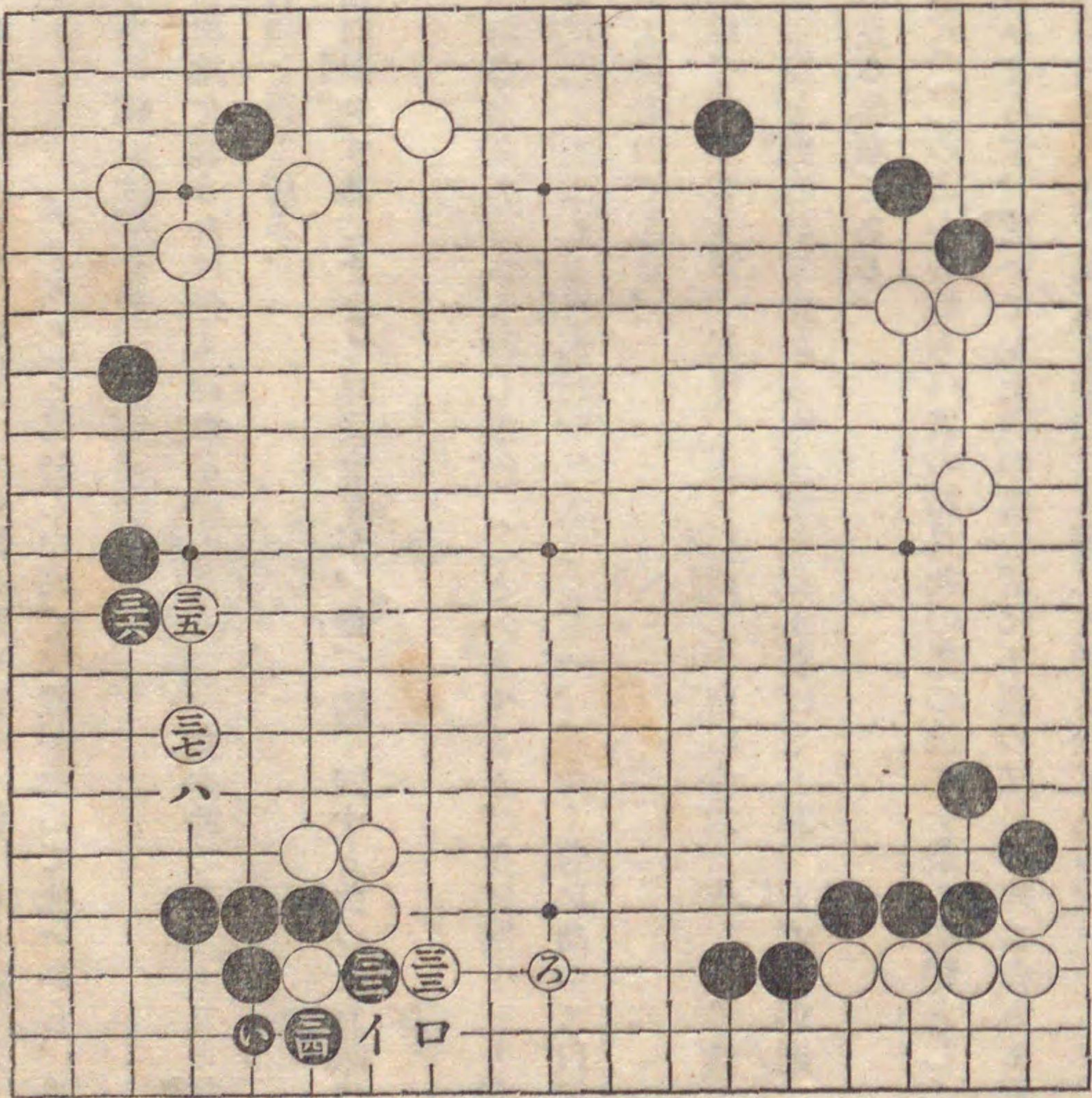
□問、此の手で黒が卅七へ打たば白は如何應じますか。

○答、白は卅四の點へ下りて隅を覗ひ黒之に應じて●と押し、た時白は星下●に拓く位のものであらう。

白若し三十五の手で(イ)にアテれば黒は三十七に二間飛して居て良し。

□問、白三十五の手を(ハ)と打つて來たならば如何ですか。

○答、黒は之に關せず(ロ)と下側を縛ねて居ればよい、(ハ)の一子は左側二間拓の黒に響かぬから緩い。



~~~~~(局 子 二 法 石 布)~~~~~



黒が三十八の手で若し⑤と縛込み、白⑥とアテた時、黒三十九の點に粘いだならば、白は⑦とアテるがよい、其の結果たとひ黒が左側から左下へ(イ)(ロ)と連絡した處で位置が極めて低いから、さしたる事はない、之に反して白は中央に稍大模様を造る事が出来る。

黒が三十八を此く下側に轉じて白の根據を奪うたは最も確かな手であるが、白が此の時三十九と抑へ込んで此の黒に迫つたのも甚だ要領を得て居る。

□問、黒四十と曲る手で、(ハ)の邊に斜走するのをよく見受ますが、茲て此く四十と曲つた意味は如何ですか。

○答、此の場合は上下に優秀なる白の勢力があるから若し黒が(ハ)と斜走すると、白に四十三と飛ばれ、何時迄も(ニ)の邊に白から缺點を視はれる味が残つて良くない、て此く急に曲つて白に接觸して治りをつけて終はうといふ策なのである。

白若し四十三の手で四十四の點に縛ねて來たならば、黒は(ホ)と縛返し、白四十六、黒(ヘ)の時白は四十五の點に粘がねば黒に四十三の點を截られて少からぬ不利を招かねばならぬ、乃て白が四五の點に粘いだ時、黒は左上を⑧と走る手順である。

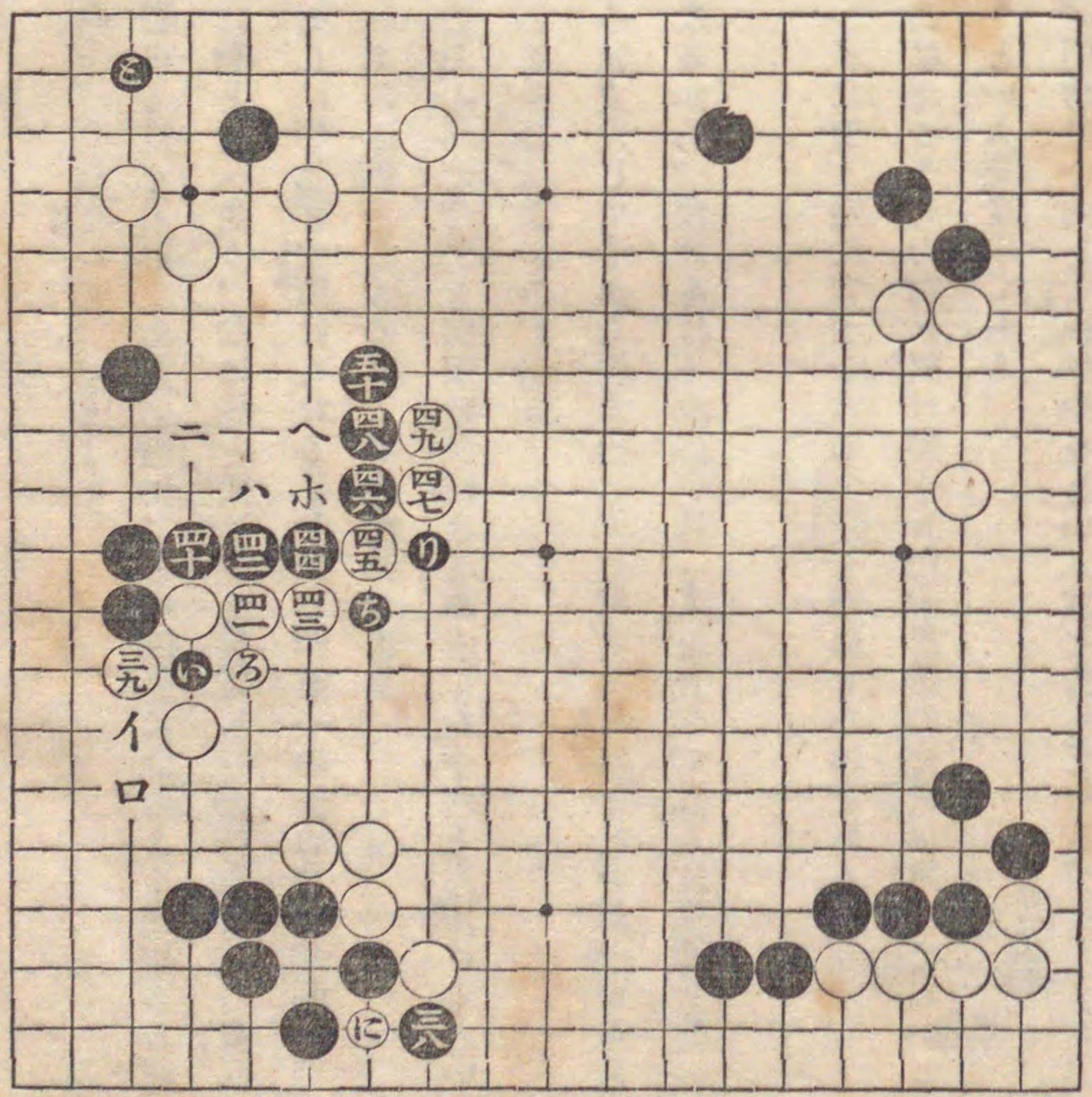
黒若し四十四の手を手拔すると、白に(ヘ)の邊から迫られ其の結果此の黒の迫害を蒙る影響として中央方面に白の大模様を造らせるのみならず、惹いて左上隅の黒の活に不利の結果を來さぬとも言へぬ、其故四十四と押し四十六と縛ね四十八と何處迄も辛抱して應じて居るのである。

(布二子、四十二)

(布二子、四十三)

黒五十と此く上側に向つて一步進んでゆくのは左上隅の我が活味を確實ならしめると同時に⑨若くは⑩の截をも視らひ兼ねて遙に右上隅と相呼應して、白が中央に大模様を造らうとする策に對戦するのである。

「註」本圖⑨若くは⑩の點の截といふ事は只味が存して居るといふだけで固より急な問題ではない、之に比すると前説にある四十三の手で四十四四十六と二段縛でもした場合と假定すると四十三の點の截は頗る急を感するのである。



(局子二法石布)



二子第十八局

黒六は直ちに⑤と夾返し、白⑥の時⑦と二間に拓いて居てもよい。

「註」此の二間夾返しは今迄の布石にも往々用ゐてあるが殊に二子の場合に最もよく應用される可き定石である、乃ち手が緩めば直に⑧と隅へ走り、白に⑨と掛けさせ⑩押し白⑪の時白五の脇へ⑫と打つ手順である。畢竟此の夾返しは(イ)と尖頂けられる手を拒くが第一の目的なのである、そして局面が早くさまりがつくといふのは黒としての第二の副産物である。

但し本圖の如く同姿勢に出て、白若し七の手で(イ)と尖頂ければ我も亦右下を十六と尖頂けるといふ打方に出ても黒の立場としては決して差間はないのである。

黒八の手で十六の點に尖頂け白を二十に立たして十から煽る例の手に出ても差間はないが、すると次に、白に⑬と冠されて局面が急になるから、黒はやはり本圖の通り八と立つて徐ろに準備を整へる方がよい。

白九は先づ玆に根據を造つて黒六の一子に迫り暗に右下十六の尖頂を豫防したのである。

此の時黒若し十の手を手拔すれば、白は先づ十九の點に掛け黒十五白十黒⑭の交換を遂げておいて次に⑮から黒六の一子を攻め立てやうといふ策なのである。

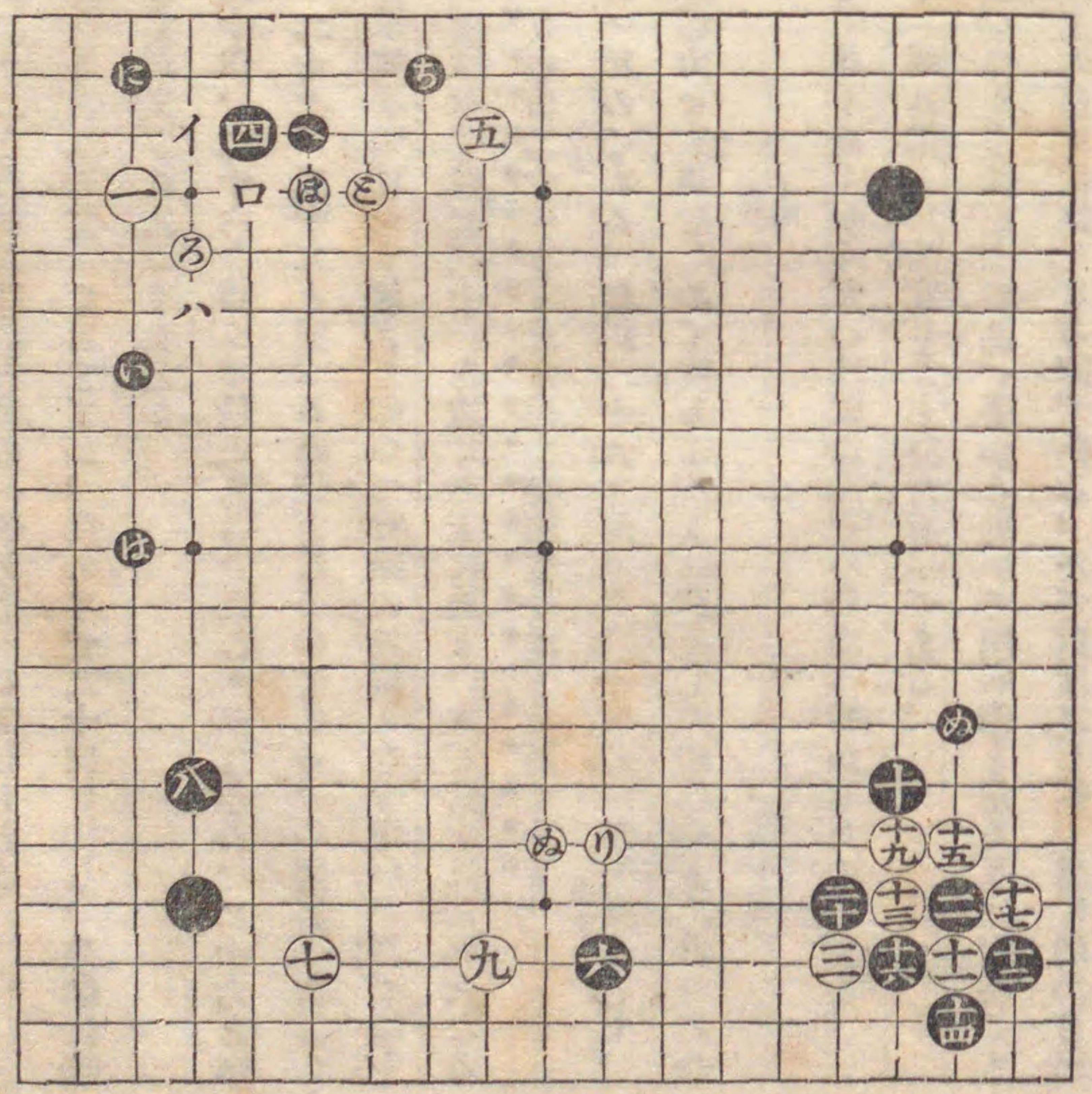
黒十は白から十九に掛けられるを妨げ同時に十六と尖頂けやうといふ意を含んでをる。

(布二子、四十四)

(布二子、四十五)  
(黒十八粘)

白十一の手は左上黒四に向つて(イ)と尖頂け、黒を(ロ)と立たして(ハ)と煽る例の手に出てもよいのである。  
黒十四の手で十五の點に行びても敢て悪くはないが、本圖の様に振替つて打つ方が早く決りがついてよいのである、若し此の十四の手を普通十五へ行びれば、白は此の處を手抜して、左上黒四に迫つて(イ)と尖頂けるかも知れぬ。

「註」一方に六の三間夾あり  
そして十と斜走をした當時、  
已に白から頂けて來れば隅から十四と振替らうといふ手を  
含んで居るのである。



(局子二法石布)



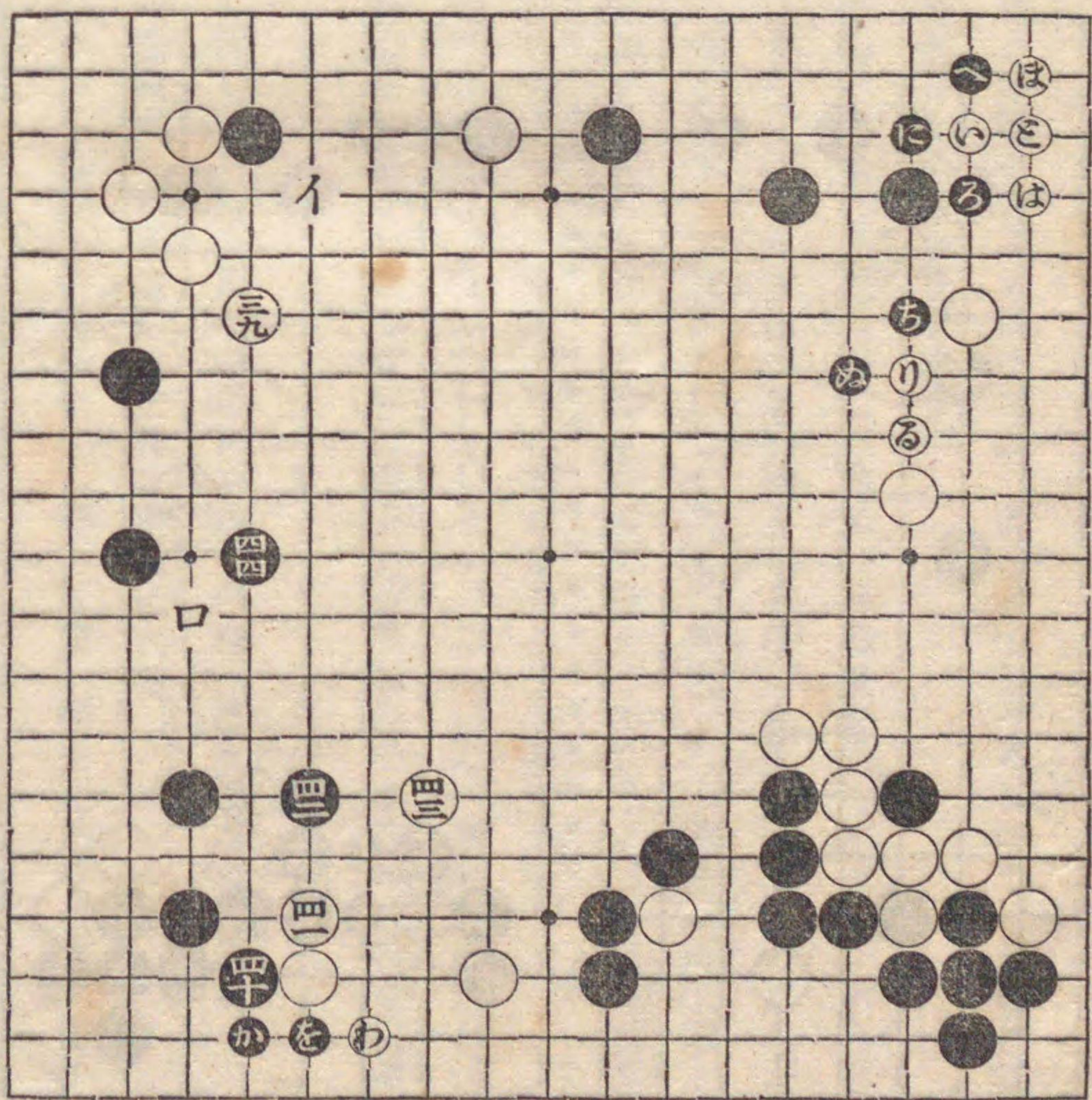




白三十九は(イ)の掛けをハタラカした手で、兼て暗に左側の膨大なる黒地を削る伏線としたのである。

「註」 黒四十は此の白が二間拓であるから之をして勢力を重複せしめ隅への打込を拒ぐため此く尖頂けたのである尙右下方面に強固無比の黒が出来て居るから之に向つて白を壓し四十二と猛撃を加へ、更に四十四と打ち、白に(ロ)の邊へ進撃さるゝ豫防を講じたのである。

尙本圖の後白が若し右上を(イ)と侵せば黑白符號の通りに運んで黒は先手を以つて左下側を黒(三)白(四)と綽粘ぎ茲に局勢は確定するのである。

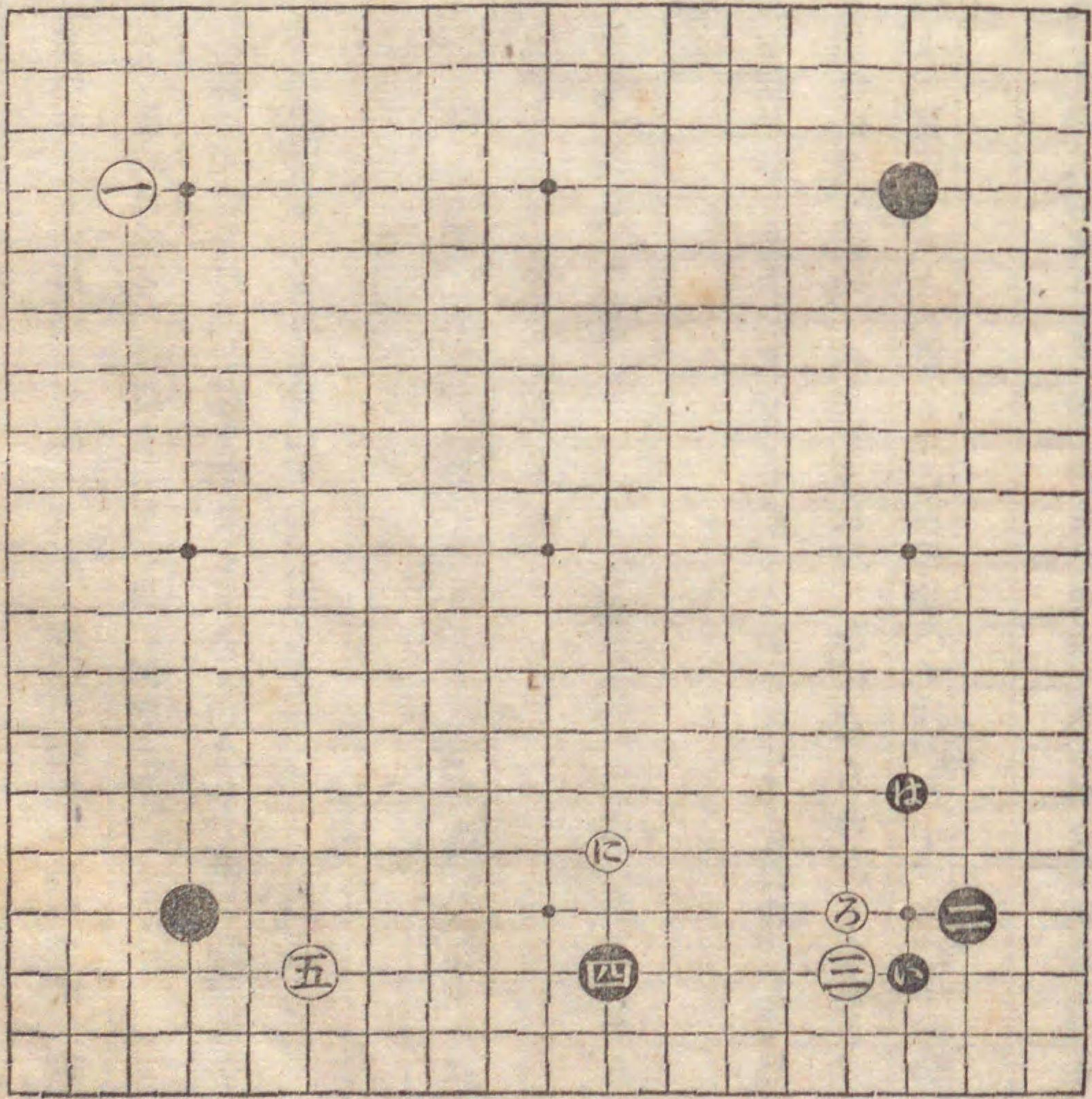


第十九局

黒が四と三間に夾んだのには別に意味はない。

△註 強いて言はゞ、白が手拔したならば(イ)に尖頂けて(ロ)に煽らうといふ位の事である、但し白の手拔場所が左上隅の締りか左上隅への小斜走の掛りかの二種の場合に限るので、若し白に五の手で右下を夾返されたり又は左下へ掛かされた時は尖頂けの策は出来ないものである。

白が此く五と左下隅へ小斜走に掛つた時は、黒より(イ)の尖頂けは面白くない、何故なれば、黒(二)白(三)と運んだと假定して其の時白に(ロ)の點に冠されては黒四は行動上頗る窮屈の感が生じるからである。

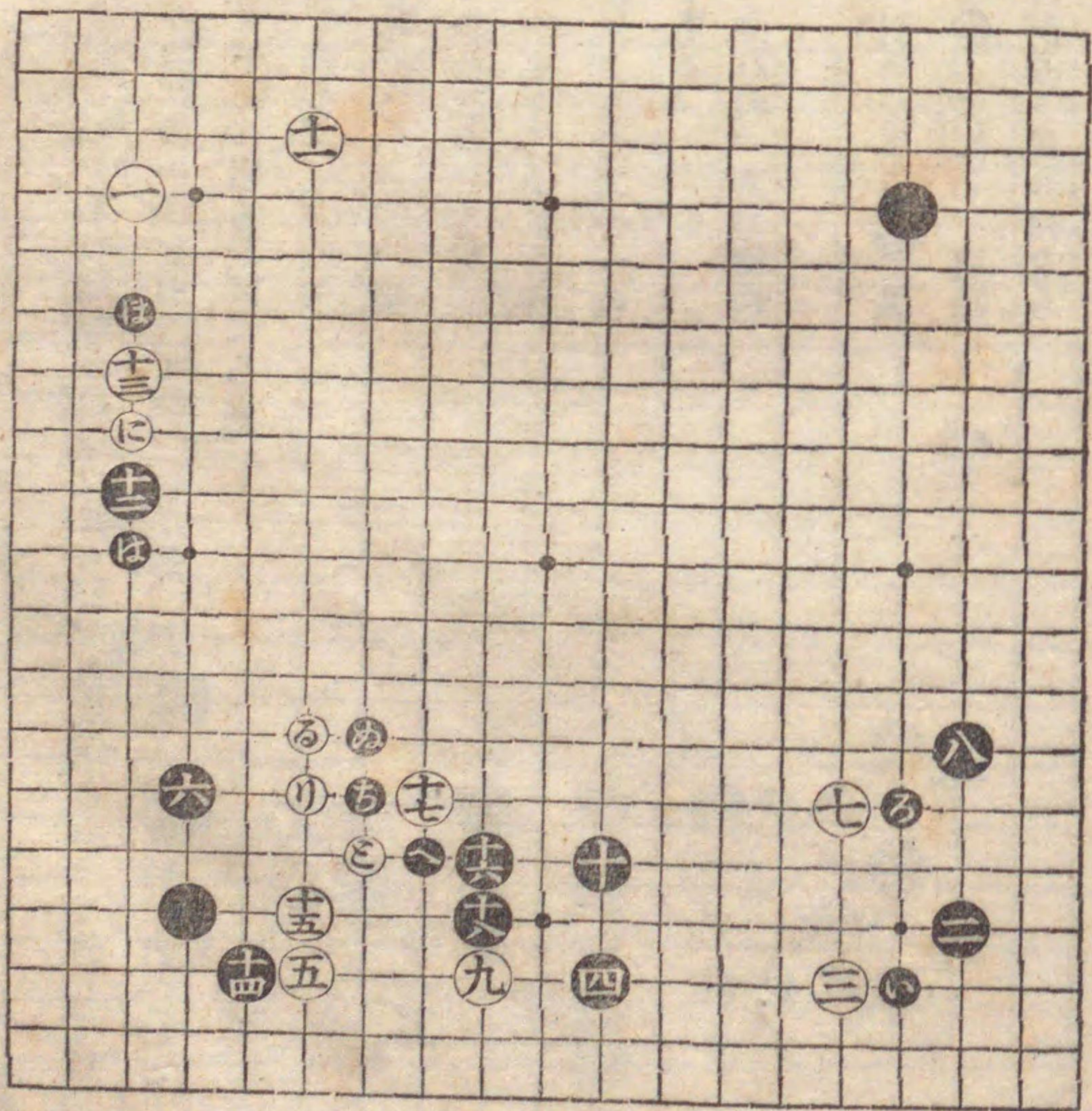


~~~~~(局子二法石布)~~~~~


白五に應じて黒が六と一間飛するのは普通の應手でなる。
 白七の二間飛は黒から●と尖頂けられるのを拒ぐ常用の手ではあるが、本圖の場合にあつては、次
 て白五の一子からの拓を兼ねて九と打つて黒四に迫るの伏線とも見る事が出来る。
 白が若し七の二間飛をせずして九の點に詰めたならば黒は●と斜走してよくがよい、其の時白は手
 拔、黒が●と尖頂け、白復手拔、黒は十の點に飛んでおく位のものであらう。
 本圖の場合に於ける黒十の一間飛も、白九の詰に應ずる至當の手である。
 白十一と左上隅を締つたは此の場合に於て最も大場であるが、其の締る形式は敢て此の大斜走とは
 限らぬ、一間高締てもよし、或は小斜走締ても差支はないのである。
 黒十二は一路控へて星下に●と打つが普通である、黒若し十二の手で●と打てば白は●と詰める
 か、或は十六の點に一間飛するかである。
 白が十三と二間に詰めたのは己が地域を擴めつゝ左上隅を守つたので、若し此の手を打たずして黒
 より●と詰められる事になると極めて消極的な守備の一手を左上に加へねばならぬからである。
 黒は十四と敵に接觸して自己の隅を守り、更に十六と高壓を此の白に加へて四、及十、の二子の勢
 力を張つたのである。

△註 黒十四の尖頂は此の處の白が五、九の二間拓であるから行はれたのである事は今更言ふ迄も

ないが此く尖頂け白に十五と
 勢力を重複せしめ、更に十八、
 二十と急撃を加へ其の機會を
 以つて自己の陣形を整へやう
 といふ巧妙な策である。
 白十七は慣用のテスナである。
 黒が若し●と出れば●と抑へや
 う、そして黒が●と截つたなら
 ば其の手を①とアテ、②と押し
 出さうといふ意である、尙左側
 に打込のヌヂがある、黒十八の
 一手は暗に之を牽制してをるの
 である。尙此の黒十八の手は白
 が若し手拔すれば③の點に打つ
 て白を④と續づかせて其の形を
 崩さうとの意を含んでをる。



△註 (前圖黒十八の手の残説)

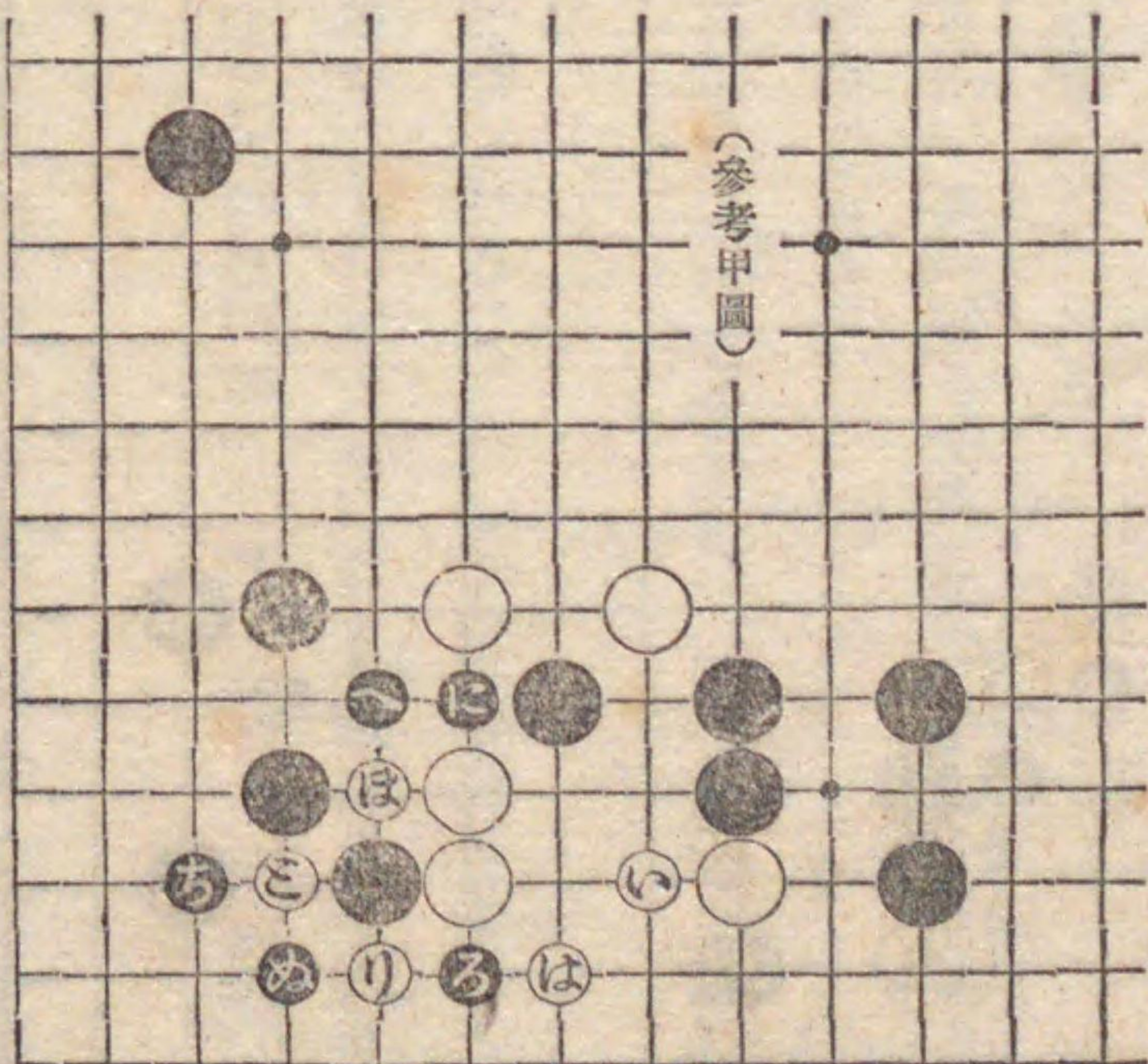
黒が若し十八(△印)の一手を打たずして十九の點から迫つたならば、白は○と沿うて押して居ればよい、本圖の如く黒が十八(△印)の一子を打つて後、白手抜、黒十九と來た時に白が○と沿はゞ直ちに黒に●と出られて益々不利に陥らねばならぬ。

黒二十の覗きは白の應手を試みたのである。

白二十一の手は此く粘ぐのが最も無難ではあるが、或は此の手で○と粘ぐか或は○と出るかの二つの打方もある、白がたとへ○と粘いても黒はやはり二十二と備へておくがよい、然して局勢の推移によりて二十一の點に突破する機會を覗つて居るのである。

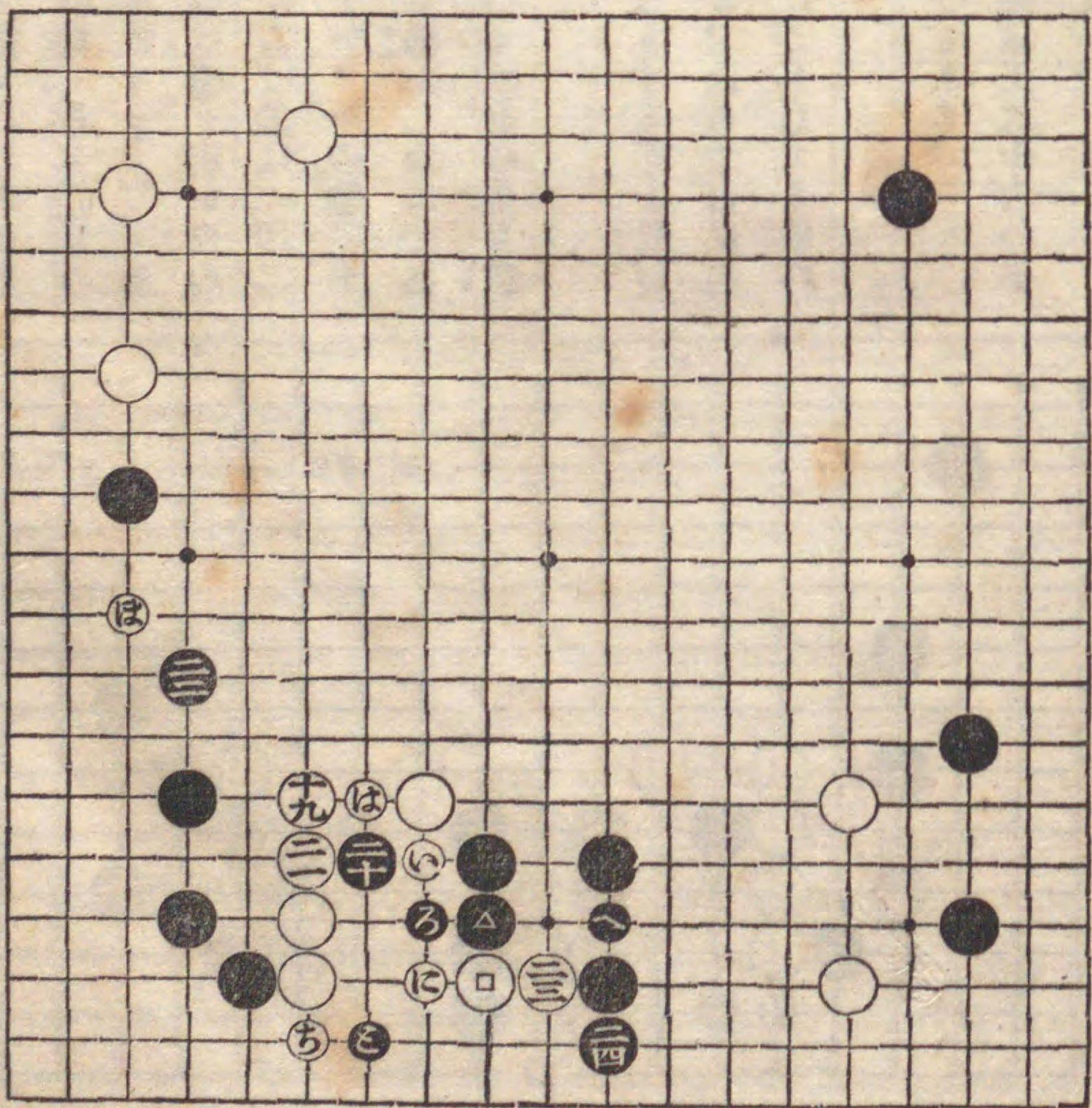
白は二十一の手で或は○と打つかも知れぬ、其の應接は(参考甲圖)の通りに運ぶがよい。

△(参考甲圖) 白二十一の手で○と引いたならば、黒は○と緯ね、白○と抑へた時、黒●と突出し、白○は●の次白○とアテて黒●の時白が○と提つたならば、黒は更に○とアテテおく手順である。



(参考甲圖)

黒が二十二と單關したのは○の打込を拒ぐ手である。
白が二十三と突き當つたのは黒から○の點に打たれて此の(口印)一子を提られるのを拒いだのである。
黒二十四は上を堅固に●と粘いておくもよい、然し此く下つたのは白二十三に對する應手を兼ねて、次で●と置く理を見て居るので、此く黒に二十四と下られた以上白は黒●の置きを拒がうと思へば○と下ておくより外はない、白が○の下りを打たず手抜すれば、次頁に示す参考乙圖の結果に運ばれるのである。



~~~~~(局子二法石布)~~~~~











△(参考圖) 白若し前圖二十三の手で㊦と出れば、黒㊧と下り、白㊨と粘ぎ、黒㊩と抑へ、白㊪と盤り、黒㊫と打かさ、白㊬と提り、黒㊭と尖み、白㊮と行び、黒㊯と縛ね、白㊰とアテ、黒㊱と粘ぎ、白㊲と截り、黒㊳と劫に受けるのである、此の劫の勝敗は直ちに全局の勝敗にも關す可き大問題である。

△註 局面何れかに十分の劫種ありて、白が二十三の手を以つて㊦と出て、此の結果になつたとすると、㊲に斷點が出来る爲め(イ)の征の遁出しに關しても黒は注意を怠つてはならぬのである。

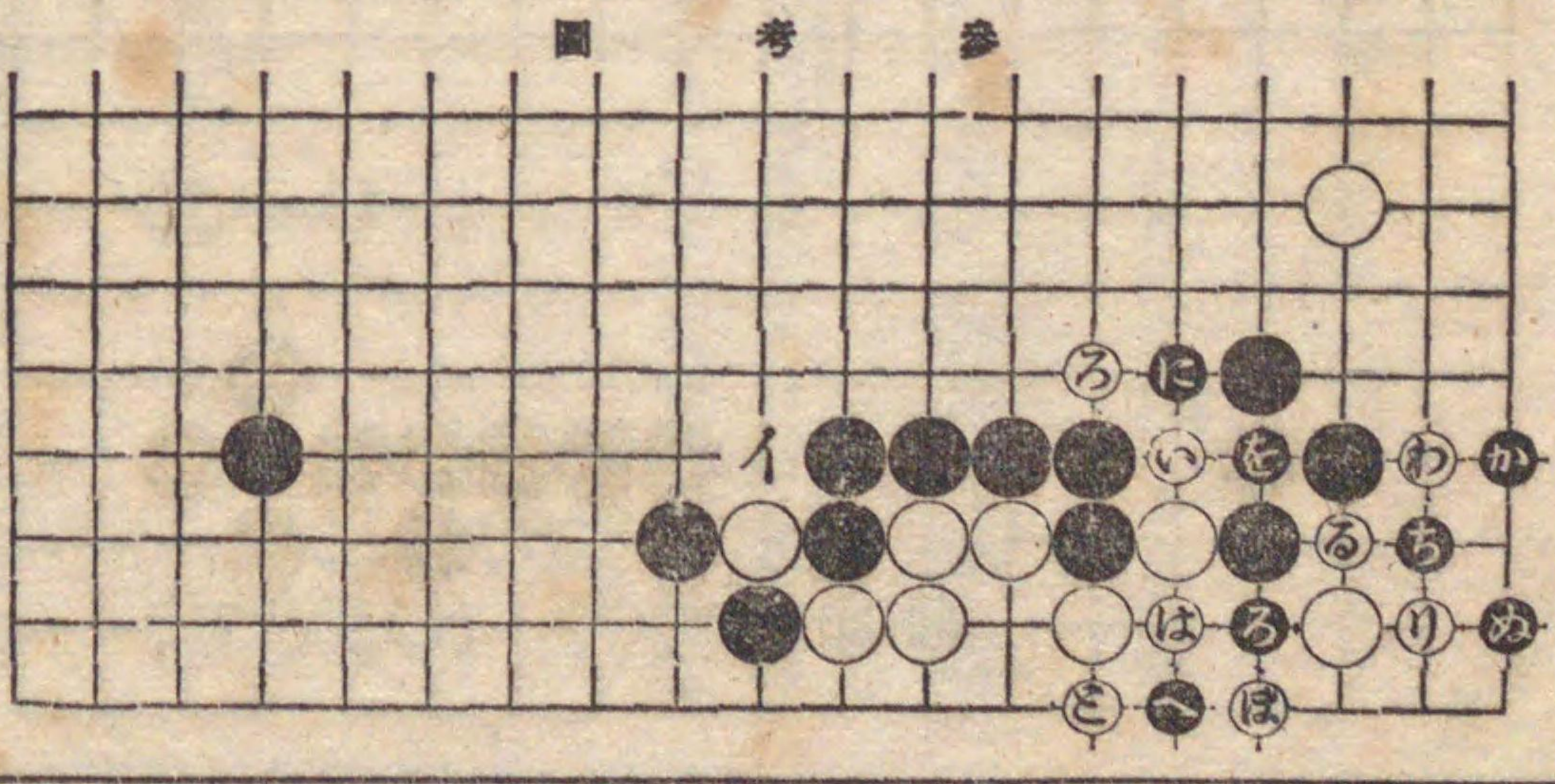
「此の参考圖の手順は互先定石三間夾二間夾返し第六十九圖(二百五十六頁)七行目「(ロ)と抑へればよい」の次に補充す可き手順と見て相互参照あれ」

前圖白二十五の手は或は㊳と尖んでおくのもよい。

△註 此の㊳と尖む手順は互先定石三間夾二間夾返しの部參看。

黒二十六は此の場合大場である、是より外に良い手はない。

白二十七の夾は趣向次第で一問夾或は三問夾其の何れでもよし、白









# 布石法詳解

## 三子之部

### 概論

第二十一世

名人 本因坊秀哉講述

初段 廣月 絶 軒編輯

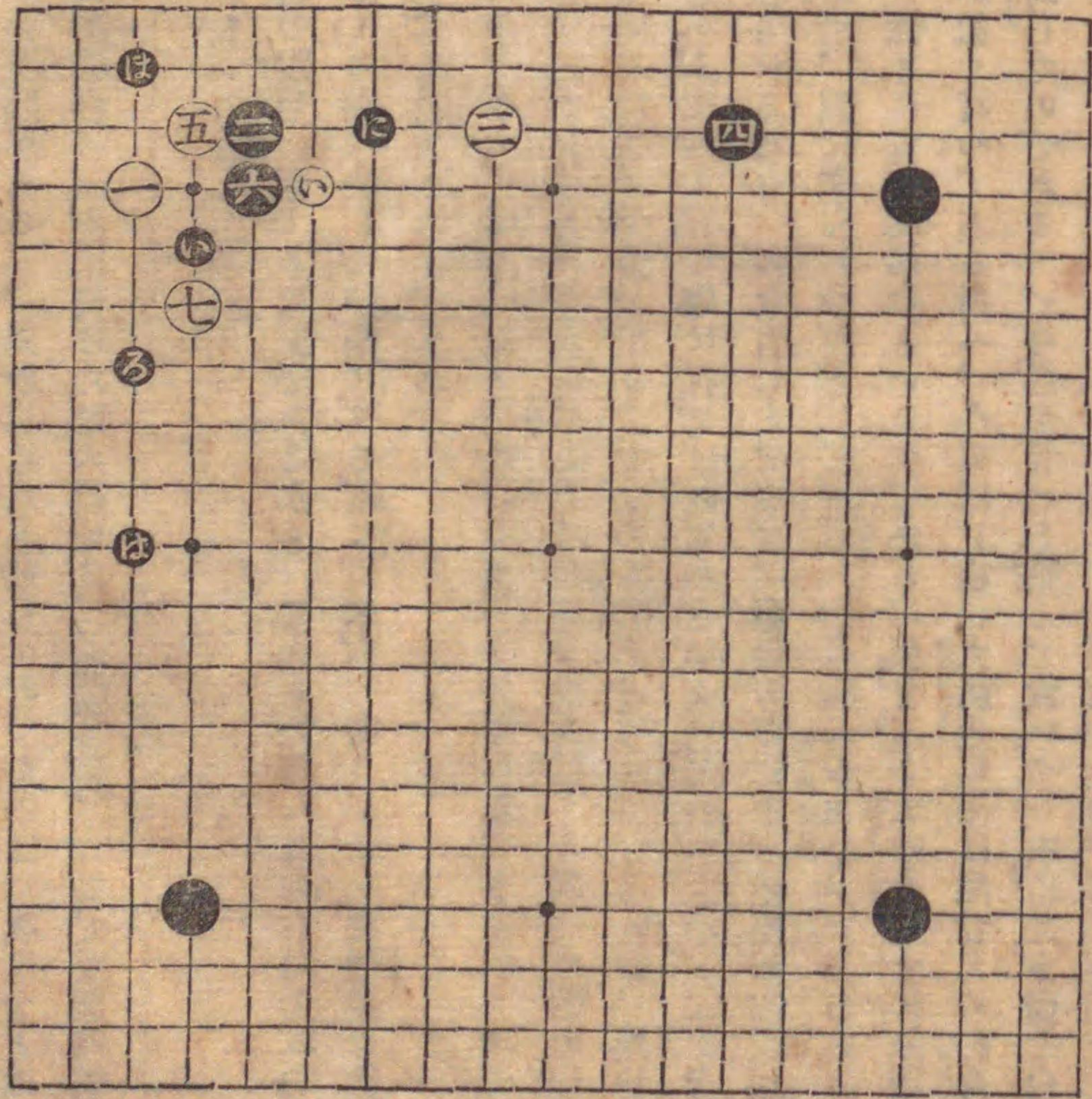
三子局は四子局の四隅何れにも黒の勢子があつて、到る所に白の行動を制限して居るのと差つて、一隅を全く開放して白に優先の權利を興へる譯であるから、其の策戦上に及ぼす影響は實に非常な差がある、其の差は一見した所では只一子だけの様ではあるが、其一子たるや五子と四子との差、若くは七子と六子との差位の事ではない隔段の相違があるから、黒は謹慎且つ精思して、互先定石の許す範圍内で先着の白に對する應接を遂げて失敗をせぬ様にし、此の明隅の應接の結果と他の三隅との布石關係を完全にして終局まで此の勢子の効力を維持しやうといへ極めて精密な注意を以て戦はねばならぬのである、此の意味からいふと白が明隅に向つて第一着を星にても下した場合はイザ知らず、苟も其の他の打着點である限りは、互先定石の指定に隨つて、先づ其の白の次に打たうといふ要點を奪つて、其の利を分かたうといふのが最も必要な心得である。



三子第一局

白一に對し黒二と掛るは、白の次で縮らうといふ要點を奪うて、白に是の一隅の利を恣にさせぬといふ趣意である事は、既に概論にも説いた通りである、此時若し白一と黒二との位置が相反して居たならば、黒としては白からの掛け(壓迫)を防いで●に尖む手もあるが、白の立脚地としては此場合●の點に尖む事は太だ面白くないのである、三子も置した棋で、さう消極的に守る遣り方では遂に勢子の効力を奪ひ去る事は出来ないからである、乃て白も三間夾の手段に出たのであるが、黒は四の手を以て白の三間夾に對し同じ●●に一の子を夾み返し、白が●の點に尖み出した時●に二間拓をするといふのが最も普通に行はれる定石であつて、又紛れも少ない、然して(此の三間夾の定石は場面が廣くて變化が一番多いから、とても布石の序に説くといふ事は困難である、故に詳解は説の進むにつれ、三間夾の條下に細説する事とする)、白●●の次に白●●に懸ければ、黒は●●に飛んでよく又白●●に掛けず他の好所に着手したならば、黒も亦手披して適當の時機を窺つて居れば可い、で適當の機を得て白から五に尖み頂けて、二の子を攻め立てる事になるか、或は黒が●●に先鞭を着けて隅に根據を占める事になるか、何うかといふ事は、局勢の進むに従つて解る事であるが、抑々この三子局は、互先局とは大に趣を異にして居るものであつて、無論黒を持つ方の立脚地から言へば、手堅く打つて早く治まりを付けるといふ趣向は置棋も互先局も、其は同じであるが然し先といふ極めて力量の近い所では、固く打つといふにも多少手心がある、即ち餘り早く治りをつけずに變化の時機を俟つといふ考も必要であるが、三子も技倆の違つた敵手に對しては、飽くまで手固く打つといふ心持が肝要である、殊に三子局で最も注意を拂はねばならぬのは、明隅から崩さ

れる、即ち此の白先着の隅で稍もすると黒は全局の敗勢を醸す様な事があるから、此の一隅を一目瞭然たる結果にするといふ事は最も肝要である、黒四と大斜走した手は自己の右上隅の地域を造る準備の傍ら白三の一片の活動を制限して居る、此の時白は●●の點に尖んで見た所で黒に●●に斜走され實利を占められて面白くないから、五と尖頂て黒に六と立たせ、七と煽つて三の一片を活動さうとしたので、此ういふ風に打てば白三の一片も亦活動て來る譯である。



~~~~~(局子三法石布)~~~~~


黒ハ、手四種

眼形ニ関スル
所要ナ一手

白十七ノ意

黒二十ノキリ
ヘニ打ツ利甚

黒八の着點は尙其他に⑧⑨何れかの三點があるが、圖の様に八と冠して打つたのは、次に十と頂けて治まらうといふ考へである、尙⑧⑨の三點に受けた時の變化は「三間夾定石」の條で委細説明する事として茲には省略する。

△(問) 黒十六と下る手で⑩に懸け粘いだならば如何。

△(答) 此十六の下りは肝要で、白の眼形に關する要點であるから、黒から此所へ打たれるのは白の大苦痛とする所である、故にかゝる點は決して等閑にする事は出来ぬ、斯ういふ一見些細な様な點が全局の勝敗に關するといふ事も往々あるのである。

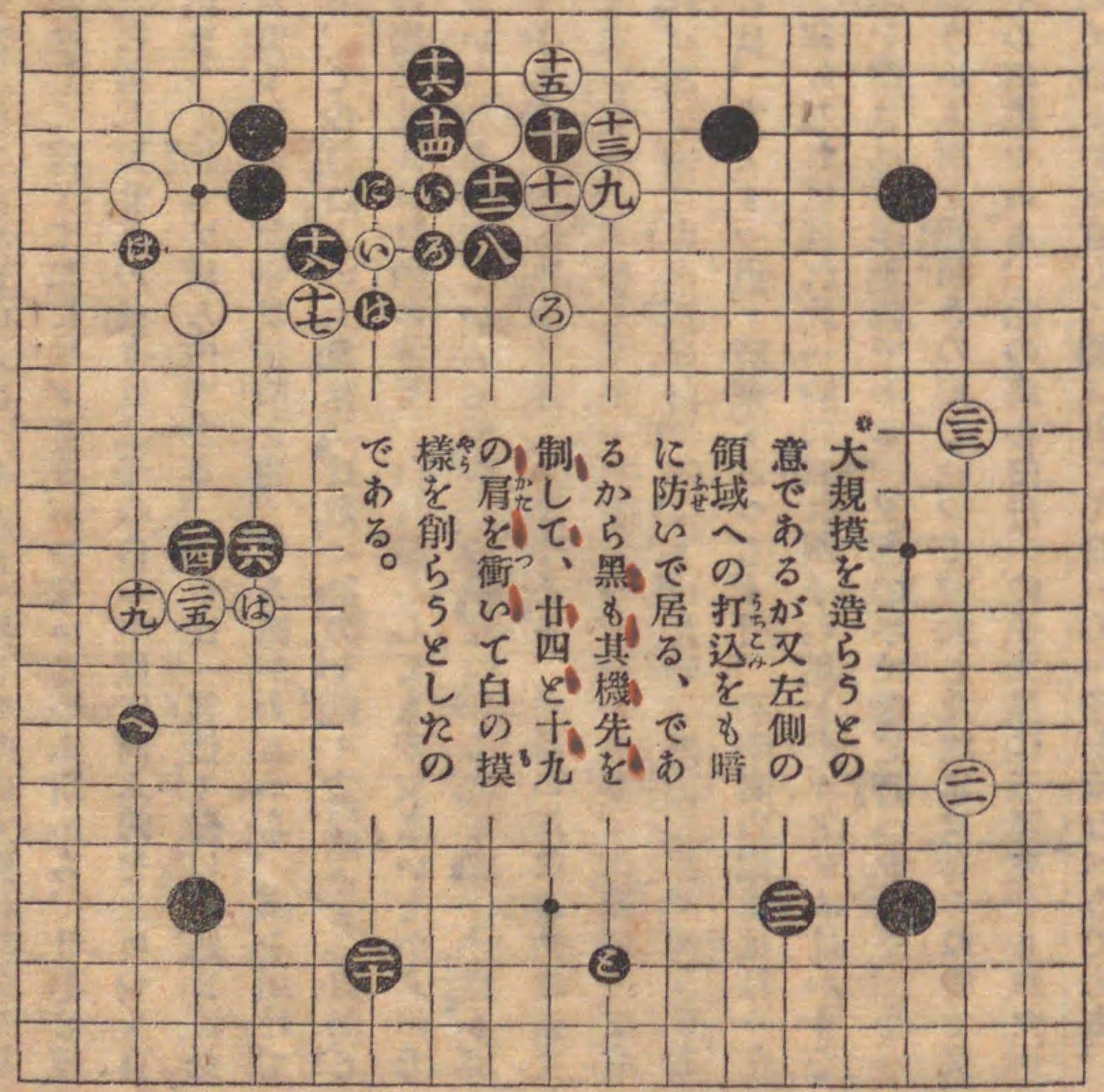
白十七と單關したのは次に⑪に覗き黒に⑫に懸け粘がして⑬に打ち黒を小さく活かさうといふ意であるが、一面⑭の頂越しをも防いで居る、之に對し黒十八と尖み頂けた手は之を防ぐと同時に⑮の頂越を意味して居る、かくて白は左上隅の四子の勢力を借りて十九の大場を占めたのであるが、黒廿の手は次に白の大模様を打たせようといふ準備として⑯に打てば如何かといふに無論良く無い、本局の様は右方に向つて任意に展開し得られる場合、何を苦しんで窮屈な⑰の方面に走る必要があるか若し白の大場に打たせようといふ意味で、假に⑱に打つたとして所で、白に⑲に單關されたら打込は消えて終つて残る所は⑳の拓きの、餘りに氣が利かぬといふ事である、黒廿二と大斜走せずに單關したのは、既に左下隅の二十の黒が低く打つてある所へ、今又同じ様に大斜走しては黒廿との釣合上面白くないから、高く廿二と單關したのである、で今黒が廿二と飛んで置いて、次に此方面を白から打たれぬ先に、黒の手番で守らうとするには、どの點が最も良いかといふと㉑の點である。

白二十三黒二
十四意

(問) ⑳の點は廿との間が三間になつて居て白から打込まれる恐れはないか。

(答) 黒はこの廣い勢子と勢子との間に、僅か三着を費して居るのみであるから、無論何處かへ打込まれる手はある、で同じ事なら兩方を締つて、中へ打込ました方が利であるから⑳を好點とするのであるが、よし白は打込んで見た所で只打込んだといふに止まつて、其の打込んだ白は直ちに黒から攻められる結果となつて、結局凌ぎに力を費さねばならぬ事となる。

白廿三の趣向は、遙に右上隅の黒を覗ふと同時に、右側に我が



大規模を造らうとの意であるが又左側の領域への打込をも暗に防いで居る、であるから黒も其機先を制して、廿四と十九の肩を衝いて白の模様を削らうとしたのである。

~~~~~(局子三法石布)~~~~~

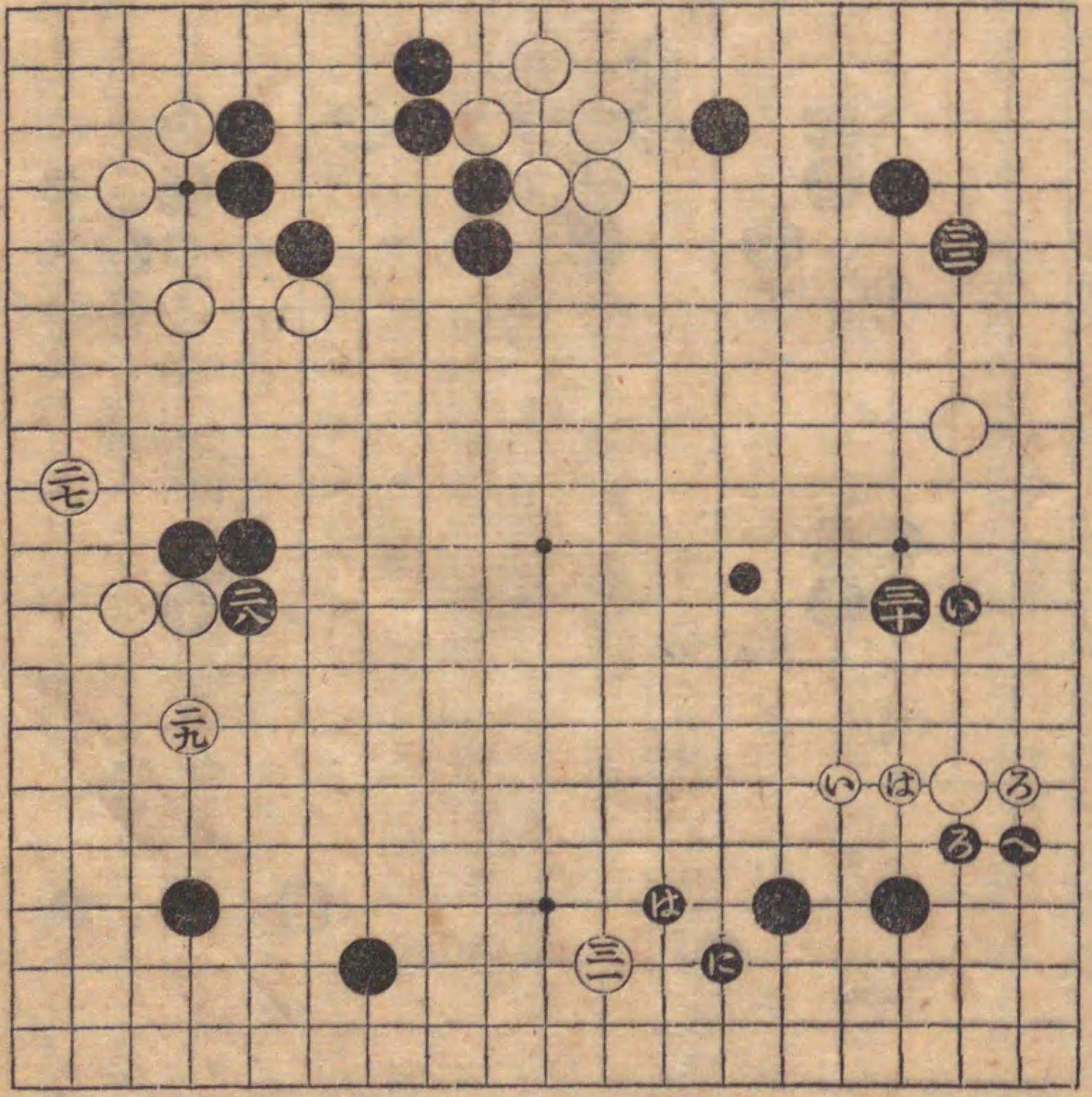


初ッ子  
は  
は

白廿七の手を以て更に一步なせ廿八の點に押さぬかといふと、すん／＼押して此の方面に勢力を加へて見た所で、左下隅の黒との距離が少しく遠くて黒に感ずる度が少ないといふ所から、廿七と軽く斜走して黒の動靜を覗つたので、之に對し黒廿八の曲りは二子の白の中原に向ふ鋒を止めつゝ、自己の勢力を加へ、遙に右側の白に打込まうと狙つて居るのである、黒卅は一路低く⑤に打込まば如何といふに、別段悪い事は無いが兎角低く打込む子は棋勢を重くする嫌があるから、其を避けて軽く三十の點に一子を下したのである、この打込といふ意味には敵の勢力を割く(兩斷する)目的と地域を削る目的との二通りある、此の場合は削る目的の方で、白に盤らしても差支ないといふのであるが、白も此處を盤つても居られまい、語を換へていふと此の卅の點は白から打てば一寸纏りが付く所であるから、其の要點を奪つて了へば、黒の目的は達した譯である、で此の所白は到底損失は免れぬが、凌げないといふ程の事もないから、手抜して卅一と打込むのである、扱圖の様な場合白卅三の手を以て⑥に單關して來れば黒は⑦に尖み頂け白が⑧に下つた時、黒⑨と打つべきであるが、この⑨の手を⑩に尖むといふのは、元より一隅を防禦するつもりで、初學者の間には往々之を見るのであるが、これはいけない、何故なれば既に此一隅の爲に四子の黒を費すといふばかりでなく⑪に白の下がある以上は、何れ地を消される事無論である、又⑫の手で⑬と押へた所で、卅一の方から侵入される事になるから、斯ういふ所を禰明きの形といつて、大した地にはならぬので又斯ういふ所を守らうといふ考へが抑々の間違である、此の場合白卅一の子は黒に三間夾せられた形となつて居て、白の發展地域が無いのであるから宜しく⑭に打つて卅一の一子を攻むべきである、

攻ムクシラ  
攻メ守ルハ  
クシテ守ル

勿論黒の立脚地から堅固といふ事は根本思想として必要ではあるが場合を考へずに堅く打つばかりが藝ではない常に敵の弱點を見出し、攻むべきは攻め、守るべきは守り、その場合に處して適宜に攻防の法を取らねばならぬ、唯茲に注意すべきは黒⑮と尖み頂けた時白⑯に下らずに⑰に粘いだならば黒も亦⑱に尖むで居て悪くはない、といふのは⑲に下られた時と⑳に粘がれた時とは、大に其趣を異にするからである、併し白が㉑に粘ぐとすれば㉒の一手が愚手となるから白は多分㉓に下るであらう



~~~~(局子三法石布)~~~~


先ク圍中ニ入ル
モハ王タルコト

三子第二局

白が一と明隅に打つた理由は、三子第一局の概論に説いた通りで「先づ關中に入る者は王たる可し」との理屈で、して見ると自ら宗主権の握れる明隅を放棄しておいて、己に敵の據つて居る他の隅を争ふといふ事は、道理上あるまじき事である。

而し二子局では明隅が二ヶ所あるから、其の何れを擇ぶ可きかは任意であるが、此の三子局となると、明隅が只一つしか無いから、茲に一着を下すといふ事は言ふ迄もない肝要な手である、

黒が(他の三隅に着手せず)之に對して二と打つた譯は、前局の初に詳説した通りである、……が扱白が此の隅先着の勢力を恃んで劇しく三と夾み攻めたのは、他の三隅には己に黒の勢力があつて、何れも白の任意行動が出来難い所であるから、先此の明隅で此の一隅の主権者であり優先者である價値を十分に發揮して、今客位を争うて來た黒二を急に攻めて、自然に自己の勢力を扶植して、他の三隅に轉戦するの地盤を固めやうといふ様な意味合である、

但し白三は必ずしも本圖の様に一間夾するものとは限らぬ、或は④に二間夾か、⑤に三間夾にしてもよいのである。

黒四は最初に打つた二の一子を犠牲として、其の代償に左側に地域を造らうといふ趣向であるから次に白が五と尖んだ時、六と二間に拓き、白が七と打つて黒二の出路を鎖した時、八と大場に單

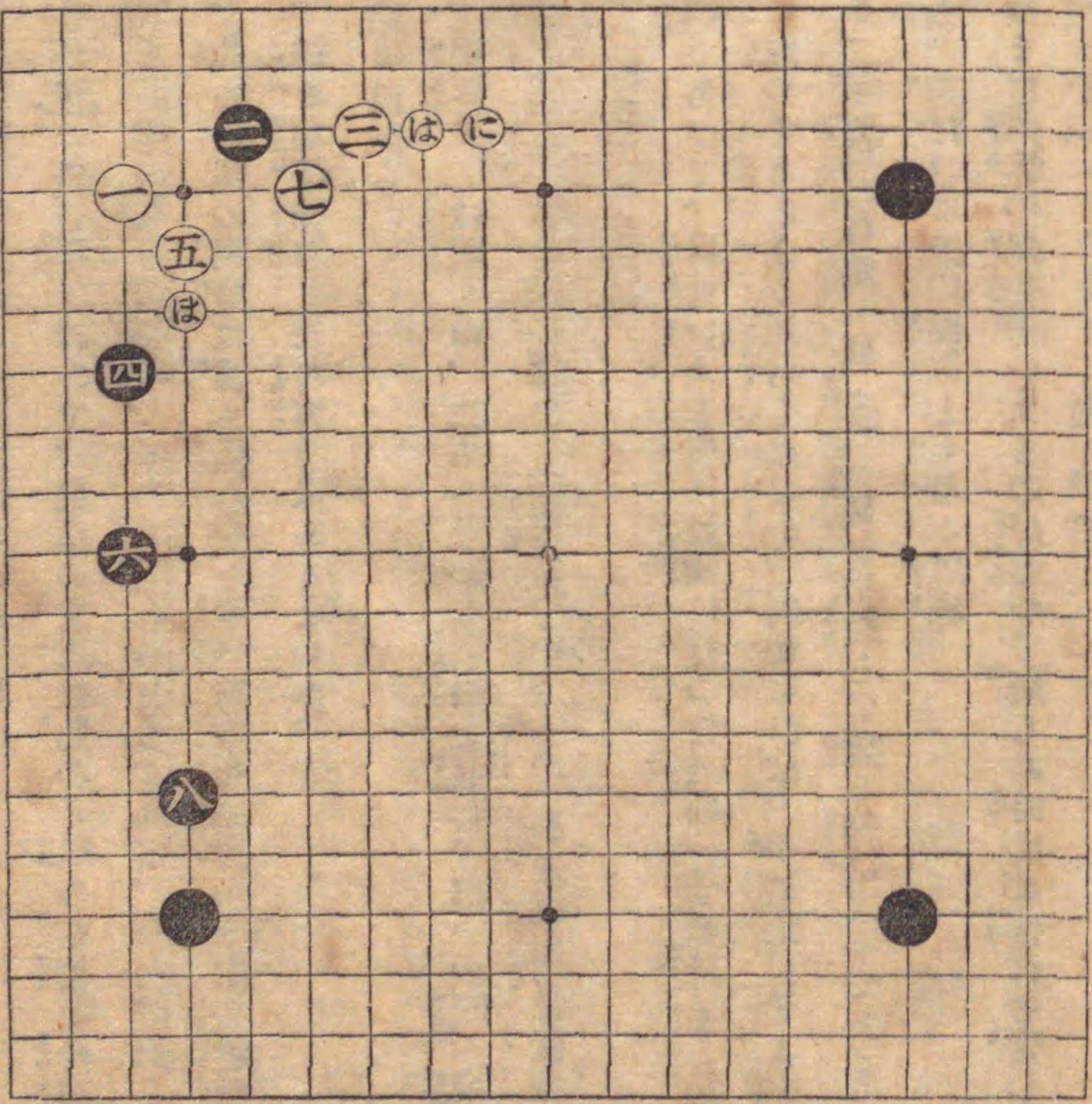
白三ト夾ミタル
意味スレ

白五手後スル
ヲ得ス

白五ノキヲ
ト打ツフヤリ
潜心研究

關して、前に四と夾返した主意を爰に貫徹する手順となつたのである。

此の白五の手は、若し手抜きすると忽ち黒から此の點を閉塞されて、白一は全く中原への出路を一手で阻止められる大切な點であるから此の場合決して手抜きする事は出来ぬ、然し白五は單に黒から一手で出路を塞がれるを嫌うたといふ計でなく、黒二と四とを左右に隔て、三の一子と相俟つて、黒二を攻めやうといふ意味の手であるから、此の五の手を黒四の肩へ③と打つ事もある(此等の着手と其の打つ意味とは凡て一間夾定石を通讀して潜心研究せらるゝと自然明瞭する事である)



(局子三棋石布)

(註)特に注意しておきたいのは、初心者間に當然起る可き疑問である、其は黒が最初二と打つたのは、白一からの締る點を奪うたので、黒二の意思は此の一隅の利權を全然白の有に飯せしめまい、願はくば我も一半の利を願たう、との手であつたとすれば、今白が三と夾んで来た際遽かに心機一轉して、此の一隅の利權は言ふ迄もなく折角打つた二の一子迄も弊履の如く捨て、顧みないといふのは、頗る前後撞着した打方ではあるまいか、と

是は一應尤もな疑問である、然し黒は白から三と夾攻められた時、必ずしも四と夾返すとは限らぬ、二の一子から運動を起して白一の腹へ飛頂く「三々頂」白三の頭に頂ける「頂引」「頂行」五の點へ掛ける「斜走掛」中邊への「斜走跳出」等諸種の打ち方があるが、(互先定石一間夾の部參看)

此く四と夾返して打つのも一の策戦であつて、畢竟いふと黒は最初に打つた二の一子を捨子として白に與へたとは言ふもの、白に取つてもあまり難有くはない、何せなれば、小斜走にせよ大斜走にせよ一手で締りの出来る所を二手(白四目黒一目各一目を相殺して殘る締は二手である)費して締つたといふ形になつて居る、其だけは黒の儲けともなる道理であるから、布石の初期即ち局面にまだ何等の場合といふものが起つて居らぬ時には何れを善しとも悪しともいふ事は出来ぬ、各々一理屈ある手といふ事を記憶しておけばよい

モ一つ起らうといふ疑問は、本圖の様になつた結果、隅の黒二は全く死滅したものであるか、或は多少の味(黒二が活る手、若くは此の黒二を利用して隅に黒が利を得る、或は之に制肘されて白が不利を犯さねばならぬ等の意)が残つては居まいか、若し其の味があるとするれば、其の手順及其を實現さす時機如何と是亦尤もな質疑である、此の手順といふ事は少し棋の心得ある人には解つて居らうが、其を實現さすは果して如何なる時機に於てす可きかとは相當有力の人にも時に判定を誤り易い事であるから尤も注意を要する問題ではあるが此の解答は暫く保留しておいて機會の至るのを待ちたいと思ふ、何故なれば、凡て物には順序といふ事があり輕重といふ事がある、此の黒二によつて隅に殘る味といふ事は畢竟些末の事に過ぎぬ、今は大局に亘る布石の知識と、部分を主とする定石の根本的眞意義とを齟味咀嚼せしめるに急なる時であつて此の末節の詳解に日を送る時ではない、其處で讀者暫く研究の進むのを待つて貰ひたい、其は何時であるかと聞かれても少しく確答に窮するが、只殊更でなく自然の順序が其の説明に移るの時機と言つておくより外は無い、現に前輯でも又此の輯でも、自然の順序として随分局部細末な點まで講解の歩を進めて居る所もあるのは讀者の己に了知さるゝ所であらう。(絶)

白七ノ手ヲ
いニ打テ
其意味

黒八ノ手
ヲ打テ
可

黒八ノ手
以後ノ打
奪シ方

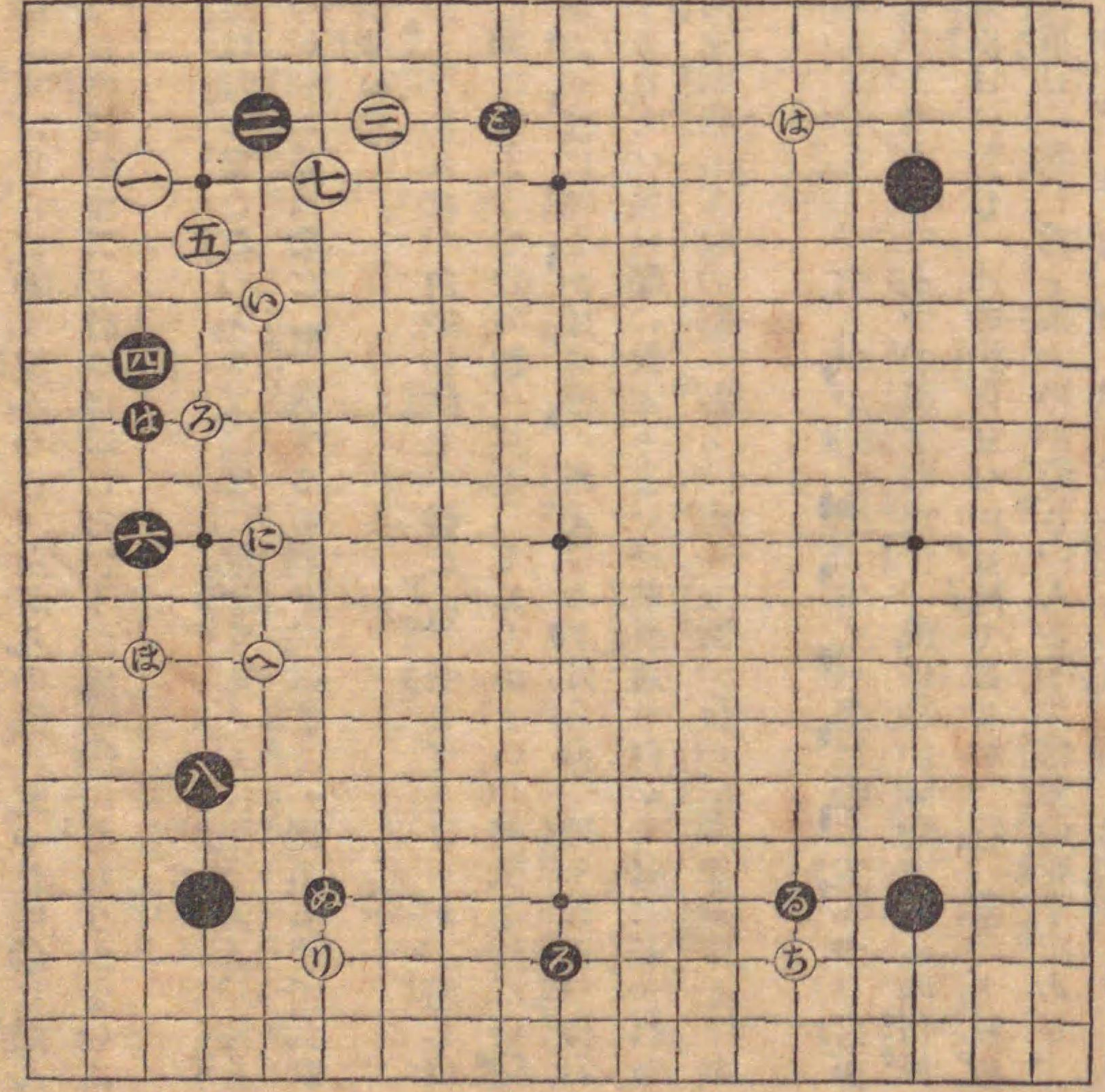
黒六は前述の通り、四と夾返した意を遂行して、二の一子を捨て、中側に別に地域を定めた手である。白七は趣向次第で③に打つ事も有る。

註、此の③と雁行する手には種々の意味が含まれて居る、其の一は、次で②とかけ黒に④と應じさせて②と煽り、此の四六方面の黒の位置を低くからしめると同時に、一方④方面に大地域を造るといふ策戦と、も一つは③と打つて黒四、六、の二子を攻め黒を②の點に立たせて②と單關して飽く迄も攻め立てやうといふ趣向とである、即ち④は四、六の方面には酷しく利くが其の代り②の邊に黒の勢力が及んだ時は、白三の位置は薄弱を感じねばならぬ、

此等の詳解は布石法の講解の進むに伴うて白七を此の②の點に打つたと同形の場合に遭遇する事が必ず有るであらうから凡て其の機會に譲る事とする、要するに白が七の手を若し②に打つとすれば、其には③と掛け④と煽る手と、③と打ち②と攻める手とを含んで居るといふ事を記憶しておけばよい、

然るに白が本圖の通りに七と打つた時は、黒四、六、方面に向つて與へる感じの度が緩い代り此の隅は先づ一應治つて居る譯で④ヨシ隅には黒二の生命として多少の味が残つて居るにもせよあるから④方面にたとへ黒の子か来たとしても敢て驚くに及ばぬのである、から黒も亦此の堅固な白の勢力に接近して來るといふ事は、(害こそあれ決して益はないから)容易に出來ぬ、黒八は前述の通り、黒が當初の二の一子を捨て、四、六と振り替つた主旨を貫徹して大場の利を占める手であるから良いには違いないが、若し局面を狭くして打たうといふ趣向ならば、此の手を以つて星下②に打つがよい、

註、局面を狭くするとは、白の打看點を制限するといふ意味である、例せば星下②に黒の無い場合は、白から⑤に打たれ①に打たれ(必ずしも⑤①の點に打つとのみは限らぬが)白に大模様を造られる、さりとして其へ打ち込んで行けば白は主で黒は客である、兎にも角にも變化の局面の廣くなるのは争はれぬ事實である之に反して、星下に②と打つておいて次で白から⑤と來れば②と飛び、又白⑤と打たず①と來れば②と單關するか、又は尖み頂けて打つとも何れにしても黒は主位に立つて客位の白を迎へるといふ順序であるから變化は餘程制限される譯である。



~~~~~(局子三法石布)~~~~~



黒八の手を以つて十二と打ち、白が④に来たならば⑤と尖みつけ、白が八の點に立つた時に飛んで此の方面に大模様を造るがよい、兎に角黒が十二と打つは⑥に打たうか或は⑦に打たうかといふ意味である、

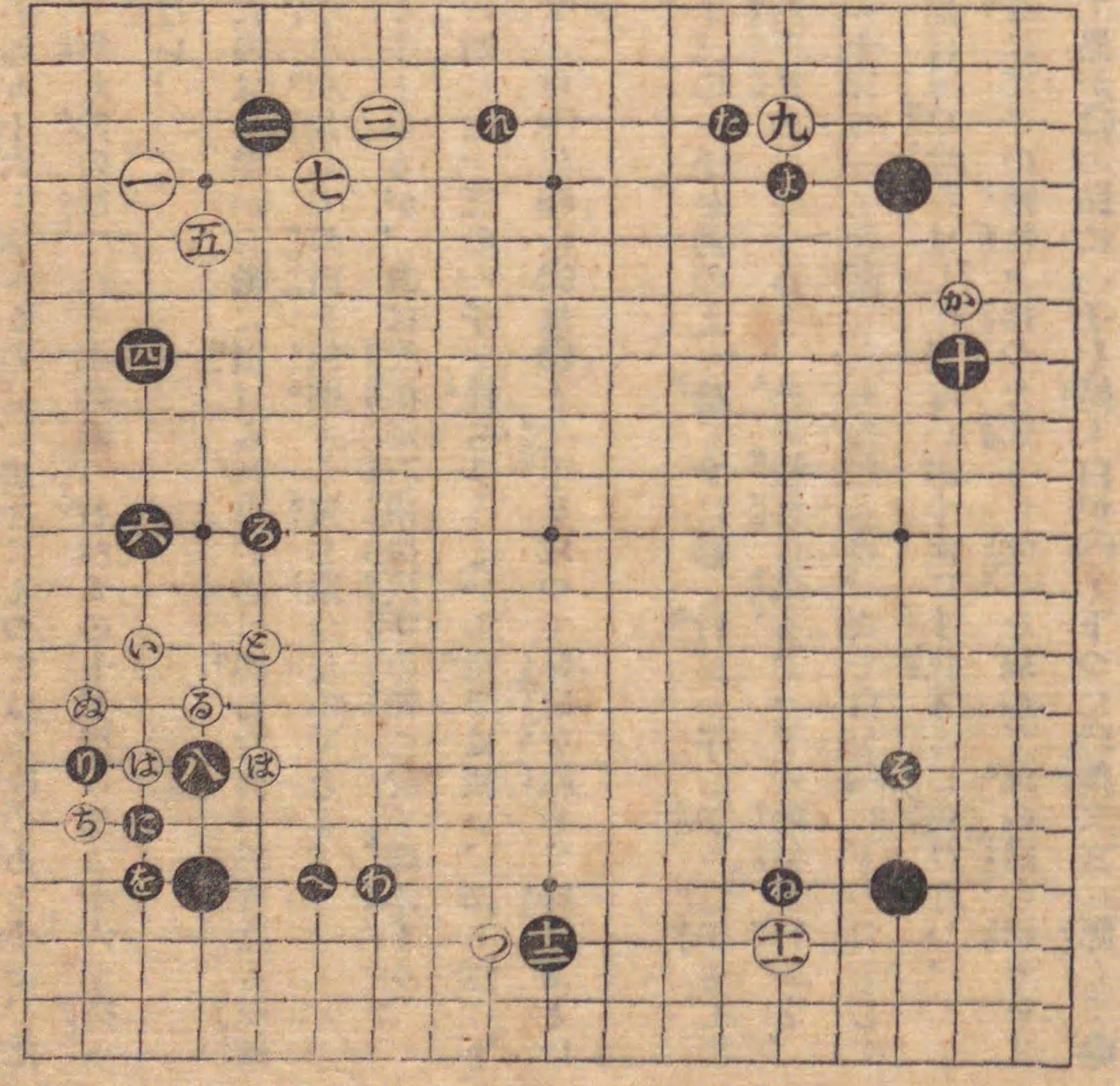
若又白が③に来ず④に来たならば、黒は③の點に打つとも又は⑥に單關するとも任意である、即ち白④黒③白④となつた時黒が④に打つが利か或は⑥に單關するが利か其は各々一理ある手で何れが是とも非とも此の場合では斷言は出來ぬ、

白が④と打つた時、黒が後に⑥に飛ぶ考ならば、白④に應じて⑥に單關してもよいが、若し白から④方面に運ばれるのを嫌ふならば⑥に飛ぶ手で④の點へ斜走しておくがよい、何故なれば白④の時黒⑥に飛んだならば、白は⑤に飛ぶか④に拓くか或は⑤に斜走するか分らぬ、即ち此の三様の打方の何れに白が出やうと關せぬつもりならば黒は⑥に飛ぶもよいが前述通り白から④に拓かれるを不便と感するならば最初に白の打方を制限して④の點に打ち、此の方面の白の活動を制限しておくのがよい。

溯つて白が④と来た時黒が⑥と應じたと假定して次に白が④に来たならば黒は⑤に尖みつけ白が③と飛んだ時黒は⑥に單關するがよい（若も④の一子が孤立の場合、或は④から④方面への拓が二間以上である場合ならば、黒⑥の尖頂けに對し、八の點に立つが普通であるが、④、④、と極めて短距離即ち一間拓きの場合は⑥の尖頂けに對し③と飛ぶのが働きのある手で常習の着手である、  
『若も黒から⑥に縛れて来たならば④に押へ八の點に當てた時に應じて劫に受ける趣向である』

白のヨリチニ  
斜走し来  
リタル時、  
受方  
白九ヲカノ  
点ニ来ラ  
ズ  
黒ハヨ  
ク打ツ

若又白④黒⑥の次白が⑤に斜走して来たならば黒は⑥に應じて次に白は⑤に飛ぶか或は八の點に斜走するか何れにしても此場合黒は⑥に二間飛しておくがよい、白九の手を若も⑥の點よりすれば黒は⑥に斜走するよりは、⑥に飛ぶ方がよい、何となれば次で打たうといふ⑥の詰めの釣合上⑥の方が優つて居る道理は既に屢々詳解した所である、  
黒十二の手は、白十一からの拓きを妨げて之を三間夾としたのであるが、此の手を以つて、⑥に飛んでおくも亦一策である、其時白は十三と掛る手で④に拓くが普通の手と言はねばならぬ



~~~~~(周子三法石布)~~~~~


白十五の時、黒十七の點に行ひず圖の通り十六と抑へるのは、場合によつては意味のある手で、此く打たねばならぬ必要の事もあるが、然し此の所では十七の點へ行ひるのも又圖の通り十六と抑へるのも別にタイして意味にかはりはない、

白十九ノ手ニ
ラニナノ所ヲ
ツキタレ時ノ
打方

白二十一ノ手

白二十ノ手
一トス

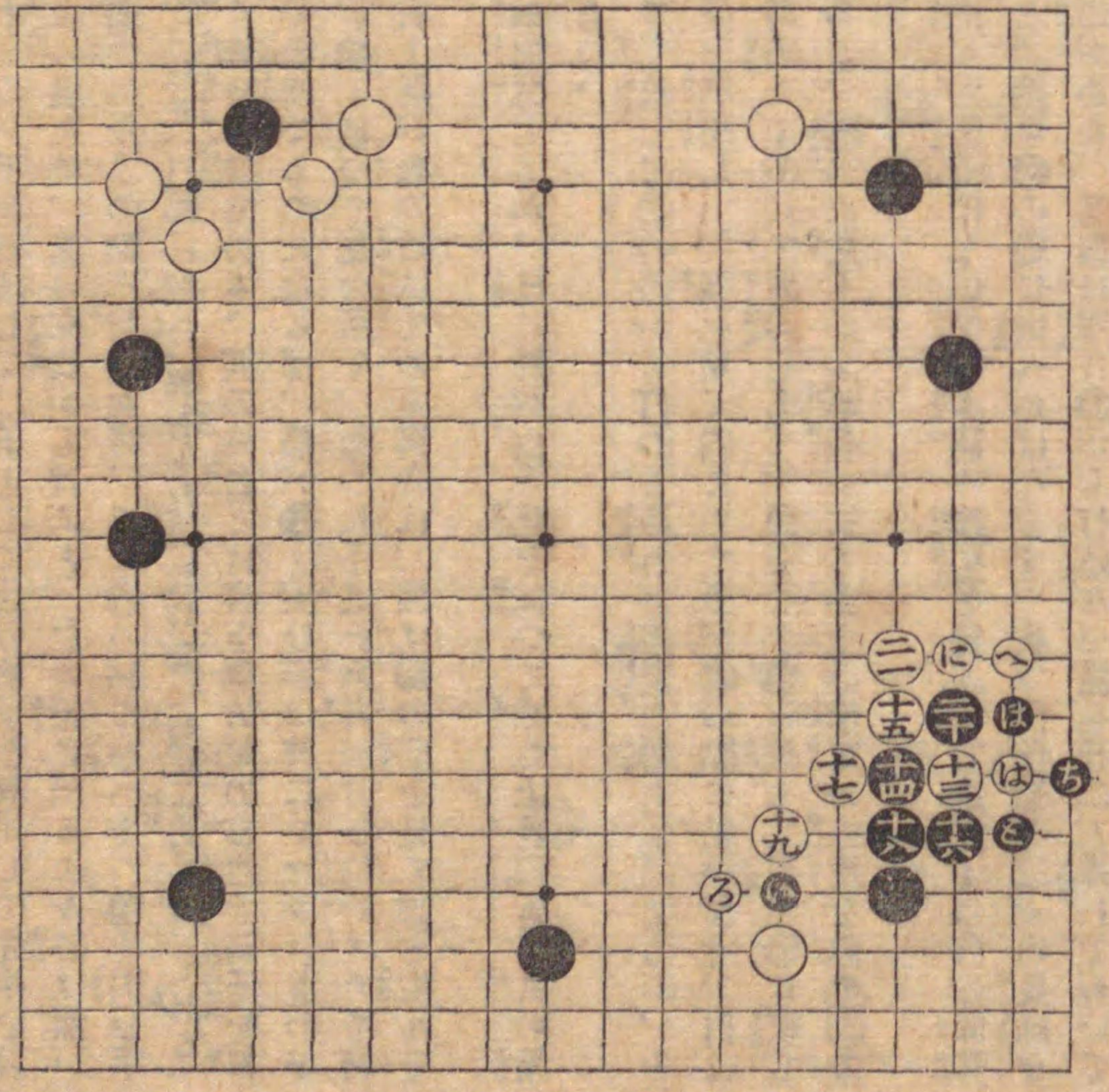
白が十三の一子を捨て、十九と打つたのは、黒から④に頂けられ白が⑤に縛れた時、黒十九と双關になるのを不便と感じて、兩掛りの子を利用して外面を包圍する策を取つたのである、十九の手で廿の點に粘ぐ手と④に下る手とあるが、其は置棋定石兩掛頂手の條に於て詳述する、白二十一に行ひたのは④にあて、④の點に白十三の一子を提らさうといふ意では無い、即ち④に下り(二子に増加して)黒に⑥を押しへさせ、白⑦黒⑧黒⑨と先手を以つて茲處を締めて終はふといふ趣向の手である、

此の所で注意せねばならぬのは白が十三の一子を其のまゝ捨てずに④と行ひ一子を加へ二子として捨てる手である、早等は専門家の所謂手筋の一つである、此の犠牲に供した一子の効果を言ふと、若之を單に④に當て黒をして④の點に十三の一子を提らしめたならば、次で白が④に下つたとしても、或④の點に當てたとしても、黒はモ早挨拶はして居ない必ず他に手抜するに違ひない、して見ると白が十三の一子を④と行ひて茲に二子の犠牲を拂つた代りに先手を以つて此の處の締りをする事が出来るのは、恰と白が④とあて黒が④の點に一子を提り白が④と下つた時黒又其に應じて④

と不用の一着を下したと同様の結果になつて居る、此の黒に一着の冗子を打たしたと同じ結果になつたのが此の犠牲子の効果である、

又黒から言ふと、只一手で提れるものを殊更に④に下つて白から④に抑へられて提たといふ様な道理にもなる何にしても此の④の一子のはたらきは確である

「註」白十九の手を④に下るのは如何いふ場合か、又下らずに二十の點に粘ぐのは如何なる場合に適するかといふ事は之から屢々説明の機會があらうと思ふ、又白が④に下つた時の黒の打ち方及二十の點に粘いだ時の應手は置棋定石の部の説明に譲る。



~~~~~(局子三法石布)~~~~~



白三二ノ点  
ニノビタ時  
黒ニキアリ

此打方  
注意

前白廿一の手から説き起した「白が十三の一子を行ばして二子として此の捨子を利用して先手を以つて此の所の締をつけやうといふ手段に出た時、黒の立場から言ふと、白の策に陥るより外は無いかといふに決して然うでもない、本圖白が廿二の點に行びた時、黒は○の點に抑へずと○と尖む手がある、すると白は○にあて黒○の點に粘り、白○に抑へ、黒○となつた時○に截れ味が残つて居る、然し此の黒が○に尖むといふのは全く場合問題である、其の場合とは右上隅方面の布石の關係を言ふのである、即ち此の方面が若も白の領域であつたならば、黒が○と尖む手は眞にツマラヌものである何故なれば、後になつて譬ひ黒が○と截つて見た所で、截つた子其れ自身が苦む位がオチで別に何等の効果もない、が本圖の様は右上隅が黒の領域である場合は、黒は○の截を見て○と尖んでおくのも一策である、

若し此く尖まれたとして此場合白は如何應じるか、已に黒が白の策を破つて来た上は白も亦其の策の上を行くといふ工夫がなければならぬ、

乃ち白は黒○の尖みの處へは挨拶せず手扱して○の邊から打つて徐ろに手段を講じねばならぬ、そして白の策戦は○方面以下の子の運びを利用して、機を見て○にあて黒が○の點に粘いだ時、白は○の點に抑へ、黒が○の點に曲つた時烈しく○に二段締をして、黒をして○に截らしめて○に絞らうといふ手を絶えず覗うて打つのである、随つて此ういふ場合は黒も亦十分慎重の態度を以て○方面の白の應接に心を用ゐねばならぬ、

黒廿二は廿四の點に締つておくのも決して悪くはない然し本圖の形勢を見ると右邊五子の白の餘勢を以つて此の廿二の點に冠せられると、黒は○の邊に備へねばならず、次で白に○と三々の要處を衝かれて、非常に地域を削られるの恐がある、又白は單に○から打込んで黒を廿二と飛して○いて

二十二ノ要所

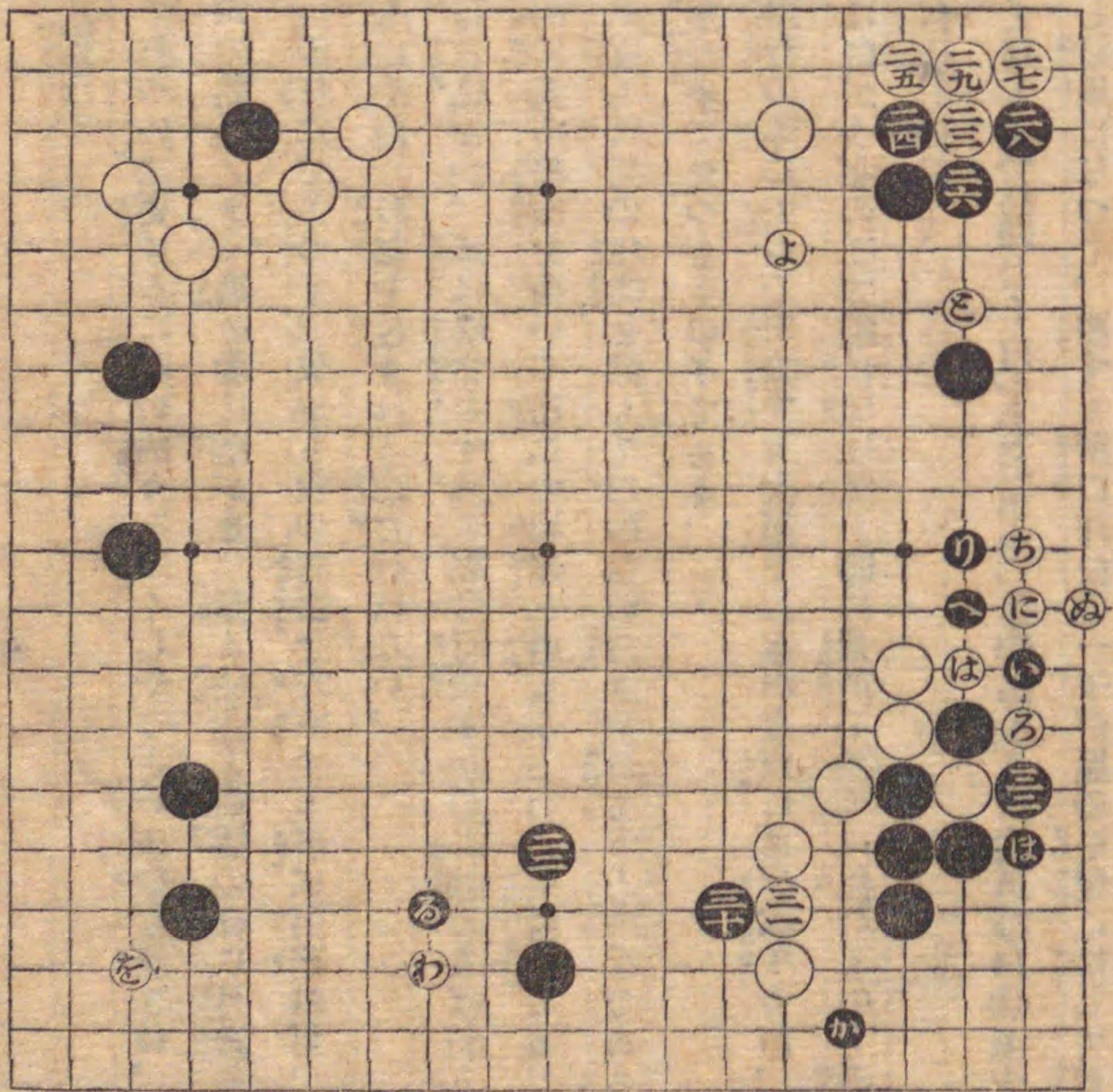
黒三十一手

黒三十二  
注意

種々の策を弄せらるゝの患があるから此場合二十二の單關は實に要所である、

白若し二十五と縛る手で二十六の點に行びて来たならば、黒は二十九の點に縛ねて振り替るも敢て差支は無、

黒三十は次に○に斜走して此の隅を治まらうといふ意味を含んだ手である、黒三十二と白の一子を提つたのは、右上隅の黒がまだ治まつてゐない即前述した諸種の味を含んだ此の一子を提つて不安の種を除いたのである若も此の一子を提らずして前述の様は白に三十二の點に下られ此の處を先手で白に締られた上⑤の邊から攻められる事になると、此の方面の黒は非常に苦しまねばならぬからである。



（局子三法石布）







三子第四局

黒四は趣向として此く打つが、本来は此の手は變化が多いから三子を置いた黒の立場としては如何であらうか、矢張り七の點に二間に夾返し白が二十の點に尖んだ時星下(●)に二間拓して置く方が紛れがなくて第一打ち易いのである、

但し此四も立派な定石の一つであるから決して悪いといふわけでは無い、

白五は圖の通り五と引くか、六の點へ行びるか、八の點に縛るか何れにしてもよいが只此の場合十三の點へ縛込む定石は宜しくない、何故なれば右下隅に黒の布石があつて、たとへ十三に縛込んだとしても四の一子を征に提る事が出来ぬからである、「互先定石二間夾之部参照」

白七の手を若し八の點へ曲れば普通定石の形に歸るのである、

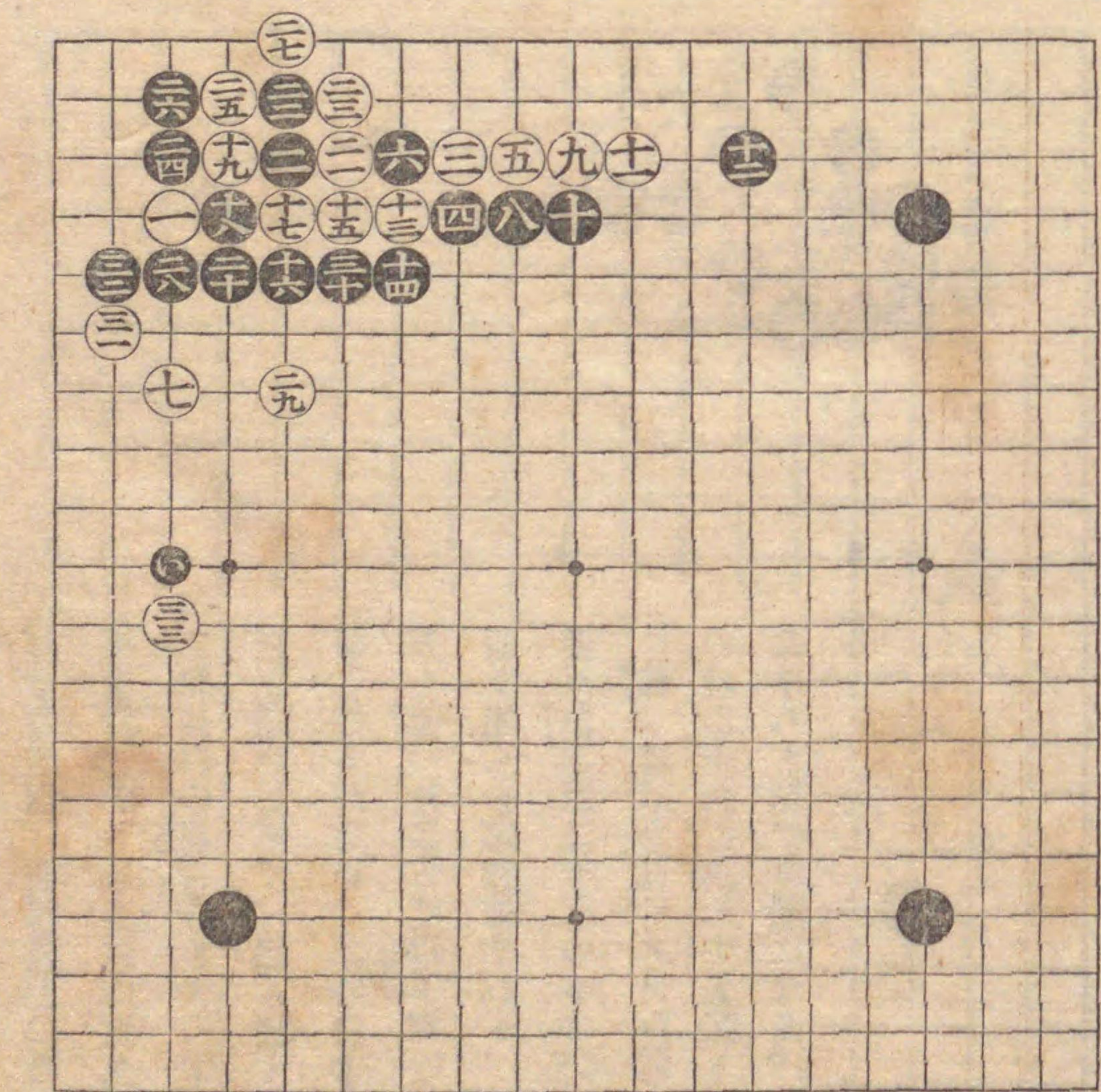
若又白が七の手で十三の點に截つたならば、黒は廿八の點に打つ手になる、(二間夾定石參看)

黒十二の手で十四に掛け粘ぐは普通であるが、多少緩慢い嫌がある、

此の十二は隅置石から恰ど都合のよい詰場所、且つ行びて行く白十一の頭を止める手と兩様に利いて居るから好い、

但し本圖の結果は只黒の着理を示したに止まつて此の結果から見ると黒の方は餘り香ばしく無いのである、乃で本圖は本圖としておいて實戰の際に應用す可き訂正着手を二十六頁に參考圖として掲げる事とする、

第三十三手迄



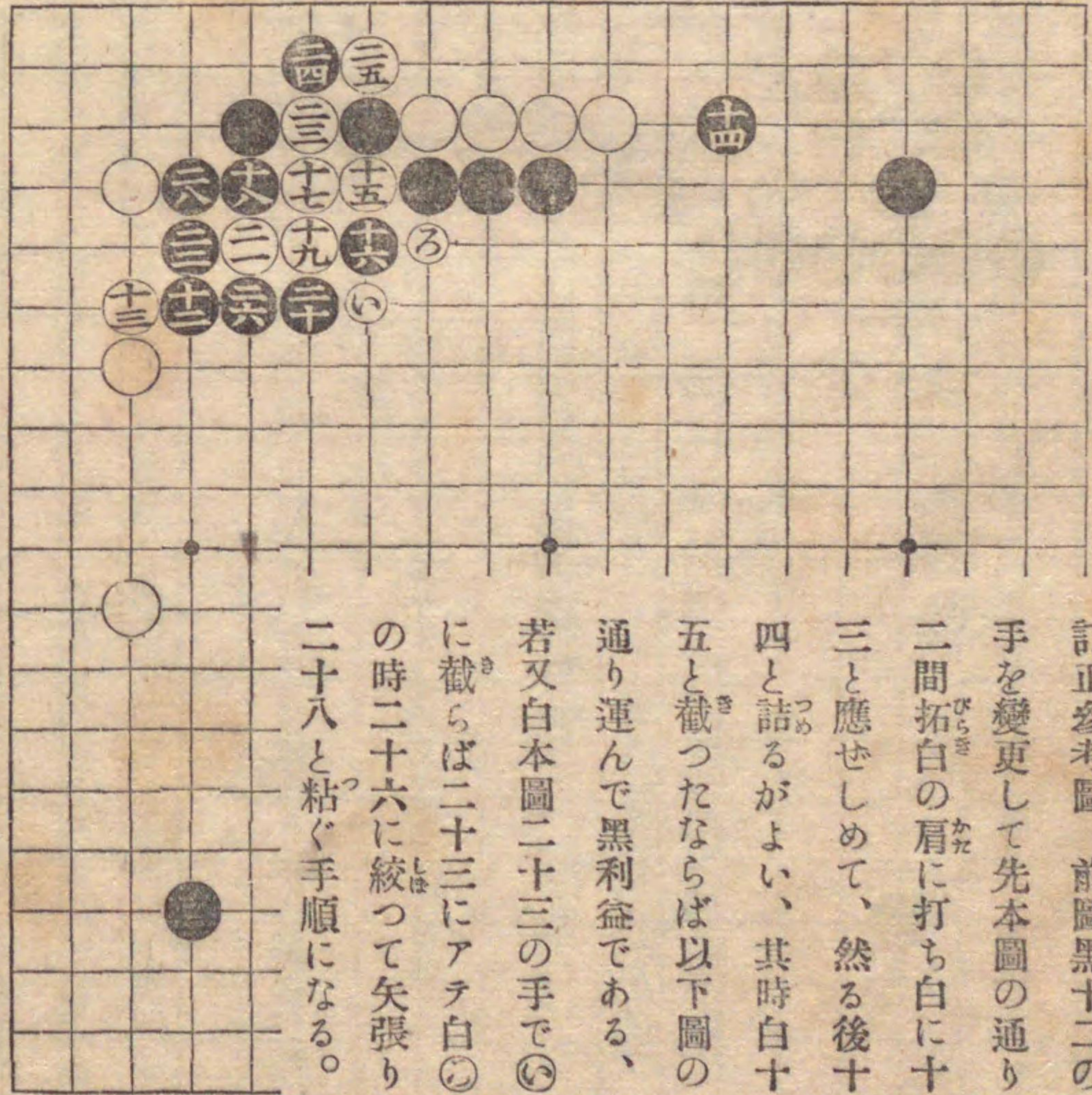
(局子三法石布)

「注」本圖で白が十三と截つた時、十四とアテ、白を十五と行ばして置いて十六と掛け白をクルクル廻しにした手ギツが面白いのである、又二十二と下つて一子増して提らせ之を利用して二十四、二十六、と締めつけ更に上から二十八と一子提つた所に妙味がある此の着理は「布石法三子第二局の十九頁圖中白二十一の手で詳解した所と同意である、白も亦三十の點の突出しのあるのに其を出す二十九と黒の缺點を窺うて三十に手を引かせ三十一と先手で裾の始末をして三十三と拓き上邊に黒の築いた堅壁の効力を削つた手段は面白い。



黒三十六を普通●に締るとして  
 も△印白の影響で尙隅には打込  
 があるから此く尖頂けて玆に先  
 手を取り三十八と星下に打ち白  
 の發展の餘地を奪うて暗に右上  
 隅への打込を防いだのである、  
 「注」若黒が三十六を●に下る  
 とすれば白は●に二間拓する  
 順序となる、其時黒打込を拒  
 いで●に飛ぶとするも●に守  
 るとするも如何にも此場合緩  
 慢である、若亦本圖の通り三  
 十六と尖頂けた後隅に味の残り  
 ぬ様に隅を守るとすれば●で  
 あらうが其では初に詰めた口  
 印黒一子が極めて愚に歸する  
 事になる乃で此く三十八と打  
 つたのである、白若隅三々に  
 打込めば隅に活を保つ代償と

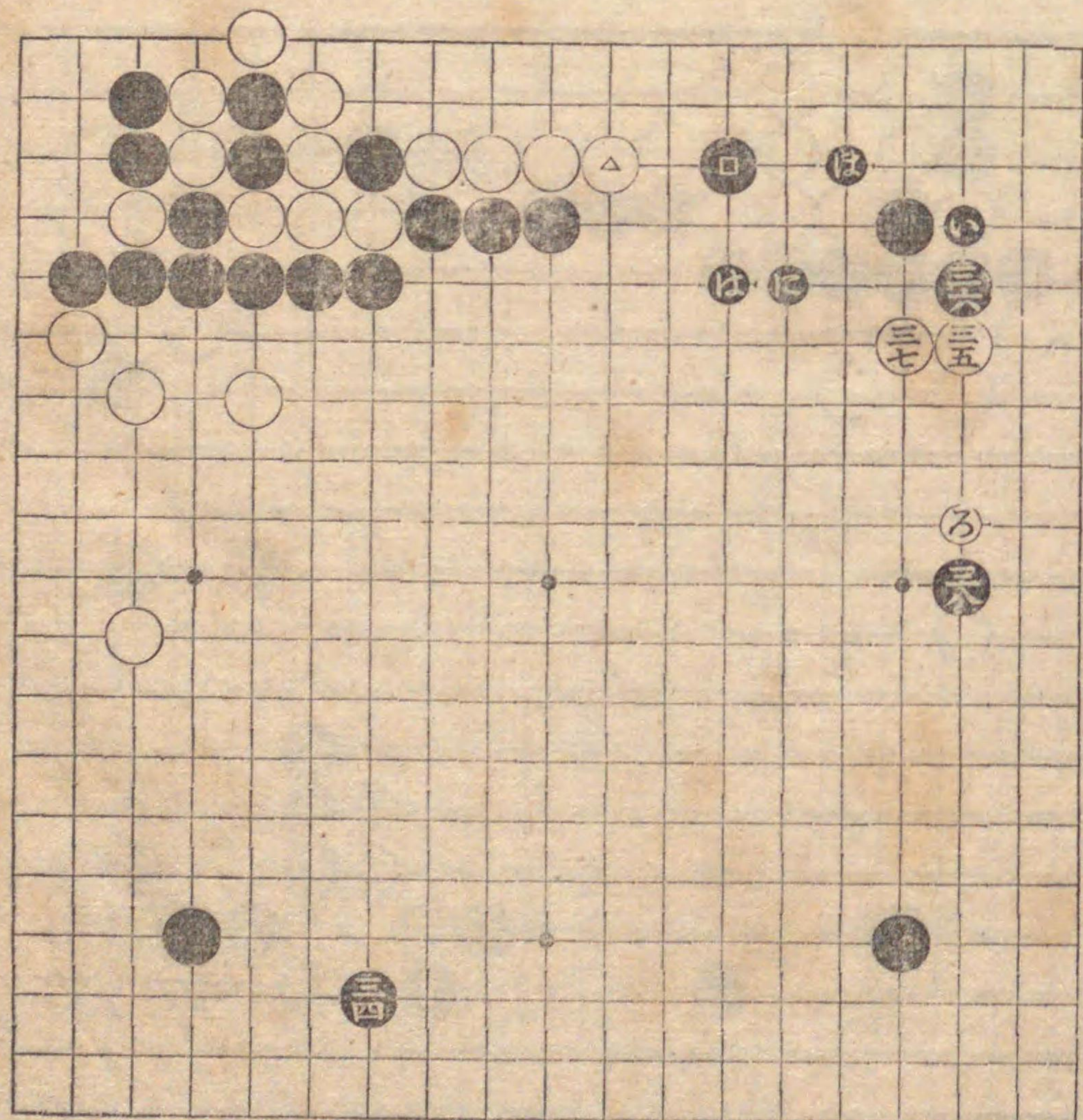
三七粘ぐ(訂正参考圖)



訂正参考圖 前圖黒十二の  
 手を變更して先本圖の通り  
 二間拓白の肩に打ち白に十  
 三と應せしめて、然る後十  
 四と詰るがよい、其時白十  
 五と截つたならば以下圖の  
 通り運んで黒利益である、  
 若又白本圖二十三の手で●  
 に截らば二十三にアテ白●  
 の時二十六に絞つて矢張り  
 二十八と粘ぐ手順になる。

第三十八手迄

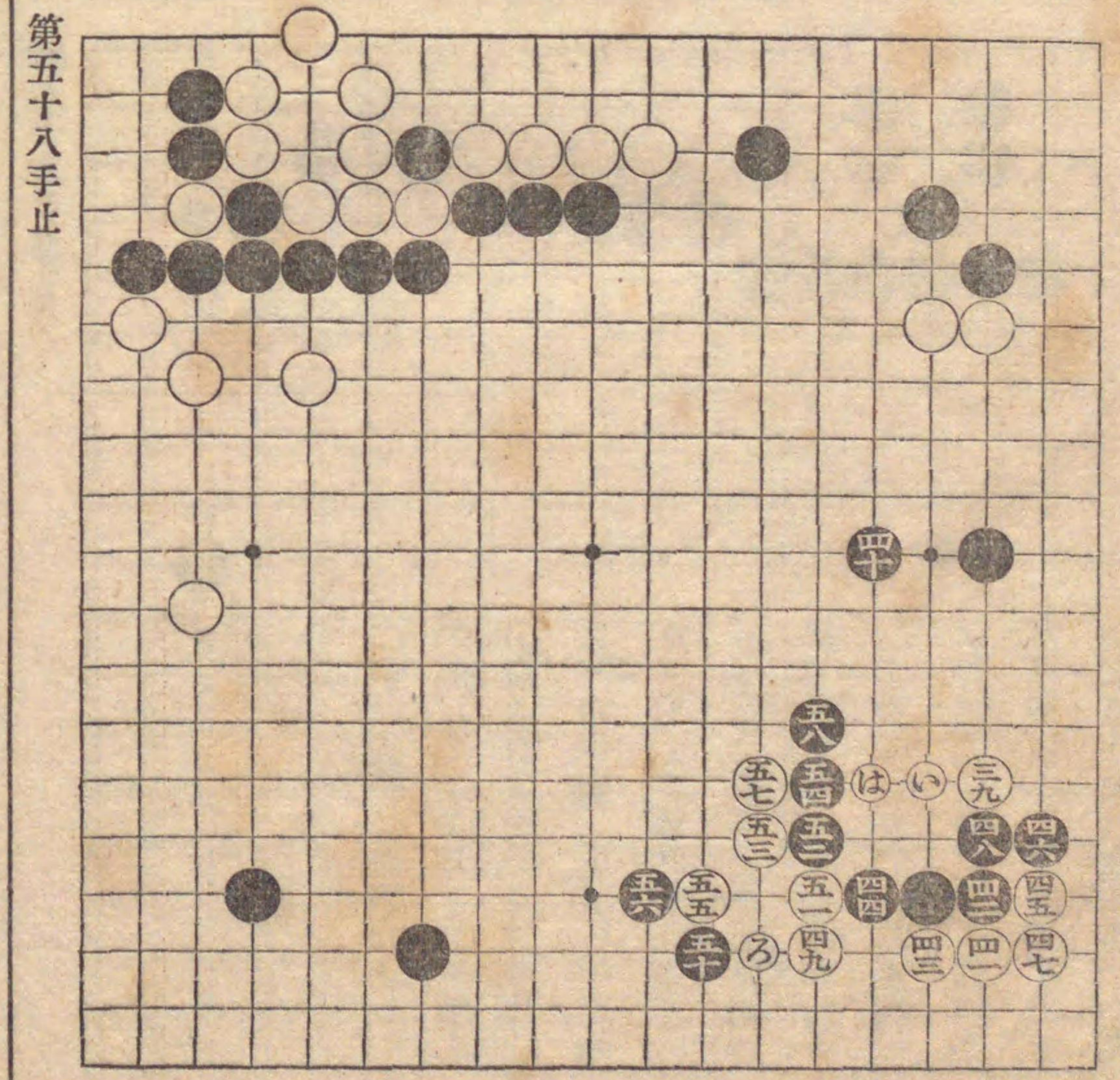
※して三十五、三十七の白は全  
 然窮境に立たなければならぬ  
 又此の二子の白の始末をすれ  
 ば自然に隅の打込は消える  
 事となる、即ち此の三十八の  
 一子あるが爲め白は代償なし  
 には隅に打込をする事が出来  
 ぬといふ譯である、又此の一  
 局部の様な形の時に黒が三十  
 八の點に打たず一路高く星に  
 打つ事がある、本圖の様に出  
 つのは白の發展を妨げるは元  
 よりであるが白を浮かして打  
 たうといふ時である、一路高  
 く星に打つのは白を低く活か  
 して、といふ時で此等は場合  
 問題と趣向問題と兩方から解  
 決せねばならぬ。



(局子三法石布)



黒四十の手は、若普通の場合ならば四十八に尖頂けて白を(三)に立たして五十一の點に飛ぶ所であるが、本圖は右上隅に已に二子連立の白の勢力があるから此場合若尖頂けて飛ぶ手順に出ると、次に白から四十の點に冠せられ白にいろ／＼手段を弄されるの恐があるから、先づ四十と單關して右上の白二子を益々究地に陥らしめ徐ろに白三十九の動靜を伺うた、  
 白四十一は振替る手である。  
 黒五十は五十三に斜走する手が一寸形の様に見えるが、すると白に(四)に行びられると後に(五)に飛ばれて中で活られるか、或は五十八の邊から覗かれる様な味がある、さりとて(六)の點に白の一子を壓しておくのも緩いといふ所から、五十と詰め自分の地域を造りつ、自然の調子を以て五十二、五十四五十八と此方面の地を治めたのである。

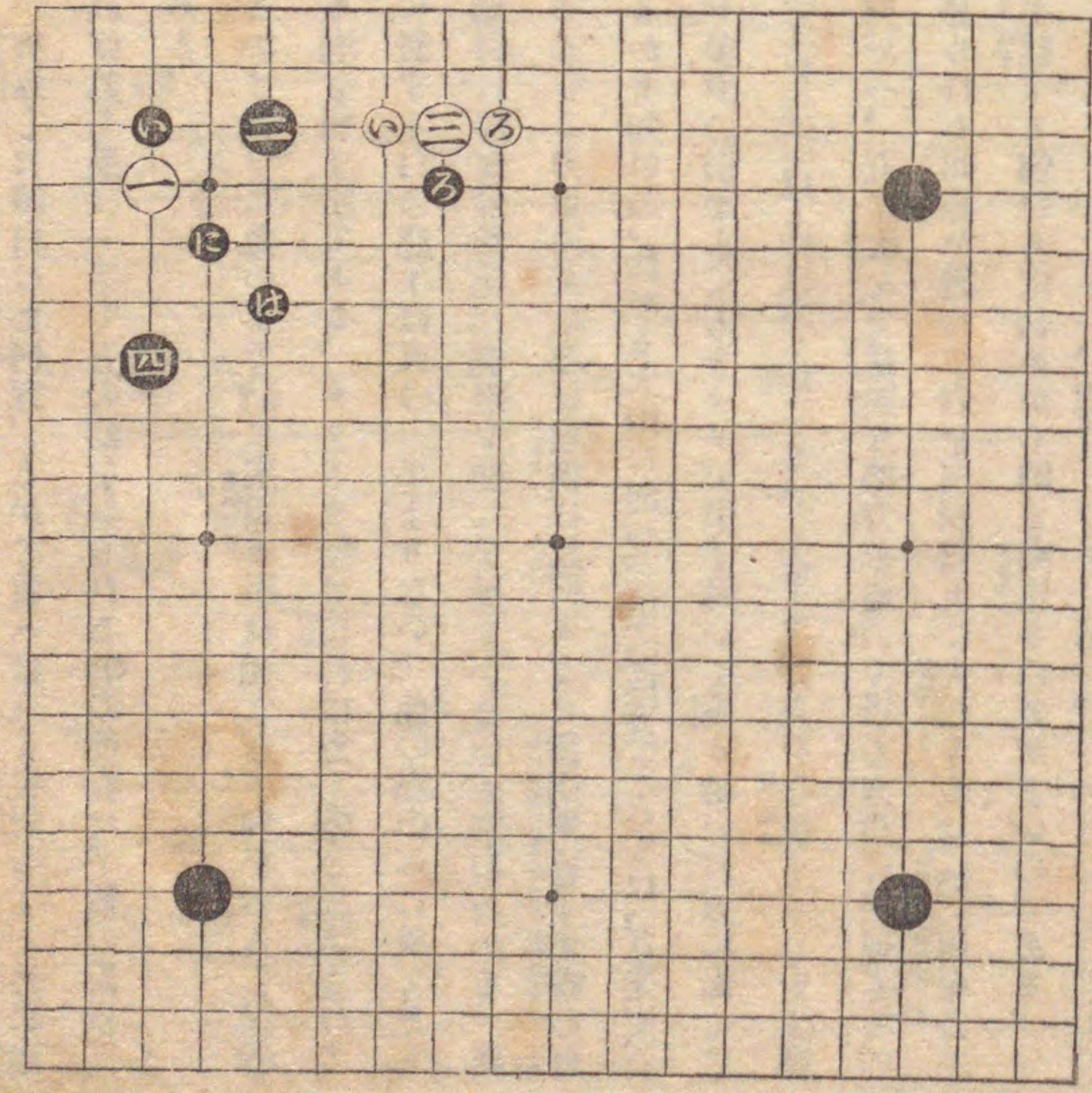


第五十八手止

三子第五局

白三は之を(一)の間夾(二)の三間夾其の何れにするも任意で、一に對局者の趣向次第である。  
 黒四は白三の夾撃に應じて二の一子を動き出すのも決して悪くはないが、此く二間に夾返すのが一番解り易くて、棋が廣くならぬだけ打ち易い。  
 「註」黒二の一子を動き出すとは、「互先定石二間夾の部」に指定してある打ち方即ち(三)の三々頂(四)の頭頂け(五)の二間飛(六)の斜走掛等を指すのであるが其の何れの打方を撰ぶとしても次で白の應手が色々あつて其の結果は如何變化するか解らぬ、

第一手より第四手迄



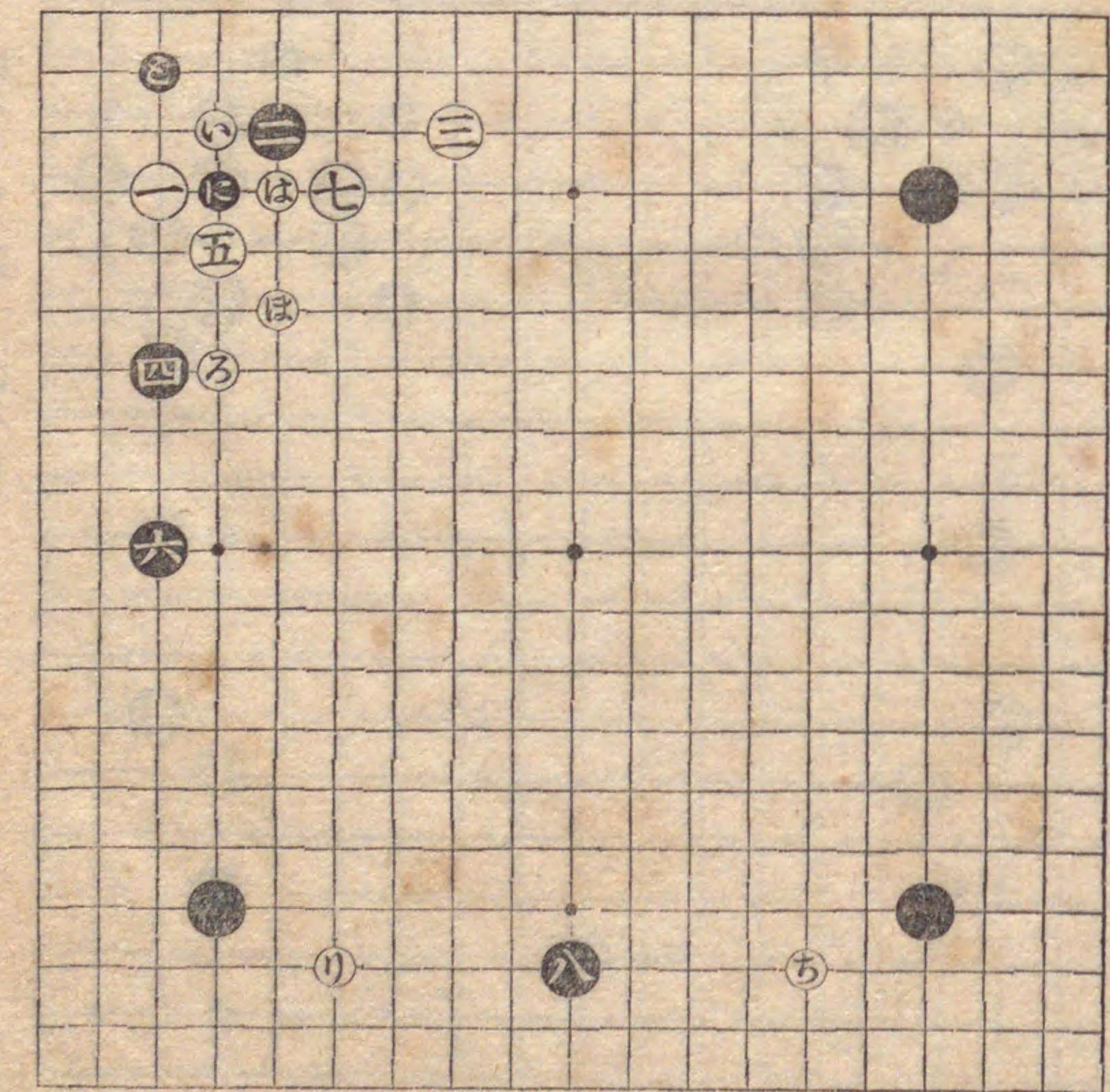
(局子三法石布)



乃で二の二子を犠牲として四と黒が夾返した時白は如何應じるかと言へば五と尖出るより外に途はないのである（若白が手抜をすれば忽ち黒に一手で五の點を鎖される其の慘害は、彼の置棋三手抜の結果より幾倍か甚しいのである、

然らば白は五の手で他に打方があるかと言うに此の手で③に尖頂る事は元より不利であるし又④に頂けるといふ事も遠理で甚しい不利を犯す手である、サリトテ④と頂れば忽ち⑤と縛込まれてイケナクなる、即ち黒四の夾返に對する白の應手は五の一手よりない、此の點のみに就て見るも黒四が次の白の應手を拘束して如何に局面の變化に制限を加へて居るかといふ事がわかる、要するに本局は三子の棋である、三子といふ力量の差は之を相撲に比例すると横綱對幕下十兩の取組である、或はより以上の差があるかも知れぬ、此かる大敵に向つた黒の注意としては、互先定石の状態の行はれる此の一隅ではヨシ多少の損をしてもキマリが早く附いて解り易い打方に出るといふのが第一の要訣である、黒六は之を二間以上に廣く拓くといふ事も、亦茲を手抜するといふ事もよろしくない、何故なれば已に白が一、五と尖んで鞏固な勢力を造つて居る方面に接近して四と打つてある所を、更に敵から乗せられる間隙を造つて六を三間以上に大拓するは禍因を蒔くものと言はねばならぬ、又此所を手抜する位ならば初めから四と夾返さぬ方がよいのである。白七は手抜してもよし、又⑧と尖む手もある、然し茲を手抜すると⑨と隅へ走られては黒に實利を

第一手より第八手迄(四手迄再掲)



(局子三法石布)

占められ白の姿勢が浮薄になる故先此に勢力を確實にしておいて黒の動靜を窺ふといふのは三子を置かした白としては極めて堅實な打ち方である。

「註」白が七の手で③に雁行するといふ意味は左邊の黒を壓して右方に大模様を造らうといふ手である詳細は已に従來二子局及三子局其他「互先定石夾返しの部」に講述してある通りである、黒八の着點が大場であつて且つ白が⑥及び⑦と來て下側に大模様を造らうといふ其の打方を制限する手である譯も已に詳述してある。

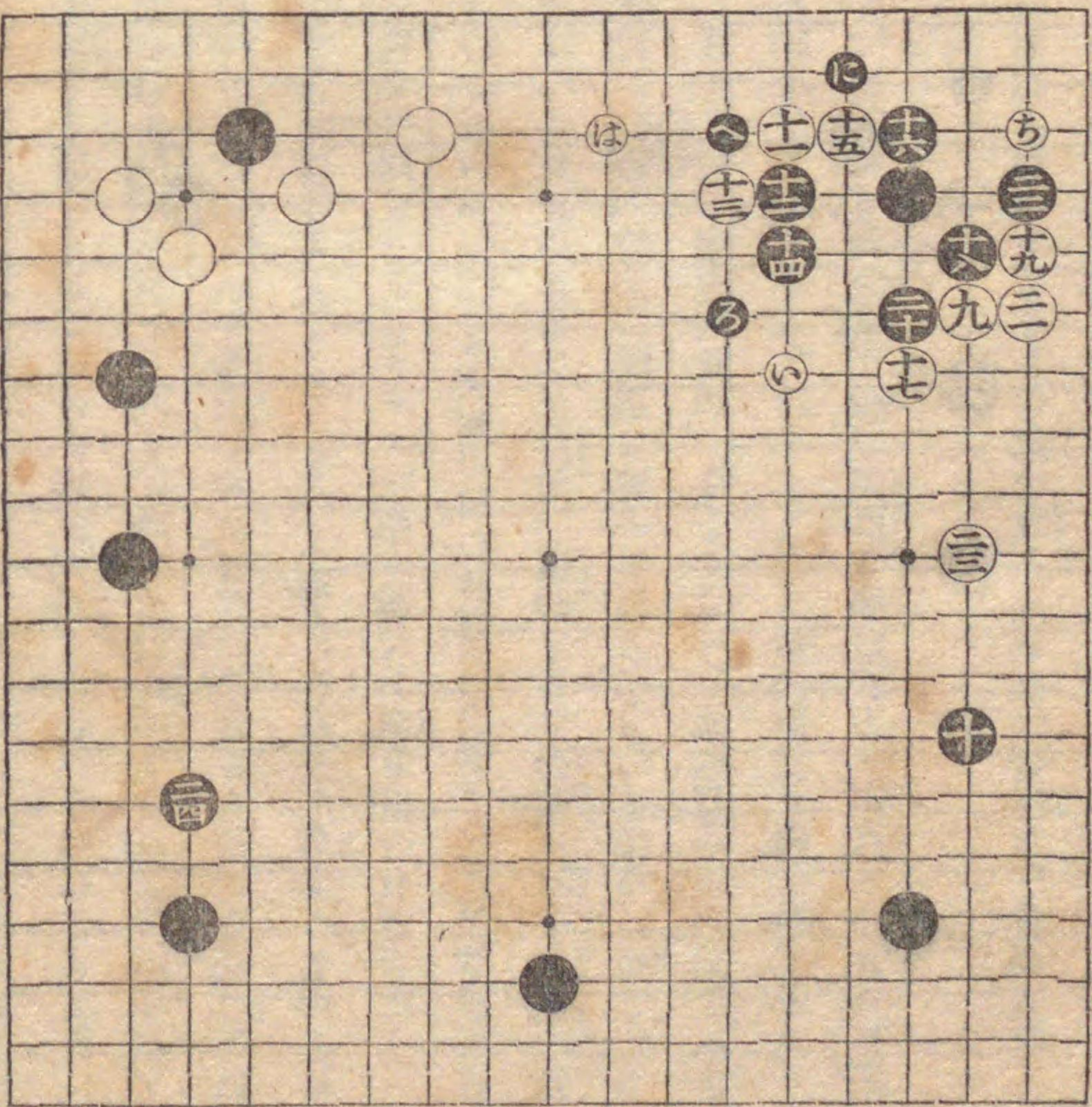


六手鳥渡  
氣付サル所

「註」百九の時黒十の手で十二と應じて打つたとして敢て悪いといふ譯はないが、其を此く十と打つのは白の勢力を一方へ傾注させ其の間に我が勢力の分賦を終へて局面を制限して打ち易くしやうといふ黒の策戦である。

白若二十三の手で㊦と飛んで来たならば黒は㊧と尖み白㊨と斜走すれば黒㊩と綽ね、次で白二十三と拓いた時黒二十四に飛んで居つてもよい。

「註」白㊦から黒㊧迄は此局部に於ける常用の應接である、白㊨は㊩の截を防いだので、黒㊩は白から㊪に夾頂けられる手の防禦である、白が此く㊫と飛んだとしても黒十のため妨げられて此の方面に大模様は出来ぬからツマラヌ白はやはり單に二十三の拓がよいのである(二子第五局参照)



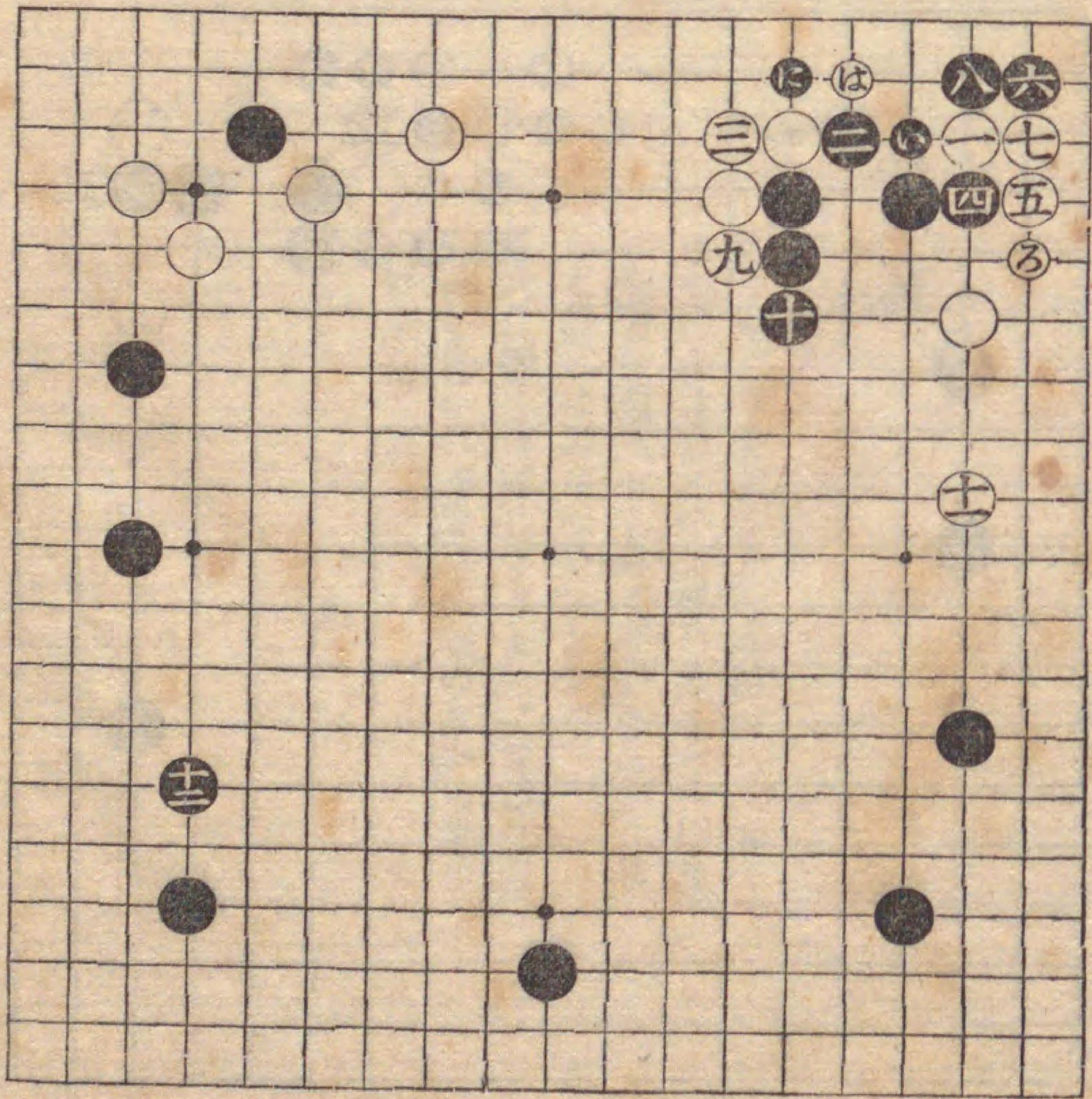
第九手より第二十四手止

三子第六局

(本圖は前局第十五手からの變化である)

黒一と隅三々へ打ち込んだのは黒の眼を奪うて之を浮かして攻めやうといふ策戦である。

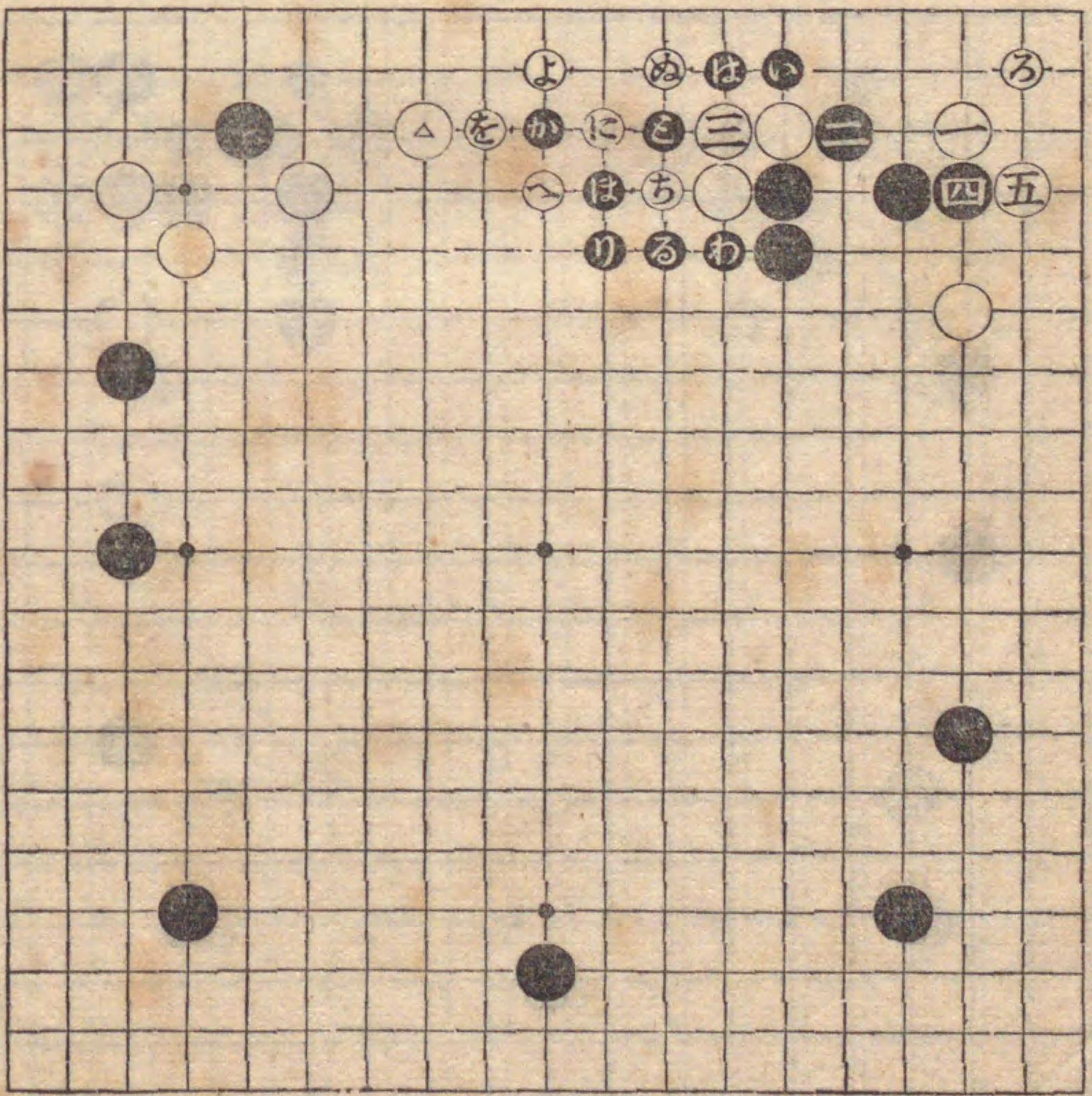
「註」黒六は白の缺點(七の點)を衝いて白の根據を奪ふ手である、本圖の結果若し㊱とダメが填まれば白は㊲に一着を補うて三子の連絡を計らねばならず又白若㊳に連絡すれば㊴から綽ねて截斷する手が出来る故黒亦㊵の綽若くは㊶の點の下りで六、八の二子を救うて置かねばならぬ、白九は先手で茲に一勢力を加へ上側の白地を手厚くし、黒を十と行びさせ自然の手順を以て十一と拓いたのである。



第十二手止



布石の關係を離れ單に此の一部分に就て言うに前圖黒六と打つ手で①と縛る手もある、其時白②と掛粘ぎ黒③と行び白が④と飛んだ時黒⑤と頂けるが手筋である（此の一着によつて白の形を愚に歸せしめ、先手を取つて外面を塗るのである）以下符號の手順を履んで黒となつた時白若手拔をするに黒⑥と締め白⑦の點を粘ぎし時⑧と截る、手がある故白⑨と掛粘ぎ黒⑩白⑪となるのであるが本圖は左方に最初の二間夾即△印白があるから黒若⑫と截つても白に⑬と征に提られるから、前圖六と打つて⑭に縛ねなかつたのである。

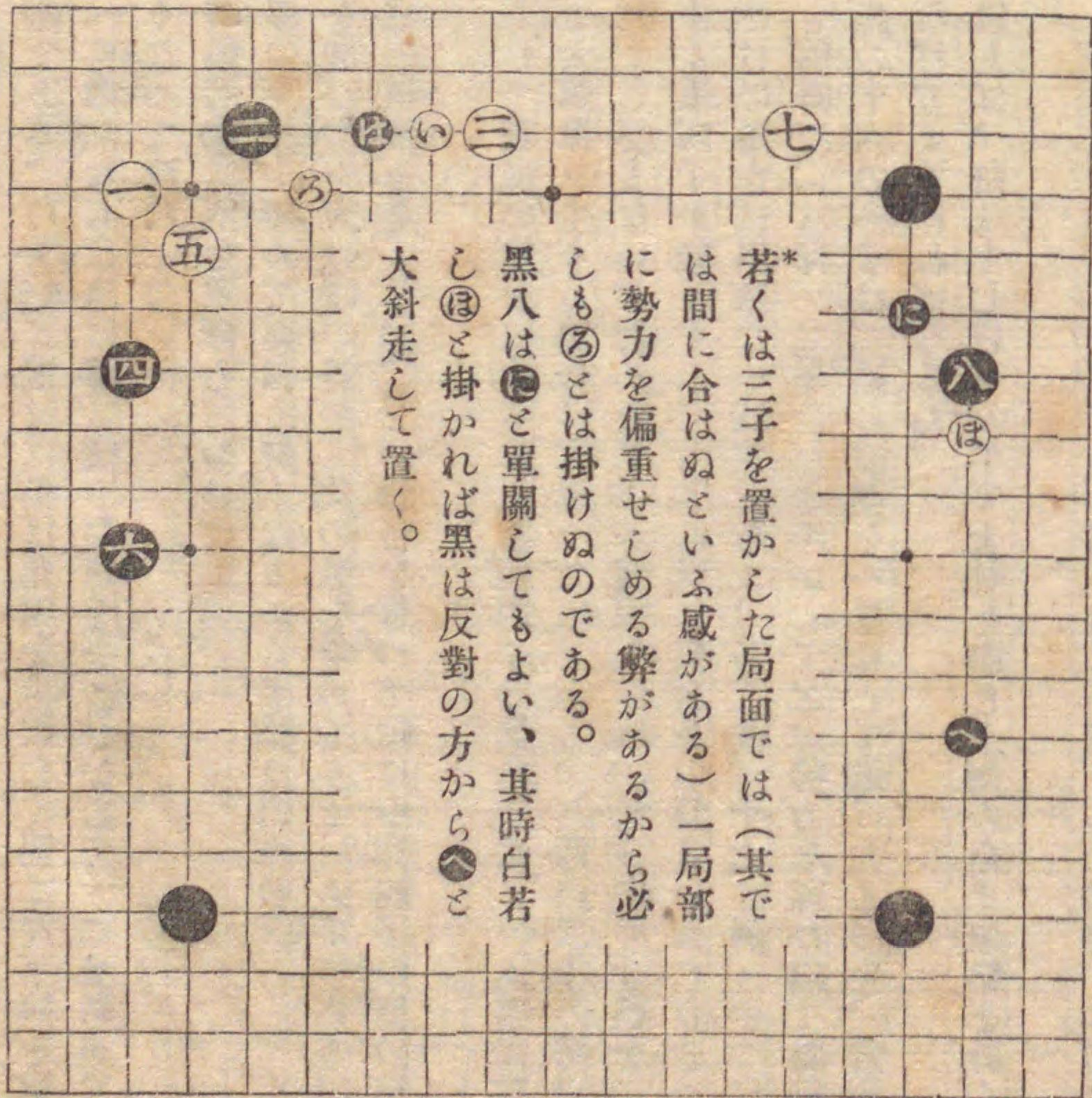


三子第七局

「註」白が此く三と三間夾に來た時に黒が四と二間に夾返すのと、白三が①と二間夾である時に黒が二間に夾返すとの差を比較すると黒に取つては本圖三間夾の時の方が餘程樂である、其は言ふ迄もなく若白三が②の二間夾であれば③の一手で忽ち外部を閉鎖されるが、本圖三間夾の場合には白に④と掛けられても⑤と飛んで悠然として活る事が出来るからである。

白七は、若是が互先の局であれば（單に此の一局部として論ずれば）此の手で⑥と掛けて終ふのが比較的利益であるから先づ大抵は掛けるのであるが、二子

第八手迄



若くは三子を置かした局面では（其では間に合はぬといふ感がある）一局部に勢力を偏重せしめる弊があるから必しも⑨とは掛けぬのである。

黒八は⑩と單關してもよい、其時白若し⑪と掛ければ黒は反對の方から⑫と大斜走して置く。



黒十は此の場合●と押し白○の時●と盤つて居ても敢て悪くはない、  
 白十一は○と飛んでも是亦差支ない處である、白若○と飛べは黒は此處を手抜して●と左下隅を單  
 關しておく、後に白が十五の處へ抑へて來たならば黒は●と窺き白に十一と粘がして十二と斜走す  
 る手になつて九以下數子の白は手重くなつて面白くない。

○問 本圖の通り白が十一と行びた時黒若●と隅を單關しておけば如何、

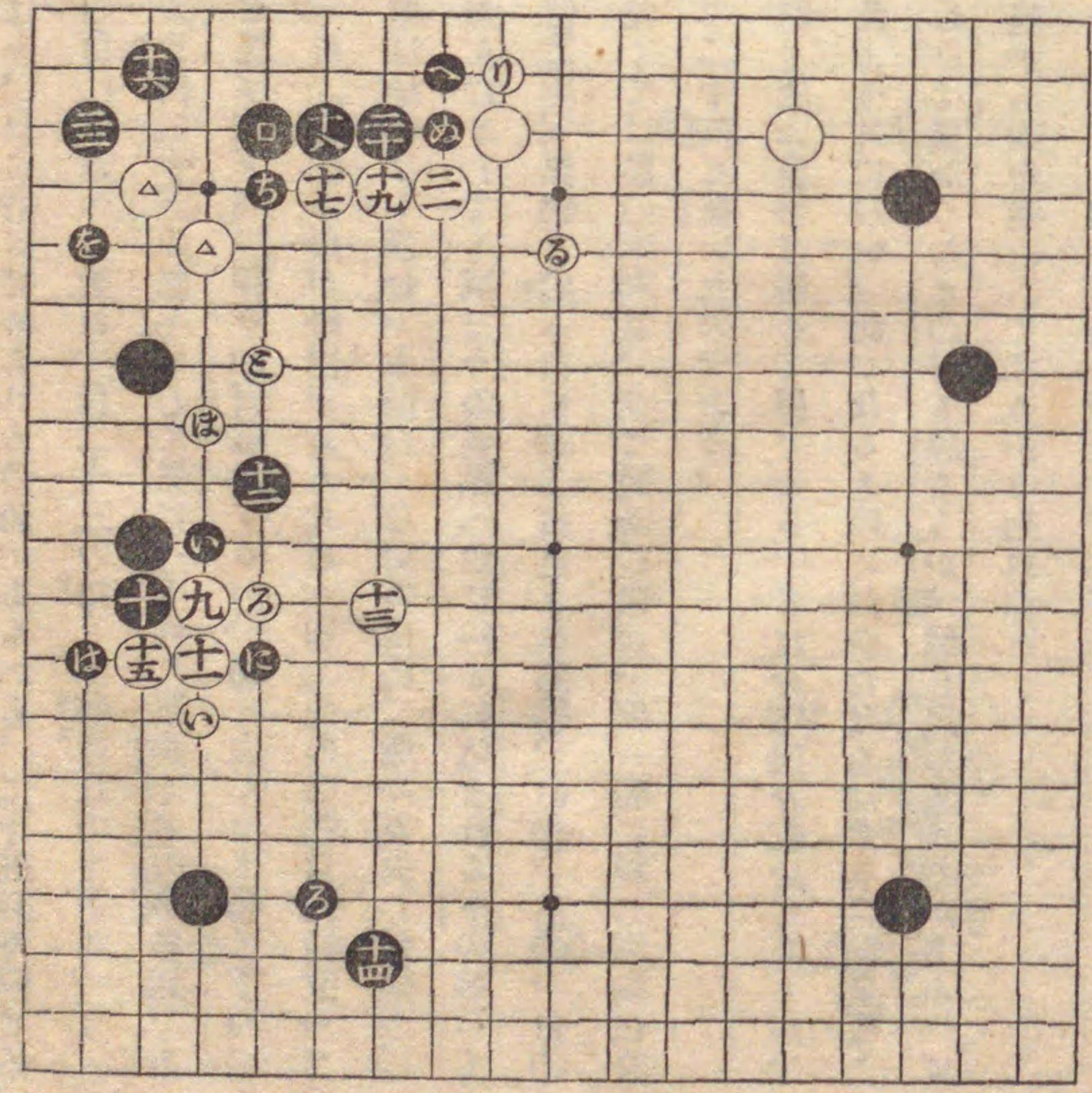
△答 其時は白に○の處へ押されて黒の姿勢が極めて面白く無くなるから手抜は出來ぬ。

白が十五と抑へたのは、一方左下隅を覗ひ、一方は⑩の邊から此の黒を攻めやうといふ手である、  
 黒が此の時十六と隅へ走つたのは自己の根據を造り(△印白)の根帯を奪つて暗中側四子の黒の援  
 としたのである。

「註」 已に一方から白に十五と曲られて發展の途を阻止された左側四子の黒の安危といふ事は左  
 上の△印二子の白の強弱といふ事と大關係を生ずる場合に立至つたのである、△印白二子の勢力  
 が弱ければ左側四子の黒は敢て心配する要もないが若此の二子が強固になれば黒は何等か備をし  
 なければならぬ、所が今此の側にある黒四子が動くとしても其は單に黒自身の備といふに止まつ  
 て附近の白に痛切な感じを與へるだけの動作は出來ない状態である、乃で先づ十六と隅へ走つて  
 (□印)黒一子の自身の根據を造ると同時に(△印)二子の白を浮かして之が勢力を奪ひ以て間接  
 に左側四子の黒を援けてをる、即此の十六の一子は三種の活動を一舉にして遂げたもので、常用  
 の着手ではあるが、此の場合巧妙な打方と言はねばならぬ、  
 已に黒十六の爲に根據を顛された以上は、白は十七以下の手で大勢を制し上側の白と連絡を計ら  
 ねばならぬのは必然の手である。

黒二十の手で普通此の形の定石である●の點へ走らぬのは、此の場合白に手抜されて●若くは○の

第二十二手迄



邊へ着手されるのを恐れたから  
 である。  
 「註」 黒が二十の手で●へ行  
 けば手抜されるの恐があるの  
 に本圖の様に二十と押せば何  
 故白は手抜が出來ぬか、其は  
 白若し二十一を手抜すると●  
 の出截二十一の綽出しがある  
 からである、尙黒二十の手で  
 ●と行き白が之に應じるもの  
 としても、黒●、白○、黒●、  
 白二十一、黒二十二、白○、  
 の尋常應接を遂げた結果上側  
 の白が堅固に治るから黒二十  
 は之を避けたといふ意味も多  
 少含んで居る。  
 黒二十二は○の盤りを見て飽迄  
 も⑩の來攻に備へて居る。

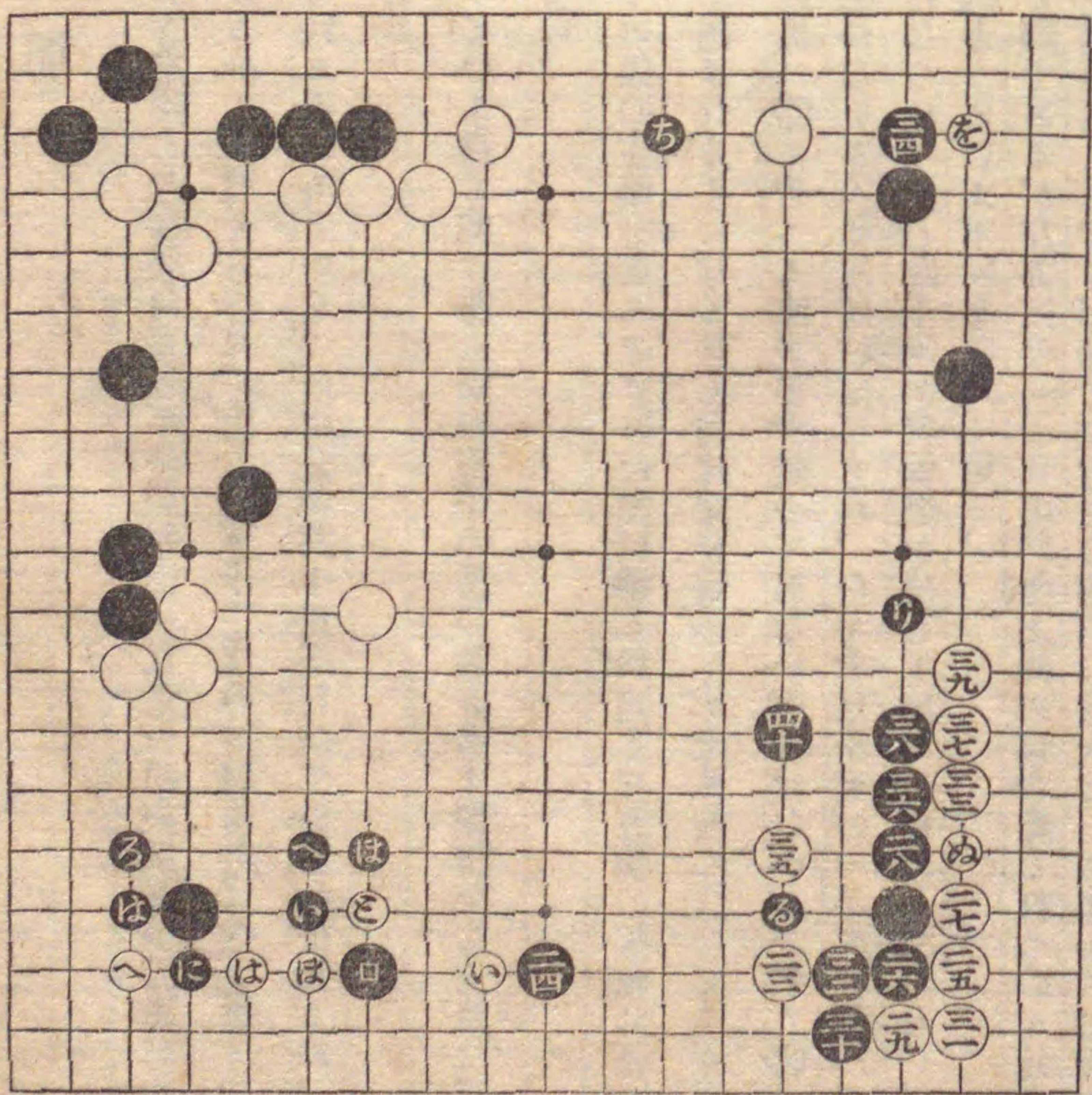


白二十三の時、黒若三十六の點に飛ばし、白に㊦と詰められるの恐があるから、二十五以下隅との振替を豫想の上二十四と打ち左下隅の自己の備へと兼ねて白二十三の拓きを妨げたのである。

「註」 單に右下隅の一局部から言ふと白二十三の應手として黒は三十六に單關するのが普通であるが、次て白から㊧と詰められると黒は左下隅の備を如何處置するか、㊨と尖んでも㊩と下つても其の影響を少しも附近の白に與へぬ（左側の白が堅固であるため）即ち此の堅固な備の立つて居る敵に接近して子を運ぶといふ事は如何なる場合でも面白くない譯は已に屢々繰返した通りである、さりとして白㊪に應じて㊫と飛んだとしても隅三々の要點へ白に㊬と打込まれる隙の残つて居る以上はツマラヌ手である、結局は白㊭、黒㊮と尖み白に㊯と打込まれ黒㊰、白㊱、黒㊲、白㊳の歸着を見る位のものであらう、此くては黒の不利益、其と同時に白が下側一帯に得る利益は大であるから、黒は隅を手抜きして二十四と拓いたのである、

元來此の(□印)黒から又低く二十四と運ぶ姿勢は極めて愚である、とは今迄屢々説いてある所であるが此の場合に於て取る手段は此より外にない、此くなるものと知つたならば最初(□印黒と)大斜走する手で㊴と一間高飛しておけば良かったとの考も起らうが、然し黒が㊵と初からあれば白も亦二十三とは打たず或は㊶の邊から策を廻らして來るかも知れぬ」  
白が早く二十九と縛るのは三十三と一間飛する爲めである。

第四十手止



——(局子三法石布)——

此の三十三は㊶の行びを一步働かしたものである、

黒三十四は自己の締りと同時に㊷の打込を覗つた手である、

白若し三十九の手で四十の點へ飛んで來たならば黒は㊸と單關しておけばよい。

「註」 黒若し三十四の手で白二十三の頭を㊹と縛ねれば此の白の生命を茲に刺す事は出來るが其の代り白に㊺と右上隅の要點を犯されて其の實利を奪はれる上に、白地へ㊻と打込む機會を逸して終ふ結果に歸するかも知れぬ。



三子 第八局

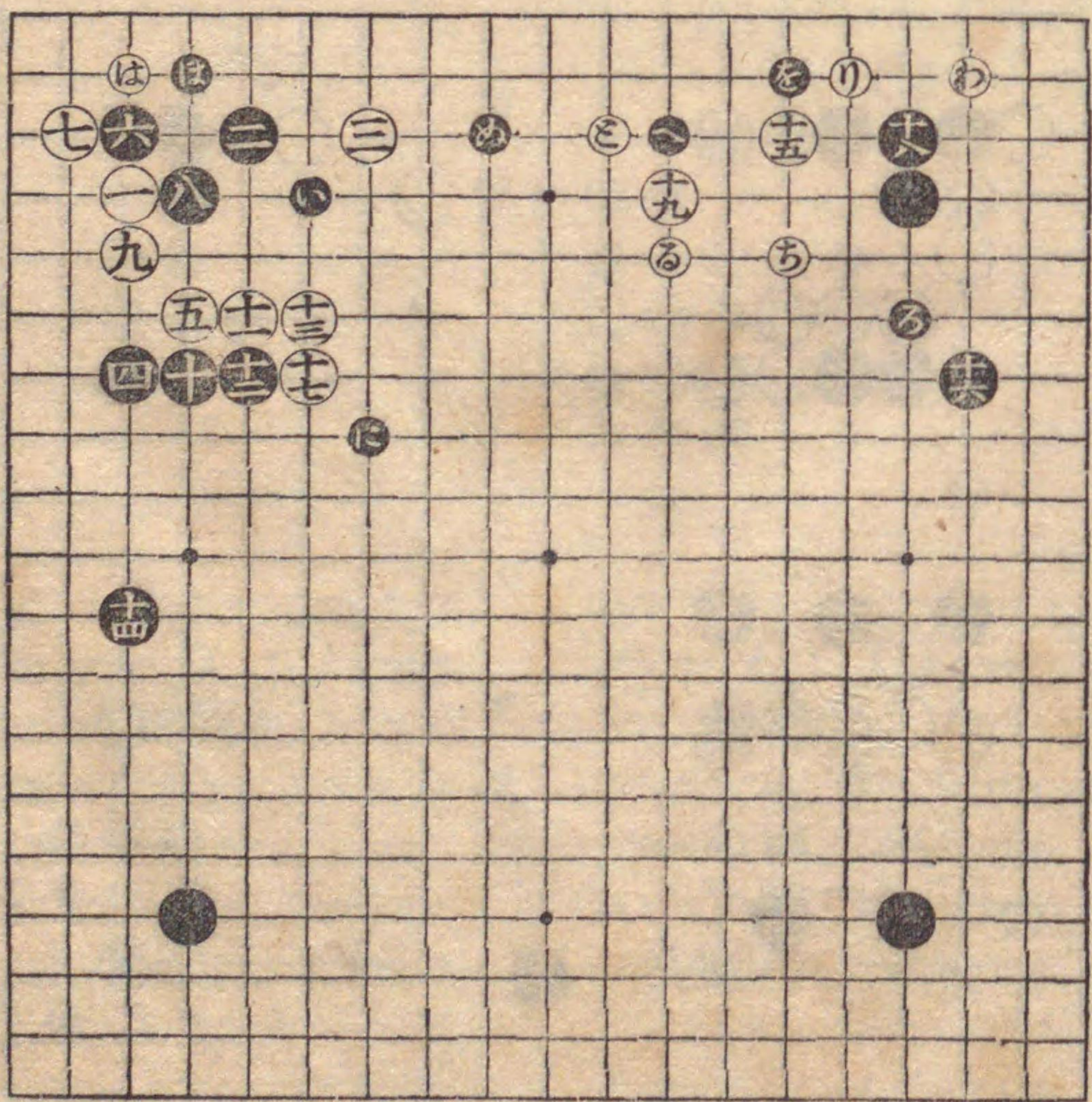
「註」 一間夾の部二間夾返の定石を應用した本圖白五の手の説明は「互定一間夾第五十五圖第六十三」黒五の手の説明と同意であるから參看せられたし黒六以下十三迄の説明も茲に之を畧す、黒から①と白三の肩に打つて出られる手があるから、白は是非共十三迄行びておかねばならぬ、随つて黒十二迄の押は利く譯である。

白十五は上側一帯に廣く地を劃さうといふ意と共に左上隅の三子の黒の動き出す豫防をも兼ねた手である、黒十六は②と單關してもよい、

白十七の手で若し③と縛ねて隅三子の黒の生路を奪ふとすれば黒は④と斜走して左側の黒地に雄大を加へると同時に上側の白の模様を消される手になるから白は之を嫌つて十七と曲つたのである。

「註」 白に⑤と縛ねられても尙ほ黒は⑥と押へる味が多少残つて居ない譯ではないが、然し⑦と白に來られては先づ隅の黒に餘喘はないものと思はねばならぬ、白十七は十五の一子と相待つて益々上側一帯に宏壯を加へる事になつた、然し左上隅が尙餘燃を残して居るのは致し方がない。黒十八は隅を堅めて併せて⑧と打込まうといふ手段を含んで居る、白十九は本來なれば⑨と二間拓する處であるが左方三の一子との均衡上此の場合此く打つのが適當である、然しながら此の一着は右上隅の黒に及ぼす影響と左方白の布石の雄大といふ事から打算す

第十九手迄



ると⑩と一間に飛びたい位の處である、然し右上に黒十八の下りの來た後であるから、今若し白が十九の手で⑩と飛べば、忽ち黒に⑪と打込まれるは明白な譯で、其の時たとひ白が⑫と尖むとしても黒は手抜して⑬に拓き、白が折角計劃した上側雄大の形勢は茲に破壊せられる事になる、又白⑭に尖ます⑮に冠すれば黒に⑯と頂け盤りをしられる、といふ恐があるから、白は⑩と單關したくても出來ぬ即十九と斜走圍ひを以て満足してをらねばならぬ。

「註」 白⑭の時黒⑮と拓けば白に⑯と隅を犯されるが然し此の交換は黒の方利である。

(局子三法石布)



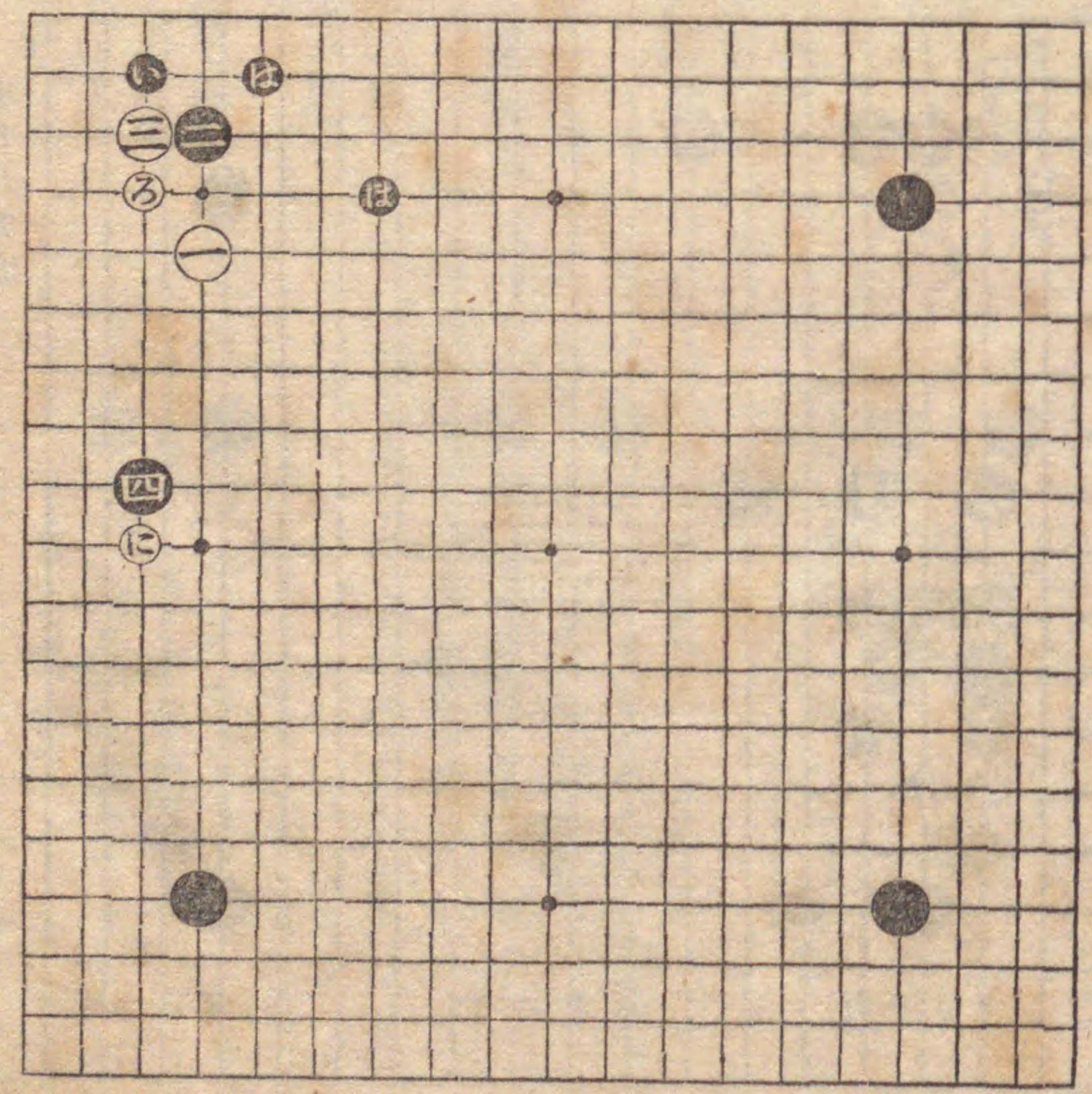




手 黒ニ必然

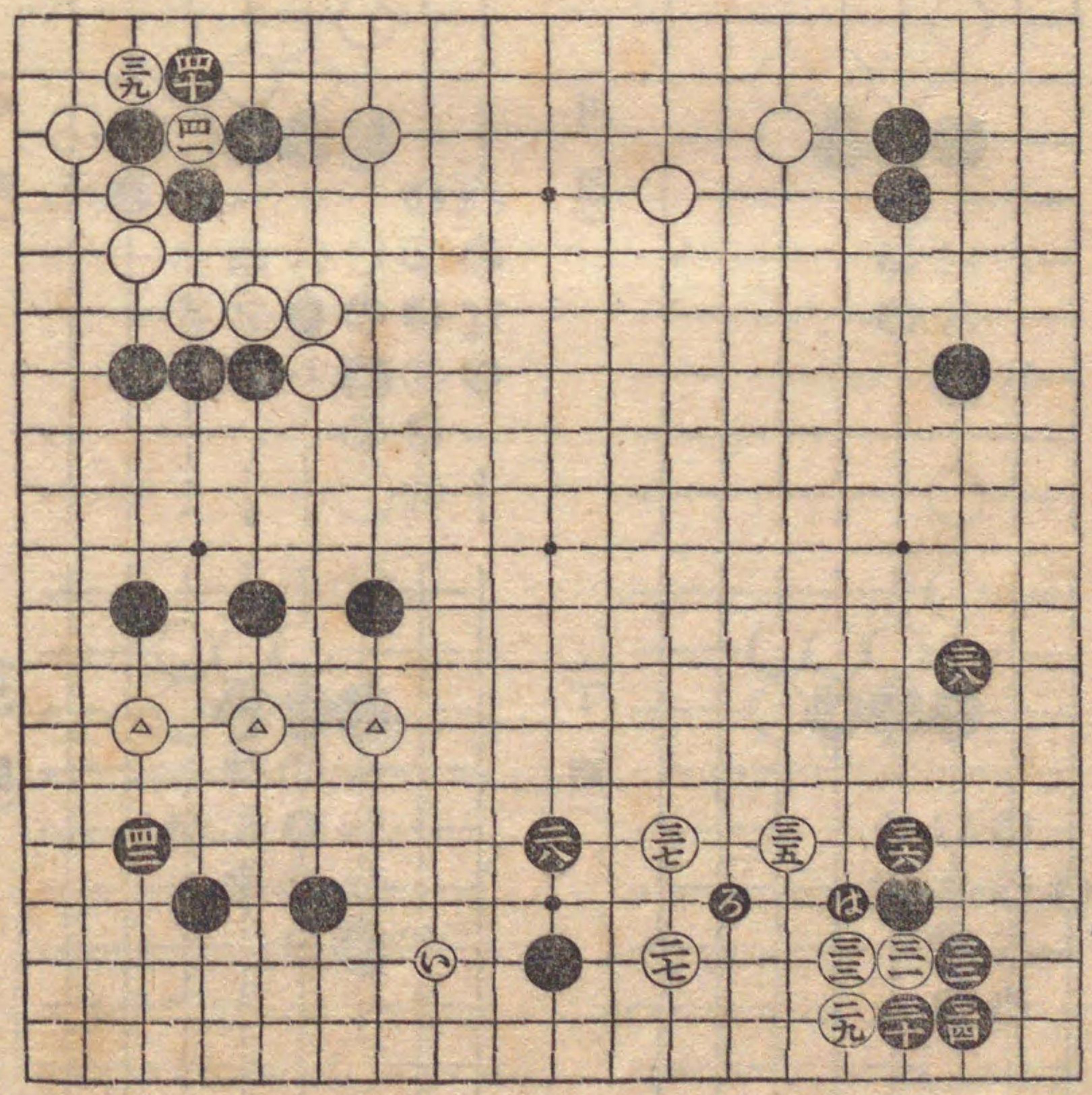
白が一と高目に打つたに就ては別に深い意味も大した策戦もない、大體此の高目に含む意味合は布石總論及互先定石の緒論に於て説いた通りであるが、茲は開局第一着手で別に全局面に何等の場合問題が起つて居るといふ時機でもない、唯(四)と小目に打つのが普通であるが白として(三)と目外にか或は此く高目に打つても敢て差支はない、と心得ておけばよい、  
 黒二は必然の手である、白一に對して之より以外の打方をすれば不利に陥る、  
 黒四は此の方面に白の大地を造らすまいといふ趣向であるが、此の手でやはり(三)と綽ね白(三)、黒(四)、白四の點若くは(三)、黒(三)と普通定石に運んでも敢て悪くはない。

三子 第九局



白二十七は(三)の打込を覗つたので黒二十八は之を防禦したのである、  
 黒三十は單に三十一の點へ下つて居てもよい、  
 已に黒三十六と堅固に打たれた上は或は黒に三十七の點若くは(三)の邊から犯されるの恐があるから之に備へて白は三十七と手堅く打つたのである。  
 「註」 白が三十七と堅固に打つたのは△印三子の白が薄弱であるから暗に之を凌ぐ準備ともなつて居る。  
 白若し三十五の手を單に三十七と打ては黒は(三)と押して白の缺點を衝いておくがよい、  
 白三十九の時黒四十と抑へ此の切味を利用して四十二と隅を治り△印三子の白を浮かす手段が面白い。

第四十二手迄



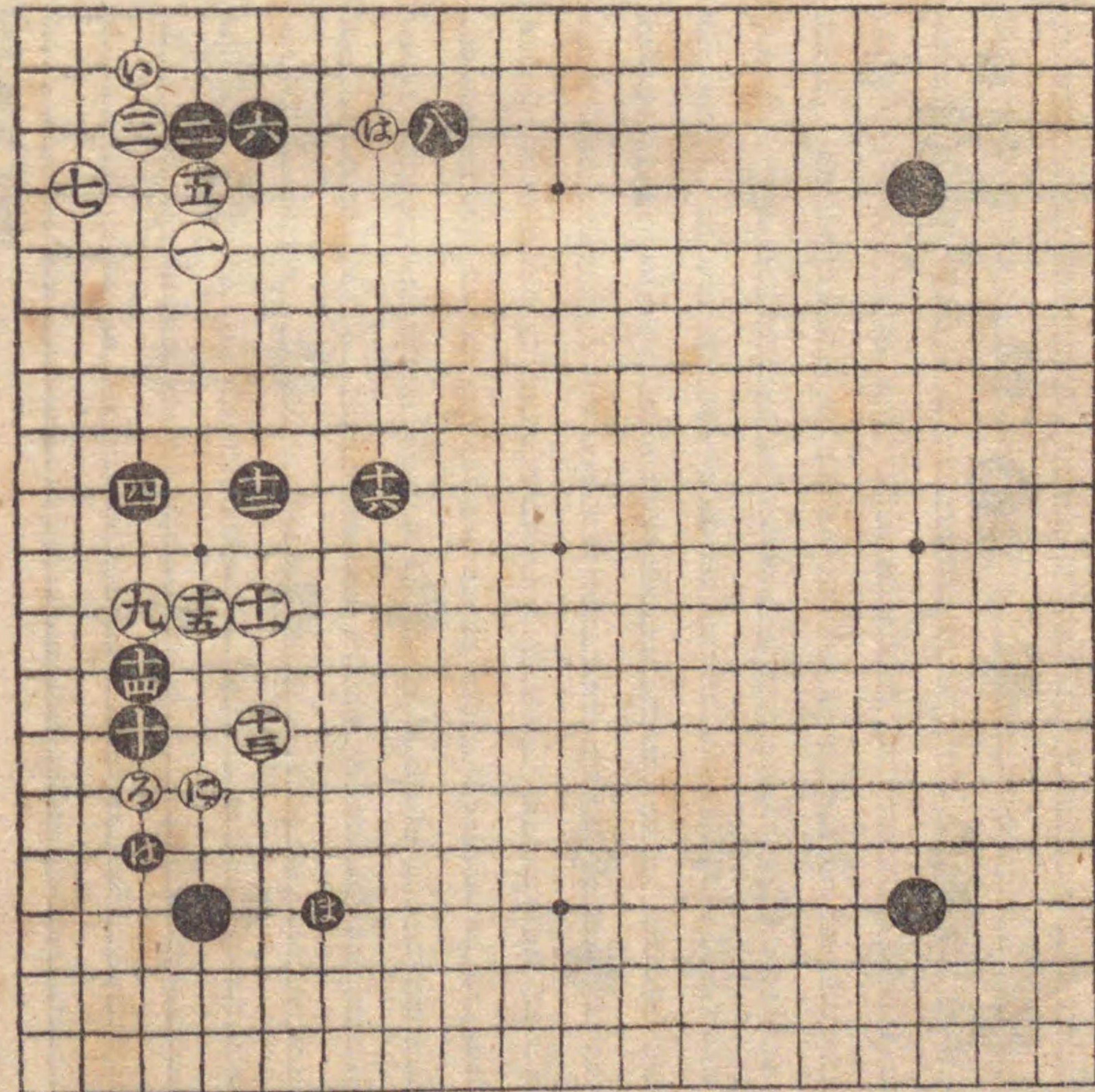


手技、次第  
又、敵

白九、意

黒十、十一、  
手順味、三

「註」白五以下黒八迄は、黒四を手抜した場合に於ける普通定石である、黒四の距離が若し遠ければ、白七の手で⑥と下る事もある、黒八は必ず打たねばならぬ手で、誤つて之を手抜きすると忽ち白に④邊から攻立てられて一局の敗因を茲に醸す事になる。  
白九は黒四を夾攻めて此の側に黒の大領域を造らすまいといふ手である、  
黒若し十の手を單に十二と飛んだならば、白に②と拓かれ、次で黒③と尖頂け、白④と立ち黒⑤と飛ぶ様な手順になつて茲に白の地が出来、乃で黒は先手で十と夾返し、白が地域を拓かうといふ手を妨げ、十一と飛ばした後、自ら十二と飛んで四の凌ぎとした手順は最も佳い、



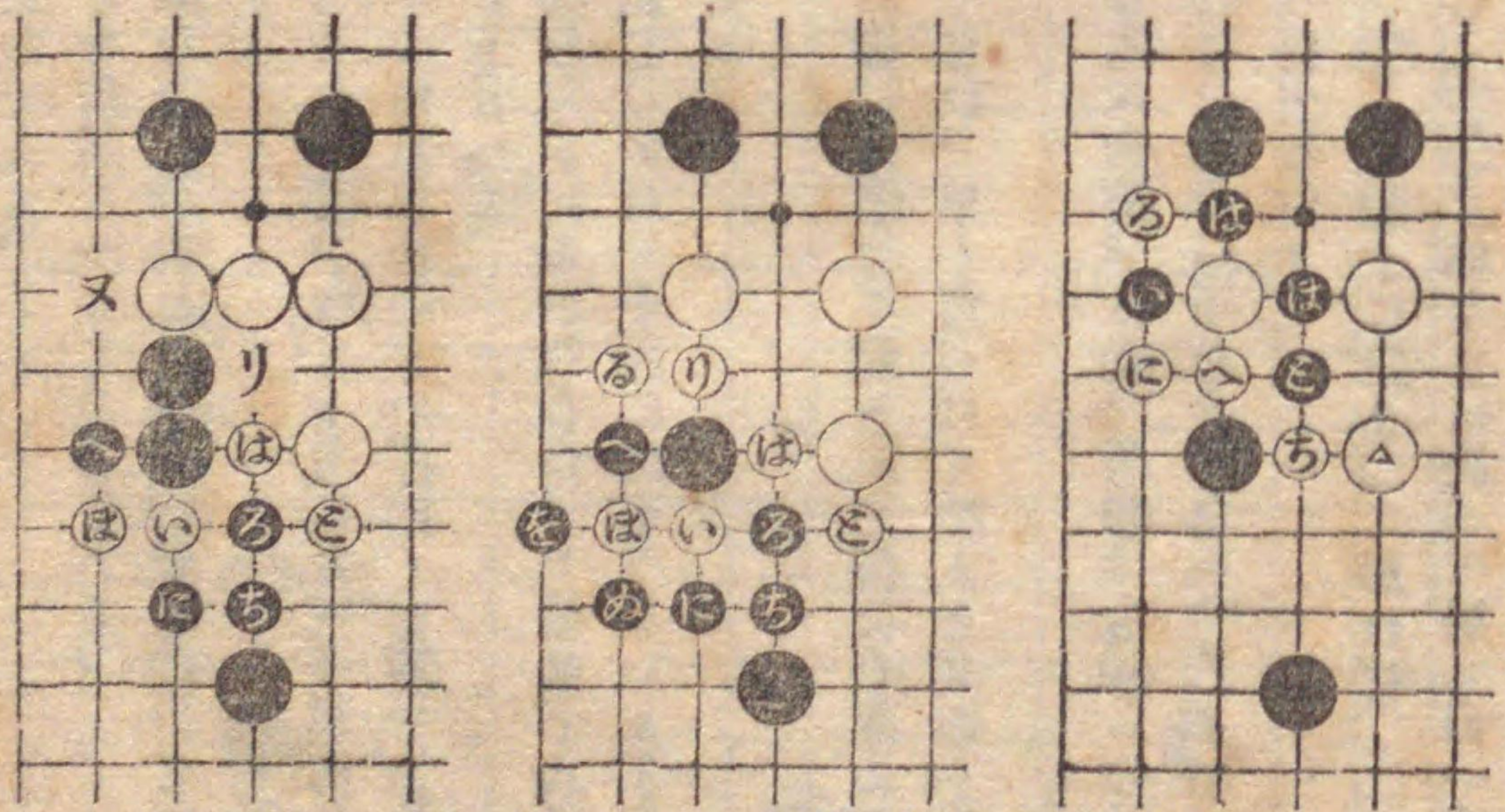
第十六手迄

白十三、意

白十三ヨリ盤  
ル一能ハス見

白十三は四及十の黒の盤りを妨げ、兼ねて左下隅の黒地に臨むと同時に黒十の腹へ②と頂けて自ら茲に勢力を造り、次で四、十二、の黒を攻めやうといふ手段を含んでおる、  
黒十四は白十三の策を破つたのである、  
白が十五と打つて此の處が堅固になつた爲め黒は十六と中原へ逸出したので、若茲を手抜すると白に十六の點から冠されて非常に苦しまねばならぬ。

「註」(参考天圖) 白十三(△印)の一子があるとき黒が②と打ち以下符號の順に運んでも上下の黒の連絡は不可能である。  
(参考地圖) 白が③と頂け以下符號の通り運へば非常に堅固になるから、上方の黒二子は極めて痛切な感を受ける。  
(参考人圖) 黒が十四と突當つた後であるとき、白④黒⑤以下の手順に運んでも手が緩んで居るから、即ち白が(リ)と打てば黒は(ス)と綽ねる、又白が(ヌ)と下れば黒は手を抜いて差支ない。



(圖人考參)

(圖地考參)

(圖天考參)



白十七は左側△印白に勢力を加へて左下隅の黒に迫つたのである、黒十八は隅の守備を兼ねて●と頂出し四子の白と十七とを兩断しやうとの手である、白十九は此の黒●の頂出しを拒ぐと同時に十七との連絡を計り、兼ねて茲に長壁を築いて中原に策を立てやうといふ意である。

「註」白若し十七の手を手扱して黒に此の處へ單關せられると、既に上方には三子梯陣の黒があり今又下方に十七の點へ黒の勢力が加はると△印四子の白は根據のない浮動した石であるだけに窮境に陥り、其の影響の及ぶ處全局の敗勢を醸さぬとも言へぬ、

白に十七と打たれては、此の隅に向つて如何なる手段を弄されるか解らぬ、で黒は十八と備へた此の十八の手は●と十七の頭に頂けて白の勢力を分割し、かねて中原に出やうといふ手を含んで居る、乃で白は十九と遮断して黒の鋒を阻んだのである。

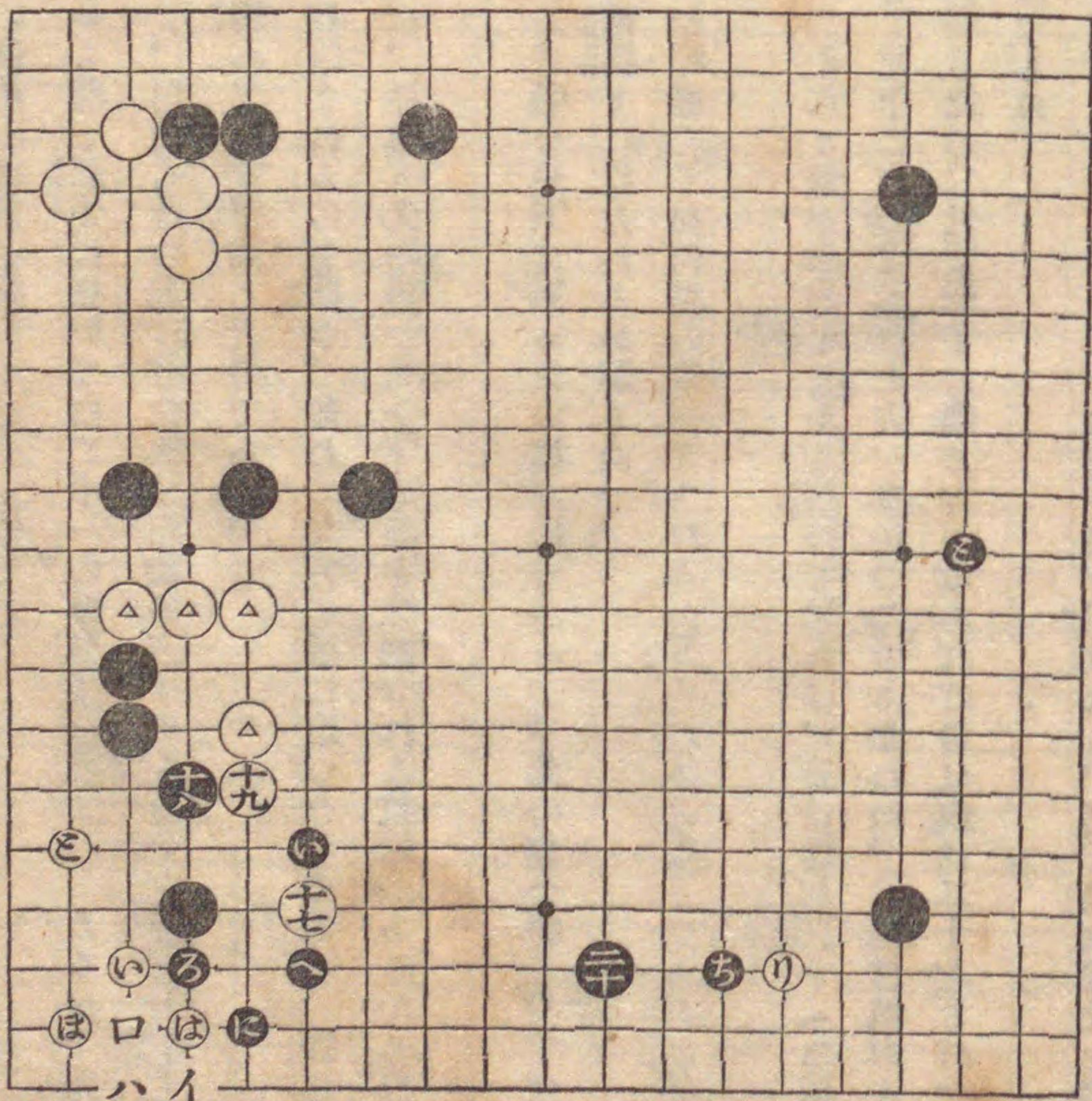
○問 此の時白から左下隅三々へ●と打込めば如何。

○答 白若し●と打込めば黒●、白●、黒●、白●、黒●、白●と手順を経て活は十分ある、が然し時機が早い、此ういふ處は急いで着手す可きものでない、早く形づけて終ふと其の「打込を利する」といふ機會を消すの恐がある。

△問 是は餘波の質問ではあるが、例せば此の白●と打込み黒●、白●、黒●、白●(の様な場合が實戰中に屢々ある)の時、黒が●と掛粘ぐ手で(イ)と白●の一子をアテ白を(ロ)と粘がして後に●と掛粘ぐのと、本圖の様に單に●と掛粘ぐのとの得失如何。

○答 是は場合の問題である、黒が(イ)とアテ白が必ず(ロ)と粘ぐに定まつて居れば(イ)と一手打つておくが利である、然し場合によつては白は必ずしも(ロ)と粘ぐとは決つて居らぬ、或は(ハ)

第二十手迄



(局子三法石布)

と切に受られるかも知れぬ、乃で黒は白から切に受けられなくても決して氣遣ひは無いといふ場合(多少の危険を犯しても此の眼形を奪はねばならぬとか、切種は十分あるとか、或は此の處の眼形さへ奪へば確に勝であるといふ様な際)に限つて(イ)と縛る、其の他は單に●と掛粘ぐがよい。

黒二十は●と右側星下に打つても、又は●と大斜走するもよい。

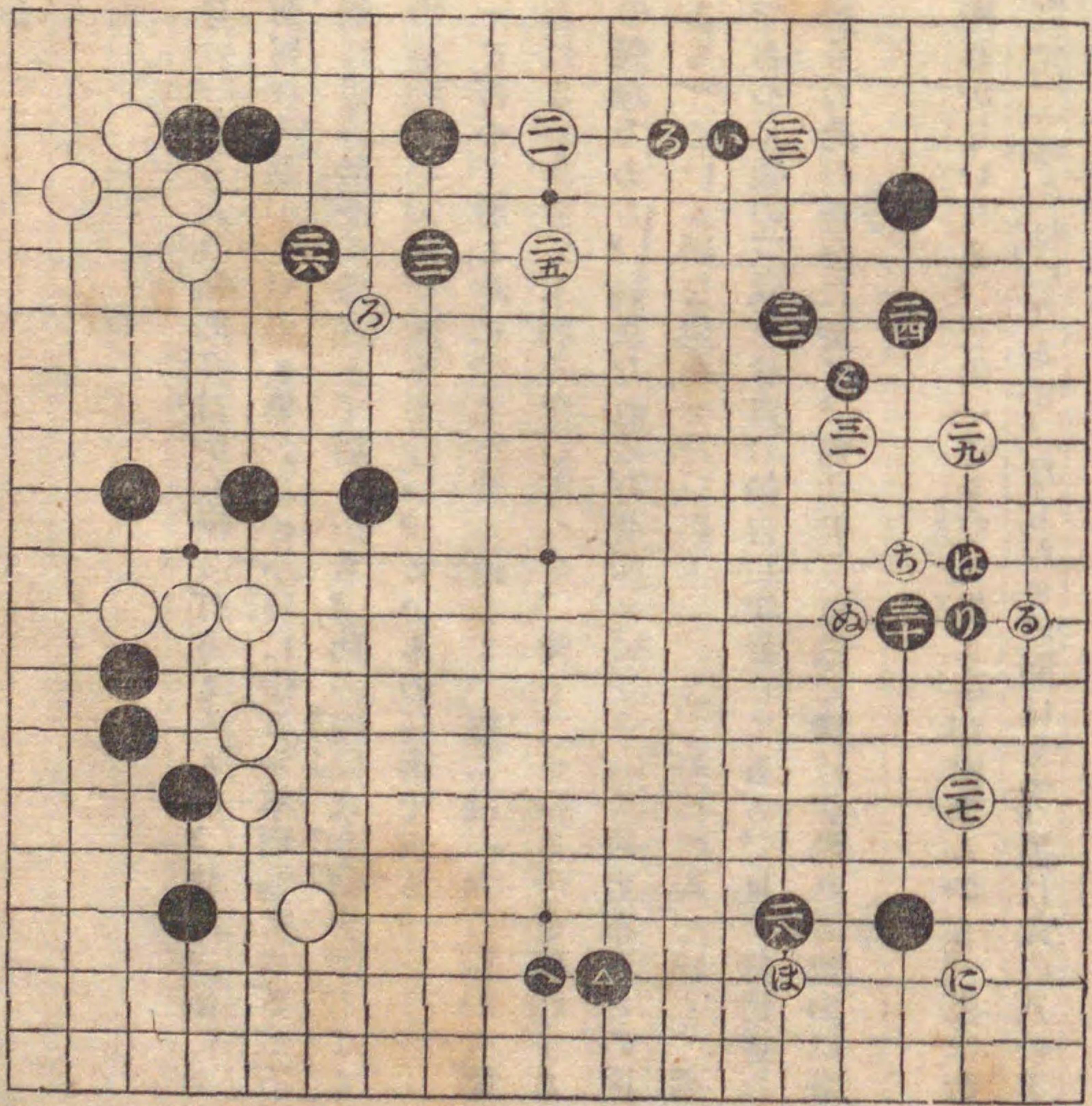
「註」黒二十を●と打てば白は●と掛かつて下側に十七方面の白の勢力と相待つて大地域を造られる。



白二十一は左上三子の白に迫つて茲に自己の地域を拓かうといふ意である、  
 黒二十二は普通の場合なれば、右上からと斜走に拓いて白二十一の發展地を奪ふのであるが、此  
 の場合は、若二十二の點を手抜すると、白から此の點に打たれ、左側の三子と左上の三子とを搦ん  
 で攻められるの不利に陥るから之に備へて此く單關したのである、  
 白が二十五と一間したのは黒にと打込まれるのを防ぎ、兼ねて左方の黒に迫つたのである、既に  
 茲に白二十五の一勢力が加はつた上は、やはりの邊から上下の黒を分割される氣味があるから黒  
 は堅固に二十六と備へたのである、  
 黒二十八は、右上方面の形勢から言ふとと星下に詰めたい様な處であるが、此の場合と打てば  
 白にと三子を犯されるか或はと兩掛りに打たれるか解らぬ、  
 要するに左方長壁の白の勢力と遙に相呼應して如何様の策を弄されるか解らぬから此く二十八と手  
 堅く備へたのである。

「註」 白に二十七と來られ、黒が二十八と飛ぶ事が早くから解つて居れば、黒は當初二十(△印  
 黒)と打つ時に早に一步進んでと星下に打つておいた方が良かったかも知れぬ、とは當然起る  
 可き感想である、然しながら、初から此の(△印黒)子がと打つてあれば白は或は二十七と打た  
 ぬかも知れぬといふ事も考へねばならぬ。  
 白二十九に應じて黒若しと尖めば、忽ち白にと一手で右側の地を圍はれる、乃で黒は機先を制

第三十二手止



(局子三法石布)

して三十と打込み二十七、二十  
 九の二子相俟つて白の造らうと  
 して居る地域を未前に蹂躪した  
 のである。

「註」 此の三十の一子を何故  
 此く一步高く打つたかといふ  
 と、若低く第三線にと打て  
 ば白にと上から冠せられる  
 恐があるから此く軽く敵地に  
 葎んだので、次で白は別々に  
 活きやうと或は低くと盤ら  
 うと其は黒の關せぬ處で、只  
 此の地域の壯大さへ削れば黒  
 三十の能事畢れりである。  
 黒三十二は隅二子の凌を兼ね上  
 下の白の厚壯を消す手である。



三子 第拾局

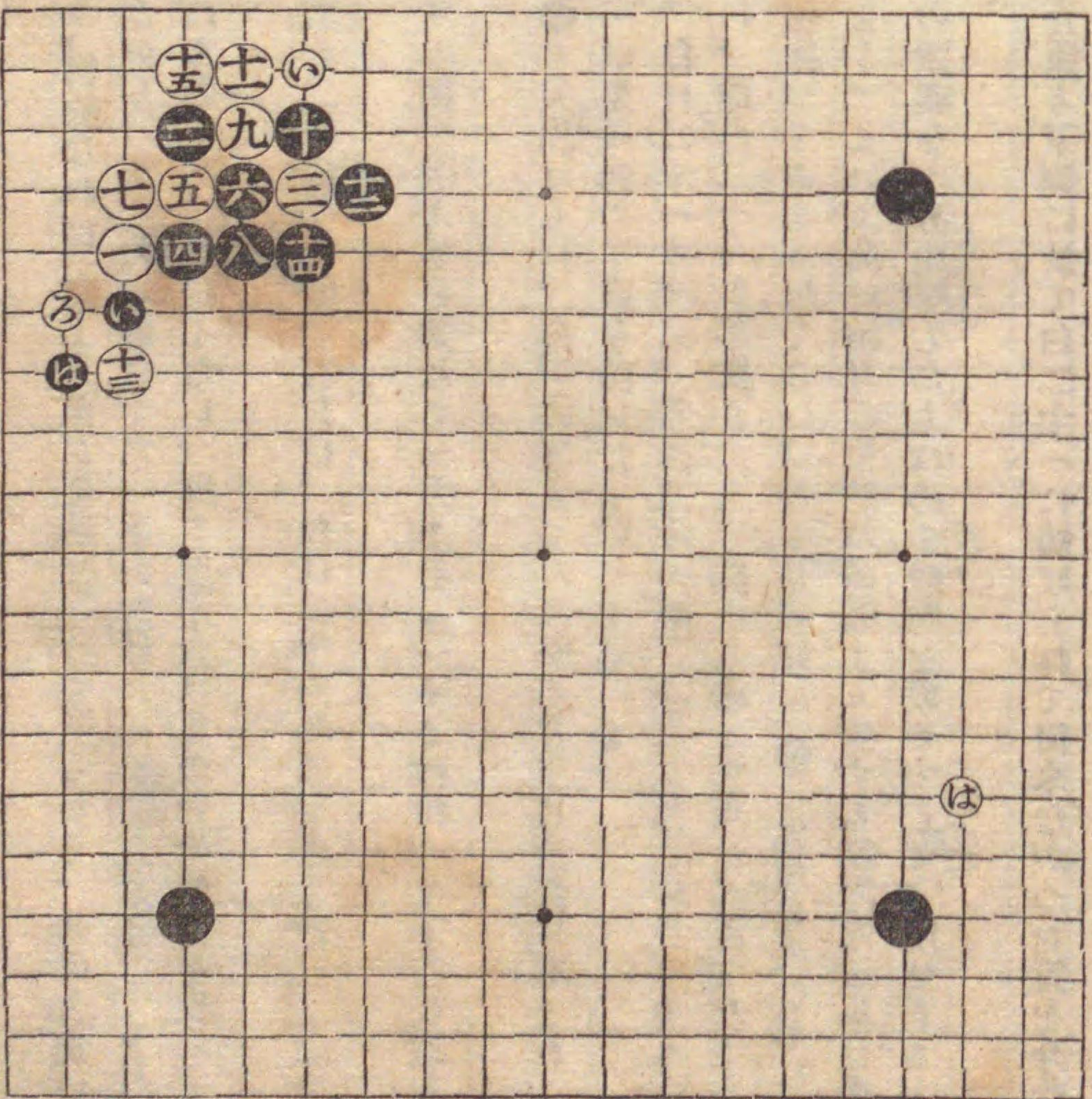
白一は前局高目の説と大差はない、  
黒二は正當な應接である。

「註」 黒二の着點は此處より外にない、尤も六の點即高目から掛る打方もあるが、其は場合による手である、然し今此の場合は局面何れの點から見ても黒が二と小目に掛るを不利益とする配石關係はない、強て求めれば他の三隅に黒の勢子が嚴存して居るから、此の明隅は如何應接しても普通定石の手順さへ誤らねば、黒の不利益といふ事は斷じてない、といふの一事である、  
初心者は稍もすると、目外に白が一と打つて居る時に二と小目に掛ると、忽ち白に六の點から壓迫されたり或は三と大斜走に掛けられるが非常に不利の様考へて、此く二と掛るのを躊躇する様であるが、之は道理のない一種の謬想である、何故なれば互先棋の時でさへ（他の布石との關係上白に六と壓迫されるが不利である）といふ様な場合でない限りは、二と打つて居て決して悪い事はない、然るに本局は三子棋であつて他の三隅には黒の勢力が布置してある、且つ前述通り何等他に利害の關係問題は起つて居らぬ此の場合に於て、白六若くは三の掛けを恐れる理由は毫もないからである。

此の隅の對隅たる右下隅④邊に白の配石がないため、三の一子を征に提る事が出来るから、黒は此く八と上を粘いだのである、但し此の三の一子の征になると、ならぬとに關はらず、黒は此の八の手で九の點を粘ぐ普通の定石に運んでも決して差支はない

然し此の黒が八と上を粘いで二、十四と白の一子を打抜く打方は此の隅の一局部では多少損であるが、全體から言ふと棋が打ち易い、即ち判りよくなることいふの利益がある、  
白十三は最も必要の手で若し之を手抜きすると忽ち黒に⑤と抑へられ、白⑥の時⑦と二段縛されて一隅に屏息させられる。  
「註」 初心者は往々十三の手で⑧と遊ぎ黒に十四と打抜かす事があるが、是は最も忌む可き手である、有害無益の手である。

第十四手迄





黒十六は●と大斜走して居てもよい。

「註」 黒十六は一見緩著の様である、何故なれば、左上方面が裾明になつて居るから、此の大場の占領も多少疎漏を免かれぬ感があるから、然し此の場合十六の手がなければ、白に○と掛かられ、黒●と單關した時、白に◎と打たれるのが甚だ面白くない、即ち黒十六は此の白の趣向を豫防した手と見ればよい。

黒二十は◎と大斜走してもよい、黒若し二十の手で◎と打たば、白は二十一の手で右上隅へ(二十五)と掛かるがよい、

白二十一は黒二十の位置が高いから其の裾を覗ふ手を兼ねて一方十七の一子と相待つて下側に地を拓いたのである、

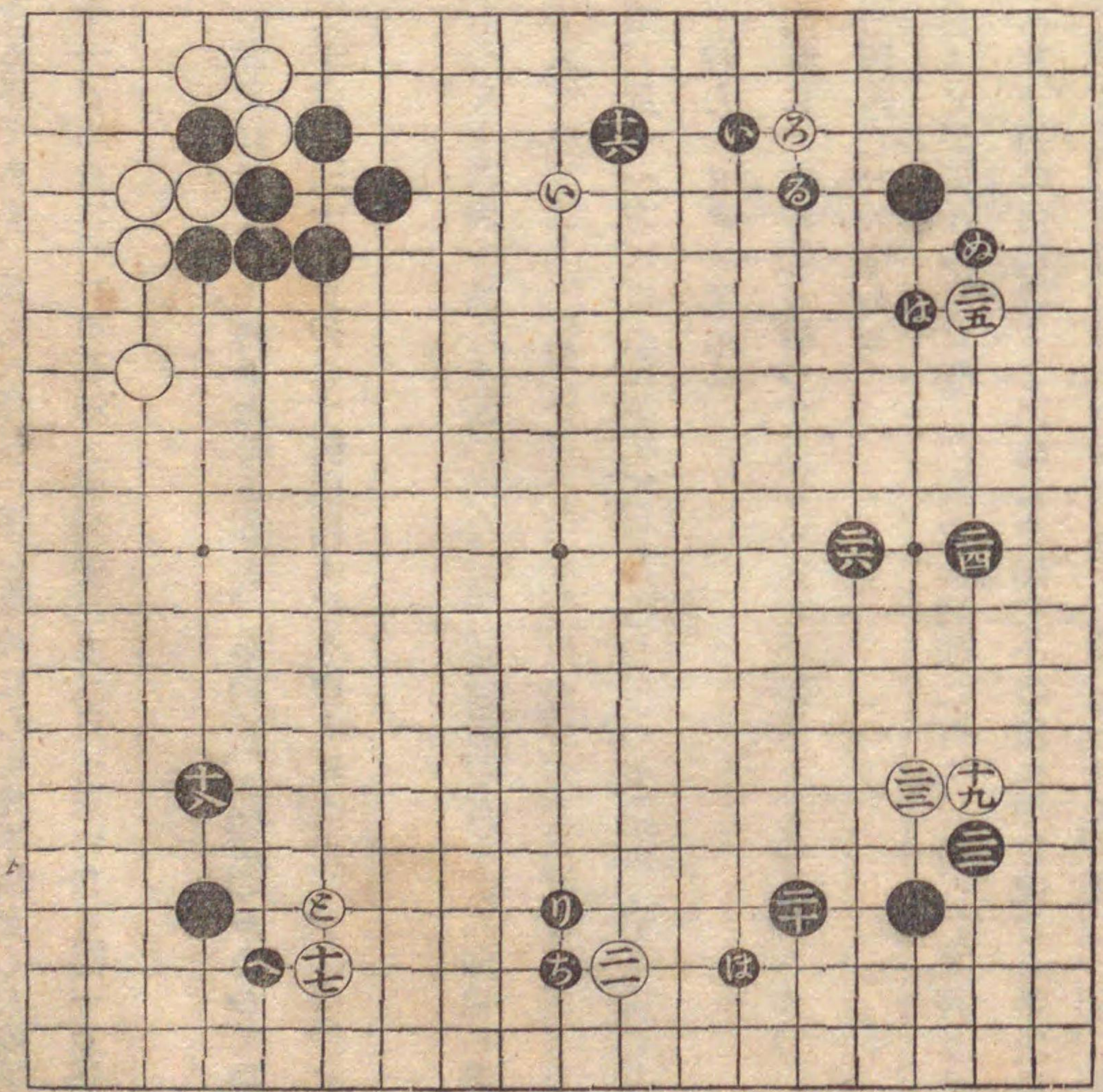
若し此の二十一を打たぬと、黒から●と尖頂けられ、白が◎と立つた時◎と星下に三間に夾まれるの不利に陥らねばならぬ、即白二十一は黒の此の手段を防いだものとも言へる。

「註」 黒が二十と高く打つたから、白は二十一と來た、若黒二十が◎と低ければ白は右上へ向つて(二十五)と掛つて居てもよい、即白二十一を手抜しても、黒から●と尖頂けて次で星下に

◎と運ぶ手が、◎の位置低い手と相待つてあまり妙でない、(若も是非茲を◎と尖頂け夾む手に)打つとすれば◎と星に打つのであらう)といふ此の相互の位置の高低より生ずる精微な關係は從來諸處に散説してあるから、今迄の講義を十分咀嚼した人は必ず説明を要せずして了解せらるゝ事であらう。

黒二十二及び二十四の手段は前述した通り下側に於て白二十一に妨げられて出來なかつた策を今此の右側に施したのである、

第二十六手迄



布石法三子局

黒二十六の手で若しも◎と尖頂け白を◎の點に立たして自ら◎と飛ぶ手順に打てば、次で白に二十六の點から冠されて非常に打ちニクウなるから、先づ二十六と茲に勢力を加へて、上下兩方の白を攻めやうとの手段に出たのである。

「註」 已に此く黒に飛ばれた後は右上の白は無論黙止しては居られぬ、否動くとしても拙劣な動き方をしては却つて益々黒地を厚壯ならしむるの結果を招かぬとは言へぬ、乃で此ういふ處は例の輕妙な犠牲的手段即振替りを行つて一方に血路を開くのである。



「註」 白二十七は振替つて隅に活きる手である、即ち△印白一子を犠牲にして先手活をしたのである、白が(イ)と行びず、先づ三十一と縛ねたのは布石法三子局第三十八頁に説いたと同一で三十五と飛ばう手段である。

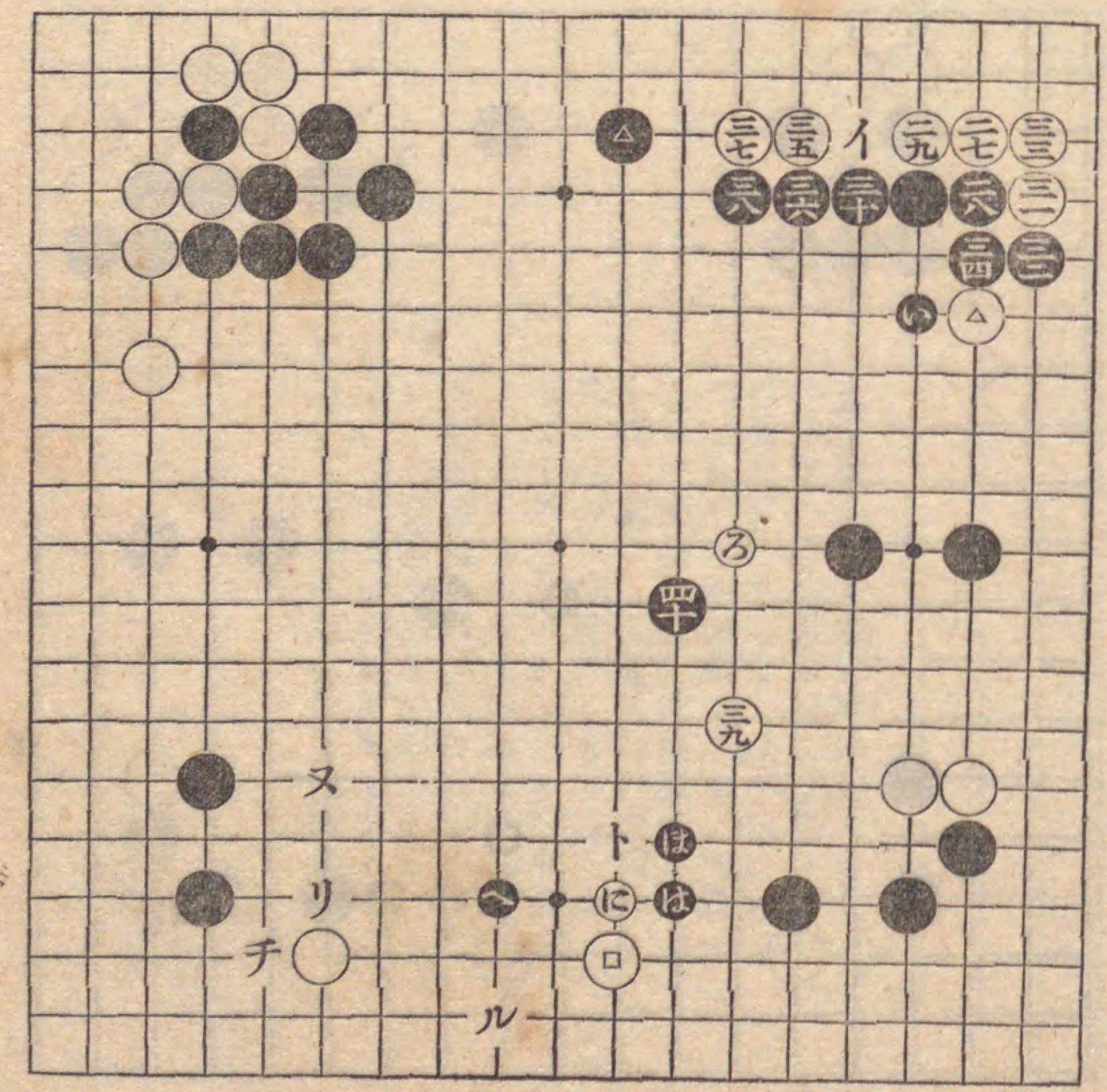
黒三十六は普通は●と打つて△印白の頭を縛ねておく可き處であるが、本圖は(△印黒)があつて白の鋒を阻止する事が出来るから此く三十六、三十八と押して何處迄も白を塗り込まうといふ手段に出たのである。

「註」 但し假令一方に(△印黒)があつても右側中邊に本圖の様な一間飛の黒がなくて△印白に動き出される患のある時なれば、やはり●と縛ねておかねばならん、本圖は△印白が(元より捨てた石であつて)重圍の裡に陥つて居る、且つ一方には△印黒の援けがあつて白を閉塞し得る様になつて居るから此く三十六、三十八と押しキツタのである。

白三十九は二子の白の凌ぎを計ると同時に、次で○と打つて上方の黒地を削らうとの手である、黒四十は其を拒いで同時に此の地域を防護したのである。

「註」 單に右下隅だけの現況から言ふと黒四十の手は●と□印白の肩側に打ち、白に○と押させて○と行び一方隅自己の勢力を加へ左下側の白に迫ると同時に右側三子の白に鋒を向ける手段に出るのが普通であるが、本局の形勢では、黒若し四十の手で●と打てば白は手抜して○と侵

第四十手止



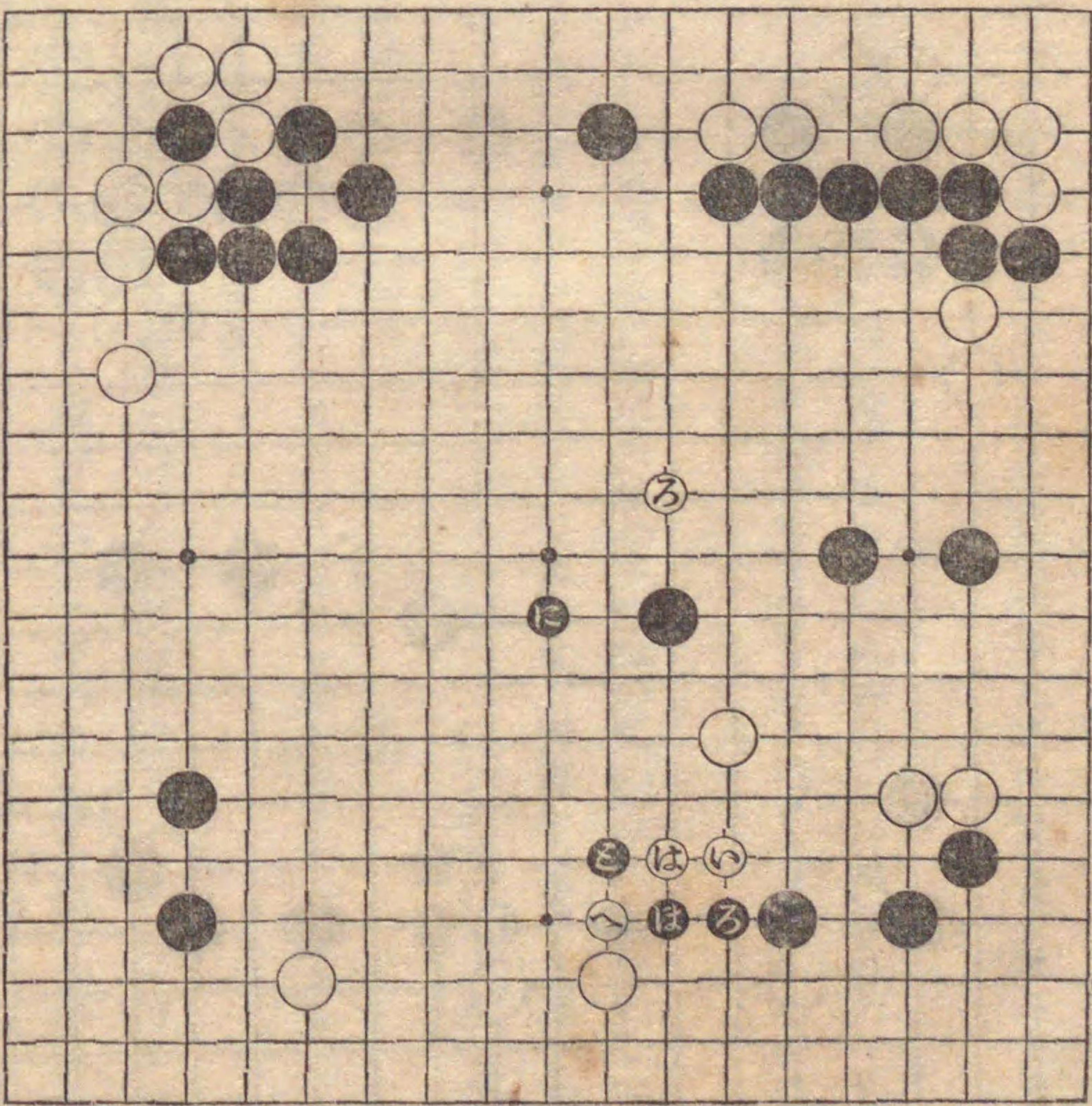
撃するかも知れぬ、果して其うなれば折角圍ひ得た黒の大地域は大に削減されるから、黒は四十と備へて傍ら三子の白に迫つたのである、  
黒●、白○、黒●の後には●と黒から打つて此の白地を蹂躪する急な手が残る、即ち白が(ト)と行びれば(チ)と尖頂け白を(リ)と立たして(ヌ)から冠して攻める、若又黒●の時白(ト)に行びず(ル)と下から盤れば黒は(ト)と曲つて茲に黒の勢力が加はると反比例に白の状態は悲惨な結果になるの外はない。

布石法三子局



殘説

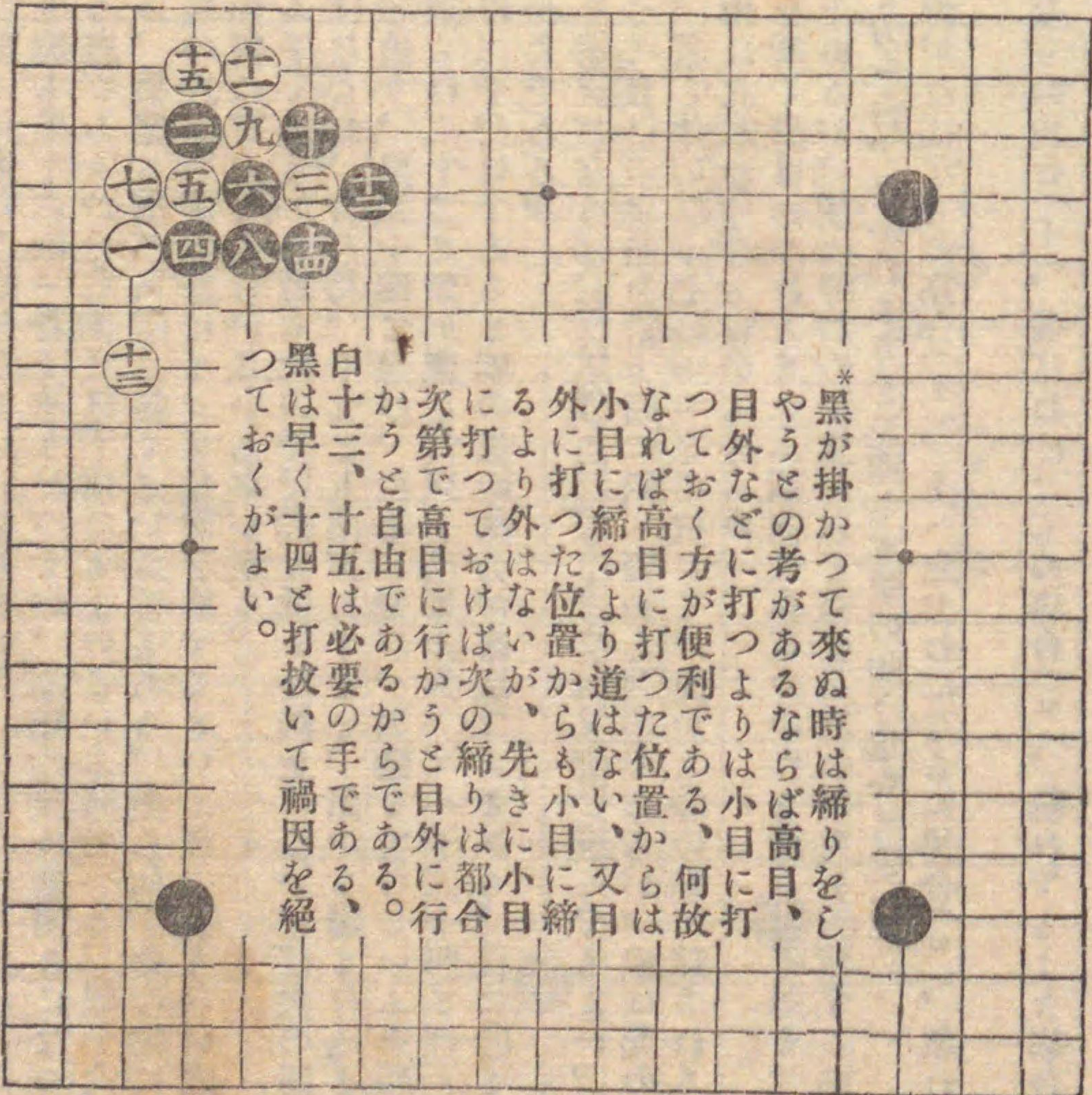
此くなつた結果、白は第四十一の手を何處へ打つ可きであらうか、無論(3)でも打つて三子の白の凌ぎをつけねばなるまい、此の(3)は三子自らの凌ぎと、右下隅の黒を閉鎖する手と、併せて下側四間拓の薄弱な白の援になつて居る、尙茲に(3)と白の勢力が加はると今度は(2)と打込む理が出来て来る、乃で黒は先づ(2)と押し白に(4)と一着應せしめて(白から(5)の點に押される)と隅の黒は頗る薄弱を感じるから先づ先手で之を拒ぎ(然る後白(6)の打込を消して(7)と單關して暗に黒(8)白(9)黒(10)の出截る味をも覗ふのであらう。



三子 第十一局

前局で説き洩した白一の意味を陳べると、白一は七の點即小目に打つが普通であるが、此く目に來たといふ位のものである、次の黒から掛る點を豫想して、是はキマリキツタ手である、即二と小目にかゝるか六の點から高目にかゝるかより外はない、乃で白一は黒に二と掛かられたら三と大斜にかけやう、又二の手で六と高く掛かつて來たならば二の點に應じて隅に利を占めやうといふ意と見てもよい。

「註」更に精密に論じると白一と目外に打つは敵の來攻を俟つといふ意が主となつて居る(勿論正則の教育を受けた士ならば白が明隅に二と打つた時其に對して「掛り」を打たぬといふ事は決してないから白一と打つ當初に於いて締らうといふ觀念のある可からざるは言ふ迄もないが)萬一\*



\*黒が掛かつて來ぬ時は締りをしやうとの考があるならば高目、目外などに打つよりは小目に打つておく方が便利である、何故なれば高目に打つた位置からは小目に締るより道はない、又目外に打つた位置から小目に締るより外はないが、先きに小目に打つておけば次の締りは都合次第で高目に行かうと目外に行かうと自由であるからである。

白十三、十五は必要の手である、黒は早く十四と打抜いて禍因を絶つておくがよい。



黒十六は下側二十の點若くは右側⑤の點に大場の占領をしておいてもよい。  
 「註」左上⑥の點が塞つて居れば上側も黒十六の一着で治りがつくが、本局の様に据明きになつて居ては更に一二着の防備を要する處であるから右側又は下側でもよいといふ譯である、黒十六の手で二十でも打たば白⑦と掛り、黒⑧と飛び白⑨と拓くといふ手もある、然し此く此の處に白の勢力が加はつても四以下十四迄の左上一團の黒はサシテ危険を感ずるといふ程の事もない之に由つて觀ても一子打抜の効果の如何に有力であるかといふ事が解る。

白十七は次で十九と廣く拓かうといふ手であるから若も此の手で⑩と低く小斜走に掛ければ次の拓き場所は一踏控へて⑪と打たなければならぬ、若し⑫、十九と五間拓にすると、黒から⑬と打込まれて苦しむ事になる、白二十一は⑭と迫り、黒二十四と飛び、白⑮と飛び、黒⑯と尖むといふ手順になつてもよい、白に二十一と肩へ來られ二十二と黒が應じた以上は是非共、モ一子二十四と押しておかねばならぬ、只十六、二十二の二子だけであると隅の黒の勢力が薄弱であるから、白に⑰と三々へ打込まれて容易に活きられるからである。

「註」黒若し二十二の手で⑱と下を游いだならば、白は⑲と行びてもよし、又⑳と飛んでもよい。白二十七の曲りは十九の一子と相俟つて自己の連絡を計り暗に隅へ響かした手であるが、或は此の曲る手で㉑と一間飛して居てもよい、若し此の二十七の一手を手抜して、黒から㉒の點に冠される事になると、白は如何なる不利益の地に立たねばならぬかも分らぬ。

「註」白二十一の手の如く敵の肩を衝く若し衝かれるといふ類例は布石の中にも屢々出て居る、又實戰の際にも能く用ゐられる形であるが、茲に特別の注意を以て講修諸君の研究を希望する點は、下記の數件である、(假に衝く方を白、衝かれる方を黒即ち本圖の如き場合と定む)

- 一 敵(白)に肩側を衝かれた時下を游がねばならぬ場合(イ)、上へ立たねばならぬ場合(ロ)、孰れでもよき場合(ハ)、
- 二 黒に下を游がれた時、行びねばならぬ場合(イ)、飛ばねばならぬ場合(ロ)、孰れでもよき場合(ハ)、

- 三 黒に立たれた時随つて行る場合、飛ぶ場合、(本圖に依て示すと二十三の手を二十五と打つ)
- 四 黒が二子以上押す可らざる場合(イ)、二子以上(如本圖)、押ねばならぬ場合(ロ)孰れでもよき場合(ハ)、
- 五 黒に(二十六)の手の如く下へ斜走された時(如二十七)曲らねばならぬ場合(イ)、曲つては悪い場合(ロ)、曲つては緩い場合(ハ)、飛ばねばならぬ場合(ニ)、孰れでもよき場合(ホ)、

